

火埜翔織という異物によるHEROACADEMYだ

完全怠惰宣言

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リハビリ作品。

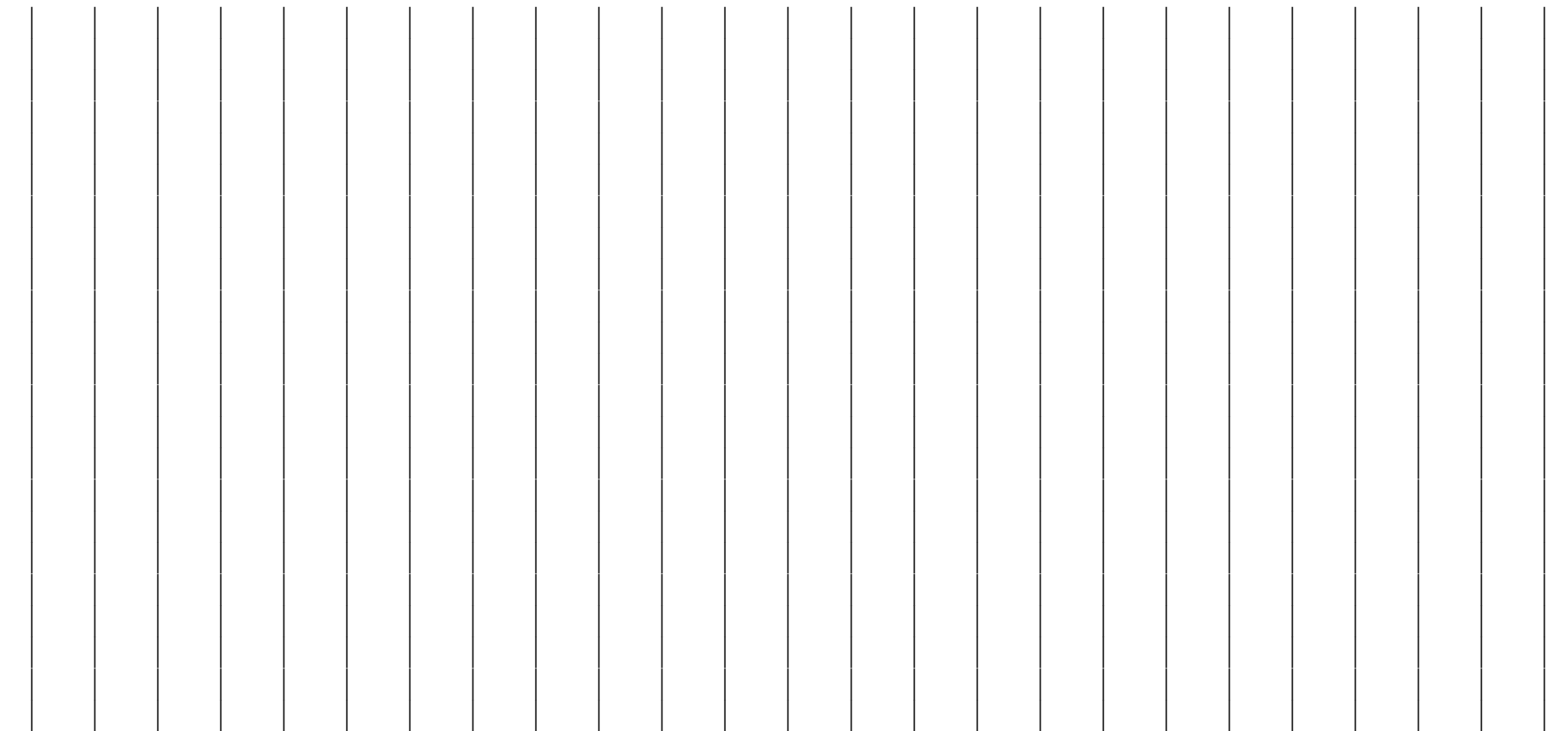
気力とか諸々が続く限り頑張ろうと思います。

本編

目次

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	th	rd	nd	st
169	159	152	145	138	128	121	113	103	96	89	82	73	66	59	50	43	37	30	22	16	7	1

4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4
t
h h



327 321 313 306 301 295 288 283 277 271 266 259 254 249 244 239 234 228 221 212 206 200 193 184 177

本編

1st

はい。

ヒロアカの世界に来て、結構良い個性貫って、かなりよい立ち位置を得た男“火埜^{ひの} 翔織^{とおり}”です。

入試でも、皆が良くやるOPロボを個性で一刀両断。

手当たり次第ロボを狩りながら、危なそうな奴らを助けていたら入試2位になった男、“火埜 翔織”です。

現在、流れ通り相澤先生の理不尽個性把握テストへ向かう流れになりました。着替えを終えてしみじみしてました。

「なにボサツとしてんだ。さっさと行くぞ」

「勝己、そんなに急がなくても問題ないでしょ」

さて、異物がはいった物語で変わったことが多々ありました。

まずは、目の前の幼馴染み1号“爆豪^{ばくごう} 勝己^{かつぎ}”である。

原作同様、プライド高いけど、頭を下げる冷静さを持ち合わせ、個性虐めをしなかったマイルドヤンキー勝己。

「かつちやーん、とーくん」

遠くから小柄な体格でジャンプしながら自分の位置を知らせる幼馴染み2号“緑谷^{みどりや} 静空^{しずく}”。

原作よりも小柄ながら、3人で基礎トレーニングをしてきたからか体力もあり、素の力も強い。

そして、成長期になって見事に実ったマスクメロン^{胸部装甲}。

そう、勝己がマイルドヤンキーになった原因でもある静空は女の子でした。

いやさ、ボクはあれだよ完全に異性の親友ポジ確立したから、少し邪な目で見る程度だけど。

「オイ、こらしズク跳ねるな。コケたらケガするだろうが」

ぶるんぶるん揺れる胸部に顔を赤らめ、一定時間凝視した勝己は解りやすいぐらい恋してます。

男のツンデレに需要はないと思ってたけど、我が幼馴染みは見えてにやけるくらい可愛らしい。

中学時代、意外に早く体の成長が始まった静空を厭らしいことから守ってきたが、勝己はまじで番犬だったね。

クラスの女子からも生暖かな慈愛のこもった眼差しで見られてたし、意外にモテタ静空（本人は気が付いていない）の番犬として周りを牽制していたし。

「シズや、隣の子はどなたかな」

手が届くところまで近付いたからかジャージを握ってくる静空。

「この前話してた試験の時にボクを助けてくれた子だよ」

「もう、その話をお終いにしようよシズクちゃん。初めまして、うららかに麗日お茶子おちゃこ”です」

「あらあら、その節はうちのシズがお世話になりました。火埜翔織です」

「爆豪勝己だ」

「いやー、生茶子ちゃん可愛い。」

「いや、解ってたけどさ可愛い。」

後ろにいる1A女子ズも可愛い。

見えていないと油断しているけど、ボクは個性の恩恵で丸見えな葉隠フェイスは綺麗系なんだけどコロコロ変わる表情が可愛らしいな。

おうふ、不安そうにイヤホンジャックを弄る耳郎ちゃんもたまりませんな。

ジャージ着ても解るヤオモモの超高校生級バディもエエですな。

背伸びをした時に丸解りの梅雨ちゃんの意外バディもナイス。

三奈ちゃんもしなやかな筋肉の上に乗った女性らしき満天の体つきも良いよ良いよ。

今このとき程、自分の表情筋が動きにくくて良かったと思ったことはない。

そんなこと考えていたら、相澤先生がボールを持ってやって来た。

「「「個性把握テストオ!?!」」」

案の定予定調和のように、雄英の入学式は現在1―A不在で進行していた。

我が子の晴れ舞台を見に来た親たちは困惑の渦にのまれ、学校側も教師や一部生徒も駆り出され説明責任という形で被害が飛び火していた。

そんな一部で阿鼻叫喚な状態を作り出している合理性を追求する男、相澤消太はそんなこと知ったことかと言わんばかりの態度で、1―Aの生徒達と対峙していた。

「入学式は？ガイダンスは!？」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事に出る時間はない」

「雄英は”自由”な校風が売り文句、そしてそれは”先生側”もまた然り」

相澤の一言で周囲が沈黙する中。

「いや、説明する責任くらいはあるでしょうよ」

「だな、たぶん本当に独断だぜあれ」

マイペースな翔織と爆豪はさらっと無駄口を叩いていた。

「……入試1位」

「ん、なんだよ」

教師に対して不遜な態度をとる爆豪が、入試1位という事実には驚く周囲を余所に話を進める相澤。

「教師に対する口の利き方じゃないが、今回は目をつぶろう。中学の時にソフトボール投げいくつだった」

「確か……67mだったはず」

「じゃあ個性使っていいからやってみろ、その円出なけりや何してもいい」

持っていたボールを爆豪に放り投げる相澤。

「手加減なんかせず、思いつきり投げろよ」

爆豪がボールをキャッチしたのを見届けると少し離れ端末を操作する。

爆豪も円に入り、ボールの感触を確かめるように何度かボールを握り返していた。

「それじゃ」

円盤投げのような体勢になる爆豪。

「あ、皆さん少し離れたほうがいいですよ」

「お茶子ちゃん、少し下がろう」

その姿に嫌な予感がした静空と翔織は周囲に少し距離を取る様に呼びかけると自分たちは、直に離れた。

そんな二人の姿を訝しみながらクラスメートは忠告通りに少し距離を取った。

周囲が少し空いたのを感じた爆豪は凶悪な笑みを浮かべる。

体を捻り、回転し更にボールを持っていない左手から数回徐々に爆発の威力を強め、回転を加速させる。

そして、その回転力を乗せて右手に握られたボールをリリース、更にリリースの瞬間、絶妙なタイミングで右手からも爆発を発生させた。

「くたばりやがれえ (BOOOOM!!)」

決してヒーローらしくからぬ掛け声とともに発射されたボールは、広大なグラウンドへと消えていた。

「まず自分の”最大限”を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段だ (ピピッ)」

そう言つて音が鳴った端末を確認した相澤、その時誰も気が付かなかったが、相澤は驚きのあまり目を見開いてしまった。

「中学から行なっている計8つの”個性禁止”の体力テスト。

国は未だ画一的な記録を取って平均を作り続けているが合理的じゃない。

まあ、それは文科省の怠慢だ。

そんなもん、わざわざ付き合つてやる道理も無い。

これがヒーローになるための最も合理的かつ正確な手法だ」

『1002.9m』

相澤が示した端末には、先ほど爆豪の投げたボールの飛距離が出ていた。

それはつまり、自分の個性の応用の幅を知るためにこれから体力テ

スト改め個性把握テストを行うということだった。

「うおおおおお!!なんだそれ!!すげー、おもしろそうじゃん!!!」

誰かが放ったその発言にピクツと相澤が反応した。

そのことに気づくものは誰もいなかった。

「てか、何ちゆう記録だよ!」

「個性思いつきり使えるんだ!流石ヒーロー科!!」

周囲のそんな喧騒の中、相澤の対面に位置してしまった静空と翔織は不幸にも、愉快そうに歪んだ相澤の顔を見てしまった。

「おもしろそう・・・か」

相澤が呟いた小さめのその言葉はなぜか周囲に響いた。

「お前らは、ヒーローになるための三年間、そんな腹づもりで過ごす気でのいるのか?」

愉悦に歪んだその顔は、言葉と態度とは裏腹に恐怖を覚えるモノだった。

「それなら、トータル成績最下位の者は見込み無しとして」

一度区切られた言葉。

そして、とてもイイエガオで放たれた次の言葉は衝撃的なモノだった。

「除籍処分しよう」

数秒の空白。

誰しもが相澤が放った言葉の意味を理解しかねていた。

「「「はああああああああああ?!!」「」」」

そして、グラウンドに響く驚愕に染まった悲鳴。

「除籍処分なんて・・・まだ入学初日ですよ!?!いや、入学初日で無かったとしても理不尽すぎる!!」

誰が言ったか、もしかしたら皆が言ったのかもしれない言葉に更に顔を歪めて嗤う相澤。

「いつどこから来るか分からない厄災・・・そういった理不尽を覆していくのがヒーローだ。」

放課後マックで談笑したかったのならお生憎様。

雄英はこれから三年間、全力で君たちに苦難を与え続ける」

—Plus Ultra更に向こうへ、全力で乗り越えて来い—

その言葉を放った相澤が生徒たちの顔を見回した時、多くの生徒は絶望に彩られた顔をしていたのにも関わらず、とある3人の生徒は全く別の顔をしていた。

不安そうに歪んだ顔、だが口許を見ると口角が上がりそうになっている生徒。

—緑谷 静空—

凶悪な笑顔に顔を歪ませながら、挑戦者として確固たる意志を現した生徒。

—爆豪 勝己—

障害を前に笑みを浮かべ、冷たく且つ燃える焔のような瞳をした生徒。

—火埜 翔織—

その顔を見た相澤は、人知れず笑みを浮かべるのだった。

自分と少女は違うと思い知らされたのは、初めて自身の個性の話をした時だった。

それは、元ヒーローが晩年に呟いた一言だった。突如始まった除籍免除を賭けた個性把握テスト。

内容こそ普通の体力テストのそれだが、背負ったモノがまるで違う。

自分の全てを出しきらなければならぬ。

そんな状況で行われることになった個性把握テスト。

各自其々が不安を顔に表す一方で、相澤の後ろをリラックスしているように見えてしまう雰囲気では歩いている3人は非常に不気味に思われていた。

「シズクちゃん、何か余裕そうやね」

麗日は、横を歩く笑いそうになる顔を押しさえている緑谷に対して余裕があると思っただのか、話しかけた。

「え、ヨユウ？無いよ、そんなの」

「え、違うの!？」

その声に反応して集まってくる女子達。

「意外ね、シズクちゃん口の端が上がりそうになってたから私につきり余裕あるのかと思ってたわ」

「緑谷、入試1位の爆豪と知り合いなんでしょ？仲良さそうだから鍛えて貰ってるんだと思ってた」

「ねえねえ、余裕じゃないならどうしてそんなに笑顔なの」

そんな会話の中、緑谷は相澤の後ろを歩く2人の幼馴染みへと視線を向けた。

爆豪は赤い逆立った髪の毛の男子に捕まり何かを聞かれており、火埜は眼鏡をかけた委員長っぽい男子と鳥のような頭の男子と話ながら歩いていた。

「だって、やっと同じ場所に立る権利を得たから、かな？」

緑谷が女子達と話ながらもキビキビと短距離走のスタートライン

へ向かつてる頃、爆豪はボールを投げた右手を開いたり閉じたりして調子を確かめていた。

「お前すげえな」

そんな時に後ろから声をかけられた。

全体的な雰囲気はどこに出しても恥ずかしくないヤンキー、と実母からも言われる爆豪を幼馴染みを介さずに声をかけてくるのは非常に珍しく、爆豪は後ろを振り返った。

「何だ、赤髪。なんのようだ、ああん」

誰彼構わず威嚇する癖は短期間では治らなかつたようで、声が聞こえた火壁は額を押さえて天を仰いでいた。

緑谷も聞こえたようで苦笑いをしていた。

「いや、1kmだぜ。ボール投げで出す記録じゃねえだろ。それに、個性”の使い方も何かこう熟練してるといっつか、自分を解ってるって言うか。とにかく、スゲかつたぜ」

「おい、舐めんよ赤髪コラ」

自身への称賛に対し、少し不快そうに顔を歪めると頭を軽く搔き自分の前を歩く火壁の後ろ姿を見る。

「抜き去りたい奴が目の前にいるんだ、満足なんかしてられねえ。それに、後ろから追い抜こうとしてる奴がいるんだ、負けるわけにはいかねえんだよ」

そう言うと、赤髪の少年から少し視線をずらし、後ろにいる緑谷を見つめる。

「オレは必ずNo.1になるんだ」

口も態度も頗る悪く、本当に正義の味方を目指しているのかと聞かれれば誰しもが疑問に思う存在だが、その胸の内に宿る燃え滾る魂の誓いは本物だった。

「てか、テメエ誰だ」

「おう、オレは^{きりしま}切島^{えいじろう}鋭児郎”。誰よりも熱いヒーローになる漢だ」

唐突に天を仰ぎ見た火壁、そんな奇行に出たクラスメートの隣を歩

いていた飯田と常闇は訝し気に声をかけた。

「大丈夫かい君、何か忘れていたことでもあったのかい」

「これからオレ達は傑物となるための一つの試練に挑むのだぞ。万全であれとは言わないが気持ちは確りとしておけ」

これから蹴落とし合いをするはずの者に対して当然のとばかりに心配を寄せる2人のクラスメート。

そんな2人の言葉に、瞳に優しさを宿らせた火埜は顔を正面に戻した。

「ご心配をお掛けしました。なに、幼馴染ズが平常運転だったからついで、ね」

そう言うと、舌を出して悪戯がばれた子供のように無邪気な笑みを浮かべる火埜。

「緑谷君とは実技の会場が一緒だったんだ。彼女は昔からあんなに常に余裕を持っていたのかい」

「もう一人はかの阿修羅の如き男か。アイツは本当にヒーローを目指しているのか」

幼馴染2人の評価を聞いて思わず声が出て笑いそうになる火埜、そんな火埜を不思議そうに見る飯田と常闇。

「2人とも甘いな、シズのあれは余裕じゃなくてやることを決めている覚悟の現れさ」

「シズは事情があつて個性の制御に難があるけど、たぶんこの中の誰よりも『ヒーロー』って存在を理解してるよ」

「勝己の態度が不遜に感じるなら、それは自分に満足してない証拠だよ」

「勝己は誰よりもストイックで、負けん気が強いから真つすぐに憧れた背中に向かって全力で走ってるだけだよ」

再び顔を手で覆う。

その手が取られた時、火埜の顔には一切の表情が消え、戦いを前にした戦士の気配が満ちていた。

「そんな2人に追いつきたいから、僕はただ必死に飛ぶんだ」

「僕がカッコイイと感じる2人に気持ちが負けてるなら、せめて2人

が真っすぐ進めるように空高く飛び続けたいだけなんだ」

そう言うのと再び笑みを浮かべる火埜。

そんな火埜の感情に飲まれかけた飯田と常闇は、何故か心に火が灯ったような気がした。

『2ビョウ18』

「フツ、ふう。ヨシ!!」

機械音で告げられるタイム。

最初の短距離走において飯田が出したタイムであった。

爆豪の本気を見せられ、火埜との会話で覚悟を決めた飯田はスタート地点を後ろにずらし、自身の個性に適した加速を得たことにより自分でも驚くタイムを叩き出していた。

これが、仮に通常のスタート地点からであればタイムをもっと遅かったであろう。

しかし、緑谷という指針を知り、爆豪という本気に当てられ、火埜の感情に当てられた彼は相澤へ進言し、自身のスタート地点を離すことで、自身の最高の形を作り出したのだった。

「(公平性を重んじるのであれば、確かにスタートラインは同一にすべきだろう。しかし、僕らの個性は千差万別。)」

「自分のフィールドでの最大実力を知ることが今は大事だ」

飯田は呟きながら、クラスメートが待っているエリアへと歩いていた。

そうすると、目の前には意識したばかりの2人が何かを相談している姿が目に入った。

それと同時に、二人の短距離走での姿勢を思い出した。

「邪魔だ、オラァ——!!」

スタート時点で細かい爆発を繰り返し、徐々に爆発の威力を上げることによって加速した爆豪。

隣を走っていた口田には事前に話していたのであろう、2人分の間を空けてスタートした。

『4ビョウ52』

「クソが——!!」

加速系の個性ではないにしろ驚異のタイムを叩き出したにも関わらず、爆豪は悔しそうに地団太を踏んでいた。

「ふう、ボチボチいこうか」

スタート地点を少し後方にズラし、ハーフパンツに素足、長袖も脱ぎ下に着ていたTシャツを肩まで捲り上げた姿になった火柱はスタート音が鳴る前にその姿を変化させていた。

両腕と両脚がオレンジ色に発火する。

両脚は鳥類を思わせる形に変化し、両腕もまた巨大な燃え滾る翼に変化していた。

スタート音が鳴ったのとほぼ同時に加速し、気が付いたらゴール地点を過ぎた場所に立っていた。

『5ビョウ59』

「ああ、風圧で顔痛い」

ゴールタイムが告げられた火柱の姿は既に一般的な人型に戻っており、顔をマッサージしていた。

「(2人とも、恐らく個性の性能で言えば全く別の使い方をしているはずなのに、応用力が凄い)」

「(本当に、自分が出来ることを知っているんだ)」

そんな2人が連れ添って相澤の許に行き、少し話をする相澤はため息をついて何かを了承したようだった。

爆豪が近くの林に消えていき、何かの蔓を持ってきて火柱に手渡すと2人はゴールからかなり離れた位置にスタンバイした。

「何をやろうとしてるんだ」

飯田だけでなく、既にタイムを計り終えた生徒たちも不思議そうにしている。

「次、緑谷お前で最後だ」

「はいー!」

諸事情により緑谷が最後に走るようになっており、彼女はクラウチングスタートの姿勢を取っていた。

「なんか、女子のクラウチングってエロいよね」

己の欲望が小出しになっている者もいるが、試験の時に飯田が見た緑谷の個性は短距離に不向きに思えていた。

「ト、シユ——ウ」

遠くて何かを呟いたことしか解らなかったが、緑谷が何かを呟く少し前、火柱が両手に黄色い炎の様なオーラを灯すと爆豪が取ってきた蔦にオーラを流し込んだ。

そして、スタート音が鳴ったのとほぼ同時だった。

「痛ってえな、シズクオイコラ。前ぐらい見ておけ」

「勝己じゃないけど、この蔦が無かったらグラウンドの壁まで突っ込んでたでしょ」

「かつちゃん、とーくんゴメン助けて。蔦がなんか絶妙に絡まっちゃった」

太くしなやかに伸びた蔦が地面に根付き、その両端を爆豪と火柱が引っ張る形で緑谷が蔦に絡まっていた。

『6ビョウ46』

緑谷の走り抜けた跡はまるで何かに抉られたような溝が出来ていた。

タイムこそ遅く感じられたが、緑谷の個性の一端が発露した瞬間だった。

そんな3人のコントを後目に個性把握テストは続いていく。

—握力測定—

メゴシヤ

「……あれえ？」

「先生、シズクちゃんの測定器が“また”壊れました」

「……緑谷“測定不能”っつと」

—反復横跳び—

「ココはおいらの独断場」

プルプルと反発する何かの間をものすごい速さで行き来する峰田。

「「嘗めんな、クソが!!」」

「爆豪の奴、分身してね」

両手からの爆発を器用に操作し、分身しているように残像を作り出

している爆豪。

―上体起こし―

「火埜、手抜くんじやない」

「うげ、バレた」

頭の後ろに組んだ手から炎を噴出させて高速上体起こしで楽しっていた火埜。

しつかりと相澤に注意を受ける。

―立ち幅跳び―

「えい」

空中で停止した一瞬、空気を足場に蹴り上がり続ける緑谷。

「オラあ!!」

両手の爆発で飛び続ける爆豪。

「ほいっと」

両腕を翼に変えて羽ばたくことで勢いをつけ続ける火埜。

「緑谷・爆豪・火埜その馬鹿ども、いい加減降りてこい」

―ハンドボール投げ―

「そおれツ」(ピピツ)

「火埜、800m」

「ハア、ハア」

「火埜さん、目に見えて疲れてきてますわね」

爆豪同様、炎を放出する際の勢いと遠心力を利用した投合を披露した火埜であったが、目に見えた疲労感からリリースのタイミングがずれてしまい記録は伸びなかった。

「2――、スマアアアツシュ」(ピピツ)

「緑谷、965m」

「イタタタタ、そろそろ限界かな?」

「シズクちゃん辛そうだけど大丈夫かしら?」

ボールを投合した瞬間、全身が痛み硬直した緑谷。

蛙吹の言葉に笑顔で手を上げて返すが、体を庇いながら歩いているのは誰の目から見ても明白であった。

「30分持久走」

「ハア、ハア、ハア、辛い」

何とか上位に食い込んでいるが、個性を使う余力はないのか普通に走っている火埜。

「ハア、ハア、ハア、痛ッ」

休み休みながらだが、時々個性を使用して上位と中位を行ったり着たりしている緑谷。

「ウラあ、オレの前を走んじゃねえ」

両手の爆発を細かに使用して走り続ける爆豪、悪態こそ出ているが爆破の細かな制御が出来なくなってきていた。

「はいお疲れさん、これみんなの総合結果ね」

「除籍対象者無し」

相澤の見せた紙にはそう書かれていた。

「「「ええええええええええええええええ!!」」」

「普通に考えたらわかりますわ・・・初日に最下位除籍なんて」

「君らの最大限を引き出すための合理的虚偽だ」

「ダウト」

相澤の対応に対して、八百万が得意気に答え、それを補足する相澤だった。しかし、その場にヘタリ込んでいた火埜がその言葉を否定した。

「最初は絶対にマジだったつすよね、てか目がマジでしたよ」

「大方オレ等が腑抜けだったら、最下位と言わず見込みのない奴は全員除籍にしてやがったな」

火埜の言葉に爆豪が補足する形で答えた。

「まあ2人の言う通りだ。まだまだヒーローと呼んではやれねえが、妥協点としては十分だ、氣い抜くなよ有精卵ども」

「「「はい!!」」」

「それじゃ本日は解散、明日はガイダンスすつから筆記用具とカバンだけでも持ってこい」

こうして、1-A生徒のヒーローへの道は始まったのだった。

明日に備え各員其々が帰宅し、緑谷・爆豪・火埜も歩けるまで回復したので教室を出ようとした時だった。

「やあ、お疲れさま3人とも」

そこには、成人にしては痩せ細っている金髪で背の高い男性が立っていた。

「あ、オー疲れ様です先生」

「おや八木さん、お仕事はもう宜しいのですか？」

「今日は診察日じゃねえだろ。何やらかしたんだ。正直に言いやがれ」

生徒3人から三者三様の返事に大人としての信頼の無さを感じた男は少し泣きそうになった。

「HHHHA、安心したまえ。今日はまだ何もしてないよ」

「今、今日はずって言いましたね」

「八木さん、またあの地獄を味わいたいんですか？」

「オイコラプロヒーロー。マジでこれ以上翔織に世話やかすなら連絡するぞコラ」

イイオトナに向けられる子供たちからの微妙に冷たい視線。

この3か月、色々やらかした結果であるため、八木としても冷や汗しか流せない状況であった。

「Oh、Shit待ちたまえ爆豪少年。とりあえずその一斉送信ボタンから手を放してくれないか」

「あ、脚が小鹿のように震えてる」

「師匠に親友に相棒に僕の保護者。こう揃うとキャラが濃いな」

「チツ、取り合えず要件を言いやがれコラ」

華麗なる土下座スタイルに移行した八木を心配そうに見つめる緑谷。

既に若干あきれ顔の火埜。

顔から怒りが爆発しかけている爆豪。

「うん、今後の緑谷少女の修行の件んでちよつと相談が」

「とりあえず、車で送ってください」

「ボケが、ココだと誰かに聞かれるかもしれないねえだろが」

「なるほど、車内なら完全な個室だから『ボク』のこと話しても問題ないか」

4人の出会いは思い出というには最近のことであった。

「緑谷少女、その2人が君の言っていた条件の2人なんだね」

ゴミだらけの海岸。

朝、まだ暗い時間に大人1人と子供3人が立っていた。

「はい、爆豪勝己と火埜翔織です」

「おい、おっさんなんだテメエは」

「シズ、案件かな？案件なら迷わず警察に連絡しようよ」

連れてこられた少年2人から放たれる言葉に冷や汗を流しながら、男性「八木 俊典」は自分の正体と緑谷静空が受け継ぐモノについて話し始めた。

「ふざけてんじゃねえぞ、オイコラ!!」

最後まで聞いていた爆豪と火埜であった。

しかし、話の途中から爆豪は体を震わせ、血が出るほどに拳を握りこんでいた。

そして、今その怒りは爆発した。

「いや、今見せたように私は」

「テメエが本物のオールマイイトか偽物かなんかどうだって良いんだよ」

爆豪の顔は灼熱のマグマを思わせるように怒りに染まっていた。

「シズは『無個性』だからって、勝己がいなかったらどうなっていたか解らない様な苛めを受けていたこともあります」

「貴方の様に『個性を上げる』と言われ誘拐されかけたこともありま

す」
火埜は逆に表情から一切の感情が読み取れない、まるで極寒の氷河を思わせる冷たさを顔に張り付けていた。

「シズにとって『個性』ってというのは、それだけ特別なんです。やる

気があれば何でもできるとまでは言いませんが、希望を持たせるだけなら止めてください」

「コイツの『夢』を弄ぶ奴は誰だろうとぶつ殺す」

少年と言っても差し支えない年齢の2人から明確に放たれる殺意。数多の敵、それこそ宿敵を前にしてもここまでの殺意を浴びたことはなかった。

「ボクは2人がいてくれたから今日まで頑張ってこれました」

「それは、あなたも同じじゃないですかオールマイト」

「2つ目の条件、『大切な人と話し合ってください』っていうのは貴方のことを心から心配してくれている人たちがいるということを理解してほしかったです」

目の前の少女から放たれた言葉に八木、オールマイトは衝撃を受けた。

彼女にこれから託そうとしている個性、『ワン・フォー・オール』はできうる限り秘匿すべきと考えていた。

しかし、後継者と見据えた少女は本当の意味でこの個性を理解しているように思えた。

「すまない、緑谷少女。1週間、私に時間をくれないか」

「いいですよ、こちら準備がありますから」

「それでは1週間後、再びこの場所で会おう」

気が付くと殺意を放っていた少年2人からは呆れたような視線を向けられていた。

これが、後にオールマイトこと八木俊典が自身の最後の仕事と定めた後継者の育成に本気で臨む切っ掛けとなった日であり、歴史がぐるりと音を立てた変わった瞬間であった。

「そろそろ次の段階に移っても良いのではとお師匠から連絡があつてね。すごいよ緑谷少女」

オールマイトの運転する車の中、憧れのヒーローに褒められ顔を真っ赤にして照れている緑谷。

「オールマイトのお陰です。正直、こんなにもすごい方々がボクを育成してくれているなんて夢のようです」

そう言つて両手を思い切り握りしめる緑谷。

「確かに、オールマイト一人だったらこんな早く個性を馴染ませられなかっただろうね」

「教え方がへボ過ぎんだよ、目のおっさんとぶつ飛びジジイにサポートのおっさんが居なかったら今頃シズクぶつ壊れてたんじゃねえか？」

緑谷の両脇に座る少年から放たれる棘を一切隠そうとしない物言いに、復活したばかりの胃が痛むオールマイト。

「うん、確かに私一人だったらもつと遅かつたかもしれないな」

「あ、話変わりますけど次回の診察まで固形物は絶対に食べないでくださいね」

「やつぱり、相当キツイのとーくん」

幼馴染みの個性を熟知している緑谷は火埜の個性を使用しすぎた時のリバウンドの辛さを知っていることもあり心配そうである。

声こそ出していないが、爆豪も若干心配そうな視線を向けている。

「いや、僕じゃなくてオールマイトが心配だよ」

「え!? 私?」

「だって、損傷した内臓の再構築と免疫系のホルモンの増強は済んでるじゃないですか。残り火を回復に回さないようにするってことは次は無理矢理最速再生を強行する可能性があります」

「まさか、あの地獄の1週間分の激痛が」

「恐らく、1時間に凝縮されるのではないかと」

顔を青ざめるオールマイト。

治療の過程を見てきた緑谷と爆豪も顔を青ざめさせている。

「ま、2日後まで無理しなきゃ良いんですからね」

その後、車内では4人分の乾いた笑い声が木霊していた。

ちなみに、後日案の定無理をして回復しきっていない内臓を痛めてしまい、どす黒い何かを背後に顕現させた火埜とその保護者による「そこまでやる必要なかったかもしれないけど、安静にしてろって言ったよなボケ」という思いが込められた、気絶することも叶わない

激痛に襲われる再生治療が行われ、久し振りにマジ泣きしかけたオー
ルマイトがいた。

数日後

「シズクちゃん、今日は朝からソワソワしてるわね」

プレゼント・マイクによる英語の授業（案外普通でした）の後の女
子皆と数人の男子とでランチラッシュの極上のランチを堪能した緑
谷。

そんな、朝から子供のようにワクワクソワソワしている緑谷の席に
はクラスの女子達が集まっていた。

「うん、だって今日は待ちに待った日だから」

「私も、次の時間とつても楽しみ」

そんな女子の花の咲いた様な雰囲気から一変、窓際に佇む一人の男
子からは正反対の気配が漂っていた。

「滾るぜ、滾っちまうぜ。次の時間、制服越しても解る数多のマウンテ
ンが遂にその姿を現すのか。おふう、落ち着けリトル峰田」

峰田から漂う怪しい気配に同じ男子勢も流石に曳いていた。

「あんのザコが。爆破する」

「勝己、まだダメ。せめて、手が動いたらにしなよ」

「お前らの会話も、中々に危ねえよ」

峰田の背後で、両手の爆発を繰り返す爆豪。

そんな爆豪を言葉で諫めているように見えて、自分も殺る気が洩れ
ている火柱。

そんな二人の近くにいってしまったが為に、怒気に怯える上鳴がい
た。

チャイムが鳴り、全員が席に着く。

少し遅れて前の扉が開き、次の時間の講師が現れた。

「Y a H A H A H A H A H A H A H A H A、有精卵諸君。私が来たよ」

生徒たちの目の前の教壇には、一般男性からすれば筋骨隆々だが、
まだ常識の範囲に収まる肉体を黄色いストライプの入ったスーツに
身を包んだ現NO.1ヒーロー“オールマイト”が教師として立っ
ていた。

「私の担当するのは『ヒーロー基礎学』!!ヒーローとしての下地をつくる為に様々な訓練を行う科目だ!!単位数も最も多いぞ」

H A H A H A H A H Aと豪快に笑うオールマイトは懐からカードを取り出し、生徒たちへと見せる。

「早速だが、今日はコレ!!『戦闘訓練』!!」

出されたカードには『B A T T L E』の文字。

戦闘訓練、昨今ではヒーローの必須技能ともいわれる戦闘技術。

自身の個性やそれ以外の特性に合わせたスタイルを確立させ、敵との戦闘においても市民を安心させられるだけの力を誇示するのに最も適した技能である。

「それに伴い、今回はこちらを使用する!!」

オールマイトが小型のリモコンを操作すると、教室の壁から番号が書かれたケースが出てくる。

「入学前に送ってもらった『個性届』と各自の『要望』に沿ってあつらえた『コスチューム^{戦闘服}』だ!!」

「『おおお!!』」

コスチュームの登場に教室に歓声が響き渡る。

「更衣室の場所はちゃんと把握しているね、それぞれの出席番号が振られたトランクを持って更衣室に移動してくれたまえ」

「着替えたら順次、グラウンド・βに集合だ!!」

「『はい!!』」

生徒たちは元気よく返事をし、各自自分の番号が書かれたトランクを持って更衣室へと走っていった。

「H A H A H A、君たち気持ちは解るが廊下を走るんじゃないぞ!!」

グラウンド・β。

オフィス街を想定した様々な建物が存在するその場所には、各々のコスチュームを身に纏った1―A生徒たちが集まっていた。

「H A H A H A H A 皆似合っているじゃないか!! 恰好から入るってのも大切なことだぜ有精卵諸君!!」

「そして自覚するのだ!! 今日から自分は“ヒーロー”なんだと!!」

自身のコスチュームに着替えたオールマイトが生徒を見回し、その姿を褒めている。

周囲を見回す生徒たち。

自分の個性に合わせたコスチュームなのだろう。

「(目のやり場に困る子が多い)」

火埜は内心照れているようであった。

「あ、シズクちゃんのなんかウサギっぽいね」

麗日と並んで出て来た緑谷は確かにマスクを被ると耳の様に見えるパーツのせいか全身が緑色なのにも関わらずウサギのフォルムに見える。

「そうかな、コレお母さんが作ってくれたのを知り合いのエンジニアさんが更に改良してくれたんだ」

しかし、全身に筋肉が付き女性らしい体つきになってきた緑谷のコスチュームは全体的にパツパツで体のラインがしっかりと出てしまっていた。

「そうなんだ、私もちゃんと要望書けばよかったな。見てよパツパツ」

麗日も全身タイトの様なコスチュームのため体のラインが丸分かりな状態である。

「ケロ、でも2人とも動きやすそうね。私と一緒にだわ」

蛙吹も全身タイトのようなコスチュームのようなだが、どうやら本人の希望だったらしく気に入っているようだった。

「ヒーロー科最高」

虚空へサムズアップする峰田に心の底では同意しつつも、火埜が必死に表に出さないようにしている。

「火埜はなんか『マファイア』って感じ。スーツにアクセサリ、腰回りについてる変な箱。でも似合ってるじゃん」

火埜の隣に来ていた耳郎、彼女の感性的に良い評価を貰えたようだった。

「耳郎さんも素敵ですね、ロックアーティストみたいで、カッコイイですね」

「えへへ、ありがとう」

火埜は紅いシャツに黒いネクタイを巻き、黒いベストに黒いスーツ一式を纏い、透明なカフスボタン。

腰にはベルトの他に掌サイズの複数の箱がチェーンで繋がれて装着されていた。

耳郎のコスチュームも見た目はロックアーティストのステージ衣装のようで、コーラルピンクのような色のダメージTシャツに黒い丈の短いジャケット、黒のズボンにブーツ。

さらには白い指貫グローブという風貌だった。

緑谷を通して女子陣と会話をするようになった火埜と爆豪。

中でも火埜の化け物級コミュニケーション能力は数時間でラインのアドレス交換までやってのけるほどだった。

「質問があります！…ここは入試の演習場のようですが、また市街地演習を行うのでしょうか？」

飯田と思われる声の方向に火埜と耳郎が振り向くと、西洋の鎧とバイクのような意匠が混ざり合ったコスチュームを着ている人がいた。

その姿に目を輝かせている緑谷を見て、似たヒーローがいるのだろうと辺りをつけて事の成り行きを見守る火埜と耳郎。

「H A H A H A H A H A H A H A H A！元気があって大変いいぞ飯田少年!!」

「しかし、君たちがヒーロー活動をする上で決めつけることは良くないぞ。現場に到着したら、まずは先行しているヒーローに状況確認を行おう!!」

「そして、今回はもう二歩先に踏み込むぞ！今回君たちが行うのは屋

内での 対・人・戦・闘・訓練”さー!”

「敵退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内のほうが凶悪敵出現率は高いんだ。窃盗・監禁・裏商売、このヒーロー飽和社会、真に賢い敵は屋内にひそむものさ!!」

オールマイトの教師らしい一面に全員が驚いている。

「君らはこれから”敵組”と”ヒーロー組”に分かれて、2対2の屋内戦を行ってもらおう!!」

「基礎訓練もなしにつすか?」

「その基礎を知る為の実践さ!ただし今度はぶっ壊せばオツケーな口ボじゃないのがミソだ」

「勝敗のシステムはどうなりますの?」

「ブツ飛ばしてもいいんスか?」

「また除籍とかペナルティがあるんですか?」

「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか!!」

生徒たちが各々発言をしてしまい、場が混乱し始めた。

「んんんー聖徳太子イイ!!」

流石のオールマイトからも汗を垂らしながらツツコみがある。

「とりあえず、全員一旦落ち着きましょう。皆が言いたいことを言い始めてしまったら、話が進まないわ」

「ありがとう、蛙吹少女!!それじゃ今回の状況設定から説明していいう」

「今回の状況は『敵がアジトに爆弾を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている!』というものだ!!」

「まず敵側に先に入ってもらい、待ち伏せてもらおう!形式的には立て籠り事件に近い形かな!」

「立て籠りってことは、敵側は人質でもいるんですか?」

「お!察しがいいな、葉隠少女!敵側にはある爆弾を死守しながら、制限時間内ヒーロー達と格闘してもらおうぜ!」

「そのために最初に言ったように敵側には先に屋内に入ってもらい、爆弾の配置決めとか建物内の構造の把握とか作戦思案してもらおうってことさー!」

「あ、爆弾は無論張りぼてだし、君たちにも運べるくらい軽いから安心してくれ！」

今回の授業内容の説明（カンペ熟読）をしながら、生徒たち全員の顔にやる気が漲っているようにオールマイトは感じていた。

「よし、じゃあ最後にもう一度確認ね！今回はペアを組んで、ペアごとに対戦する形式だ！」

「次に一番最初のダブルペアはここに残り、それ以外のみんなは私とともに別室にて試合観戦！」

「敵側が先に屋内に入りダブルペア其々で事前の打ち合わせ。そして、敵側が屋内に入ってから数分後に試合開始だ！」

「試合開始や終了の合図諸々は私がアナウンスで伝えるから、心配しなくていいぜ！」

「ヒーロー側の勝利条件は爆弾の確保、もしくは全敵の無力化で勝利！敵側は制限時間終了まで爆弾を保守もしくはヒーロー側の無力化ができれば勝ちだ！」

「そして、無力化の条件は“これ”を敵に“巻き付ける”ことさ」

そう言って、新品のテープがオールマイトの指に現れ、フラフープのようにクルクルと指先で回されていた。

「それは、テープですか？」

「正解!!これは雄英印の訓練用捕縛テープ、何も相手をボコボコにしなくても、こいつを体に“巻きつけた”その時点で相手の無力化成功ってことになるぞ!!」

「まあ訓練って言ってもあまりに過激なことやって取り返しのがつかないうことになったら大変だからね！ヒーロー側は各自一つずつこれ持っていくように！」

「さあ、コンビ及び対戦相手はくじ引きで決定だ!!」

何処に持っていたのか、オールマイトは勢いよくチーム分け用の札が入った入物を前に出した。

「適当なのですか？」

くじで決めることに対して、飯田が不満の声を上げる。

「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップする事が普通さ。今

回はそういったことも含めて最初の授業とするのさ」

「そうか!!先を見据えた計らい、失礼いたしました!!」

「それじゃ、準備はいいかな? Let's KUJIBIKI TIM E」

A チーム：麗日お茶子、緑谷静空

B チーム：障子目蔵、轟焦凍

C チーム：峰田実、やおよろずも

D チーム：飯田天哉、爆豪勝己

E チーム：尾白猿夫、芦戸三奈

F チーム：口田甲司、砂藤力動

G チーム：蛙吹梅雨、常闇踏陰

H チーム：葉隠透、火埜翔織

I チーム：切島鋭児郎、瀬呂範太

J チーム：上鳴電気、耳郎響香

「お、火埜君とだ。よろしくね」

「ええ、こちらこそ。よろしくお願ひします葉隠さん」

若干視線を下げっぱなしにして会話する火埜と、手袋とブーツだけなのにバタバタと忙しく動く葉隠。

「そして、記念すべき最初の対戦チームはこの二つ “Aチーム” “VS “Dチーム”!!」

対戦チームの発表されると、緑谷と爆豪の視線が合わさる。

「本気で行くよ、かつちゃん」

「真剣でこいや、シズク」

互いに視線をぶつけ合い、互いを鼓舞するかのようによる気を漲らせる両者。

「それじゃ、それ以外の皆は私と共に移動だ」

「役柄、決めてないですよ」

「・・・OhNo」

何かと締まらないオールナイトだった。

コイントスの結果、Aチームが敵でDチームがヒーローとなった。火埜は他の生徒たちが移動する中、幼馴染2人を見ていた。

「ま、面白くなりそうじゃん）頑張れよ2人とも」

「火埜君、行くよ」

そう、聞こえないほどに小さな声でエールを送る火埜とその腕を持って皆の後に続く葉隠。

「飯田、テメエの個性は脚力強化の類なんだな」

ヒーロー側、爆豪が飯田に詰め寄る様に作戦会議が始まった。

「あつああそそうだ、ぼ・オレの個性は“エンジン”。ギアチェンジをしていく事で誰よりも速く走れるようになる。爆豪君は」

「オレは“爆破”、この両手から爆発を起こさせることが出来る。正直、今回の訓練はオレ達に分が悪い」

一方、アジトとなるビルでは。

「お茶子ちゃんの個性は“無重力”だっけ？」

「うん、私の両手の指先の肉球、五本の指全部で触れた物を一時的に無重力状態にできるんよ。シズクちゃんは“超パワー”やったっけ？」

「少し違うんだけどね、増強型ではあるんだけど、自分の地力を底上げして、力だけじゃなくて反射神経の類もパワーアップ出来るんだ（実際は全然違うんだけど）」

張りぼての爆弾の前で可愛らしい女の子二人がキヤツキヤツとしている光景、恐ろしく違和感だらけの光景だが非常に眼福である。

「今回の訓練、ボクらが有利だよ」

「ん？どうゆうこと？」

「分が悪い、とはどういうことだ爆豪君」

「いいか飯田、テメエの個性を十全に使うなら今回の場合、屋上みたいの開けた場所に限定される。テメエ仮に最速状態にもってけてもこの中ぶつからずに走り回れるのか」

「んん!?んん、ハッ!!無理だ」

「オレにしたって相手が爆弾を持っている、この状況で近くで個性を使用しようものなら、誘爆させる危険性がある、そうなるのだ」

「かつちゃん達は行動に制限がかかった状態になる」

「ほへへ、なら楽勝なんじゃないの？」

「ただし、それは理想的な形になればの話だよ」

「だが、逆にシズクたちは取れる手段が多すぎるあまり、時間切れを指すしかない」

「確かに最悪麗日君の個性で爆弾を浮かせられてしまったらオレたちは捕獲するしか方法がない」

「もともと、『捕獲』することしかできないなら最初っからそれ狙いでいけばいいんだよ」

「と2人は考えてるだろうな」

モニタールームにて試合観戦の準備に入ったオールマイト。

知り合い2人の対決ということもあり、火埜に解説役が回ってきた。

そして、見事に2人の考えを言い当てた火埜。

「流石、幼馴染」

「知力戦は互角というところでしょうか」

周囲のざわめきを隠れ蓑に、火埜は一番後ろまで移動した。

「ま、オールマイトの説明をどう解釈するかで、この訓練の難易度が変わってくるんだけどね」

「え？どうゆうこと」

火埜の漏らした言葉にペアとなった葉隠が火埜の顔を覗き込む（見えてないけど）様にして質問してくる。

「オフレコですよ。今回オールマイトはあの物体を『爆弾』と説明しました」

「うん、そうだよ」

「でも、それがどんな爆弾なのか説明していません」

「うん？何が可笑しいの？」

「起爆方法も時限式とは言っていません、あくまで訓練の性質上、時間制限が設けられましたが、それよりも前に爆破してはダメともイイとも言っていません」

「!!確かに」

他人から姿が見えないのに動きと声色で感情が伝わりやすい葉隠にホツコリし始めた火埜。

「それに互いの勝利条件の共通項である『無力化』についても敵側は特に指定はされませんでした、と言うことはヒーロー側から捕縛テープを奪い、ヒーロー側に巻き付けても『テープを巻き付けられた者は無力化された』というルールは適応されてしまいます」

「あ、本当だ」

「あえてそう言われたのか、それとも初授業で緊張されていたからなのか解りませんが、解釈次第ではどちらも不利になるんですよ」

「ほへへ、火埜君頭いいね」

そして、同様の会話を幼馴染がしていることは火埜は考え付いていたし、審判役のためイヤホンをつけているオールマイトも会話を聞いて非常にいい笑顔になっていた。

「(やっべー、説明ミスったのバレてた)」

冷や汗を流しながら。

訓練開始のブザーがグラウンド・β。

爆豪たちは緑谷たちの個性を分析し、時間切れを待たずに寧ろ積極的に自分たちを行動不能にしていくスタンスで来ると読んでいた。

「準備は出来てるか飯田？」

「ああ、任せてくれたまえ爆豪君」

そんな2人は入り口に目を向けず、ビルの壁面を見ていた。

そして、飯田が全速力でビルから遠ざかっていくと、爆豪は自身の爆発を利用して屋上を目指し飛んで行った。

飯田も、徐々にギアを上げていき、現在自分があげれる一番上のギアまで持つていくと今度はビルめがけて走っていき、その速力を生かし壁面を走り抜け屋上へと駆け上がっていった。

「おお、屋上からの奇襲ってことか」

「すつごい爆豪くん飛んでるよ」

「飯田は垂直ダッシュとかマジかよ」

「飯田ちゃんの性格から考えて、立案したのは爆豪ちゃんね」

「これは流石に、緑谷達も読んでなかっただろうな」

モニターに映る現在の状況を見つめる生徒たち。

各々に評価を述べながらも観戦している中、壁際で敵側を写しているモニターを注視している生徒がいた。

「火埜さん、どうかされましたの？」

「顔が悪だくみしてるみたいな顔してるぜ」

そんな火埜に気が付いた八百万と、八百万のボディに目を向けていたことで違和感に気が付いた峰田は火埜に声をかける。

「ん？いやさ、シズが面白い事してるから」

「え、マジで!？」

「確かに麗日さんもせっせと何か運ばれているような」

火埜は笑み深めるとネクタイを少しだけ弛める。

「皆、勘違いしているけど僕と勝己がシズのこと一番怖いのはあの“個性”じゃないんだ」

ビルの屋上の映像がモニターに映し出される。

爆弾はなく、ビルへの侵入口となる扉も死角になって見えない。

「シズの一番の怖さは、観察力と思考の瞬発力だよ」

するとその死角から、緑谷と麗日が悠然と歩いてきた。

「シズはああ見えて、詰将棋みたいに相手の勝ち筋をある程度潰してから動くから、下手したら勝己たち負けるかもね」

火埜は4人が映し出されているモニターに視線を向ける。

それはまるでこれからの訓練を楽しみにしているような視線だった。

「かつちゃん、飯田君。爆弾は1階の一番奥の部屋にあるよ」

「ヒーローらしく、私たちを無力化して爆弾を捕獲に试试看んしやい」

「2人とも、そんなこと言ってるのかい!?!」

「飯田お前馬鹿か、コイツら今のでこの現場に野次馬が来ている想定を追加しやがったんだぞ。これでオレらは時間内に2人を捕まえるって選択肢しなくなされたんだぞ」

緑谷と麗日の爆弾発言に驚く飯田を余所に、爆豪は冷静に現状を分析し始めた。

「麗日の後ろにドアがあると仮定して、あそこを突破するためには敵2人を無力化しなきゃなんねえ」

「それこそ、この屋上なら僕らにもアドバンテージはあると君も言うてたじゃないか」

視線を緑谷と麗日から一切離そうとしない爆豪。

反対に、爆豪の発言があまりに衝撃的だったのか2人から視線を外し、爆豪を凝視してしまっている飯田。

「屋上と言っても、色々モノが落ちてる上に、落ちたギアを一気に上げるための助走距離が稼げるほど余裕はねえ」

「仮にあったとしても、あの2人が妨害してくる。そして、今回オレらが取れる手段は“無力化”しか選択肢がねえ」

「そう、今かつちゃんが言った通り、いくら敵を捕らえるためとはいえ、ヒーローが敵をボコボコにしたら問題だよ」

「それに、自滅型の敵なら寧ろ自分達も巻き込んで爆発でヒーローの評価を下げにいくんやない？」

「クソがー！！」

「なーんか爆豪の奴 “爆発” してね？」

「本当だ、シズクちゃん達と話し始めたら何かスゴイ顔になってきたね」

「H A H A H A H A、これは面白いことになったね」

「先生どう言うことですか？」

「詳しいことは割愛するが、緑谷少女達は “想定の押し付け” を行ってきたのさ」

インカムをして、音が一人だけ聞こえるオールマイイト。

その言葉に複数の生徒は頭にハテナを浮かべている。

「今回、私があえて穴だらけで説明したルールに、自分達の解釈を足すことで緑谷少女達はヒーロー側が完全に不利に成るように心理的な圧力をかけたのさ」

「(グラ爺報告案件発生、と)」

「つまり、爆豪さん達は目に見えない枷をつけられてしまっているということですよ」

「そう言うことだね、ソコについては彼らが戻り次第説明しよう」

屋上では大方の予想通り、爆豪対緑谷・飯田対麗日の構図で訓練が進んでいた。

「チッ、相変わらず厄介だな」

「ボクはかつちやんより弱いんだから、訓練のルールを盾にしないと対等に渡り合えないの」

敵の無力化のためのルール。

『事前に渡された捕獲テープを “巻き付ける” ことで無力化されたこととする』緑谷と麗日はこの “巻き付ける” という部分に着目した。

爆豪は自身の個性 “爆発” による加速を利用するためには、両手が空いてなければならない。

その為、相手にテープを巻き付けるといふ行為に常時意識を割くこ

とが難しいのである。

訓練中の4人の中で純粹にフィジカル面でトップに立っていることは、個性把握試験において確認済みだ。

だが、緑谷のような自身の身体能力を底上げする個性持ちに対して爆豪は個性抜きではまだ勝てないことは自身も認めている内容であった。

麗日は緑谷の助言により、浮かせた瓦礫の中心に立っていた。

麗日個性「無重力」の最たる弱点は許容範囲があることである。

範囲を越える「重量」を対象にしてしまうと酷い酔いに襲われてしまう。

緑谷は許容範囲の判定が重量であることに着目した。

コスチュームを纏っていれば現在麗日が浮かせている瓦礫程度であれば突破することは可能であろう。

しかし、相手が飯田となると話が違って来る。

4人の中で最も速く動ける飯田が個性を使用して走ったならば、3人にはその姿を追いけることはできない。

しかし、緑谷が爆豪の相手になる状況を作り、麗日が飯田の相手をする状況に持っていったならば、麗日の個性が光る。

野球ボールと同じくらいの大サイズの瓦礫を、麗日が酔わない程度の重量で屋上に配置。

それらを浮かせることで、防御するのではなく、飯田の行動を読むためのレーダーがわりに使用したのだ。

「今回は、普段からお喋りしてる静空ちゃんとお茶子ちゃんに軍配が上がりそうね。それに、お茶子ちゃんの周りに浮いてる瓦礫で飯田ちゃんの個性の強みが消されてるわ」

蛙吹が結果の予想を呟くと、それに重なるように周囲も勝負の決着が付いたような空気が漂っていた。

「梅雨ちゃんもまだまだだね」

壁際で自分の腰周りに付いている匣を弄りながら、モニターを見る火柱の声が室内に響いた。

「あら、でもこの状況じゃ爆豪ちゃん達に勝ち目は薄いわよ」

「そうだぜ火埜、いちゃもんなんて漢らしくねえぞ」

火埜の発言に首をかしげ自分の意見の正当性を解く蛙吹と火埜の発言を反論をかける切島。

「何と言われようと、皆まだまだだよ。爆豪勝己の本質はそんな簡単じゃないよ」

火埜が反論を繰り出したのとはほぼ当時だった。

「あれ、爆豪の奴緑谷からスゴい勢いで離れたぞ」

「両手地面につけて何か凶悪な顔で笑ってるよ」

「まさか、爆豪ちゃん」

「ふふふ、やったれ勝己」

緑谷・麗日ペアの狙い、それは単純に時間切れだった。

同年代という括りであってもフィジカルが鬼の爆豪。

思考がガチガチに固いが、個性と噛み合ってしまった時の爆発力が怖い飯田。

この二人を相手にして、尚且つ戦闘不能狙いなんてとんだ無理ゲーだ。

ということ、個性により強化した身体能力で爆豪を緑谷が、浮遊させた瓦礫によるレーダーで飯田を麗日が、其々を相手にすることで時間切れを狙い、相手には自分達は相手の無力化狙いだと誤認させることで時間切れ狙いを隠し、優位に進める予定だった。

実際、今しがたまでその戦法はガツチリとハマっていた。

だからこそ、緑谷は自分から距離をとり屋上に両手を置いた爆豪から嫌な予感敷かしくなかった。

「飯田、プランB!!」

その声と共に両手から爆発を発生させ大量の土煙を上げた。

全体を写すカメラすら人影を写し出すことしかできない。

土煙が晴れた時、そこには。

緑谷の全身に捕獲テープを巻き付け疲弊しきった「飯田」、瓦礫を吹き飛ばされ右手に捕獲テープを巻かれた麗日を前に座り込んでしまっている爆豪がいた。

「ヒーローチームWin!!」

怒涛の勢いで行われた初戦の終了は以外にあっさりしたものだっ
た。

「え、ナニナニ!? どうして!？」

「勝己はこうなることも想定していたんだよ、シズの間合いで戦い続
ければ確実にタイムアップで負ける」

「だから、シズを見ながら周囲の状況を確認してた。麗日さんの個性
で浮かせていた瓦礫、屋上から空いている隙間があったからあの作戦
は明らかに飯田を限定して考えてしまっていた」

「プランBなんて無かったんだろうな、大声出して飯田の視線を自分
に向けさせたうえで土煙を上げる爆発を起こした。そうすれば飯田
が自分の所に来てくれるし短い時間だけでも会話が出来る」

「そうか、そこで互いの相手を交換する話をして飯田君のスピードで
緑谷さんを翻弄して、自分は麗日さんが浮かせた瓦礫を吹き飛ばして
障害物を無くし、無防備になったところを捕獲したのか」

突然の展開に驚く葉隠、火埜は自分の考えを告げどこか誇らしそう
に幼馴染2人を見ていた。

尾白が火埜の発言から答えを導き出した時にはモニター無いでは
捕獲テープが解かれた緑谷と麗日、爆豪と飯田が握手を交わしてい
た。

「HHHHH、今回のMVPはズバリ誰かな? わかる子は挙手」

訓練を終えた4人がモニタールームに戻ってきたので総評が始
まった。

「はい、勿論爆豪さんですわ。事前の作戦立案から次につなげるため
の観察など4名の中で誰よりも常に考えて行動されました。その
結果、敵の無力化」という理想的な結末を迎えましたわ」

「八百万少女の言う通りだね。しかし爆豪少年は当初はペースを握ら
れっぱなしで疲労困憊だし、飯田少年は終始爆豪少年に任せきりに見
えたね」

「うっせ、解ってんだよ」

「はい、これを糧に精進いたします」

「麗日少女も序盤までは良かったけど、最終的に爆豪少年の閃きにやられた感じだったね」

「はう、確かにその通りです」

「緑谷少女も発案は良かったけど、次の手を考えるようにしないとだね」

「おっしゃる通りです、ボクがもっとしつかり考えられたら」

「H A H A H A、反省は後にして次のグループいってみよう!!」

こうして、第一試合は幕を閉じたのだった。

第1回戦の総評も終わり、2回戦の準備となった。

「お疲れ勝ち」

壁際でへたり込んでいる爆豪へと火埜が話しかけていた。

1回戦を終えた4人の中で最も疲弊していた爆豪を気遣ってか、他のクラスメートたちは残りの3人に集まっていた。

「シズクの奴やべえな、たぶん個性のブーストに慣れてきたみたいだし、そろそろお師匠たちが言っているように戦闘方法スタイルを確立させてもいいんじゃないか」

「シズはオールマイイトフリークだから殴り合いを主眼に置いてくださうけどね」

幼馴染2人で話す時、話題はどうしてももう一人の幼馴染である緑谷静空に関する内容になってしまう。

「ところでよ」

「なんじやい」

「お前、いつまで葉隠の手握ってるつもりだ」

「……えへっ」

実は1回戦の途中からある理由からずっと手を繋いでいる火埜と葉隠。

ブーツと手袋を火埜に預け完全迷彩状態フルモードでいた。

火埜は見る人が見ればわかるが頬が赤い。

「爆豪君スゴイ、良く気付いたね」

「葉隠、翔織はこう見えて純情野郎だからな “可愛い” 女の子と手を繋いでるだけで顔が赤くなるんだよ」

「黙れ、純情マイルドヤンキーが」

2回戦。

ヒーロー「Jチーム：上鳴電気・耳郎響香」Vs 敵「Cチーム：

峰田実・八百万百」

終始峰田が八百万のベストポジションに移動してはた目には役に立っていないが、自身の個性 “もぎもぎ” を生かした行動不

能トラップを作成、爆弾の置いてある部屋までの時間稼ぎに貢献。

部屋自体も八百万の個性「創造」によって作られた各種防犯装置により扉が開かず、結果耳郎の個性「イヤホンジャック」で正確に位置を特定できたにもかかわらず個性を使用できなかった上鳴が完全にお荷物となりCチームがタイムアップにより勝利。

なお、総評でオールマイトの要らん気遣いを受けて上鳴はそれなりに傷ついたようだった。

3回戦。

ヒーロー「Gチーム：蛙吹梅雨・常闇踏陰」Vs 敵「Fチーム：口田甲司・砂藤力動」

開始を告げられても作戦を煮詰めていたため、時間的な余裕が幾分無くなったヒーローチームだった。

しかし、常闇の個性「ダークシャドウ」の特性が生きた薄暗い部屋での戦闘で砂藤の個性「シユガードープ」と互角に渡り、口田が個性を使用する間もなく窓から蛙吹の奇襲に遭い爆弾を確保されてしまいGチームが勝利する。

そして、4回戦

「というわけで葉隠さん、僕らが敵としてこの爆弾を守らなきゃいけないんだけど、正直轟君の個性意味解りません」

「だね、個性テストでは氷だして滑ってるだけだったし」

ウンウンと互いに腕を組んで頷くのは敵役Hチーム。

「あれ、火埜君もしかして私見えてたりする?」

「あつ、・・・ダメツテタワケジャナイヨ。タイヘンオキレイナカオダチデガンブクデシタ」

「てことは?イヤーーーもしかして見えてたりするの?」

「だから、視線を下げないようにしてたの。黙っててごめんさい」

「ああ、もう理由は解ったから後で説明してね」

「アイ」

「中、騒がしいな」

「本当にな（火埜の奴不憫な）」

一方、ヒーロー役Cチーム。

騒がしいことは解る轟が無表情で入口を見ているのに対し、障子は複製腕の変異確認中に偶然拾ってしまった二人の会話から事情を察し対戦相手の一人に同情を示していた。

「確認なんだが本当に良いのか」

「ああ、障子はなにもしなくて良い」

轟の発言の後、開始のブザーが鳴り響いた。

「直ぐに終わらせる」

そう言つて轟が右足で地面を踏みつけると瞬時に氷が発生、ビル丸々一棟を氷付けにしてしまった。

「ビル内部で動く音はしない」

「障子は其処にいてくれ、爆弾は俺が確保する」

そう言つて悠々とビルに入つていく轟。

障子はその後ろ姿に頼もしさよりも何か別の恐ろしさを感じた。

「さ、寒い。轟の奴もつと速く歩けよな」

「お、おそらく轟少年自身が滑らないようにゆつくり歩いてるんじゃないかな（あの歳でこの出力、一体どんな訓練をさせたんだ）」

グラウンド・β地下に作られた移動型モニタールーム。

ここにも轟の個性の影響が現れていた。

「さ、さすが轟君。推薦1位の実力をしかと見させてもらったよ」

「あれ、でも葉隠達の部屋のカメラ可笑しくない?」

凍った階段を登りきり、目的の部屋までやって来た轟。

彼の目の前には足を氷付けにされ動けなくなっている火埵と葉隠の姿があった。

「悪い、実力の差が有りすぎたな」

「爆弾に触ればオレ達の勝ちだ。そのあと直ぐに溶かしてやるからもう少し待ってろ」

そう言つて部屋の奥に置かれた爆弾に手を振れようとした。

「轟、捕獲」

突如、爆弾が消え去り変わりに複数の手錠により拘束された轟と手錠から延びる鎖を握つて立つ火埵がモニターに写された。

「「はあ!?!」」

「ケツ、楽しやがつて」

「とーくんらしいね」

訓練会場となったビルでは手錠の拘束具により身動きがとれず転がされ目を白黒させた轟がいた。

「葉隠さん大丈夫?今溶かすね」

「び、ひのくくん、はやくくして〜」

恐らく葉隠が居るであろう場所まで火埜が移動すると火埜が姿を変えた。

全身をオレンジ色に染めた巨大な翼を持った孔雀のような鳥へと姿を変えた火埜。

少し浮かび上がると翼で何かを包み込むような姿になる。

すると、段々と何かの輪郭が現れてきた。

そして、ついにしっかりと現れたのは。

「なんじゃー、あの目鼻立ちがくつきりした美少女は!?!」

モニタールームに響く峰田の絶叫のとおり、オレンジの火の鳥に抱きつき温もりを堪能している美少女が姿を表した。

「オレンジてことは大空、〃調和〃か。周囲の状況と調和すると葉隠の場合は個性が一時的に弱まるのか」

「はあく、葉隠さん美人だな」

モニタールームを混乱に陥れたHチーム。

「あ、葉隠さん悪いんだけどこれ着て」

人型に戻り、スーツの上着とベストを脱いで葉隠に渡すと半獣態と言うべき姿になり翼となった両腕で再び葉隠を包み込む火埜。

「え、なんでなんで?そんなことしたら障子君に見えちゃうよ?」

「うん、葉隠さん今色々と危ないから取り敢えずベストを着て上着はスカートみたいに巻いて、お願い」

不思議そうにしながらベストを着て上着を腰に巻き付ける葉隠。

「着たよ〜」

葉隠のその言葉を聞くと人型に戻り顔を両手で覆いブツブツと何

かを呟き始める火埜。

「イヤイヤイヤイヤ、不味いつて。葉隠さんこれで動いたらもう完全に痴女じゃん。訓練終わる頃には効果切れてるだろうけど、この状態で格闘戦なんて絶対に駄目でしょ」

覆っていた手の間から葉隠を見上げる火埜。

そこには目鼻立ちがくつきりした美少女が不思議そうに自分を見ている姿があった。

「葉隠さん、取り敢えず轟君を漁って捕獲テープを探して首に巻き付けて」

「はい」

「とどろきー、オイラとそこ変われー」

血涙を流し、ハンカチを噛み千切った峰田の魂の咆哮がモニタールームに響き渡った。

肌色率60%弱の美少女にまさぐられる様は、何となくいけないものを見ている気がして恥ずかしかった。

実際、轟の顔近くに葉隠の胸部が近づいた際には峰田以外の男子は一斉に顔を背けた。

「よし、葉隠さんはそのまま爆弾の置いてある部屋に移動して爆弾の警備」

「了解!!ところでいつまでコレ着てれば良いの?」

「せめてこの訓練が終わるまでは着てて、お願い」

もう障子に聞こえてようと構うもんか、そんな感じで普通の声量で話すHチーム。

「火埜」

突如、轟が声を上げた。

2人で寝転がした轟を見ると何やら申し訳なさそうに、且つ不思議そうな顔を向けていた。

「お前の個性は『火の鳥』じゃないのか?」

あれ、こんな顔出来たんだと火埜が考えていると。

「轟君、そう言うのは後だよ。さあ、火埜君も行った行った」

あ、いつも表情コロコロ変わってたんだと火埜と轟が認識したの

は同時だった。

一方、ビルの入口で待つ障子は。

「(あまりにも遅い、中で何かあったな)」

静観状態だった自分を恥、直ぐ様複製腕全てに耳を複製して中の様子をうかがった。

すると、自分に物凄いスピードで近づく風切音が聞こえた。

音のする上空を見上げると、そこには紫色の炎を纏った火の鳥が自分に猛スピードで突っ込んでくる姿があった。

「しょーしょーじーしょー、僕の精神安定のためにおとなしく捕まってくれーしょー」

その叫びと共に火の鳥が自身を通り過ぎると障子は轟同様手錠の拘束具に捕まっており額には鉢巻のように捕獲テープが巻かれていた。

「敵チーム、Win!!」

その瞬間、オールマイイトの勝敗アウンスが流れHチームの勝ちが確定した。

そして、モニタールームにも音声が流れると。

「八百万、絶対聞こえてるよな？後で何でもするからワンピースみたいな服作つて」

勝利した火埜の魂からの願いが響き渡った。

モニタールームに戻ってきた4回戦メンバー。
ただし、Hチームは少々出で立ちが変わっていた。

火埜翔織。

上着は中に着ていたインナーの黒いタンクトップだけになっており、折り畳んだベストとネクタイを左腕に引っ掛け、左頬にはくつきりと紅葉マークが出来ていた。

葉隠透（恐らく）。

火埜が着ていたであろう赤いワイシャツを着て、下半身は火埜のスーツの上着をスカートのように巻き、それをベルトでしっかりと止めた状態で口からムームー言いながら火埜の後ろにベツタリと張り付いて時折ポカポカと音がする程度に叩いている。

なお、恐らくと付いているのはその少女が目視可能な目鼻立ちがくつきりした黒髪ロングの美少女だからである。

「よう、色男。綺麗な紅葉だな」

「黙れ勝己、しばき回すぞ」

「どうぞ、葉隠さん？お使いくださいまし」

「わあー、ありがとうヤオモモ」

「まあ（あだ名なんて私初めてですわ、それになんて愛らしい笑顔）」
男子に見えないように女子一同でガードされた葉隠は八百万の創造したワンピースに着替える。

「おいおいおいおい、火埜さんよお。お前オイラ達に謝ること有るよなあ、あん!!」

その横では何故か正座させられた火埜が血涙を流す峰田に詰め寄られていた。

「いや、お前らには無いはずだ「惚けんじゃねえよ!!」

峰田のあまりの迫力に周囲の男子も驚愕していた。

「お前は、緑谷っていう可愛い幼馴染みが居ながら、葉隠というオイラ達には視ることのできなかつた美少女の裸体を一人嘗め回すように楽しんでやがったな!!そうだよな、そうだと言いやがれ!!」

峰田の理不尽な怒りにさらせられており、流石に可哀そうになってきたのか尾白と障子が割って入ろうとした時だった。

「頭沸いてんのかテメエ」

「ピエ」

顔面アイアンクローから持ち上げられ、殺気が籠りに籠った眼差しで火埜に見つめられ瞬時に縮こまる峰田。

「いいか、相手が見える見えない関係なくな、相手が不愉快に思いそうなことをしないように努めるもんだろうが。しかも、今回の訓練で葉隠を巻きみかねない出力でぶっ放すことも考えれたから事前にどのオーラなら問題ないか確認もしてるんだよ。思ってた以上に馴染んだせいで輪郭とかはつきり見えてたけどな、そうですねえよ見えてましたよ美人でしたよ役得でしたよ。でもな、葉隠だってヒーロー志望の前に女の子なんだよ、TPOで考えればそういう感情駄々洩れで見られたくないことぐらい分かんだろうが。お前マジで燃やし尽くすよ」

朗らかに笑っているイメージの強かった火埜のノンブレス説教。

峰田を見ると若干漏らしていた（何がとは言わないけど）。

「ひ、火埜少年」

「ああん、んだコラ」

「あ、ゴメンナサイ」

No. 1ヒーローに悪くもないのに謝らせている怒り。

実際、治療中に何度か怒鳴られているから脊髄反射で誤っているのだが。

「ねえねえ、火埜君」

「葉隠さん、もうちよつと待って。このブドウ頭処すから」

「別にいいよ、私気にしてないし」

服を引かれ、後ろを振り向くとそこには朗らかな笑みを浮かべた葉隠がいた。

「まあ、最初は峰田くんみたいに考えてたけど、私が見えてからも体隠してくれたりしてたし」

「それに、前もって聞いてたのにパニックになったの私だし、取り合えずね授業受けよう」

「・・・、峰田」

「はい」

「葉隠さんに感謝しろ」

「はい」

怒気も収まり気づかないうちに発していたオーラが薄まると所々から息を吐きだす音が聞こえた。

「火埜の奴キレるとやべえな」

「はあ？ウチは寧ろ好感持てましたけど」

「まあ、今回は大人しいほうだったな」

爆豪の発言に視線が爆豪に集まる。

「え、あれが」

「そう、あれで」

「誰だって触れてほしくないこと一つや二つあるだろう、さつさと総評しようぜ」

轟の助け舟に乗る形で授業に戻る面々。

一方の火埜と葉隠はコスチュームに着替え終わった火埜のジャケットの裾を葉隠が握って離さないののでそのままにしている。

「んん、それじゃ今回の総評、MVPは誰だと思う」

「はいはい、火埜君だと思いまーす」

「作戦立案、仲間の補助、対抗チーム2人の捕獲全てを行っていましたしね」

べた褒めの火埜は当然とばかりに無表情に近い顔立ちで立っている。

「まあ、そうだね。葉隠少女は今回はドンマイってとこだね」

「はい、私いいとこなかったです」

「轟少年も自分の個性に自身があるのは良かったけど、セカンドプランを立てていないのが痛かったね」

「はい、今回負けたのはオレのミスです」

「障子少年ももう少し自分の意見が言えたらよかったね」

「はい、轟が突入する前にもう少し慎重を期すべきでした」

「H A H A H A、ちゃんと反省点を生かせるのならそれでOK!!とこ

ろで火埜少年」

「・・・何っすか」

気持ちが落ち着いてきたのか返事に温かさが宿ってきた火埜。それを見て安心したようでオールマイトは続ける。

「葉隠少女はいつ元に戻るんだい？」

「さあ？」

「「え!？」」

「思ってた以上に葉隠さんとオーラの親和性があったみたいで、もしかしたら個性因子に影響出てるかもしれないですね」

「あ、でもさつき透明になれって思ってたら腕透明になりました」

「オンオフが出来るようになった可能性があるのか、葉隠少女は近いうちに必ず病院で検査受けるように」

「えー、いつもより調子いいのにですか？」

「個性学は未だ未知の部分が多いからね、検査しておいて損はないよ」「はーい」

「それじゃ、4回戦は終了ということ。次いつてみよう」

戦闘訓練が終了し、放課後となった。

「はいはいはーい、これから今日の反省会しない」

葉隠がいつもの調子で皆に声をかけていた。

「葉隠さん」

「あれ、火埜君どしたの？」

未だに透明化する気配のない葉隠の肩に火埜が手を置いた。

「これから病院行くよ」

「えー、明日じゃダメ？」

「ダメ、僕の保護者も校門に来るみたいだし、親御さんには連絡済みだから取り合えず今日はダメ」

戦闘訓練以降、距離が近くなった2人。

それを面白くなさそうに見ている緑谷。

「そうやね、葉隠さん自分の体なんだからちゃんと検査してきなよ」

「ケロ、反省会なら明後日にしましょ。明日予定を決めればいいわ、ちようどお休みだし」

麗日、蛙吹の援護もありシブシブという態度が顔からも解る葉隠は何か名案を思い付いたような顔をした。

「じゃあさ、皆グループ作ろうよ。そしたら連絡とりやすいでしょ」
「はう、遂にうちもラインデビューや」

原作世界線だとガラケーの麗日。

しかし、この世界線では多少お金に余裕が出来たため最安値のプランでスマホデビューを果たしていた。

数分後、峰田も土下座懇願でグループ入りを果たし、1Aライティンググループが出来上がった。

「それじゃ、今日は解散としよう。皆しっかり休んでくれ」

飯田の仕切りで帰路につく1-A生徒たち。

校門まで何となく全員で移動していると。

「んもー、遅いっちゃぶるよトリーボーイ」

そこには4m近くある長身のスラリとした女性がピンクのスーツを身に纏い立っていた。

「あれ、イワさん今日は“ソツチ”なんですね」

「うわー綺麗な人。ねえねえ火埜君、この人がさっき言ってた保護者？」

火埜の後ろにずっと付いて来ていた葉隠が顔を出すと女性は値踏みをするように顔をスレスレまで近づけた。

「このキャンディーちゃんがトリーボーイがやらかしちやっただ子ね」

「やらかしたというか、ここまで親和性が高い子がいることに驚いているというか」

「はいはいはーい初めまして、火埜君にやらかされた葉隠透です」

「あら、面白い子ね」

3人のやり取りを遠巻きに見ている1Aグループ。

その中で顔色を変えている存在が2人いた。

一人は爆豪、顔面蒼白となり震える体を緑谷で隠し、イワさんと呼ばれた女性の視覚から逃れようとしていた。

もう一人は峰田、何故かこちらも全身から冷や汗を滝のように流しながら白目で気絶しかけていた。

「あら、シズクちゃんじゃない、ということはこのキャンディーちゃん達は」

「お久しぶりですイワさん、皆クラスメートです」

「あらあら、皆カワイイキャンディーちゃん達じゃない」

するとイワさんと呼ばれていた女性は手を振るった。

すると、手袋に包まれた指先が注射器の様に形状が変化した。

「エンポリオー、男”ホルモン」

そう叫ぶと自らの体に指を突き刺した。

そして、突き刺した瞬間から体に変化が訪れた。

長かった紫のロングヘアーはアフロヘアーへ姿を変え、8頭身はあろうかというモデル体型は顔が巨大化し体が縮んだたせいでどう見ても2頭身になった。

体の変化が終わり指が引き抜かれる頃には全くの別人がそこにはいた。

「ギャー、ニューカマーヒーロー”グイーンキヤマバツカ”!!」

「ヒーハー!!」

峰田が現実を直視し気絶する際、トラウマでもあるのかその存在の名をあかしたお陰でそのインパクト抜群の存在が誰だか知れ渡った。

「何してるんですかイワさん」

「あらヤダ、イレイザーヘッドじゃない。ヴァナータがこの子たちの担任なのね」

「あなたはただでさえインパクトあるんですから用事済ませてさっさと行ってください」

「それじゃ、トリーボーイとこのキャンディーちゃんは預かってくわよ」

「どうぞどうぞ、火埜お前も大変だな」

「慣れましたし、いい人ですから」

「そこはオレも否定しない」

「それじゃトールガールも車に乗せたし行くわよ、ヒーヒーヒーハーヒーヒー!!」

「じゃ、お先」

「皆またねー」

ものすごいインパクトを残して去っていくプロヒーロー。

あれが自分たちが目指すプロの頂にいる存在の一人なのかと別の意味で戦々恐々としている1Aメンバー。

「お前たちもさっさと帰れ、あの人はインパクトの強い外見をしているし言動はエキセントリックだが、経験・知識豊富な確かな実力者だ」「あの人を目標せと言わないが、紛れもないプロヒーローの一人であることは知っておけ」

そういうと校舎に戻っていく相澤。

遠くから「ヒーハー」と何度も響く奇声。

数分の間ボー然としていた1Aメンバー。

「それじゃ、取り合えずまたね」

あの光景に慣れている緑谷が未だに怯えている爆豪と未だ処理の追いつかない麗日の手を引き帰宅するのを皮切りに、それぞれが自宅への帰路に就いた。

日曜日、初めての戦闘訓練での反省会を行うべく1-A生徒は火桟から送られてきた住所の前に集まっていた。

途中で相澤も文句を言いながら合流し目的地へと歩いていた。

そして今、生徒全員の心は見事に一致していた。

「……(本当にココに入るの?)」

そんな生徒たちの心の声が聞こえて来たのか、全く関係ない方向に視線を向けている相澤。

「まあ、折角あちらが気を利かして全員が使える会議室を準備してくださったんだ。時間は有限だ行くぞ」

「……待つて待つて待つてください!!」

1-A生徒並びに担任の相澤の目の前にはあまりにショッキングな建物が映っていた。

昼間だというのに煌々と煌めくピンクの蛍光ネオン。

店主であろう存在の印象深いどデカイ顔面が輝く看板。

全体的にピンクピンクしていて如何にもR-18禁な雰囲気を出している大人お店。

全てが目にも優しくない建物「キャバレー」"ニューカマーランド"本店」が映っていた。

「いやいやいやいや、火桟は真面だと信じてたのに」

「でも、住所は合ってるしGPSも"ココ"指してるし」

「確かに、イワさんに世話になってた時は"ココ"が事務所だったな」
「イヤーーーー、オレら絶対食われるじゃん」

全員の身体に得体のしれない寒さが駆け巡り、背中にじつとりと嫌な汗が流れ始めた時だった。

「皆遅いよー、何してんの」

「こっちですよ」

真後ろのビルからヒョッコリと顔を出したのは2日前から顔立ちがはつきりした葉隠透といつもはポニーテールにしている髪を下ろした緑谷だった。

「『そつちかよ!!』」

「あ、そういえばイワさん事務所引越したとか言ってたな」

「ウエルキヤマー、キャンデイズ。ヒーハー!!」

「で、でーたーー(気絶)」

峰田が綺麗に気絶したが背負ってきたリュックごと相澤が荷物のように持ち上げる。

「こういう時、ナリが小さいと便利だな」

「さて、ヴァターシはこれから重要な会議に行かなきゃナツシブル」

「あとのことはトリーボーイ達に任せてあるから寛いでってちょうだい」

「お手数をお掛けします、イワさん」

「細かいことは言うでナツシブル、それじゃアデュー」

クイーン・キヤマバツカ(男ver)がハイテンションのまま回転しながら出ていく。

そして、全員が視線を戻すとそこには後ろに控えていた火埜が困ったような顔をして立っていた。

「いや、インパクトはデカいし、テンションも高いけどあれでもビルボードチャート3位になったこともある人だから」

防音処理がなされているはずのドアから「ヒーハー」とあの奇声が聞こえた気がしたが、全員聞かなかったことにした。

「火埜サツサと行くぞ、休みと言っても時間は有限だ」

「相澤先生も休日申し訳ありません」

「本当に不合理だな」

「ははは、はあー」

火埜の後について歩く面々、処々の事情でヒーロー事務所という場所を知る飯田と轟はともかく他の面子は初めて入ったヒーロー事務所に興味津々だった。

「会議室は5Fです、一番展望が良いからってイワさんが『あれ』で壁撃ち抜いてリフォームしたんで」

「ああやっぱりこのビル、オレが世話になってた時、後ろでイワさんが暴れてたビルか」

「イワさん喜んでましたよ、先生がちゃんと人間的な生活してて」

「『あれ』の餌食になるくらいなら誰だって真人間になるだろう」

「確かに」

「ねえねえ、火埜」

先頭に行く相澤と火埜。

ビルのオーナーの人となりを知る2人だから解る会話をしながら先に進んでいるとクラスでもムードメーカーになりつつある芦戸が声をかけてきた。

「少しだけでいいから、この中案内してよ」

「お、良いなそれ。火埜も中知ってんだろ」

芦戸の意見に乗っかる形で、お調子者っぽい上鳴が賛同する。

よくよく見ると気絶している峰田以外全員が興味津々と顔に書かれていた。

「別に良いけど、男子はココが誰の事務所か解ってて言ってるの？」

「え？」

「だから、さつき表で副業の店見たはずだけど、『ココ』が『誰』の事務所で、『どんな人』が相棒をやってるか解ってて言ってるの？」

途端に男子全員が戦慄の表情を浮かべ、とある一カ所を防御する態勢を取った。

「ま、上鳴がどうしてもっていうならいいけど、皆さん年末の過渡期を終えたばかりでストレスたまってるから手加減なんてないだろうな」

火埜の続く言葉に特に名前が挙がった上鳴の顔は画風が変わるほどにシリアスになっていた。

「『時間は有限だ、早く行こう』」

「アホ共が」

「バカばかりだね」

そんなこんなで5Fの会議室に着いた一同。

先頭の火埜がドアを開ける。

「みんな遅ーい、何してたの」

2日前に顔を初めて見たクラスメート、葉隠透が私怒ってますという表情で立っていた。

そんな彼女は薄っすらとメイクをしており、明朗快活な彼女を更に愛らしく引き立てていた。

「とりあえず、あの時のペアごとになる様に座って、飲み物は一番後ろの机にあるの自由に飲んで良いってイワさんが言ってたよ」

「オラ、服掛ける奴ハンガーここだぞ」

「荷物とかは各自で持って座るほうがいいよね」

先に着て準備をしていたのであろう緑谷、爆豪、麗日の声で皆が動き始めた。

峰田は自身の最大のトラウマとの再会から記憶がなかった。

気が付くと隣には憎きイケメンと超高校級双子山があった。

超高校級双子山に視線を釘付けせんと意識が完全覚醒したその時、その奥で信じられない光景が見えてしまった。

「あ、火埜君また髪解いちゃったの。ゴムかして」

「いや、別に性根据えてやるわけじゃないんだから」

「でも髪の毛邪魔でしょ？」

「別に、普段の授業でも縛ってないんだしいでしょ」

「ムウ、かぁーしいーてえー」

「・・・はあ、はい」

「ムフー、よろしい」

「オイラの目の前でイチャイチャしてんじゃねえ!! (血涙瀑布)」

峰田の魂の咆哮に会議室に居る全員は無言で首を縦に振っていた。

そんな峰田の後ろにヌルリと近づく一つの影。

「ねえ、峰田君」

「何だよ緑谷、お前はあの光景に何とも思わないのか」

そう言つて峰田が緑谷の声のする方を向いた瞬間。

「プエ」

緑谷のアイアンクローが顔にめり込んだ。

「いい峰田君、あれは親鳥に雛がくっ付いていつてるようなものだから、別にとーくんと葉隠さんが付き合ってるとかイチャイチャしてる

とかそう言う訳じゃないから、あんまり邪推しちゃダメだよふたりにしつれいだよそもそもあつてすうじつなのになんであんなにべつたりされてだいじょうぶなのかなかなかしいよおかしいよねとーくんのぱーそなるすぺーすはおーるふりーなのかなかなかない」

「落ち着けシズ」

「ひゅぶ」

暗黒面に墮ち掛けていた緑谷の頭に火埵のチョップ（軽）が突き刺さった。

「いた〜い、あれボクは何を」

「ボケシズク、オレ等は幼馴染みだけど他人だぞ。そこは尊重し合おうて約束しただろ」

「それに、例え僕が誰かとそういった関係になっても、シズが幼馴染みなのは変わらない、だろ」

「うー、またやっちゃった?」

「ほれ、麗日ヒーリングだ。抱きついてこい」

そう言つて緑谷を軽く投げ飛ばす火埵。

「シズクちゃんキャッチ、ほーらイイ子イイ子」

「あう、またやっちゃったよお茶子ちゃん」

「ケロ、私も蛙吹式体温ヒールハグ」

「あ、あたしも混ざる芦戸リラクゼーション」

「わ、私もいきますわ。八百万セラピー」

「あ、この流れウチもか、えーつと耳郎キュアハグ」

「元凶だけど私も、葉隠ヒールパヒューム」

女子に囲まれ抱きつかれ、目に見えて緑谷が落ち着いてきた。

「百合ハーレムもいいなあ」

その光景をいつの間にか復活していた峰田がヨダレを垂れ流しながら見たいたが、男子全員からの有罪判決として爆豪と火埵に蹴りあげられていた。

「さて、中々に面白い茶番劇が見れたところでさっさとやるぞ。なお、今回はお前らが自主開催という形だからオレは寝ている、時間になったら起こしてくれ」

「仮眠室は隣ですよ」

「おう、じゃさつさと始めろ」

そして始まった反省会。

Aチーム：麗日お茶子、緑谷静空

評価点

- ・穴だらけのルールを利用して相手に不利となる状況を作り出した
- ・そのうえで、相手を無効化させる手段を取り勝ちに行く姿勢を見せた

反省点

- ・相手に押し付けたルールで自分たちも気づかぬうちに首を絞めていた

- ・プランが崩れた後に立て直しが出来なかった

Bチーム：障子目蔵、轟焦凍

評価点

- ・互いの個性を正確に確認し合い、互いの得意分野を生かさせた
- ・時間の余裕を作ることによって相手に心理的なプレッシャーを与えようとした

反省点

- ・完全に無効化したと思いついでしまい、個人で動いてしまった
(轟自身の反省点として明言)
- ・相棒に任せきりにしてしまいとっさの状況で動けなかった
(障子自身の反省点として明言)

Cチーム：峰田実、八百万百

評価点

- ・時間を有効に使い罫を仕掛け時間切れまで爆弾を守り切った
 - ・自分たちの個性を十二分に発揮し、相手に何もさせなかった
- 反省点

- ・峰田の視線がいやらしい(女子一同)
- ・作戦に自信があつたがゆえに、突破された際の行動を考えていな

かった

(反省会にて露見)

Dチーム：飯田天哉、爆豪勝己

評価点

- ・自分たちの個性の利点を理解した作戦を立案できた
- ・とつさの機転ではあったが相手チームを怪我無く確保できた

反省点

・序盤、完全に思考も行動も相手チームの思惑通りに動いてしまっ
た

- ・爆豪一人に任せきりになってしまっていた

(飯田自身の反省点として明言)

Eチーム：尾白猿夫、芦戸三奈

評価点

・相手の裏をかき、芦戸の酸による床抜きというアイデアの柔軟性
・尾白の個性である尾を生かし芦戸を爆弾に投げつけ確保という相
手の心理の裏をついた作戦の立案

反省点

・床抜きに時間がかかりすぎて時間切れまじかであっても作戦を変
更できなかった

・芦戸投げという賭けの割合が高い作戦を最初から盛り込んでいた
ことによる確実性の無さ

Fチーム：口田甲司、砂藤力動

評価点

・互いに相手を思いやり、常に互いがカバーできる距離を保ち続け
た

- ・時間が迫っても落ち着いて行動できていた

反省点

- ・相手の作戦を考えることを半ばしていなかった

・周囲の警戒を怠った結果、勝てた訓練で自分たちから負けに行つた感が否めない

Gチーム：蛙吹梅雨、常闇踏陰

評価点

- ・時間を掛け入念に作戦を練ったことでスムーズに行動に移せた
- ・必要最小限の行動と時間で爆弾の確保に成功した

反省点

- ・作戦を練ることに時間を掛け過ぎてしまい、作戦決行時には時間的な余裕をなくしていた
- ・爆弾のある部屋を探すのにも時間がかかってしまい、実は時間切れスレスレだった

Hチーム：葉隠透、火埜翔織

評価点

- ・相手からの制圧攻撃に対して冷静に対処し、相手の作戦を逆手に取り2人を確保した

- ・互いの利点を生かし、最大戦力を騙し切った

反省点

- ・一人に全てを任じた形になっており、負担の分担が出来ていなかった

(葉隠自身による反省点として明言)

- ・全て自分ありきの作戦しか練れなかった、相棒の個性を生かし切れなかった

(火埜自身による反省点として明言)

Iチーム：切島鋭児郎、瀬呂範太

評価点

- ・相手からの攻撃に対して一歩も引かず、互いの個性を生かし奮闘した

- ・確実性が求められるシチュエーションで相手に賭けとなる行動を

とらせた

反省点

- ・ただ待っていただけで、特に作戦を考えていなかった
(瀬呂による発言で露見)
- ・相手の個性を知っていながら対処を怠った
(芦戸の発言により切島が事前に芦戸の個性を把握してたことが露見)

Jチーム：上鳴電気、耳郎響香

評価点

- ・常に相手の位置情報を把握しながら行動していた
- ・爆弾のある部屋に最速でたどり着いた

反省点

- ・時間にだいぶ余裕があったにもかかわらず、時間切れを迎えてしまった

・正直、上鳴何もしてないよね (総意)

全員の総評が終わり、上鳴と峰田が部屋の隅で虚無の顔をして膝を抱えて拗ねていた。

しかし、本人たちも自覚があるようで溜息をつく音だけが数分響いた。

「ところで」

一息つくためにそれぞれが用意された飲み物に口をつけ始めた時、轟が声を上げた。

「火埜の個性って結局なんなんだ？」

その一言で火埜に集まる視線。

当の本人は口にココアを付けた葉隠の顔をナプキンで拭きながら蛙吹と何か談笑しているようだった。

「ああ、そういえば話す約束をしてたっけ」

「休憩も終わりそうだし、それじゃ僕の個性について説明しよう」

轟の発言に火埜が反応すると手元に置いてあったパソコンを操作する。

すると、会議室の入り口手前の壁が割れ、中から巨大なスクリーンが姿を現した。

そして、天井からは明らかに高価そうなプロジェクターが降りてきた。

「さて、僕の個性について話す前に僕の両親について話をしなければならぬ」

「僕の両親はともにヒーローで、僕が5歳の時に殉職した」

日常生活の様に両親の死を告げる火埜。

それは、とても異常なことで誰しものが反応に困っていた。

「別に両親のことが嫌いだったわけじゃないし、今でも月命日には墓前に行ってる」

「単純に両親がちゃんと区切りを付けられる材料を残してくれていたのと、現保護者がちゃんと僕を見ていてくれるから問題ないってだけ」

「さて、両親の話に戻ろう。今から10年前、2人のヒーローがオールマイトに追従するように活躍していた」

「『激獣ヒーロー』 『ビーストアーツ』、『色彩ヒーロー』 『カラフルパレット』この2人が僕の両親だ。父の個性 『ビーストオーラ気力獣』は自身の体内で

練り上げたオーラに獣の姿を与えて纏うことで強固な装甲を持った動物に変異するという個性だった」

「そして、母の個性 『エンチャントカラー色彩付与』は母の手から現れる色を塗ることで様々な状態を相手に付与させるという個性だった」

「その2人なら存じ上げている。ぼ、オレの両親も未だに話に出すかな。けど確か殉職理由は公表されていなかったのでは？」

「まあ、そこは今関係ないでしょ飯田。とにかく2人の個性を頭に入れた状態で僕の個性の話しよう」

「まず、間違いなく僕の個性は『火の鳥』だと言い切れる。詳しく言うとならぬ様なオーラと肉体をコンバートすることで物理的な攻撃を

受け付けない焰状のオーラの鳥になるとというのが詳細だ」

「だけど、正直僕からすれば不慣れな個性なんだよね」

「はあ勝ち個性じゃねえか、何言ってるんだよ」

復活を遂げた上鳴の声が会議室に響く。

確かに概要だけ聞いていれば無敵の個性といえるだろう。

「でも、鳥の姿の時って僕の精神状態によるけどオーラに熱量を持つてしまうんだよね。だから緊急で街中で使うと服が燃える」

「そんな中、鳥化を解くと全裸の不審者の完成になってしまった」

「服に関してはここ最近だと、自分の細胞提供によるオーダーメイドをしてくれる会社が増えたしコスチュームも僕の細胞を使用して作られてるから鳥化を解いても素っ裸になることはなくなった」

「ただ、鳥化すると理由は不明だけど凄くお腹が減るんだ。オーラの燃料も解つてないけど、鳥化した時の最少食事はラーメン100kgに炒飯50kg、餃子700個だったな」

「それに、鳥化してる時はオーラと肉体をコンバートしてるから物体に触ることが出来ない、これだと誰かを助けることが出来ない」

「そこで、出力調整も兼ねて部分的変化を試してみたんだけど、まあ当時は今ほど変異も下手でシズと勝己にも迷惑かけたけどね」

「まあ、おかげで僕には複数の属性を持ったオーラが流れていることが分かった」

「複数のオーラ」

常闇の目がキラリと光る、何か彼に刺さるワードでもあったのだろうか。

「そ、色オレンジにするレッドとブルー・赤バイオレット・青イエロー・紫グリーン・黄インディゴ・緑ホワイト・藍ホワイトの8色」

「また、8色のオーラにはそれぞれ固有の性質がある事が分かった。橙Ⅱ調和・赤Ⅱ分解・青Ⅱ鎮静・紫Ⅱ増殖・黄Ⅱ活性・緑Ⅱ硬化・藍Ⅱ構築・白Ⅱ凍結って具合にね」

「そして、意外とロマンチストだった勝己の提案で其々の色に適した天候で区別することにした」

「ぶ、あの顔でロマンチスト」

「言いたいことはちゃんと見えや葡萄頭、今度はちゃんと燃やしてやるよ」

小声でちやちを入れた峰田であったがしつかりと聞こえていたらしく、耳元で爆豪の爆破の音が聞こえたらしくまたビビっていた。

「橙〓大空・赤〓嵐・青〓雨・紫〓雲・黄〓晴・緑〓雷・藍〓霧・白〓雪という感じで、ヒーローならこっちのほうがいいかなってことで採用しました」

「今回の訓練で轟君は僕らを氷漬けにして動きを封じ、爆弾を確保しようとした」

「実際、オレがあこの部屋に着いた時には火埜の身動きが取れなくなっていたし、爆弾も目の前にあった」

「訓練風景をカメラで見てた皆には恐らく爆弾ではなく僕に近付く轟君が映像として見られていたと思うんだけど」

「それはこの『霧の焰』を使ったんだ」

火埜が話を振った瞬間、火埜が立っていた場所には全盛期バリバリゴリマツチョのオールライトが立っていた。

「『はあ!?!』」

「HHHHHH、さっき話した通り『霧の焰』には構築する力つまり相手に幻覚を見せる力があるんだ」

「無論、焰と表現するのだから熱量はある。しかし、鳥になっている時よりは熱量の調節や切り替えがスムーズに行えるから」

そう言って瞬間的に火埜の姿に戻るといつの間にか握っていた箱にオーラを流し込み、箱から出てきた鎖付きの手錠を峰田に投げつけた。

「んん!?!」

右手首に付いた手錠は瞬く間に峰田を拘束する手錠の拘束具となった。

「変装を解いた瞬間、『雲の焰』の特性を生かした増殖手錠での拘束が可能になる」

「なるほど、訓練の時に気が付いたら拘束されてたのはそう言うことか」

「んーんーんんんー」

「そう言うことか、氷を溶かしきつた後に葉隠さんに照射していた黄色の『晴の焰』は活性を特性としているから、下手したら凍傷になつてたかもしれないから全身の細胞を活性化させて万全の状態にしたというわけ」

「いい加減にほどけー!!」

毎度毎度オモチャのように扱われる峰田。

しかし、拘束を解かれた後「此のヒモバージョンはないか」と思わず聞いてしまい、擁護する人間を失った。

「とまあ、こんな感じ。因みにこの箱は知り合いのエンジニアさんに頼んで親父のサポートアイテムを改良してもらったモノです」

「じゃ、次。私の現状についてです」

元気よく手を挙げ、その実年齢より幼い印象を与える仕草に何人かの母性本能が働きかけた。

「まずは、ご覧の通り透明化の on. off が出来るようになりました」

そう言うとスクリーン前まで移動して、一瞬で全身を透明化し見慣れた葉隠になる。そして、また直ぐに今の見えている状態に戻った。

「後ね、大雑把にだけと部分的に透明化させることも出来るよ」

そう言つて今度は頭から順に下へ透明化させていく葉隠。

「診てくれた先生が言うには、個性因子が別の形で発達した可能性があるあるんだって」

個性学で不思議だねという空気が流れ始めた。

「あ、後ねおっぱい大きくなった。2サイズも」

葉隠の要らん一言で峰田の目が光るが、耳郎のイヤホンジャックが突き刺さり苦痛にのたうち回っていた。

そんな耳郎も何かを閃いたような顔をしていた。

「葉隠さん、関係ないこと言わないのってあれ?」

火埜が注意をしようとした時、葉隠は女子に囲まれその自慢の胸を揉まれていた。

「た、確かに大きく柔らかくなつとる」

「ああ、葉隠さんも『晴の焰』との親和性が良かったんだ」

「ケロ？てことはシズクちゃんも」

「え、緑谷の『コレ』も」

「胸が大きくてもあまり良いことなんてありませんわよ？」

「富んでる者は黙ってて!!」

そんな女子の混沌をそこから眺めていると会議室のドアをノックする音が響いた。

「また茶番か？昼になったし飯いくぞ」

相澤が寝起きで充血した目をそれはそれは不機嫌そうに血走らせ、いつの間にか開いていたドアに寄り掛かり立っていた。

「おい、翔織どこ行くきだ」

「え、向かいの食堂だけど」

そんな幼馴染み2人の会話を聞いた一部は、レストランが良いとか、もつと良いところ行こうよ、と騒いでいるが真後ろにいた相澤が普段からは考えられない猛ダッシュで火埴の肩を掴むと前後に揺さぶっていた。

「おい、まさかコイツら連れてくのか!？」

「えー、大丈夫じゃないっすか？」

「大丈夫じゃないから言ってるんだよ」

「でも、ばっちゃんが連れてこいって言っていましたし」

「あの人は自分の価値に無頓着過ぎる」

普段の相澤からは考えられない狼狽え方に言葉を無くし大人しく先導されてく一同。

着いたのは町の定食屋さんという雰囲気のお店だった。

定食屋としか書かれていない店構えにあからさまにテンションが下がったのが数名いた。

「あ、開いてる」

驚愕に震える相澤を無視して店の戸を開ける火埴。

「ばっちゃん、来たよ」

「によほほほ、どーじょ」

「あら、この声は?」

「なんじゃ、これ!!」

「こ、米だけで飯が進む!!」

「お味噌汁美味しい、落ち着くう」

「漬物がダメだ、手が止まらねえ!!」

「おかずにたどり着けない」

生徒が騒がしくて気が付かれていないが、相澤も黙々と丼に盛られた白米を鮭の塩焼きと共に消費していた。

「ウチは御飯とお味噌汁、漬物もお代わり自由じゃよ」

「「「おかわりーーーー!!」」」

こうして第一回目の反省会は幕を閉じた。

週が明け眠そうに歩く一人の生徒がいた。

火埜翔織である。

フラフラと歩くその姿は週が明けた1日目とはとても思えなかった。

世界と自分を隔てるようにオリジナルチューニングのヘッドホンをして音楽を聴きながら登校するその姿、幼馴染みの2人が見たら一目でわかっただろう。

今、火埜は頗る機嫌が悪いと。それはもう原作の爆豪（夏休み前Ver.）がかわいく見えるほどである。

ぱつと見はいつも通りだが、所々の仕草に荒さが出ている。

そんな火埜の目の前には、彼の機嫌を更に悪化させる要因があった。

「HEY!!イレイザー!!なんか落ち着きないなどした?」

（自称）心友で同期、席も隣のプレゼント・マイクがテンション上げ上げで話しかけたのは珍しく落ち着きのない相澤だった。

「マイク、いや校門の前そろそろどうにかしないと考えていてな」

「オイオイ、マスメディア共はほつといてもUAバリアがあるから校内侵入はNGだろ」

おちやらけるのを辞め淹れたてのコーヒーを相澤へと渡し、自分も授業の準備を始めるマイク。

「実は火埜がまだ登校してないんだ」

雄英高校の校門にはとあるセンサーが取り付けられており、その一つに生徒の登校確認が取れる機能があった。

これは、各自が所持する生徒手帳に内蔵されたチップにセンサーが反応し、担任のヒーローに登校の有無を知らせるものであった。

「おうい、それはちよつと拙くないか」

「校門の前のマスコミがトリガーになる可能性もある。マイク手伝ってくれるか」

「OKOK、心友の頼みとあらば仕方ねえな。ハウンドドッグもそろ

そろ限界ほいしな」

No. 1ヒーロー、オールマイトの事実上の引退宣言・後進育成のために直々に教鞭を執るというニュースは、「WKO(WORLD KOSAY ORGANIZATIONS)」に加盟する各国に衝撃を与え、現地日本でも未だに連日ニュースで取り上げられない日はなかった。

そんな彼が母校である雄英高校で教えることになったと解れば当然、毎日のごとくマスコミが押し寄せる騒ぎになるのは明白だった。いち速くスクープを物にしたい、そんなマスコミの思惑は当然渦中の生徒たちにも向けられるわけで。

「オールマイトの授業はどんな感じ?」

「まだ新人さんだからかしら?カンペ読みながらだけど自分の言葉で伝えられるように努力されているわけロ」

「平和の象徴」が教壇に立っている様子など聞かせて!!」

「もう、あれっすわ。根本的に何て言うか、画風が違う感じっすね!!」
「教師オールマイトについてどう思ってます?」

「世界でも有数、日本最高峰の教育機関に自分は、自分達は在籍することができているという事実を意識させられました。威厳や風格はもちろんです但他にもユーモラスな部分等は我々学生は常にその姿を拝見できるわけですからトップヒーローとは如何なる者か、そして我々学生が目指すべき高い頂の極一部でも学びとり、成長の糧とすることこそが、事実上の引退宣言ともされるオールマイトの意思を受け継ぎ、新たな時代のヒーローになるべく日々精進し(ウンタラカンタラ)」

新学期が始まってから学校が開いている日だけでなく、休校日すらも押し寄せるマスコミの行動は加熱していた。

既に登校妨害ともとれる行動も目立ち、行政が動きかねない事態に発展していた。

「かっちゃん、とーくん見なかった?」

「あ、翔織の奴ならまだ来てないんじゃないかねえか」

窓際の席、運良く幼馴染みが固まれた席順で1番前に座る件の幼馴染

染みの姿が教室に見当たらなかった。

「昨日は『あの日』だったからナーバスになってないか心配だなあ」

「ちっ、少しはオレ達を頼れつつうんだよ」

そう言っただけで勝己が窓の外を見る。

そこからはちやうど校門が見え、未だに退く気配のないマスコミに爆豪は苛立ちを覚えていた。

「お、今度は火埜の奴が捕まるっばいぞ」

上鳴の暢気な声に事情を知る2人は校門を凝視してしまった。

そこには、確かにヘッドホンをしている幼馴染の姿があった。

「ねえ君、何年生？オールマイトの授業はどうなの？」

1人の女性アナウンサーが火埜にこえをかけた。

火埜はヘッドホンを指で叩くと足早にその場から離れようとした。

「あ、待ってちよつとでいいから話聞かせて」

ヘッドホンを叩く、つまり周りの音は聞こえませんというジェスチャーをしたにも関わらず詰め寄ってくるアナウンサー。

他局のカメラも火埜に集中し、抜け出せない状況になっていた。

「邪魔だな」

そんな火埜の呟きを運悪く拾われることは無かった。

火埜の瞳が氷のように冷たくなっていることに気付かない周囲は無遠慮にマイクを突き立てる。

誰にも気が付かれないほどにうっすらとしかし確実に相手を殺傷できるオーラを両手に纏い始めた火埜。

校門へと歩いていった相澤とマイクはその最悪の光景に走りだしていた。

「邪魔だっけ言ってるだ」

「おっはよう、ひーの君」

「おはよう、火埜。土曜はありがとな」

そんなマスコミの群れを掻き分けて、火埜の両手に葉隠と耳郎が抱き付いた。カメラに写らない絶妙な位置取りで火埜の手を握り混むように。

「HEYYYYYYYY、遅刻ギリギリたあ珍しいじゃねえかりスナー

諸君」

「お前らいい加減にしろよ、登校妨害で訴えるぞ」

その直後、相澤とマイクが校門に到着し、3人を校内に招き入れた。

「ちよつとなんですか、てか汚。え、学校の先生ですか？」

「入校証があるなら入ってもらつて構わないがどこか持つてるところはあるのか。ないならいい加減に退散してくれ」

「それじゃあな、マスメディア共。ちゃんと手順踏んでから来るんだな」

相澤とマイクが校門へと戻ると瞬く間に巨大なバリケードが出来上がった。

「ハツハツハー、見たか雄英名物『UAバリアー』」

「葉隠、耳郎訳は知らんだろうが良くやった。火埜、お前はミッドナイト先生ところ行つてから授業に出ろ。さっさと行け」

「はい、それじゃ下駄箱まで行こうか火埜君」

「どうした、なんか辛そうだな。ウチのお気に入り聴くか？」

女子2人に手を引かれ歩く火埜。

少し立ち止まり大きく深呼吸をした。

「ゴメン、2人ともありがとう。相澤先生の申し付け通り、ミッドナイト先生のところ寄つてから教室行くから」

そう言うとき火埜は足早にその場から走つていった。

「火埜君大丈夫かな？」

「なんか無理してるっぽかったな」

「ところでジロさんや」

「なんだい、トールさんや」

「火埜（くん）と近過ぎないかな??」

下駄箱にて乙女の戦いが静かに始まっていた。

「ムウーーーーー」

「静空、ステイだぞ」

「でも、葉隠さんも耳郎さんもトーくんと近過ぎるよね」

「はあ（これで恋愛感情ゼロだって言いきるんだからなあ、女つて解らねえ）」

教室では番犬が小型犬を宥めていた。

「ああ、やっちゃったよ」

ソフアーに蹲り、終始「あ、あ、あ、あ、あ」と唸っていた火埜の復帰一言目がそれだった。

「あら、翔織復活かしら」

「ねむネエ、ありがとう」

ミッドナイト、香山かやまねむり睡と火埜の付き合いはそれこそ火埜がこの世に生まれた瞬間からになる。

火埜の父、ビーストアーツこと火埜じゅうぞう獣造の職場体験を受けた際に、大きなお腹のカラフルパレットこと彩命あやめと出会い、職場体験後も何かと相談に行っただらあれよあれよという間に出産に立ち会わされたのだった。

そして、何の因果か火埜を初めて抱き上げた人物こそミッドナイトであった（父は仕事で、母は気絶中で無理だった）。

2人が殉職した時も、何かと世話を焼いていた。

イワさんが養子縁組を進めなかったら未婚の義母になっていたかもしれない、そう思うほど繋がりが深かった。

「彩命さんにはいろいろなことを教わったし、私の個性が進化したのもお二人のお陰だもの、気にするんじゃないわよ」

「ほら、復活したならサツサと行きな、それともおねえちゃんのおっぱいが恋しいの？」

ミッドナイトの豊満な胸を腕を組んで持ち上げてわざと揺らしている。

「セクハラ禁止、〃オレ〃がそういうのに弱いので絶対ねむネエが原因だ」

「ほおら、猫が脱げてるわよ。安心なさい、あんたの子供抱っこするまでおねえちゃんは死なないから」

セクハラモードとは打って変わって可愛い弟分を抱きしめるその姿は衣装に関係なく、慈愛に満ちていた。

「ほんと、〃僕〃は恵まれてるよ。それじゃ行ってきます」

「はいはい、行ってきな」

進路指導室を後にする火埜の背中を見ながらミッドナイトは溜息をついてしまった。

「私らじゃダメなのよね、誰か早くあの子の安心できる場所になってくれないかしら」

それは、姉として心からの願いだった。

「遅まりました」

教室に入って来た火埜に視線が向く。

その中でも相澤の視線は特に鋭かった。

「事情が事情だ、次は自分で制御できるように努力しろ」

「ういっす」

「さっさと席につけ」

火埜が自分の席に着くと相澤は再び話し始めた。

「遅くなったが、今から学級委員を決めてもらう。時間もないからさっさと決めろ」

「はいはいはい、あたしやる」

「組織の長、漢として燃えるぜ」

「おいらのマニユフェストは女子は膝上7cm」

「静粛にしたまえ!!」

各々が思い思いの発言をしていく中で、手を上げ垂直に立ち上がるという器用なことをやってのけた飯田の声が響いた。

『『多』と『他』を牽引する責任重大な職務、『やりたい者』がやれるモノではないはずだろう!!』

「周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務!! 民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるといふのならば、これは投票で決めべき議案ではないか!!」

「だったら、直下立つなや」

「飯田ちゃん、会って1ヶ月経ってない私たちじゃ明確なルールがないきや投票だつてゴチャゴチャになっちゃうんじゃないかしら?」

「くっ、確かにそうだ!!」

爆豪のツツコミと蛙吹の冷静な疑問に、机に手を叩きつけ悲壮感を

漂わせる飯田。

「だったらスピーチと投票でいいでしょう。ルール事態も簡単なものにすれば時間も掛からないだろうし」

「あれ、火埜は飯田に賛成？」

「耳郎さん、そつと後ろ見て。相澤先生がキレそう」

「うわお、本当だ」

火埜が賛成を示したことに、目を輝かせる飯田。

「賛成した手前、簡易的な選管するからさつさと決めようよ」

「あたしも賛成、そしてあたしも選管しまーす」

火埜の意見に乗っかるように葉隠も選挙管理担当に名のり上げる。

その時、耳郎と葉隠の間に火花のようななにかが散ったような気がした。

「それでいいから、さつさと決めろ」

相澤の一言で1A学級委員総選挙が幕を開けた。

1A学級委員長投票ルール

①今回に限り、クラス全員が候補者且つ投票者である。

②スピーチの順番はランダム（やるかどうかは自己判断）。管理人どちらかが終了宣言をするまでスピーチを行える。

誰にも迷惑にならなければ何をしても良い。

※迷惑の判定は相澤先生及び管理人に一任される。

※判定の最高決定権は相澤先生にある。

③希望者全員のスピーチの後に投票用紙に以下を明記する。

1) 投票人の名前

2) 学級委員長に推薦したい者の名前

※同じ用紙に同名が記入された用紙は無効とする。

④選考中、管理人に話し掛けてはならない。

⑤管理人は全員が投票用紙を管理人に渡し終えた時点で終了とする。

⑥管理人には投票権は無いモノとする。

11th

「おい、火埜」

スピーチの内容を考える時間とし10分間与えられた。

葉隠に人数分の白紙の確保を任せると相澤に呼ばれた火埜は一番後ろに立っていた。

「どうやら、無事に猫被れたようだな」

「お陰さまで、^ぐ迷惑をおかけしました」

極少数のスピーチをする気の無い者は兎も角、やる気が満ちてる者は必死に内容をまとめようとしていた。

「あのルール、態と解釈違いを起こさせることが目的だな。賢い奴からはそろそろ連絡が来るんじゃないか？」

「流石は先生、まさか一番手が八百万さんだというのも驚きでしたけどね」

そう言つて八百万から届いたメッセージを相澤に見せる。

『本文』

スピーチを最後にしてくださいませんか？

対価：お2人のお好きな飲み物5日間』

相澤に本文を見せると直ぐ様返信をする火埜。

『本文』

了、ただしより好条件の提案があつた場合は其方を優遇』

返信された内容を見て少し膨れた顔になる八百万。

その顔があまりにも可愛かつたのか火埜も少し遊んでみることにした。

『本文』

週末、デートしてくれるなら確約するよ』

「やつてることが峰田と変わらん」

「流石に八百万さんもからかわれてるって解りますよ」

そんな会話をされてるとも知らず、後から見ても丸解りなほど耳まで真っ赤になった八百万から返信がきたのは2人とも意外だった。

『本文』

わかりましたわ、よろしくおねがいたします」
目を点にする火埜と相澤。

八百万を見ると嬉しそうに手を振ってきた。

「はっ、おまえが嵌められる姿なんて何年ぶりに見たかな」

「あれえ？なんで、なんでえ？」

そんな2人の雑談は、次の授業を受持つオールマイトが登場しても続いた。

今回の選挙が、オールマイトの授業ヒーロー学に関係する内容と判断されてしまい、スピーチは白熱していった。

「絶対オレに入れんじゃねえ。自分の事情を優先したいからな」

爆豪のように辞退を仄めかす者。

「オレは障子を推す、クラス内でも状況判断が正確で、何より人の話を聴こうとする姿勢に好感を持った」

轟のように戦闘訓練でペアになった相手を推す者。

「おいらは「峰田くんしゅりょく」

「なんで!!」

「女子のスカート膝上7cmなんて言うのは迷惑だからだよ」

「せめて全部言わせてやれ葉隠」

「ちえ、相澤先生が言うなら仕方がない、それじゃどうぞ」

「く、おいらのマニユフェストは女子のスカート膝下30cm」

ルールを上手く使われスピーチが真面に出来ない者。

多種多様だった。

特に火埜に印象を与えたのは飯田と八百万だった。

「正直、オレに何が出来るかは皆に理解してもらうには時間が足りない。だから、オレが委員長になったら皆が困った時に誰よりも速く駆け付けれる委員長になりたい」

「それがオレが目指すヒーローの在り方であり、オレが進みたい道の果てにある理想だから」

理想の体現、飯田はルールの穴を理解した上で愚直に真つすぐに皆に訴えかける道を選んだ。

「私が委員長になりましたら、今よりもより良い教育環境を提供いた

します」

「望まれるなら、環境は必ず私が整え致しますわ。皆様が最高のヒーローになれるようご助力いたします」

最後のスピーチで自分の今まで蓄えてきたありとあらゆるモノを総動員することを確約する八百万は、ルールの抜け道を利用する道を選んだ。

愚直に真つすぐ、理想のヒーローを体現した飯田。ルールを理解し、自分の利点をアピールすることに成功した八百万。

対局の2人の姿勢はクラスの皆にどう映ったのか。

「さて、皆の投票用紙が手元に来たということ。今一度ルールを確認しておこう」

1 A 学級委員長投票ルール

- ① 今回に限り、クラス全員が候補者且つ投票者である
- ② スピーチの順番はランダム（やるかどうかは自己判断）
管理人どちらかが終了宣言をするまでスピーチを行える
誰にも迷惑にならないければ何をしても良い

※迷惑の判定は相澤先生及び管理人に一任される

※判定の最高決定権は相澤先生にある

③ 希望者全員のスピーチの後に投票用紙に以下を明記する

- 1) 投票人の名前
- 2) 学級委員長に推薦したい者の名前

※同じ用紙に同名が記入された用紙は無効とする

④ 選考中、管理人に話し掛けてはならない

⑤ 管理人は全員が投票用紙を管理人に渡し終えた時点で終了

⑥ 管理人には投票権は無い

「教師として一言言わせてもらうが、ちゃんと授業が生きていることが分かっただけでも今回の選挙は行った甲斐があった」

「そうだね、火埜少年はこの穴だらけのルールで皆がどう動くのか我々に見せてくれたしね」

極々少数が何を言っているのか理解できていなさそうだが、という

相澤の小言は隣にいたオールマイトのみ聞こえていた。

「さて、投票集計が終わったので、電子黒板に一気に表示しよう」

『1位) 八百万百 (投票者：芦戸、常闇、轟、障子、緑谷)』

2位) 飯田天哉 (投票者：蛙吹、切島、砂藤、爆豪)

同率 緑谷静空 (投票者：飯田、麗日、耳郎、瀬呂)

4位) 火埜翔織 (投票者：尾白、口田、八百万)

5位) 上鳴電気 (投票者：峰田)

同率 峰田実 (投票者：上鳴)』

「はあ!? オレお前に入れてねえぞ」

「互いに考えることが一緒だったんだろう、自分で自分に投票するこ
とはルール③に抵触するから投票者を違う人間にしたんだろ。それ
が重なっただけじゃないのか馬鹿どもが」

相澤の突っ込みが綺麗に決まった。

「ま、ルール②と④を上手く利用した子もいたようだね」

オールマイトも教師らしく物事を多角的に見れるようになってき
たようで、準備時間中に火埜と葉隠に引っこり無しに着ていたメッ
セージを黙認していた。

「でも、同率2位が出ちまったんだから2位は再投票でもするのか」

切島の疑問は確かにそうであった。

非合理を嫌う相澤が何も言わないのは正直可笑しかった。

「問題ない」

相澤がそう言うのと電子黒板の情報に変化が起きた。

『1位) 飯田天哉 (投票者：蛙吹、切島、砂藤、葉隠、爆豪、火埜)

2位) 八百万百 (投票者：芦戸、常闇、轟、障子、緑谷)

3位) 緑谷静空 (投票者：飯田、麗日、耳郎、瀬呂)

4位) 火埜翔織 (投票者：尾白、口田、八百万)

5位) 上鳴電気 (投票者：峰田)

同率 峰田実 (投票者：上鳴)』

つい先ほどまで選挙管理人をしていた葉隠と火埜の名前が飯田の
投票者に追加され、順位が変動。

結果が変わったのである。

「すでに結果は出ている」

「おいおいおいおい、可笑しいだろ。なんで葉隠と火埜の名前が追加されてんだよルール違反だろ」

上鳴の発言に何名かが騒ぎそうになる。

「いや、上鳴。2人ともルール違反はしてねえぞ」

そこには某ちっこい名探偵の閃いた時の様な顔をした峰田が立っていた。

「どういうことだ?」

「いいか、ルール⑥の効果で管理人の2人には投票権はない。だからオイラは2人の名前を使うことを諦めた」

「だけど、2人が管理人の立場にいるのはルール⑤で明記されている通りオイラ達の投票用紙が全部集まるまでだ。集まった段階で2人は選挙管理人から外れていたんだ」

「だからなんだよ?」

「ルール⑤の適用で管理人から外れた2人は当然、ルール⑥の効果が無くなり、逆にルール①が適用れることになるんだよ」

「峰田、正解だ」

峰田の説明を聞き、相澤も同意する。

「火埜少年も葉隠少女もルールにのっとり、投票を行った。ヒーローは敵と対峙した際にとれる手段は無効化のみ!!それ以外はいかなる状況であってもバツシングの材料になり、心が折れたヒーローたちを我々は何人も見てきた」

「だからとは言わんが、君たちにはどんな状況下であれ自分の特技を相手に押し付けられるヒーローになつてもらいたい」

「三度言おう、この3年間でお前たちに伝えるべきモノは情報・技術何であれ望む限り全て詰め込んでやる」

「オレ達が与えられるモノをどう捉えどう吸収するかはお前たち次第だ」

「皆、頑張るんだぞ!!私も頑張るぞ!!」

オールマイトの熱量に当てられ何やら珍しく熱血化した相澤の鼓舞と元々熱い漢オールマイトの鼓舞に1A生徒の魂に火が灯ったよ

うな光景だった。

「というわけで、飯田君が委員長。八百万さんが副委員長ということ
で拍手」

「なんか冷静だな火埜」

「いや障子君と違って、なんか周りが凄すぎて一周回って冷静になっ
ちやつた感じ？」

昼休み

「火埜君、君はなぜオレに票を入れてくれたんだ？」

食堂のカフェテラススペースでI—A全員が揃ってお昼を食べて
いた。

そんな中、一人机を占領して井ものリレーを行っていた火埜に飯田
が話しかけていた。

「え、何で？どしたの急に？」

ソースカツ丼(約3人前)を食べ終わり、炒飯唐揚げトッピング(約
5人前)を制覇している最中だったこともあり、頬に米粒が付いてい
たが何故か普段見せない子供っぽさに見慣れた緑谷以外の女子が
キョンキョンしていた。そして、なぜか雰囲気も幼く感じた。

「正直言っ君はオレに対して苦手意識を持つているように思えてい
た。他のクラスメートとは積極的に話しているがオレとは、そのあま
り話してくれていないように思えて」

「(あ、バレてた)うーん、そんなことないはずなんだけどね。まあ、し
いて言えばその『在り方』にかな？」

「『在り方』とは一体？」

気が付いたら周囲も注目している。

頬についた米粒は耳郎が周囲に気付かれないよう回収され食べら
れていた。

「フォオラ、ファイファイアフンツフェファイフオイ」

「飲み込んでからで結構」

「(ンゴツクン)ほら、飯田君って今回『抜け道』に気が付いていても
やらなかったじゃん」

「自分が正しいと思ったことを貫くって大変じゃん、それでも貫こう

とする姿勢に投票した」

「ひ、火埜君」

感動している飯田とクラスメート。

しかし、爆豪は解っていた。

「(こいつ、得票数が高い奴が委員長になる様に心理操作しやがった)」
今回設定したルールで【選考中、管理人に話し掛けてはならない】というルールを作った。

そして、全員がスピーチをどうするか考えていた時、火埜と葉隠のスマホが同時になった。

2人は確認するとクラスメートを見て頷く仕草をした。

実はこの時、連絡を取ったのは火埜から葉隠にであり、内容もクラス全員を見て頷くというものだった。

しかし、これにより皆が【話し掛けてはならない】とはされたが【連絡を取ってはならない】とはされていないことに気が付き各々が独自に連絡を問いに行ったのであった。

その中においても飯田は一切ぶれずにスピーチの内容を考えていた、その姿勢から真面目な人間を推すだろう人間が多いと当たりを付けていたのであった。

「(ま、こいつにとつて委員長になるメリットの方が少ないしな)」

「食べ終わったしトレイ返しに行こう」

「だったらじゃんけんして勝った奴は免除されようぜ」

「ふむ、それも良いな、よし皆「さいしよはグー」でいくぞ」

「「「さいしよはグー、じゃんけん」」」

「「「ポン」」」」

「火埜は良く食べるね」

「「個性」がらね、芦戸さんもしっかり食べるんだね」

「えへへ、昔から食べる時はしっかり食べるように言われてたから。
火埜はいっぱい食べる子嫌い？」

「え、全然。むしろ一杯食べる君が好きってね」

「んもー、火埜ったら。なに、口説いてんの？」

食堂から教室まで食休みがてら遠回りをしながら喋る火埜と芦戸。なんやかんや面倒見の良い芦戸とオカン気質の火埜は気が合うようで、これに蛙吹と爆豪が加わると「1-A謎の世話焼き同盟」が結成される。

他愛もない雑談をしながら歩く2人。

曲がり角を曲がった時、芦戸の前に掌が見えた。

次の瞬間、芦戸を抱き抱え、後ろに逃げようとする火埜。

そんな火埜の喉を掌が掴みかけた。

「ゲホッ」

ただそれだけのはずなのに、火埜の首は無惨に崩れかけていた。

「お、ナイス反応。学生と言っても流石はヒーローの卵」

そこには、顔に手を張り付けた青年が愉快そうな声を出して立っていた。

「死柄木吊」こちらにいらしたのですね」

その後から、体のいたるところが靄のような存在が出てきた。

「ああ、黒霧」。流石天下の雄英だよ、学生までエリートで嫌になっちゃまうぜ」

死柄木と呼ばれた青年が壁に手を振れると、振れた箇所からみるみる壁が崩れていった。

その光景に、もしかしたら自分が触れられていたのではと考えてしまった芦戸。何より、クラスでも上位に位置する火埜が初見殺しだったとは言え重症を負わされたことに恐怖のあまり動けなくなり、火埜の制服を握りしめてしまっていた。

「芦戸さん」

そんな芦戸の耳に火埜の声が聞こえた。

「芦戸さん、安心して。必ずオレが君を守るから」

“晴の焰”を掌に集中させ、喉を瞬時に治療した火埜。

目の前の2人の脅威度が計り知れないならと、呼吸できる程度まで行った治療を途中で止めてしまった。

「あれ、反撃するのかな。かっくいいねえ」

「死柄木吊、目的は達しました。至急立ち去りましょう」

「まあ待てよ、目の前には瀕死の生徒がいるんだ。いつまでも苦しませるのは可哀想だろ？」

「まさか」

黒霧と呼ばれた存在は、死柄木と呼ばれた存在が何をしようとしているのか見当がついてしまった。

「さっさと殺してあげよおぜえ」

今度は火埜の顔を掴むべく手を拵げ、走り込む死柄木。

すると、火埜は死柄木の突き出した手首を掴むと合気道の要領で黒霧へと投げ飛ばした。

そして、ふらつく体を必死に動かし、芦戸を背に庇いながら校舎の壁に手をつける。

「ぶっ壊すのは、おまえの専売特許じゃねえんだよ」

潰れた喉を庇いながら、校舎の壁に捕まるように置いた火埜の手から、ルビーを思わせる真紅の『嵐の焰』が放出された。

すると、先程まで何もなかったはずの校舎の壁は真紅のオーラに包まれ瞬時に砂粒のように崩れてしまった。

「行きますよ、死柄木弔。この騒ぎは不味いです」

「くっそ、ふざけやがって餓鬼が、クソ餓鬼が!!」

黒霧と呼ばれた存在に手を引かれその姿を消す死柄木と呼ばれた存在。

2人がいなくなるのを確認する前に、気力が途切れたのか火埜は気絶してしまった。

「え、火埜?起きて、ねえ起きてよ!!」

異常を感知したパワーローダーとセメントスが駆け付けた時には、制服を真っ赤に染め、気絶した火埜とそんな火埜に抱きついて離れようとしないう芦戸しかいなかった。

保健室に運び込まれた火埜。

既に8割方再生していた喉には「晴の焰」が灯っており、外見的には治療を必要とはしなかった。

リカバリーガール曰く、体は問題ないが、何かとてつもなくストレスを感じる事柄があったために精神的に疲弊し眠り続けている。

放課後までには目を覚ますだろう、というお達しで泣き疲れくっ付いて離れようとしないう芦戸も同じベッドに放り込まれた。

教師も何とか冷静にある事を務め、会議を行っていた。

「取り合えず、騒ぎに乗じて校内に入ってきたマスコミは敵認定ってことでいいんじゃない」

いつものおちやらけたキャラを一切消失したマイクの一言に何名かの教師は首を縦に振っていた。

「まあ落ち着いてほしいのさ。僕らが率先してマスコミを叩いたら、それこそ今回の騒動の主犯格たちの思うつぼかもしれないのさ」

ネズミのような摩訶不思議な生き物、校長の根津は普段通りに会議を進めていた。

彼の持つお気に入りティーカップが粉々に砕けている点を除けば。

「とにかく、僕らのカワイイ生徒に手を出したクズ共は見つけ次第確保という方向で行くのさ。ま、何やら危険な個性を持っているみたいだから、うっかり”重傷を負わせてしまっても仕方がないのさ”

左手で器用に回していた万年筆を握るとその瞬間、万年筆は砕け散りインクで机を汚してしまう根津。

実は教師陣の中で最も怒り狂っていたのは校長である根津であった。

「マスコミも今回ウチに押しかけてきてた局は向こう5年は出禁にして、それから直接乗り込んできた奴らはヒーロー科の戦闘訓練を受けてもらって生徒がいかに真剣にヒーローを目指しているか知ってもらうのも良いかもしれないね。ま、不慮の事故が起きても仕方ないけ

ど」

「いい加減におし根津、火埜も目覚めてすぐにこの会議に参加しようとするなんて、担任に似てきちまったのかね？ついさつきまで昏睡状態だったのに、一体何を見たらあの子をあそこまで追いつめられるんだい」

こと訓練に関して一切手を抜かない師匠イワさんの下でそれこそ血反吐を吐かされる訓練を行ってきた火埜翔織は戦闘という分野における思考と見極めは下手なヒーローより優れていた。

事実、人一人庇いながら教員の個性等の情報から最も被害の出ない方法で教員を呼ぶ方法を躊躇なく実行した。

お陰で芦戸にケガらしいケガはなく、校舎も外壁が完全に消失したがセメントスが居れば問題ないレベルの損傷だったともいえる。

そんな火埜が精神的に摩耗するような相手とはどれほどの存在なのか。

泣き疲れて眠ってしまった芦戸は今なお火埜の制服を握ったままであり、無理やり離すことも躊躇されるとのことですつとされていった。

「今回の件では情報が少なすぎる。兎に角紛失したモノがないか改めて各自チェックし、火埜の準備が整い次第再度会議を行えばいい」
割と冷静に見える相澤であったが、彼の手は握りしめ過ぎたのか血が流れていた。

しかし、それこそがこの場にいる教師陣の意思を表しているようだった。

真つ暗中、芦戸は歩いていた。

何時からこの場所にいるのか覚えていないが、ただひたすら歩いていた。

すると遠くの方に手を振る人影が見えた。

しかし、芦戸はなぜかその人影に近付きたくなかった。

なのに、自分の足は勝手に動いて前に進んでしまう。

眼も背けられない、足も止められない、そして気が付くと自分の顔

の前に傷だらけの掌が映し出されていた。

次の瞬間、掌は自分をすり抜けると自分の後ろから悲鳴が上がった。

顔が削がれた中学時代の友達、体中が欠損した今のクラスメート、両親、近所の人々。

そして、遠くにいる人の手を張り付けた漆黒の悪魔が芦戸に触れようと化け物のような腕を近づけてきた。

身体を見るとドロリとした黒い亡者が自分を掴んで離そうとしない。

もう少しで手が届く。

そんな時、温かな「8色」の焰が自分を包み込んだ。

その焰は徐々に鳥の姿となり芦戸を慈しむように包み込むと悪魔に向けて威嚇するように一鳴きする。

気が付くと黒い亡者も悪魔も芦戸の周りから姿を消していた。

—安心して。必ずオレが君を守るから—

その声に安らぎを感じ芦戸は目を覚ました。

「あ、芦戸さんおはよう。大丈夫?」

制服の首元は赤黒く染まっているが傷らしい傷は見当たらず、いつも見せる距離をとるための笑顔とは別の、人を安心させる笑顔をした火埜が芦戸の頭を撫でながら起きていた。

瀬呂と尾白は保健室へと歩いていった。

切っ掛けは瀬呂が相澤に呼び止められた事だった。

「お前ら、放課後時間あるか」

多目的ルームで近代ヒーロー美術史の授業を受けた後、教室に帰る途中に忘れ物を思い出した尾白と昼に全校放送で通達された本日単独行動禁止により尾白に付き添った瀬呂に相澤が声を掛けた。

「はあ、特に用事はないっすけど」

「悪いがコレを火埜に届けてやってくれないか」

そうやって相澤がどこから取り出したのは紙袋だった。

「これは制服ですか?」

「ああ、今回の件で火埜の制服が血だらけになっちまってな。そのま

ま帰ったらまた「言論と報道の自由とかクソ抜かすゴミ共」が騒ぎ立てかねないからな、取り合えず上は全部取り換えることになった」「オレはこれから「報道の自由を傘にしたクソ共」と今後のことで協議に行かなきゃならなくなてな。悪いが保健室まで届けてやってくれ」

瀬呂はこの時、相澤から漏れ出す殺意を敏感に感じ、この場から逃げたい衝動に駆られていた。

しかし、その殺意が自分に向いていないことは解っているので何とか耐えていた。

「解りました、それじゃお預かりします」

「すまん、それじゃ頼んだ」

紙袋を渡され、スタスタといつも以上に足音を鳴らしながら歩いていく相澤は誰がどう見ても不機嫌だった。

「(そっか、火埜の奴起きたんだ)」

昼休憩が終わり、教室に戻ると相澤から芦戸と火埜が校内に侵入した敵に襲われたこと、火埜が負傷したことを聞かされた。

クラスメートが負傷したと聞いた時、実は瀬呂は何も感じなかった。

正確には現実として受け止めていなかったというのが正しい。

ヒーローになるために入学した、訓練での負傷は覚悟していたが敵との戦闘なんて大分先のように思っていた。

そのはずなのに、自分達がちよつとしたハプニングに対処した時、クラスメートは死ぬかもしれない場面に出くわしていた。

回復系の力も持っていた火埜だからこそ生き残れたと言われてもピンと来なかったが、そんな奴ですら消耗で強制的に眠らせられてしまう。

改めて、ヒーローと言う職業の恐ろしさに考えさせられることだった。

「火埜、目が覚めて良かったな」

隣を歩く尾白に話しかけられ、現実に戻ってきた瀬呂。

「まったく、あいつは常識人だと思ってたんだけどなあ」

「良い子って訳ではないよな」

火埜と話をしていると解ることだが。

どちらかと言うと楽したい人間である。

勉強も得意不得意分野がハッキリし過ぎている。

自分の価値基準に正直である。

年相応にエロに興味がある反面、以外に純情純真である。

大人のような感性が垣間見える一方で、子供染みたワガママと無邪気を併せ持つ歪な存在。

そんな火埜を瀬呂は気に入っていた。

「速く保健室行つて、非常口委員長」の話してやろうぜ」

「ああ、あれは傑作だな」

2人は笑いながら歩いていた。

目的の保健室に近づいた。

「ちよっ・ま・」

「・た、・い、・るよ」

保健室から何やら物音がする。

芦戸と火埜以外今は居ないはずの保健室から。

尾白と瀬呂の2人は最悪の想像が頭を過った。

「おい、大丈夫か!？」

「無事か、2人とも!？」

急いで保健室の扉を開けた2人が目にしたのは。

数分前

「あれ、ひの?」

「はい、貴女の火埜君ですよ」

赤黒く染まったワイシャツの第2ボタンまで外し、ネクタイも同様に弛められ、バレないように身に付けている翼を模したシルバーのペンダントトップ。

まだまだ男の子な指が壊れ物を扱うように撫でているのは芦戸の髪。

徐々に意識が覚醒していく芦戸。

そして、真つ先に見たのは自分を庇い負傷した筈の火埜の喉。ズタボロだった其処は女子も羨むような綺麗な首筋があった。思わず手を伸ばし、火埜の喉を撫でる芦戸。

「ちよつと、くすぐりたいですよ」

本当にくすぐりたいのだろう、笑い声が漏れてくる。

「良かったあ、ひの」

気が付くと芦戸の瞳から涙が溢れ落ちそうになっていた。

しかし、その涙は火埜が掬い上げ、指で優しく拭った。

「ふえ、ひいのお（グスツ）」

「あれ、泣かしたい訳じゃないんですけどね？」

「だって、あんた、あたしのせいであ」

「気にしないでください、あれはオレのどうしても引けないばめんだつたんです。それに言つたでしょ」

「オレが君を守る」つて」

そう笑う火埜は何時もの子供っぽい笑いでも、心の境界線を作るために浮かべる大人のような笑みでもなく、年相応に純粋な笑顔だった。

「あ、ああ、ひいのお」

元々自分の感情に素直な芦戸。

押し寄せる感情の波に抗うことをせず、思い切り火埜を抱き締めてしまった。

「よかった、よかったよお火埜」

しかし、彼女は大事なことを忘れていた。

泣き付かれ寝てしまった芦戸は一度目を覚ましていた。

隣を見ると傷がほぼ塞がった火埜。

夢でも見ているかのような感覚の中、寝苦しさを覚えた芦戸は何時ものようにネクタイを外し、制服であるワイシャツをお腹の辺りまで外す。

すると、再び唐突に眠気に襲われる芦戸。

芦戸自身、「ああ、これは夢だ」と良く解らない納得をすると再び火埜の隣で眠りについたのであった。

そんな彼女が火埴の頭を抱きしめる。

そうなると必然的に火埴の顔は彼女の年相応に育った胸部に抱き抱えられてしまう。

そして現在、彼女はその胸部を下着一枚隔てて何も障害がない状態だった。

つまり、

「ちよつとまって落ち着いて芦戸さん」

「良かったあ、火埴生きてた」

「あ、いい匂い、じゃなくて!!」

「ごめんね、ありがとう」

「うあ、柔らかい、て外れてるから落ち着いて!!」

いつの間にかズレてしまっていた下着に気付かず直に火埴の顔を胸に押し付けながらそれに気が付いていない芦戸。

頭がまだ整理しきれないからか、猫が何匹か逃げ出した状態で所々で本音が漏れている火埴。

そんなカオスな状況が出来上がっていた。

「心配して損した」

「だな、取り敢えず火埴で芦戸の大事なところは写らなさそうだし」

「極刑だな」

オレ達の心配を返せこのラブコメ野郎。

そんな副音声で聞こえそうな虚無の表情で尾白と瀬呂はその喜劇をありのままに文章にするとクラスのグループラインに載せるのだった。

そのラインを見た怒りで思わず自室のお宝本を破り裂いてしまい、何かに覚醒しかけたブドウ頭の少年がいたとかいかなかったとか。

「ヒノノヤロウ、オイラトソコカワリヤガレーーーーー」

『今は僕の愛しい宿敵、オールマイトに焦点を当てて計画を整えよう』
「はい、ご主人様」

週が明けて、月曜日早朝

「わぁーかぁー、何かあつたら必ず〃かぁなあらあずう〃連絡くださいよお」

「まったくもお、朝から騒がしいんだから」

校門前、ピンク色のド派手な装甲車の前で火埜を前後に揺さぶるマスクを被ったスーツの男性。

その男性の声に迷惑そうな顔をするたらこ唇がセクシーなスーツ姿の漢女。

「でもね若、今回の件はあたし達本当に心配したんだから。ちゃんと気を付けてよね」

「解ったから、早くトウさんを止めてマグねえ」

火埜の護衛を勝手に勤めるのは仕事の依頼で雄英に来たクイーン・キヤマバツカ事務所所属のヒーローの2人。

「倍々ヒーロー・トウワイス」と「磁界ヒーロー・マグネティア」だった。

火埜と出会い、運命が変わったと自称するキヤマバツカ事務所に所属するトリファンクラブのメンバーでもある。

「あら、遅いと思って迎えに来てみたらマグに仁じやない」

「あら、睡。ごめんね、ああたの旦那が過保護発動しちゃってて」

「まだ入籍しかしてないわよ。式は翔織が高校卒業したらって話し合っただのよ」

「ねえーむうーりいー、若をわぁかぁを頼んだぞお」

「もう、2人とも。コス着てる時はちゃんとミッドナイトって呼んでよね」

トウワイスは事務所に所属する前、不幸が重なり自棄になり銀行を襲うとしていた。

そんな時、偶々公園のベンチに座る子供に声を掛けた。

それが火埜との出会いであり、彼の人生のターニングポイントと

なった。

その後、何回か挫折をしたが火埜の存在と気が合い現在入籍したミッドナイトの精神的な援助があり、遅咲きのヒーローとしてデビュー。

そんな過程を経ているため、事務所ないでも1・2を争う火埜の過保護者となったのだった。

マグネティアも似たようなものだった。

もつとも、彼女の場合はキヤマバツカ事務所で事務員をしている親友の誘いがあったのが大きいかもしれない。

「2人共、仕事頑張って」

ミッドナイトの後を着いていく火埜の言葉。

2人は今日の依頼を達成するための心の燃料として心に留めたのだった。

「内包するオーラの色と言うのはどう言うことだい」

火埜の体調を考慮しつつ行われた緊急職員会議。

事前に作成された相澤による聞き取りレポートにも黒霧を見て気分を害した理由が掲載されていた。

「内包するオーラの色が滅茶苦茶だったと」

「僕自身の個性に関係するのですが、意識を集中させると僕の目には相手が内包するオーラが色として認識できます」

「根津校長なら頭というか脳が最も色が濃くて、綺麗なオパールホワイトに相澤先生なら両目に青色のオーラが濃く見えます」

名前を挙げられた両名に視線が向く。

そして、自分たちの個性の象徴的な部位に目を向ける教師陣。

「基本的にオーラは単色なんです、特殊型に分類される個性持ちは体の中心に向けて色が混色していく傾向にあります」

「1-Aですと緑谷さんが綺麗な混色であることから個性を複数内包している可能性があります。また轟君に関しても左右で色が違い、中心で色が綺麗に混ざり合っていることから複合型であると僕は考えております」

そう言うとき机に置かれていたお茶を一口含むと深呼吸をする火埜。

「しかし、黒霧と呼ばれていた敵は違っていました。複数の色が混ざることなく、無理やり一つの器に色が存在しているような感じでした」

「とにかく気持ち悪かったです。混色していた個所もありましたが、全体的にはそれを色として認識したくないと体が拒絶したのが昏睡の原因かと思われまます」

「火埜の発言から、恐らく敵は複数の個性を1人に人工的に集め、一つの個性として成り立たせている可能性があります」

相澤が火埜の言葉を引き継ぎように立ち上がり話し始めた。

その言葉に、教師陣はある1人の存在を思い出した。

「相澤君、それじゃまるで」

「そうですねオールマイルト。かつて貴方と貴方の仲間、多くの犠牲を払って打倒した今世紀最大の敵の影が見えてきます」

「確かに、私も死亡を確りと確認できたわけじゃなかったが」

「そして、黒霧と呼ばれた敵は私の仮定が正しければ何らかの実験体であることが予想されます」

一同に黙る教師陣。

「火埜君」

根津が今回ただ一人の被害者火埜に話しかける。

「黒霧と呼ばれた男、確かに混色していた個所があったんだね」

「はい、それでも全体的に見ても少ない割合でしたが」

「そうか、解ったありがとう。それじゃ君は教室に行くがいいさ」

「それでは、失礼いたします」

火埜が退室すると会議室は一切の音が無くなった。

「A・F・O、か」

早朝緊急職員会議の影響で1時限目は自習となっていた。

それは無論、1―Aも同じなのだが皆が時計を気にしていてそれどころではなかった。

すると、ガラガラと前のドアが開けられる音が響き、全員が一斉に音のする方へと視線を向けた。

「え、なに？なんか、怖いんだけど」

「火焚てめ「ひのー」」

最初に反応したのは峰田だった。

物凄い形相で峰田は真っ直ぐに火焚へと飛び掛かった。

しかし火焚へと辿り着く前に、横から物凄い勢いで吹き飛ばされ壁にめり込んだ。

犯人はドアの前の座席に座る芦戸だった。

「ねえ大丈夫？なんで火焚だけ呼ばれたの？やっぱり何かあったの？」

矢継早に繰り出される質問に苦笑いを浮かべる火焚は、頭を掻いていた右手をそのまま芦戸の頭にのせると「あの時」のように壊れ物を扱うように丁寧に撫でた。

「大丈夫ですよ、ちよつと書面では報告しにくいことを口頭で説明しただけですから。安心して、ね」

頭を撫でられている芦戸の顔は、徐々に落ち着きを取り戻していった。

そして、一切の違和感を感じさせることなく芦戸は自然に火焚へと抱きつくのだった。

「火焚君、身体は大丈夫なのかい、あの日のノートは後で渡すから心配しないでくれたまえ、いやその前になんて無茶をしたんだ。オレは学級委員長として君に注意しなければ」

「飯田君も、というか皆に心配かけだようで申し訳ない。一応先生達から説明があるまでは僕も喋れないからさ」

「ていうか、翔織君はいつまで三奈ちゃんの頭を撫でているのかな？」
「ウチ達も心配したんだぞ、てか芦戸はいつまで抱きついてるつもりなんだい」

「ノートでしたら私の物をお使いください」

飯田の小言爆速ターボがかかったタイミングで目から光が消失した葉隠と耳郎、そしてフンスフンスと息巻いた八百万が火焚の傍に着ていた。

「あれ、緑谷は混ざらないのか？」

砂藤が何時もなら率先して嫉妬にくれる緑谷が朗らかにその光景を見ている状況に不信感を抱いていた。

「ケロ、日曜日の女子会の成果ね」

「うん、やっぱりボクにとつてとーくんはお兄ちゃん梓だっみたい。だつて今ちよつと誇らしいもん」

「だつて良かったね爆豪くん。まあ、ウチは認めないけど」

「アホらし、そんなもん知ってたわ。なんでお前に認めれなきやいけないんだよ」

緑谷の後ろでメンチきりあう麗日と爆豪。

教室前と窓際で起きた混沌。

なんとなくいつもの1―Aの風景だった。

「時間が押しているため今日のHRは連絡事項だけにする」

その日は何事もなく無事に過ぎていった。

休み時間の度に火埴の取り合いが起こったこと、その仲裁をしていたのが何故か蛙吹と瀬呂だった事に気が付いた飯田が終始煩わしかったことを除けば。

放課後、相澤が相も変わらず不機嫌そうに教室に現れた。

「明日のヒーロー基礎学だが、予定どおり執り行う」

「そして、これから1週間放課後の全ての施設の点検にはいるため施設の貸し出しが出来なくなる」

「そして、当分の間だが登下校の際に校門ではプロヒーローによる警護が行われることになった」

「以上で本日のHRを終了とする」

1―Aは飯田の号令をもって終了となった。

「翔織、お疲れさん」

下駄箱で靴を履きかえていた火埴の背を叩いたのは爆豪だった。

「シズの件なら麗日さんがやってくれたことだよ」

「ちつ、あの丸顔が。なんでオレに敵意剥き出しなんだよ」

「オレもよう知らんけど、「なんか、こうわたしの魂がシズクちゃんに爆豪くんを近付けたらアカンていつてる」らしいぜ」

「ふぎけんなあの丸顔が!!」

「まあ、今年で片思い歴二桁に突入した勝己には同情するけど」
靴を履きかえ、外に出た2人。

校門ではクラスメート達が本日最後の談笑を行っていた。

「今回の件、オールマイトが言っていた件に関係あると思うか」

爆豪の呟きに対して火埜は返答に困った顔をしていた。

「師弟でただ一つ情報共有をしていない、オレらが任せられた事情と
AFO」。聞いた性格だと後継者というかもう一人の自分を作っ
ていても不思議じゃないな」

「やめてよね、勝己が言うど実現しそうじゃん」

「ああ、誰が全自動旗回収機だコラ」

「誰もそこまで言ってるねえよ」

前を見ると騒がしい部類にはいる何人かが手を振っていた。

「ま、なるようにしかならないさ」

「取り敢えず近々でカツ翔び爺に連絡だな」

校門につく頃には話を終えていた爆豪と火埜。

「ねえねえ、二人でなに話してたの？」

最近では誰もツツコミすらしなくなった葉隠から火埜へのハグ。

爆豪が目で追うと、耳郎が制服の裾をちよこんと握り、八百万がか
なり近づいていて、芦戸がそこにどう加わろうか様子を伺っていた。

「何でもないですよ、明日は久々のコス有り授業ですね、て話ですよ」

火埜のその一言が燃料となりまた騒ぎ始めるーAメンバー。

最近では余り喋らない轟や常闇も一緒にいることが増え、クラス単
位での仲は学校でも上位に位置するらしい。

そんな、クラスメート同士の雑談はその光景を相澤に目撃され怒号
が聞こえるまで続いた。

「さあ、皆規則正しく迅速にクラスの席順でバスに乗り込むんだ」

ヒーロー科1-Aは本日午前中の単元全てを使い、ヒーロー基礎学を行うことになっていた。

登校後直ぐにコスチュームに着替えると校舎入口に集合していた。無論、最初にそこに着いていたのは飯田だったことを明記しておく。

「くっ、このタイプだったか」

悔しそうな顔をする飯田。

彼の想像とは異なりバスの座席が2人がけの前向きシートと横向きのロングシートも混在したタイプだった。

「朝からフルスロットルだな飯田委員長」

「ああ、てかやつと届いたんだなその『眼鏡』」

2人がけの席に座る爆豪と火柱。

そして、爆豪は火柱にかけている眼鏡が前回の訓練から変わっていることに目敏く気が付いた。

「まあ、コンタクトがつけられないオレのために博士が態々メガネ型にしてくれて、激しく動く時は外れないようになる機能まで付けてくださったみたいだね」

「ああ、確かに翔織はコンタクトつけられないんだったな。オレと違って」

「目に指を突っ込む動作ができる方が恐ろしいんだよ」

「ま、オレも今日からコンタクト使用するから馴らしてかないとな」

前方で会話する2人を他所に後方ロングシートでは雑談が盛り上がっていた。

「シズクちゃんの個性ってオールマイイトに似てるわね」

きっかけは蛙吹のその一言だった。

「身体強化、て意味ならそうかもだけどボクの個性他にもできること有りそうで」

「確か、中学3年で突然発現したのでしたわね」

「うん、診てくれた先生が言うには個性に身体が耐えうる状態になつから使えるようになったんじゃないか、て」

「個性学は未だに謎多いからな、緑谷みたいな事例も出てくるんだな」「でもよお」

そんな中、切島が自分の腕に個性を使い調子を確かめるように腕を回した。

「正直、オレは緑谷や轟、爆豪に火焚みたいなド派手な個性が羨ましいぜ。実力社会だつても今のヒーローにはエンタメ性も求められてるしな」

両腕を硬化させ拳同士を打ち付ける切島。

「まあ、オレは電撃ぶつ放せば良いけどな」

「活躍が限定的な上に直ぐにアホになる奴がよく言うよ」

上鳴は自身の個性『帯電』が昔から人気の有る「雷」に属する個性だからか上機嫌だったが耳郎に弱点を思いきり抉られ悄気る。

「ちくしょー!!でもでも、オレは鬼コーチ爆豪とガチ講師火焚の放課後勉強会で一番誉められてんもんね。なあ2人共」

立ち直りが早いのも美德とばかり、放課後に行っている1Aツートップによる勉強会ではよく誉められることをアピールしようとするの席に座る爆豪と火焚へ声をかける上鳴。

「え?ああ、まあ、ねえ」

「ああん?そら、なあ」

若干困った顔になる火焚と鬱陶しそうに顔を歪める爆豪。

「同じ経験値を稼げるならレベルが低い方が伸び代ある(でしょうし)(だろうが)」

誉められると期待して振った2人からの種のだメ出し。

流星に涙目になってしまう上鳴。

「もつと誉めてよ、オレは誉められないと伸びないタイプなの!!」

「調子にのるな上鳴、前にも言ったがお前が成績上位で入試を通過してきたのは試験と個性の相性が良かったからだ。あの試験方法以外だったら落ちてた奴何人もいるだろう。他の奴らもまずは自分の個性と向き合え」

相澤の雷が落ち、方々に飛び火する。

原因となった上鳴も流石に縮こまっていた。

「まあ、相澤先生の言うことは最もだけど自分の成長を噛み締めるためにたまには後ろを振り返っても良いんじゃない？上鳴君だつてぶつ放以外にも数秒だけど出きるようになったことも有るんだし」

暗くなった雰囲気を持ち直したように火埜が話しに乗っかる。

対象になった上鳴も持ち直したように火埜を拜んでいた。

「余り甘やかすなよ火埜。あいつらの為にならん」

実は爆豪と火埜の前の席に座っていた相澤に小声で確りと釘を刺される火埜。

「まあ、たまには良いんじゃないやねえの。誉めることもよ」

実は鬼コーチと呼ばれるフィジカル総監督の爆豪が一番皆を誉めていることに誰も気が付いていないのは人柄が原因かそれとも言動が原因か。

「相澤先生、そう言えばオールマイトは？」

「そういえば、今日はヒーロー基礎学と被るとかあるから一緒に授業するとか言ってたよな？」

「あの人か」

何故かバスにいない教員の名が火埜から出る。

その名前を聞き遠くをみる相澤。

「何かあったのか」

「ああ、有ったとも言えるな」

珍しく焦りの表情を浮かべる爆豪に対して、相澤の表情は呆れの感情一色だった。

「川で溺れてる仔犬を助けたついでに、その上の橋から落ちかけてたタンクローリーを引っ張り上げて、意識の無かった運転手を病院まで運んで、仔犬を獣医に見せに行ったら騒ぎを聞き付けたファンとマスコミに囲まれ、ファンサをしていたから遅刻してくる、と相棒のあの人から連絡があった」

「ダメ新人か!？」

これ師匠チクリ案件だよな、という相澤の小声に首を縦に振る爆豪

と火埜だった。

「すつげー!! なんだ此所!？」

授業の会場に着いて誰が最初か解らないがその一言は生徒全員 of 感想だった。

「水難事故、土砂災害、火事……e t c.」

そして、そんな生徒達の前に特徴的な格好をした教員が現れた。

「あらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場、その名もU・S・ウソの災害や

事故ルーム
J!!」

「いや、まんまかよ!!」

「権利関係、書類作るの大変だったです」

上鳴のツツコミに対して当時を思い出したのか、乾いた笑いを漏らす本日の講師。

「スペースヒーロー『13号』! 災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なヒーロー!」

「わー! 私好きなの13号!」

緑谷のヒロオタの側面が久し振りにみれてホツコリしている爆豪と火埜。

そして、自分の好きなヒーローの登場にテンションが上がっている麗日。

「13号、オールマイトは? ここで待ち合わせる筈だが」

「先輩、それが」

「おい、まさか」

「あの後、銀行強盗に鉢合わせして、それを解決したら今度は巨大引つたくり集団逮捕の応援要請を小耳に挟んで援助に向かい、今本気ダツシユで県境まで戻ってきているところだそうです」

「不合理すぎる。仕方ないが始めるぞ」

偶然近くにおいて2人の会話を聞いてしまった爆豪は、かつて見たブツ飛ばされるオールマイトを思い出し静かに達観した顔で合掌した。

「えーおほん。ではでは、始める前に少々お小言を1つ、2つ、3つ、4つ、5つくらいかな?」

丁寧に指を折りながら、話す内容を確認した13号。

生徒全員の顔を見渡し、視線が自分に向いているのを確認すると話し始めた。

「皆さんご存知のとおり、僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも簡単に吸い込んで塵にしてしまいます」

「その個性で、今までにいろんな人達を災害から救ってきたんですね」
13号の自身の個性の説明を聞いて、鼻息を荒く明らかに興奮している麗日が合いの手をいれる。

「はい、そうですね。でも、この力は個性とも容易く簡単に人を殺せる力です」

そのおっとりとした声色が一瞬冷たさを帯びたような感じが周囲に漂った。

「皆の中にも簡単に人を殺せる個性を持つてる人がいるでしょう。というより、全ての個性はどんなものであれ簡単に人を傷つけることが出来てしまう可能性があります」

「現在の超人社会は個性の使用を資格制にして、厳しく規制することにより、皆さんが見えているところでは成り立っているようには見えません」

そう言うと右手の人差し指のカバーを開き近くに置いてあるゴミ箱へとその先向ける13号。

ゴミ箱は瞬く間にブラックホールに引きずり込まれると、その姿を消してしまった。

「しかし、一歩間違えばこのように容易に人を殺せる『力』個性を持つていることを一人一人が忘れないでください」

「先輩がカリキュラム無視して独断でやってくれた個性把握テストで、自身の力が秘めている可能性を皆さんは知りました」

「おい、13号?」

「オールマイトの初めてのヒーロー基礎学の授業で行われた対人戦闘で、それを人に向ける危うさを体験したかと思えます」

「おい、お前何か根に持ってないか?」

「でも、今回は今までと違います。今日の授業では人命の為に個性を

どう活用するかを学んでいきましょう。君達の力は人を傷つける為にあるのではない。救たすける為にあるのだと、心得て帰ってくださいいな」

「以上！ ぐ清聴ありがとうございます」

話し終えて一礼する13号。

所々で漏れた毒から何かを察してしまいそうになるが、生徒一同はそんな13号へ拍手をおくるのだった。

それが止んだところで後で機嫌を取ろうと決めた相澤が口を開く。

「そんじゃあ、授業を始めるぞ。まずは・・・、ん？」

生徒に指示を下そうとした相澤が何かに気がついたように警戒態勢に入った。そんな相澤の背後、およそ100m程先に黒い靄もやのようなものが現れた。

「相澤先生、 〴〵あいつ〴〵です！」

「わかってる！ 全員不用意に動くな!!」

火埜の言葉が訓練所に響き、相澤が臨戦態勢を整えた直後、全身いたるところに〴〵手〴〵をくつつけた怪人死柄木弔を筆頭に、どう見ても友好的には見えない連中が、姿を現した。

「何だよ！ あいつら！」

「これも授業の一環か？」

「動くな！ あいつらは全員本物の敵だ！」

外していたゴーグルを装着し、首に巻いた布を握り締める相澤。

「13号に、イレイザーヘッドだけですか。おかしいですね、先日頂いた教師側のカリキュラムでは、オールマイトがここにいる筈なのですか？」

「やはり先日のは、貴様らの仕業だったか」

前回のマスコミ騒動は暗に自分達がけしかけたと言ってるような黒霧の発言に陰しさが増す相澤。

「おいおい、マジかよ。せつかくこんな大衆引き連れてきてやったのにさあ。平和の象徴どこ見ても居ねえじゃねえか」

首を掻きながら周囲を見回す死柄木。

周囲を見ていた視線は出入口付近にいる1-A生徒達に向けられ

る。

「ああ、そうか。コドモヲコロセバクルノカナ？」

顔に張り付いた手が邪魔で見えないはずの顔に浮かんだ笑顔は、薄く澱んでいた。

「うーん、体力落ちたな」

雄英高校最寄駅にてウォーキング（時速15km）で疾走するオールマイト。

ナチュラルボーンヒーローは今朝のやらかしを自己反省しながら周囲に気を配って歩いていった。

「まあ、個性の恩恵を無駄遣いしていたから東京大阪間ジャンプして5分とかやつちやつてたんだし、今それやったら私本当にピンチだしな」

方々に迷惑をかけていることに気づいているが、既に師と仰ぐ男性と先生であった現雄英校長のスケジュールを合わせたお説教とお仕置きが決定していることには気が付いていなかった。

すると、彼のスマホに緊急着信が届いた。

それは、雄英教師に一斉配信される緊急事態連絡だった。

USJ施設内中央西にある広場に死柄木を中心に突如として黒い霧が湧き出し、そして埋め尽くしていく。

そこから徐々に、一人二人と、明らかに堅気に見えない荒々しい霧囲気を纏う者達が続々と姿を現した。

その人数は瞬く間にA組の人数も超えて30人、40人と増えていく。

そして、誰もいなかったはずの広場は数多の敵で埋め尽くされてしまった。

広場を敵で埋め尽くすと黒い霧は範囲を狭めていくと、最後に中央最後尾に位置する死柄木の横に黒霧が姿を現して、完全に消えた。

広場と出入口付近まではだいぶ距離がある。

普通ならば、視線など感じるはずもない。

その筈なのに。

ーゾクリー

誰かなのか、それとも全員だったのか。

生徒達の背筋は、怖気に震えた。

「な、なんだよあれ。本当に授業じゃないのか？」

「峰田、落ち着け。先生方が既に臨戦態勢に入っている。いくら虚言癖のある相澤先生でも、生命がかかった状況で合理的虚偽はやらないだろう」

峰田の今にも泣き出しそうな声に、流れる様に毒素にまみれた言葉を返すのは爆豪。

苦々しい顔はそのまま、奥歯が軋むほどに、強く噛み締め、距離が離れている敵を睨みつける様な鋭い目で見た。

「(クソが!!)」

自身の理解者、大切な幼馴染みである火埜が一時的に昏睡させられた原因が目の前に現れた。

その事に、自身が気付かぬうちに恐怖を感じている事実には苛立ちを覚える爆豪だった。

「外見特徴、完全一致。火埜君から報告が上がった死柄木弔と黒霧ですわね」

「前は偵察、今回が本命なんだろう。13号、生徒達を引率して入り口付近まで後退しろ。そこで防御陣形をとって、その後の指揮は任せる」

「なぜ、後退ですか?!校舎まで避難した方がいいんじゃないですか?」「そうしたいのは山々なんだが、あの霧が完全に消えた。報告のあった黒霧がいなくなっただろう。恐らく、俺の個性を警戒してるんだろうな。外に出られると俺の目が届かんし、生徒達を人質に取られでもしたら、それこそ拙い」

相澤はゴーグルの下で右目を開けたり閉じたりを繰り返す。

教師から、ヒーローへ。

その意識を切り替えるためのルーティンを行った。

「俺が突っ込んで時間を稼ぐ。13号は生徒達を頼む」

「まっ、待って下さい相澤先生! あの人数を相手に一人で時間稼ぎなんて無理です!」

緊張のせいだろうか、飯田の声はどこか悲鳴のようできて、微かに震えてすらいた。

その声に、相澤は苦笑を浮かべる。

自身をアングラと称する相澤Ⅱイレイザー・ヘッドは、ヒーローとしての世間認知度は極めて低い。

その為、とあるお節介焼きが勝手に挺入れするまでは情報の少なさから敵には嘗められ、市民には不安がられることは日常茶飯事だった。

その頃のような、雰囲気を感じ懐かしさを覚える自分に対して相澤は苦笑しそうになるが。

「飯田、減点だ。お前らよく覚えておけ。」

「ヒーローは一芸だけじゃ務まらない」、
「苦手だからできません」
そんな甘ったれた考えは捨てろ

声に緊張感はない。

姿勢も自然体。

気負いは一切感じられず。

口許には笑みを浮かべ。

冗談すら交えている。

相澤は生徒に視線を向ける。

「お前達も一端のヒーロー候補だ。期待しているぞ」

そう言って、既に目付きの違う3人の生徒を目で追ってしまった。

相澤はクラスを振り分けた日のことを思い出した。

「やあ、相澤くん。相変わらずのようだね」

新入生のクラス振り分けが行われたその日、廊下を歩いていた相澤に声を掛けたのは骸骨もどきと呼ばれていたその人ではなく、一般人並みに肉体が鍛え上げられたオールマイイトだった。

「オールマイイト、どうしたんですか出勤は明後日からでは」

「ちよつと近くまで来てね、懐かしい母校を探検していたんだ」

ある日を境に相澤の目の前に立つ現役No.1ヒーローは変わった。

今でもこの国の平和の象徴でありながら、多くのヒーローとチームアップし、専門性の高い案件では進んで指揮下に入る。

1人の大黒柱でありながら周囲のヒーローたちと共に平和を維持しようとする姿勢に相澤は少なくない好感を抱いていた。

「今日はクラスの振り分けがあつたんだってね。私も参加したかつたんだが、明日の記者会見の準備もあつてね」

「存じています、事実上の現役引退宣言。今後はセミプロ、サイドキック相棒のような立ち回りで事件に向き合い、後進の育成を第一にされるとか」

相澤の言葉にどこか哀愁を漂わせるオールマイト。

「そういえば、相澤君はどんな子たちの担当になつたんだい？」

「簡単な資料で良ければどうぞ」

脇に抱えた生徒たちの簡単なプロフィールをオールマイトに渡すと相澤は壁に背を預け、その様子を見守った。

数分後、ファイルを読み終えたオールマイトの顔には笑顔が浮かんでいた。

「彼らの選出は相澤君が？」

「はい、今回はB組を担当するブラドと多少のすり合わせだけで概ねオレの希望通りになりました」

昨年度、一クラス全員を退学処分にした相澤。

その教育の方向性から、本来であれば今年は担任を外されるはずだったが、多くの在校生の嘆願により担任を任されることになった。

「相澤君、爆豪・火柱・緑谷の3人この3人には気を付けたほうがいいよ」

そう言うとファイルに掲載された生徒一覧の3人の生徒の名前に赤丸を付けたオールマイト。

「なぜです。確かに3人ともそれぞれ問題がありますが、要注意生徒というわけではなかったはずですが」

相澤は赤丸の付いた3人の生徒の情報を思い出し出していた。

爆豪勝己

強力な「個性」に加え、その応用力に長け、際立った戦闘センスの持ち主。

上昇志向と自尊心が強く粗暴で攻撃的に見られがちな性格。

友人想いの側面も持ち合わせており、行き過ぎた報道をする報道関係者への悪感情を持つ。

火埜翔織

『〃ビーストアーツ〃 火埜獣造』並びに『〃カラフルパレット〃 火埜彩命』実子。

〃（記載不可事項）〃ただ一人の生存者。

当時の体験により人と壁を作る傾向にあるが、幾分か治っている。

緑谷静空

中学3年で個性が発現した希少ケース。

個性に振り回されがちだが、制御範囲内に収めている。

勉強・体力共に優秀だが、過去に苛められていた時期があり、自分に近い人間に軽度の依存傾向をみせる。

「この3人がどうかしたんですか」

「キャマバツカと親しい君なら〃私の秘密〃を知っているだろう」

「ああ、この間のあれはやっぱりイワさんの妄言ではなかったんですね」

数日前、火埜の高校合格祝いに強制連行された相澤はその場でイワさんからオールマイトに関する事情を伝えられていた。

「受け継がれる個性〃ONE FOR ALL〃。にわかに信じがたいですが、それが3人とどう関係してくるんですか」

「3人とも私の〃後継者〃なんだ」

後継者。それも平和の象徴、No.1ヒーローの認めた存在。

「爆豪少年は私の意志を継いでくれた。少しでも長くこの世界が平和である様にNo.1を目指すと言ってくれた」

「火埜少年は私の精神を継いでくれた。例え怒りに駆られようとも、誰かのために事を成すと言ってくれた」

「緑谷少女はこの個性を継いでくれた。この先どうなるか解らないが、この個性で多くを助けると言ってくれた」

成人男性と変わらぬ体格となったNo.1ヒーロー。

それが意味することを相澤は悟れぬほど愚かではなかった。

「キヤマバツカと火埜少年、デヴィツドの協力により、私は成人男性としての健康な肉体を取り戻せた。おかげで“残り火”に影響された私の個性が生まれた」

「そんな弟子たちは戦闘という面で既にそこいらのヒーローを凌駕できるレベルまで到達している」

「だから、相澤君には彼らがちゃんとヒーローになれるように心構えを作ってあげてほしい」

そう言うのと深々と頭を下げるオールマイト。

「(安心してくださいオールマイト。貴方の弟子達は貴方が思っている以上にヒーローですよ)」

「お前たちは13号の指示に従え、不測の事態でも冷静に対処しろ。お前たちなら出来るはずだ」

中央広場では死柄木がガリガリと首を掻き巻く音が響いていた。

「んだよ、オールマイトいないじゃん、早くも計画ご破産？対象討伐でクリアなイージーゲームなのにそもそもその対象いないとか、ふざけてるよなおい」

死柄木は、ギョロリと隣にただ立つ大男を苛立ちを隠すことなく蹴りつける。

異常なまでに発達した全身の筋肉。

頭部は剥き出しの脳味噌。

感情はおろか意思さえほとんど感じさせない。

この計画のために寄せ集めたチンピラ全員が束になっても、足元にも届かない最強戦力。

「さて、どうするかねえ」

死柄木が崩壊したプランの立て直しを模索している間に戦闘音が聞こえ始めた。

「おいおい、考える間もなく始められてるし。すっごいなあ、不利な戦場でも迷わず突っ込んでくるよ」

「カツコいいなあ、さっすがヒーロー」

そんな言葉とは裏腹にその顔にはただ一人戦場に走ってくる相澤、
「イレイザーヘッド」を馬鹿にしたような顔をしていた。

「でもバカだよねえ、調べてあるに決まってんじゃない。個性消すチー
ト野郎には、個性じゃない遠距離武器」

「お前なんてその個性が無きや、ただの運動神経の良いオッサンなん
だよ」

嘲笑いながら、手配したチンピラたちに予め伝えていた指示を出
す。

嗜虐的な笑みを浮かべたチンピラは、大まかな狙いをつけるだけで
いい『ばら撒くタイプ』の銃火器を構え、銃口をただ突っ込んでくる
イレイザー・ヘッドに向けてトリガーに手を掛けた。

「あぁ?」

しかし銃声は、一つとして響くことはなかった。その代わりに響い
たのは、破碎音と打撃音と手駒として準備したチンピラたちの汚い悲
鳴だった。

突っ込んでくるイレイザー・ヘッドが突然消えた。

そう錯覚してしまうほどの急激な超加速で距離を詰めるイレイ
ザー・ヘッド。

銃器を持った連中を体術と自身の武器である特殊繊維製の捕縛布
で打ち飛ばしたのだ。

全ての武器を破壊して。

イレイザー・ヘッドの個性は「抹消」。

それは視認した相手の個性を使用できなくする個性。

個性社会では反則級の代物だが、逆を言ってしまうえば個性を消すだ
けの代物であり、身体能力は常人の域を出ず戦闘能力は決して高いと
は言えない。

世間のイレイザー・ヘッドへの評価とはそういったものだった。

「なんだよクソガキが情報と違うじゃねえか!おい、お前から囲め!そ
いつはイレイザー・ヘッドじゃない!個性でボコしちゃえ!」

「お、おう!って、なんだ個性が使えねえ!」

慌てふためくチンピラを前に不敵な笑みを浮かべるイレイザー・ヘッド。

「残念、俺は間違いないく、イレイザー・ヘッド」だ。だがまあ、そう判断してもおかしくはないか」

淡々と。

逆立つ黒髪が自身の怒りに呼応するかのように怪しく揺れ。

黄色いゴーグルの向こうから、赤い眼光が地獄の焰のように妖しく光る。

苛烈に。

捕縛布が伸び、個性が使えずに棒立ちになった的でしかない敵を容易く拘束、一塊にして別の一団にハンマーの如く叩きつける。

チンピラ達は早くも脱落・脱走者を出し、数の利で勝ち誇っていた敵勢が動揺するには、十分すぎる戦果だった。

飛び上がり、捕縛布に捕らわれた大柄の異形型を蹴り飛ばす。

発動型の個性を相手には、胴体への打撃で悶絶させる。

仲間だった周囲のチンピラがやられる一方で一部のチンピラは様子を窺っていた。

無闇矢鱈に攻めず、事前情報にあったイレイザー・ヘッドの個性が切れるまで若干距離をおいて囲み出した。

しかし、目を閉じることで解除されるその効果は事前の情報の時間を大幅に超えてもなお、消える気配を見せなかった。

「相澤先生、少々よろしいでしょうか」

反省会の数日後、緑谷が職員室に訪ねてきた際には何か問題が起きたのではないかと心配になったことを思い出す相澤。

「どうした緑谷、何か用事か」

「あ、スイマセン。もしお時間がありましたら少しお付き合いいただきたいのですが」

そうして連れてこられた先には既に同僚のプレゼント・マイクがサポートアイテムの指向性スピーカーを外され喉と胸部に薄っすらと青く光る焰を纏ったタオルを掛けられだらしのない顔を晒してい

た。

「ああ、ひいのおく。こおくれえくてえいいきいでえくたあのおくむう」

「ひぎっさんは声帯もそうだけど肺に負担掛け過ぎ。次からは金取るよ」

「とまあ、こんな感じで僕のオーラによる治療も可能だから皆勝己に絞られてきてね」

「オラ、いくぞ野郎ども」

その日、自分の受け持つ生徒たちが体育館で基礎トレーニングをするからと施設の使用届を持ってきていたことを思い出したが、自分が連れて来られた意味が理解できない相澤。

「どうしたこの状況」

「とーくん相澤先生連れて来たよ」

「あんがとシズ。それじゃシズも走り込み行ってらっしゃい」

「はーい、いつてきます」

マイクのだらしない顔を見ながら状況を見守っていると空いているベッドを見つけそこに寝転がる相澤。

すると、手足と顔が拘束され動けなくなってしまった。

「おい、火埜どういうことだ」

「先生、イワさんが目の心配してましたよ。てなわけで、火埜式オーラ温熱マッサージ」

「ああああああああ、気持ちいい」

目に青い焰を纏ったタオルを載せられる。

個性の使用もあってかドライアイだけでなく疲れがひどくなりつつあった相澤の目は瞼越しとはいえとてつもなく気持ちいい感覚に襲われていた。

「先生方には僕の個性出力調整訓練に付き合ってもらいますから、よろしく願います。ヒーローなんだから自己管理大事ですよ」

ヒーロー活動も行っている教員を対象に火埜の個性出力調整訓練の名目で保存治療を行っているらしい。

そういえば、今日の根津は妙に毛並みも色艶も良かったなと思った

相澤の記憶はココで途切れた。

「あれ以来、個性使用中の瞬きの回数が極端に減った。おかげで今まで以上に個性を発揮できる」

「それだけは感謝してやる」

頻回に瞬きというインタバルが必要だった以前と違い、今のイレイザー・ヘッドであれば数分単位で瞬きすることなく戦闘を行える。

情報の食い違いという隙を見逃さず、抹消ヒーロー「イレイザー・ヘッド」の蹂躞劇は続く。

「先輩、明らかにオーバーペースだ。自分のスタイルじゃ無いにしても今回は生徒の安全優先。そして、先輩ほどのヒーローが警戒する何かがある」

「すっげーヒーロー!!相澤先生余裕じゃん」

「なるほど、ヒーローは一芸だけじゃ務まらない」と仰られていたがこう言うことだったのか」

上鳴、飯田の洩らした言葉に何も言えなかった13号。

それだけ、目の前で戦うイレイザー・ヘッドに注視してしまっていた、周りが見えていなかった証拠であった。

「お喋りは後にして皆で周囲の警戒。目標は出入口まで後退だよ」

とにかく、イレイザー・ヘッドに少しでも余裕を持たせるためには足枷である生徒達の無事の確保が最優先である。

周囲を警戒しつつ、13号は指示を出していった。

「おやおや、困りますね。ゲスト生徒に退場していただくにはまだ速いのですが」

あと少しで出入口にたどり着く。

その時、出入口を塞ぐように広大な黒い霧が発生し、中から黒霧と呼ばれていた存在が姿を現した。

「(いつの間?!?)」

以前の会議で転移系の個性であるとされた黒霧。

しかし、その転移速度は予想の遥か上をいていた。

13号も冷静に分析するが、とにかく生徒たちを少しでも敵から遠ざけるべきだと判断し、生徒達に指示を出そうとした時だった。

ーズブツナー

13号と生徒全員の両足が沈んだ。

踏ん張ろうとした足は空を踏み抜き、体勢が完全に崩れる。

「まあまあ、そう焦らず。どうか、ゆっくりとなさってください」「そして、これから始まるショーを、皆さんで楽しんでってください」

それは、13号にとって致命的なミスだった。

踏ん張りがきかず、崩されたバランス。

底無し沼に填まったかのように完全に沈んだ両足。

そして、相澤の視線から隠れる障害物のように扱われる自身。

その後ろから舞台上に役者が登場するかのようになり、黒霧は足元からスモークの如く黒い霧を吹き出して登場した。

「遅ればせながら名乗りを、我ら『ヴィラン連合』」

「我らは。現代社会に異を唱える者共」

「そんな我らがこの度催すショーの演目、それは」

「『^{オールマイト}平和の象徴の最期』という最高のコメディでございます」

一流のエンターテイナーがそうするように、黒霧は胸の前に片手を置き深々とお辞儀をするのだった。

「!?!」

その行動を察知できたのはどれ程の人数だったのだろうか。

13号はガンマンの早撃ちの如く、瞬時に黒霧へブラックホールを発生させた人差し指を向けてしまった。

「13号先生、『罨』だ!!」

火柱の静止する声が木霊する。

僅かに声に反応する13号、しかし声に反応できたのは個性を発動させてしまった後だった。

黒霧を殺すために向けられたその絶対の矛は、自身の背後に現れた黒い霧へと塵になって吸い込まれていった。

「・・・な、なん、で!?!」

気が付けば囚われていた足は解放され、重力に引かれるように前のめりに倒れていく13号。

「おっと、危ない危ない。どんな物質でも塵にして吸い込んでしまう個性『ブラックホール』。一見強力な個性に見えますが、『スーツの指先を開いて発動させる』。なんてわかりやすい挙動なんでしょう、それさえ解っていれば対処はさほど難しくないのでですよ。どうやら私の個性の方が幾分か強かったようですね」

スーツが開いた瞬間、指先に転移空間を作り、そして本人の背後に出口を作る。

黒霧はたったそれだけでブラックホール封じたのだ。

13号も咄嗟に個性の発動を止めたようだが、コスチュームの背面は消失し、そこから皮膚と肉が広範囲に削られた背中が覗く。

けして、致命傷とまではいかないだろう。

しかし、出血量からして放置しては重症化することは確かだ。

「さて、次は」

黒霧の靄がかかった頭部が生徒に向けられる。

恐らく、初めてだろう。『自身』に向けられる害意と殺意に多数が息を呑み込み、身を固く構える。

その時、黒霧へ飛び掛かろうと動く影があった。

「上等だ!!舐められっぱなしじゃ漢じゃねえ!!」

「13号先生から離れろ!」

全身を硬化させた切島が体当たりを、それに続くように尾白が尾を地面に叩きつけた反動を利用した跳び蹴りをそれぞれ黒霧に叩き込む。

「うお!」

「なんだこれ!」

一切二人に向くこと無く攻撃を躲す素振りすら見せない黒霧。

「おや?」

「切島、尾白!!」

しかし、二人の攻撃は当たるところか、黒霧を通り過ぎ黒霧の周りに展開された霧の中にズプズプと沼に落ちたかのように沈んでいった。

「ふふ、危ない危ない。流石は名門ヒーロー校、一年生とはいえ、優秀な人材がいるようですね」

表情の窺えない顔から、子供を誉める教師のような声色で切島と尾白の行動に称賛を示す黒霧。

「といっても、所詮は羽化すらしてない卵。丁度イレイザー・ヘッドへの牽制材料が欲しかったところでしたので。イレイザー・ヘッド、今私の個性を消したら、この二人の体は真つ二つになってしまいますがよろしいですか?」

「っ!?」

その言葉で、自分たちが枷人質になつてしまったことを察した二人は抜け出そうと足掻くが黒い霧はその体を離すことはない。

寧ろ、足掻いた分余計に沈んでいつてるように見えた。

黒霧は僅か、ほんの一瞬だけイレイザー・ヘッドに注意を向けた。

その時、黒霧の体には無数の手錠が拘束具のように取り付いていた。

「お久し振りです、黒霧さん」

そこには、手錠の鎖を顔面蒼白になりながら握り締め、訓練では見せたことの無い程に紫に煌めく焰を鎖を握り締めた右手に灯した火埴が立っていた。

「貴方は確か、あの時お会いした生徒さんですか」

「どうも、中々面白いジョークを言うもんですから体に力が入りませんよ」

拘束されながらも余裕を見せる黒霧。

拘束しながらも余裕が見れない火埴。

対照的な二人に周囲が見守っている。

徐々に火埴の息が明らかに荒くなっていく。

事情を知る13号は体を動かそうとするが思った以上に重症らしく体を動かすことが出来ないでいる。

「動かないでくださいよ、今の僕は加減が下手ですから」

黒霧から視線を外すこと無く、13号の元に辿り着く火埴。

「勝己、13号先生の外傷は」

名を呼ばれ油断無く動き火埴の側まで寄つてきた爆豪は13号の傷の状態を確認する。

「ヤベエな、骨見えてる箇所あるぞ。単純に活性させたら動くのに支障が出るぜ」

「麗日、13号先生の意識確認。一度傷口を綺麗にする」

「は、はい。大丈夫意識あるよ」

「轟、周囲警戒。僕が怒られるから何かあったらブツ放せ」

「任せろ」

「オレと耳郎も周囲警戒にまわるぞ」

「あんがと、障子。耳郎もよろしく」

「任せな」

「瀬呂と峰田と口田は二人の回収、多少強引でいいから引っこ抜け」

「おう、ご指名とあらば」

「はっはは、クラス内ヒエラルキーの変化だぜ」

「(頑張るよというジェスチャー)」

火埜の指示に動きまわる生徒達。

「貴方がリーダーですか」

その光景を興味深そうに見ながら黒霧が声をかける。

「いや、リーダーはそこでお前を見張ってくれてる騎士っぽい奴だよ」

「と言うことは参謀ですか？ 指示も的確ですし、良ければ我々の仲間になりませんか？」

「お褒めに預かり光栄ですな、先生だいたい熱いし痛いよ」

13号の背中に手を向ける火埜。

黒霧からは見えないが何かをしようとしているのは解った。

「う、ぐう。ああああああ!!」

突如上がる13号の悲鳴。

「おや、いたぶる御趣味があるのです？」

「いいからお前は黙ってろ」

手錠の上から自身の個性であるテープを巻いて拘束を強めている瀬呂。

近くには息が荒い尾白と切島が座っていた。

13号の悲鳴が消えると八百万が状態の確認を行っていた。

「OKですわ、後はリカバリーガールにお任せできそうですわ」

見える範囲を創造したガーゼで覆い、創造した軟膏を塗ることで雑菌の侵入を防ぎ僅かに残った熱傷を保護する八百万。

「やべえ、火埜。やっぱ外と連絡取れねえ」

「!?なるほど、それを確かめるのが本来の目的ですか」

上鳴が個性の性質を利用して外と連絡を取ろうとしたが一向に通じない。

恐らく電波妨害もしくは阻害系の個性持ちがチンピラの中に居るのだろう。

「飯田!!迷うな!!」

瞬間、爆豪の怒声が響く。

「すまん、皆」

黒霧の視界に写らない所でギアを上げていた飯田が助けを呼びに自身の最速で走り抜けていった。

「本当に素晴らしい、一部の生徒は既に半端なヒーローを越えていますね」

「嘗めんなや怪人クロモヤー。卵であってもこちとら将来有望な有精卵なんだよ」

「あれ、なんか火埜キャラがくない？」

「“あれ” 見てると吐き気スゴくて猫被ってる余裕がないんだよ。こっちが素だよ。文句は受け付けねえぞコラ」

「いや、ワイルドな火埜もウチは好きだぞ」

取り繕う余裕を失くし、精神をゴリゴリと削られている火埜は普段被っているネコが何匹も逃げ出していた。

「おや、お辛そうですね。でしたら少々楽にしてさしあげましょう」

気が抜けていた、そうとも取れる状況で敵がアクションを起こさないはずはなかった。

手錠の拘束具のほんの僅かな隙間を利用した部品転移をさせることで黒霧は拘束具から脱出していた。

瀬呂の拘束も無論意味を成さず、瀬呂のテープは隠し持っていたナイフで切り裂かれていた。

「お茶子ちゃん、13号先生と一緒に浮かんで!!」

「近くにいるお互いに掴め!!」

「本当に将来有望な有精卵達ですね」

緑谷が麗日に叫ぶ。

それとほぼ同時に轟が全員に聞こえるように叫ぶ。

状況把握能力ですら今まで標的にしてきたヒーローを越えていく。

その姿に既に脅威対象と認識を改めた黒霧は自身の出せる最高速

度で霧を払げると範囲に捕らえた生徒達を飛ばしたのだった。

「おや、こんなに取り零してしまおうとは」

「皆は何処!!」

黒霧の漏らした言葉に反応をした芦戸。

13号と共に浮かんで退避した麗日と範囲の外にいた障子と砂藤も油断無く黒霧を見据える。

その言葉に、確認できないはずの顔を愉快そうに歪めているような霧囲気が黒霧からした。

「皆様ならこの場の様々な場所に散らして貰いました」

「無論、其所にも敵はいるんですがね」

「まあ、火埜君だけは、あちら」に跳ばすよう指示がありましたので」

黒霧がそう言つて手を差し出す。

するとイレイザー・ヘッドが今戦っている広場の天井部分に黒い霧が現れ、其所から人が落ちてくる光景が見えた。

「ふざけんなよあのクソモヤ!!殺す気満々じゃねえか!!」

霧を抜けた其所はUSJで一番高い天井部分、火埜は重力に引かれ地面へと落ちていった。

「嘗めんなや!!」

落ち始めて数秒、文字通り「火の鳥」へと転化し羽ばたくことで地面への激突を免れた火埜。

目も前にはゴーグル越しでも解る不機嫌なイレイザー・ヘッド。

周囲には突然の事態で動きを止めたチンピラ。

その奥には死柄木と全身黒く染まった筋肉質な何か。

「弁明は後で聞こう」

「いや、オレ悪くねえし!!」

ネコを被ることを放棄し人の姿に戻った火埜に対して、危険地帯に来たことにお怒りのイレイザー・ヘッド。

「なんだなんだ、ガキが追加かよ」

チンピラの誰かの言葉に頭が冷えていく感覚を覚える火埜。

「死ねよガキ」

両手から硬質化した剣のような物質を生やしたチンピラが火埜に攻撃を仕掛ける。

所詮はガキだという考えが占められた思考。

そんなチンピラの目の前にはいつの間にか銃口が向けられていた。

「五月蠅いんだよこのドサンピン野郎が」

その言葉と共にトリガーを握り薄らと赤いオーラを発射させる火埜。

オーラの圧力で吹き飛ぶチンピラ。

周囲のチンピラも突然の出来事に驚いていた。

「OPERATION ARCO BALENO」

火埜が呟く。

『YES, MY MASTER』

突如、女性の声が響く。

すると、火埜の腰の周りに小型の匣型のサポートアイテムが展開され、かけていた眼鏡のレンズがオレンジ色に染まると耳にかかっていたフレームがヘッドホンのような形状に変化した。

『SYSTEMA C・A・I 起動』

火埜翔織、始めての命を懸けた戦闘が始まる。

火埜翔織、名は体を表すというが個性は文字通り「火の鳥」

焰のようなオーラに体を変換し鳥の姿となるその姿はまさに火の鳥だった。

いかなる損傷を受けようとも瞬時に再生し音速に近い速度で飛行可能。

更にそのオーラには複数の属性が見られるが、「燃え広がる」といった通常の炎の特性はなかった。

しかし、本人曰く「0か100しかない個性」らしい。

オーラに変換された体は物体を通過させてしまい、自身の心理状況次第では要救護者にすら熱による負傷を与えかねない。

そんな個性であるためか、彼の人生の大半は個性の制御に向けられていた。

その結果。

「なんだ、火炎放射器じゃねえか」

拳銃型のアイテムから放出される焰のようなオーラに吹き飛ばされた同胞を見て体が岩の様な鱗の様な何かに覆われたワニの様な外見の敵が姿を現した。

「その程度、オレ様の個性で防いでやるぜ」

そう言うと、敵は火埜目掛けて猛突進し始めた。

その様子を火埜だけでなく、プロであるイレイザー・ヘッドですら動こうとしなかった。

だが、2人の僅かな挙動に遠くから見ていた死柄木だけが気が付いた。

「(あのガキ、今“瞬時”にマガジンを変えやがった)」

突進してくる敵に慌てることなくいつの間にか握られていた青く輝くマガジンを装填すると敵に向けて引き金を引く火埜。

「はん、効かねえって言ってるんだろ」

両腕でガードした敵が突進してくるが突如変化が現れた。

ビキビキと音を立ててワニの様な敵の鱗が破壊されたのだ。

その隙を見逃さず、イレイザー・ヘッド渾身の蹴りが鱗の剥がれた腕に突き刺さり悲鳴を上げてのたうち回る敵。

「火埜、やりすぎんなよ」

「だから、最後の1撃は先生にお願いしますよ」

そんな呑気な会話が聞こえる中、死柄木の近くにいた敵が口から何かを引っ張りだしていた。

「生徒共々、くたばれヒーロー!!」

それは俗にいう「対戦車砲」だった。

敵は躊躇なく引き金を引くと轟音とともに砲弾が2人を襲う。

着弾したため、煙で何も見えないが確実に着弾していることから2人の悲惨な末路を想像する敵だった。

「おい、オレの生徒を甘く見るな」

煙の中からイレイザー・ヘッドの声と共に彼自慢の捕縛布が対戦車砲を撃った敵に巻き付き捕らえ、上空へと持ち上げられる敵。

煙の中心には匣から黄色く輝きを放つ薬莢をガトリング砲の様に連ねたレーンを銃型アイテムに装填した火埜が狙いを定めていた。

引き金が引かれ、銃口から銃弾が発射される。

全ての銃弾を浴びた敵は意識を失う、それと同時に上空に両腕を翼に変化させた火埜が飛び上がると、直に右手を人間の腕に戻し銃型アイテムで周囲を撃ち始めた。

次々に倒れていく同胞を嘲笑いながらも避ける敵が火埜に狙いを定める。

「降りてきたところを狙ってぶっ殺してやる」

銃弾は徐々に激しさを増していき、「俊足」の個性を持った敵も徐々に違和感を持ち始めた。

「(なんだ、弾丸の速さが不規則に早くなって来やが)」

「俊足」の個性を持った敵が付いてこれたのはそこまでだった。

銃弾は不規則に加速し、対応が遅れた敵から気絶させていき、煙が晴れる頃には立っていたのは死柄木と黒い筋肉質な何かだけだった。

「ああ、「コ」までやられると逆に冷静になるわ」

死柄木はそう言うのと広場に置かれていたであろう椅子に座りこむ。

「おい、〃脳無〃これ被つてろ」

黒い筋肉質な何か、脳無と呼ばれた存在は死柄木から渡された巨大な布を被ると大人しく座り込む。

「お前ら、何がしたいんだ」

油断なく周囲を警戒するイレイザー・ヘッド。

そんな彼の声に死柄木は悠然と構えてしゃべりだした。

「いや、今回は〃脳無〃の性能実験も兼ねてオールマイイト殺そうと思ってきたんだけどさ、生徒優秀過ぎるだろ。二流以下のヒーロー程度なら相手にならねえんじゃないか？」

「はっ、オレの生徒を嘗めるなよ」

「相澤先生、嬉しそうっすね」

何故か和やかに話している3人だが、一定の距離を保ち臨戦態勢にあるのは間違いない。

「ていうかお前、ヒノって言うんだっけ？チートが過ぎんじゃないか。お前のせいで今回のクソゲー以下だわ」

「いや、シガラキトムラさんでしたっけ、あんだけ事前に情報有れば対処するでしょ」

「だよなあ、いや生徒と思つて嘗め腐つてたわ」

「本当に何がしたいんだお前ら？」

たまらず声を掛けるイレイザー・ヘッド。

そんな彼の言葉に顎に手を当てると何やら考え込み始める死柄木。

「いやさ、生徒が凄すぎてグルつと思考が一周しちまつて冷静になつたわけよ。今回集めた適当なチンピラは相手にならなさそうだし、何か気が落ち着いたからオールマイイトが来るまで一問一答しようぜ」

「ふざけR「質問、死柄木君は何がしたいんですか」オイ、火焚!!」

「いや、相澤先生。相手が嘘かもしれないけど情報をくれるついでに、お前らからやりましょうよ」

「お前な」

「あと、正直もう限界つす。あの脳無って呼ばれてたやつ黒霧つてやつより気持ちわりいっす」

「・・・ち、ほら質問したんだから答えろ」

「なんだろう？この世界を終わらせたいみたいなのでもないし、オールマイト殺すのも実際「先生」が言うからでオレ自身は、いやオールマイトが持ってた「アレ」のせいでオレはこんな目に当てるんだし、アイツの全部を救ってるみたいなの顔が嫌いだし。取り合えず「個性」を失くして世界がどうなるか見てみたいなあ」

火埜の言葉に死柄木は本人すら自覚していなかった気持ちのスラスラと喋っていた。

イレイザー・ヘッドからしか見えていないが、雨の焰を目視不能なギリギリまで薄めた濃度を放射して鎮静の効果で死柄木を落ち着かせることで、今まで考えて来ないようにしていたありとあらゆることに目を向けさせることが目的であった。

そうすれば、無意識に情報を整理しようとして漏らしてくれるからであった。

「(こいつの後ろに誰か師匠のような奴がいるのか？それにどうやらオールマイト自身のことをこいつ自身は憎いと思ってるようなには感じられないな)」

「で、ヒノは今の世の中どう思ってるんだよ？」

「え、オレ？」

「イレイザー・ヘッドに聞いたところで対して面白い話が聴けるとは思ってたねえいゝ」

死柄木から指名され少し考え込む火埜。

「いや、正直クソだよね」

その一言に最も驚いたのは質問した死柄木本人だった。

「おいおいおいおい、ヒーローの卵が言ってる良い答えじゃないだろう？」
「だって、この「超常の力」を「個性」っていつて何かオブラートに包んでるけど、実際なんかの拍子で今の世界の均衡を崩せたらそれこそ数年前の混沌とした世界が戻ってくるでしょ」

イレイザー・ヘッドにとって火埜の発言は安易に予想できた。

教師の中では関係性が濃いほうに分類されるイレイザー・ヘッドは火埜の早熟な思考回路に何度か助けられてきた。

それこそ、ヒーローやってたら見るような人間の後ろ暗いモノも見せてしまったこともある。

だからこそ、火埜翔織という少年がヒーローを目指した理由が解らなかつた。

「人間なんて自分と違う何かを拒む、そんな性質を持って生まれてきた失敗作だよ。『個性』が無かつた時代は肌の色、思想、人種、才能、感性、一つでも異質なものがあればそれを悪と論じて拒絶して自分が正しいと信じて疑わない馬鹿な生き物でしょ?」

「なあ、火埜君よお。お前『こつち』来ねえ?」

死柄木は火埜との話のなかに何かを感じ取つたのか、突如として火埜を勧誘し始めた。

「お前の両親のことも先生から聞いている。そんな大衆に守る価値なんであるのか? 創成期にどれだけの屑ヒーローが生まれた? 今世間でイレイザー・ヘッドみたいにガチでヒーローしてる奴がどれだけいる? こんなクソみたいな世の中は一度ぶち壊した方がいいんじゃないか?」

死柄木と火埜。

全く似ていない筈の2人。

なのに、何故か話があつてしまった。

今の社会に対する不満、それを外に出しているか中にしまいこんでいるかの違いだが、イレイザー・ヘッドは2人が互いに共鳴しているように思えてしかたなかつた。

「僕と貴女死柄木の違いは周囲の人かな?」

「確かに、この世界はクソだし『勝手』に滅びるなら滅んでくれて構わない。だけど、僕はそんなクソみたいな世界でも一緒に居たいと思える人たちが出来た。その人たちに出会ってなければ君の手を喜んで握つてただろうね」

「まじかよ、折角親友になれると思つたのに」

「心配性な幼馴染みがいるからね」

広場に死柄木と火埜の笑い声が木霊する。

「やれ脳無」

死柄木の言葉に被ってた布を剥ぎ取り、火埴に豪腕から繰り出される右のストレートが打ち込まれた。

しかし、その豪腕は空を切る。

イレイザー・ヘッドの捕縛布にからめとられた火埴が宙をまいイレイザー・ヘッドの傍に着地する。

「火埴君は連れて帰る、先生に頼めばなんとかなるだろう」

「火埴、お前男にもモテるんだな」

その瞬間、イレイザー・ヘッドは今まで感じたことの無いだろ殺気を感じた。

その殺気は目の前の死柄木から発せられていた。

「オ、」

喉をかきむしり、殺意のこもった目でイレイザー・ヘッドを見る死柄木、その口から何やら言葉が漏れていた。

「オレは」

すると、死柄木の後ろに黒い霧が現れ、中からは黒霧が姿を表した。

「オレは『女』だーーーーー!!」

数秒程空気が死んだ。

錆びたブリキ人形のように首を火埴に向けるイレイザー・ヘッド。

「火埴」

「マジです、オーラ嘘つかない」

「いや、お前この間会ったのは男だったと」

「いやマジで背格好は似てますけど、よくよく見たら別人ですよ彼女」

怒りのあまり背筋が延びたことで確認できたが、死柄木の胸部には確かに膨らみがあった。

そして、そう言われれば声が子供っぽいというよりはハスキーな女性性にそれに聞こえてくる。

「確かに、この間は『弟』が来たけど今日は火埴君を見たかったからオレが来たんだよ」

「イレイザー・ヘッド、あなたレディに対して少し失礼ではないですか」

保護者のように死柄木の両肩に手を置く黒霧。

その姿から

「うちの娘この何処を見れば男に見えるんだコラア」

と聞こえてくるようであった。

心なしか感情がない筈の脳無からも抗議の視線が突き刺さってくるようだった。

蛙吹・緑谷・峰田の3人は広場に来ていた。

無傷とは言いがたいが、全員が負傷らしい負傷をしておらず、無事であった。

そんな彼らの目の前では。

「ふぎけんよ、この根暗コラア」

「お、落ち着いてください。葬」。今回はその姿で来ることが条件だったんですから」

「オレは普段はもつとちゃんとしてるわ」

黒霧に羽交締めにされながら罵倒をしている恐らく死柄木である少女。

「先生、流石にコレ」は謝りましょう」

「いや、お前以外で初見で解る奴なんていないだろう」

「峰田くんはどうですか？」

「……、アイツなら解りそうな気がする」

深く溜め息をつくイレイザー・ヘッドと火埜。

「胸か？お前ら男は所詮胸なのか？サラシで潰してるけど寄せて上げればDはいくんだぞコラア!!」

「お願いですから落ち着いてください」

「ほら、そこだけ謝るときましようよ。因みに僕は形に拘る美乳派です」

「葬」、身体的なことでも不快な思いをさせてしまい申し訳ない。後、オレはそういうの特に拘らない美脚派だから」

「そんなこと聞いてねえわ!!」

コントかよ、という心のツツコミが聞こえてきそうな状況が出来上がっていた。

―数分後―

ゼエハアと肩で息をする葬。

何故か対面に座らされ落ち着かせている緑谷。

命令を停止され止まってしまった脳無。

欲望カウンターで葬の正確な胸部装甲値を計算中の峰田。

家事得情報（流し場）のメモを渡す黒霧。

黒霧からメモを渡され、変わりに簡単ガッツリ系のおかずにもなるツマミレシピのメモを渡す火埜と蛙吹。

戦闘の雰囲気でなくなり目薬を注すイレイザー・ヘッド。

「私が来た!!」

出入口のドアを蹴破り颯爽と現れるNo.1ヒーロー。

「遅いよ!!」

「何してたんだコラア!!」(葬)

「今回はボクも擁護できません」(緑谷)

「(ポーー?)」(脳無)

「オイラでさえ今回は不味いと思う」(峰田)

「貴方教師の自覚あるんですか?」(黒霧)

「案件確定ですね」(火埜)

「ケロ、今回は流石にどうかと思うわ」(蛙吹)

「取り敢えず、教師の仕事嘗めんなよ」(イレイザー)

「ええ、私フルボッコ?というより君ら仲良くなりすぎじゃない?」

オールマイトの一言で互いに挨拶し、其々が離れた位置に着く。

「さてと、仕切り直しといきたいところだが」

葬が両手で拍手する形で音を出し仕切り直しの合図としたが。

「正直、生徒嘗めてた。優秀過ぎるだろ」

「目視範囲に生徒の増援を確認しました」

「だから」

葬がもう一度手を叩くと同時に黒霧がワープの触媒である黒い霧を広範囲に放出させる。

すると、中からふた回りほど小さく細い脳無が3体現れた。

「皆もコイツらで遊んでつてよ」

先ほど以上に恐怖を煽る笑みを浮かべた葬が“胸”を張ってあたかも指揮者のように立っていた。

「で、どういうことだコラア!!」

「オレも、詳しく聞きたいんだけど」

「トリーくんトリーくん、貴方が心配でダツシユで来た可愛い可愛い葉隠ちゃんにはなにか無いのかなカナカナカナ？」

「うお、葉隠の目から光が消えてる」

「んー、Chaosだね」

「取り敢えず、さつき説明したとおりだからそれで納得してよ勝己。轟君も詳しくと言われてもね、何か共通の悪口先が居たからってだけだし」

「火埜少年、それって私のことかい？」

「透は無事に終わったらハグで許して。切島君、有史以来男は女に負けるものだよハハハ」

葉隠が天空に向けて全力のガッツポーズをしてる姿を横目に、作戦タイムの許可が降りたので輪になり作戦会議中の雄英側。

「取り敢えず、あの『オールマイト用』と呼ばれていた奴は貴方オールマイトが担当してください」

イレイザー・ヘッド主導で始まった作戦会議。

「うむ、遅れた分は挽回させてもらおうよ」

「マジで本当に頼みますよ。結果次第では弁護しますから」

次いで生徒達を見る。

涙目の峰田を含め全員が覚悟を決めた良い目をしていた。

「他の3体をオレ達で相手するが作戦は何かあるか」

対面にて作戦会議中のオールマイト達を観察する葬と黒霧。

「黒霧さん、どうなると思うっよ？」

「素が出てきてますよ葬。そうですね、十中八九我々が負けるでしょう」

なんの気概もなく自分達の敗退を告げる黒霧。

質問した葬も同意するように頷いていた。

「まず、生徒達の成長速度がこちらの予想を遥かに上回っています。散らした生徒達も今の段階で誰も負けておりませんし、今ここにいる生徒達も市井に溢れる2流紛い物以外なら相性次第では完封できるでしょう」

「だよね、オールマイトも何か疲れてはいるけど、弱体化してるようには見えないしね」

「確かに、全盛期に比べて細く見えますがあの筋肉を維持する必要性が無いと判断されているのであれば、あれが今の彼のベストな状態なのでしょう」

「ああーあ、今回の収穫は火埜君だけか」

「葬さーりーん」

作戦会議が終了したのか、手を振り意識を自分達に向ける火埜。

これから命のやり取りをするのになんとも言えない緊張感の無さ。

「やっぱ火埜君、欲しいわあ」

「それじゃ、フェアに始まりはこの弾丸が地面に落ちたらにしよう」

火埜のサポートアイテムである匣から弾丸を一つ取り出すと上空へと投げ飛ばす。

脳無達も弾丸を目で追い、地面に触れるその瞬間まで動く気配はない。

そして、弾丸が地面に落ちてキンツという金属特有の音を鳴らした。

その瞬間。

最初から出ていた巨漢の脳無と広場の中心でがっしりと組み合うオールマイト。

がっしりと組み合った脳無とオールマイトの足元を凍り付かせ固定する轟。

捕縛布で高速で向かった3体の細身の脳無をけん制し動きを止めさせたレイザー・ヘッド。

爆豪に捕縛布で固定され上空へと涙目で連れていかれる峰田といつも以上の速度で飛ぶ爆豪。

爆豪の背に張り付き共に上空へと飛ぶ蛙吹。

両腕を翼に変化させ上空へ飛び立つ火埜とその背中に抱き着く葉隠。

火埜の足に捕まり空へ向かう緑谷と切島。

その構図が瞬時に出来上がった。

「まず、あの細身の3体ですが個性を一つしか持ち合わせていません」
個性の有無をオーラという不可視の物で判断できる火埜の発言。

相手の情報を如何にして把握するかが重要である局面においてこれ程助かる存在はいないだろう。

「3体とも両腕が特に色が濃かったので個性は両腕が起点になる発動型ではないかと考えられます」

「というか、翔織気分はどうなんだ」

「慣れた、というか大空の焰で精神安定させてる」

「〃調和〃による精神安定かよ」

「おしやべりは後にしろ爆豪、それで火埜作戦は」

「まずは……」

「対オールマイト用というアレの動きをオールマイトが組み付く形で止めてもらいます」

がちちりと組み合っていた巨漢の脳無とオールマイト。

脳無が弾きそこから殴り合いの応酬が始まった。

しかし。

「〃対オールマイト〃というくらいですから同等の筋力を持つていると考えられます」

「攻撃の余波だけで僕らは吹き飛ばされかねないので轟君には足元を凍らせ続けて動きを拘束してもらいます」

凍り付かせた端から氷を砕いていく2人。

その都度、轟が足元を凍らせていくが足場をしっかりと固めているオールマイトとただ踏ん張るだけの脳無では次第に力の入り方に差が出て来た。

「勝己と峰田君には3体の足止めをお願いします、峰田君の個性なら可能ですよね」

「おい、解ってんな葡萄頭」

「畜生、人の笑顔があんなに怖いなんてオイラ知らなかったぜ」

「受ける、オイラの八つ当たり。【フレックシユグレブロックシールド腕ぎたて葡萄房完熟粘弾】」

放課後訓練で提案された峰田強化案はモギモギの腕ぎり取れる回

数の増加だった。

峰田以外にはくっついて離れないという特性は敵の無効化と捕縛を同時に行える優良個性なのだが、限界を迎えると峰田曰く

「ミチミチいって剥がれるような感じになるんだよ」
とのことだった。

ならば、限界のその先に行こうということで、火埜による晴の焰照射による強制無限モギモギが始まったのだった。

因みに同様の地獄を味わった男がいるのだが、今回は省く。

その結果、今までの5倍の量を挽ぎれるようになった峰田のモギモギ爆弾が上空から3体の脳無に降り注ぐ。

性質がわからないにも関わらず、手振るってガードしようとするためくっ付き、そのモギモギに新たなモギモギがくっつくことで簡易的な拘束具になっていった。

峰田の技が決まり、火埜の背から体だけ乗り出し腕を透明化する葉隠。

放課後訓練での成果が著しい彼女は部分透明化のみならず、自身を利用しての光の屈折率をいじれるようになっていた。

「いっくよ、葉隠フラッシュ!!」

腕が拘束された3体の脳無の目と思われる器官への閃光の照射。

どうやら視力を頼りにしていたらしくその場で目を抑え動きを止めてしまう。

そして、上空から3人分の影が襲い掛かる。

「OPERATION OF A」

『YES, MY DONNA。ターゲットロック』

地面に降り立ち右脚を後ろに引く緑谷。

上空で発動させたサポートシステムも活用する。

『出力3%、脚部サポートアイテム硬質化確認』

「ストライクシュート」

蹴りつけられた脳無は拘束され逃げ場がなくすべての蹴りの威力をその身に受け沈黙。

「(もつと、もつともつともつともつともつともつともつともつと」固

めろ”」

緑谷から僅かに遅れ切島も飛び降りた。

空中で自身を硬化していく。

もつともつともつともつと、と心の底から願う切島。

放課後訓練では尾白や砂藤、障子に緑谷といった格闘戦が主流となるクラスメートを相手に設定範囲から外に出ないで硬化し続ける訓練を行ってきた。

今ではわずか数秒、更に動かなければという条件になるがパワーローダーからお墨付きが出るほどに硬度をあげられるようになっていた。

「武麗吼幡魔!!」
フレイクハンマー

最高硬度まで高まった切島のラリアットをむき出しの脳に受けた2体目の脳無。

頭を押さえながら耳障りな悲鳴を上げて沈黙した。

爆豪の背から跳躍した蛙吹は自身の舌で最後の脳無を縛り上げる。

実は放課後訓練では教える側に回ることが多い蛙吹。

自身の個性に対する理解度で言えばクラスで一番の彼女。

家族思いで友達想いな彼女は元来イジメの対象になりやすい異形型の個性を発現した後も、一時期避けられることこそあったがそれでも周りの友達と家族が支えとなり、ヒーローを志す中で個性の理解度を深めていった。

そんな彼女だからこそ、個性に対する思考能力はクラスで一番と言われ自分の個性を用いて実演する形で教えるのでアホの子達からも人気だった。

自身の舌で捕縛した脳無、舌の収縮を利用して蛙の脚力で蹴りつける。

「フロップピースタンブ」

逃げ場のない衝撃が脳無を駆け巡り意識を奪い取った。

そんな姿を上空にて確認した火埜が叫ぶ。

「イレイザー・ヘッド捕縛してください、峰田は捕縛布をモギモギで留めろ」

そして、自身が纏い翼となっているオーラが真っ白に変化する。

「透、寒いなら勝己のどこ移れ」

「トリー君が温かいから大丈夫」

「たく、強情なお姫様だッ」

その姿は獲物を刈取る隼のようであった。

急降下と共に火埜の周囲にダイヤモンドダストが舞う。

『オーラ熱量マイナス値ヲ測定、ドウゾ』

そして急降下のまま地面へと突き刺さる様に火埜の蹴りがさく裂した。

「オーバード・ゼロ」

火埜を中心に吹雪が巻き起こり瞬時に凍結していく広場。

爆豪に葉隠以外はしがみ付き、イレイザー・ヘッドも捕縛布を利用して空中に留まる。

吹雪が晴れるとそこには分厚い氷に閉ざされた3体の脳無が存在していた。

「おい、葉隠さつさと降りろ。お前らもだ」

爆豪の声で動きを止めていた全員の意識が覚醒し、宙を飛べる火埜と爆豪がオールマイトの下に駆け付けるように飛んで行った。

「早く来てくれ、もう限界だ」

今回の作戦で最も疲労を強いられたのは轟だった。

人外の2人が振るう暴力という台風のすぐ近くで2人を足だけ凍らせ続ける。

砕かれては凍らせまた砕かれては凍らせ、轟の右側は所々凍り付いていた。

「(意識が、飛、ぶ)」

僅かに飛ぶ意識、しかしそれは致命的なミスであった。

砕かれた氷を再び凍らせるのに出来てしまったタイムラグ。

「轟少年!!」

轟を信じていたからこそ再び凍り付くオールマイトの両脚。

反対に機械的に判断するからこそ凍り付くことを逃れた脳無。

形成は脳無に有利となり移動しながら全方面から殴りつける脳無

それをガードしてやり過ぎそうとするオールマイト。
轟の思考に絶望と失望が現れた時だった。

「OPERATION EXPLOSION」

『YES, Sir』

『標的ヲ確認、非殺傷熱量設定、発射スタンバイ』

「悪いオールマイト、クソ熱いぜ」

「ヒート・エア・エクスプロージョン」

手榴弾を模した籠手から発射されるのは爆発ではなくそれを制御された熱風だった。

勢いはすさまじく、脳無は耐えるのに精いっぱいのものであった。

「轟君ゴメン、遅くなった」

轟の傍に火柱が降り立つと大空の焰でコーティングした晴の焰を轟に当て氷を溶かしていく。

「悪い、助かった」

「あとはオールマイトだけですな」

熱風が止み脳無が意識をオールマイトに向ける。

しかし、オールマイトはそこにはいなかった。

「敵諸君、我々ヒーローは常に100%の意気込みで活動している。君らの敗因は唯一つ、彼らを生徒と侮ったことだ」

その声は、脳無の上から聞こえた。

オールマイトは上空へと飛びあがると降下の勢いも利用して脳無へと蹴りを決める。

脳無は地面にめり込むがそれに留まることなくオールマイトの連撃が脳無を沈めていく。

地面にめり込んだ脳無の足を持ち引つ張り出し空中に放り投げると再びのラッシュ。

「この一撃一撃が100%否120%の私の本気」

「そして、こんな言葉を知っているかい、更に向こうへ Plus Ultra!!」

その言葉と共にくり出されたパンチは暴風となり脳無を吹き飛ばし、USJの天井を突き破ってしまった。

後に残ったのは天高く拳を突き上げるN.O. 1ヒーローの雄姿だ
けであった。

後に「雄英USJ事件」と呼ばれることになる敵の雄英施設への襲撃事件。

周到に練られたその計画は瓦礫のごとく崩壊するのだった。大半の敵は引率を担当した教師陣の奮闘と、当時まだ1年生だった彼らによって撃退されることになったのだった。

第二次超常暗黒期の開始とも言われるこの事件は後に伝説となる多くのヒーロー達の原点となり、若きヒーロー候補達が目指すべき指針として今なお語り継がれ続けている。

そう、これは。

「アホなモノローグ語ってないで無心で正座してろ火埜」

下阿保

捕縛布でガツチリ固められた上に瀬呂のテープでコーティングされ、背中葉隠、正面芦戸、右側耳郎、左側八百万にガツチリ抱き付かれ逃げ出すことのできない火埜に軽めの拳骨を落とす相澤。

「いや、でも今回オレ悪くない」

「お前だったなら、あの時13号のところまで翔んで逃げれたろ。なのに戦闘に参加した点は嚴重注意物だ」

「その原因の1つは撃沈してますしね」

すつと顔を芦戸の頭から横にそらすように前を見る。

そこには。

「おい、俊典。お前教師嘗めてるだろ、じゃなきやただのバカだよなおい」

「ゴフツ、お、お師匠出会い頭の鳩尾への高速頭突きは勘弁してくださいと」

「お前弁明できる立場か、ああん!!」

小柄の老人の登場と共に鳩尾に綺麗に決まった頭突きとトラウマの再発で全身がガクブルしていた。

「既にグラントリノを呼んでいたとは。兎に角、お前らは絶対に動き回るな、大人しくしてろ、あと火埜はいい加減に大空と雨の焰を解け」
「解いたら発狂するかもしれないので嫌です」

「そうならないための処置だ。ミッドナイト先輩がここにいらしている時点でお前なら察するもんだと思っていたがな。しかし、相変わらざるらしいお前のその甘えたがりな生粋の弟属性とやらは」

「ネムねえだろそれ喋ったの!! 幼少期にそういう風になれと育てた張本人がなに言ってくれて」

「トリーうるさい」

一向に精神安定を解こうとしない火埜の口を頭部を思いきり抱き締めることで塞ぐ芦戸。

意識してなのか、胸に抱え込むように頭を抱き抱えられた火埜の顔は芦戸の歳不相応に育ってきた胸に埋められる形になっていた。

精神が落ち着いているからか視覚・嗅覚・触覚にて芦戸の身体を認識し、背中の葉隠と右腕を挟み込んだ耳郎に左腕を挟み込んで八百万の心音を感じ取ったことで状況を正確に理解したのか顔を真っ赤に染めて火埜は気絶した。

「ありや? 気絶しちゃった?」

「まあ、コイツはそうあれと育てられたからな。素が出てる状態で、可愛い”と思ってる女子に抱き付かれたらこうなるわな」

「二”そんな、可愛いだなんて(照)二三」

普段から緑谷とは別ベクトルで心配の種の幼馴染みへの仕返しにと情報を小出しにしていく爆豪。

完全に自分の事棚に上げているが、火埜が起きた時の復讐が恐いのです途中で留めた。

「フゴー、フゴフゴフゴフゴフグー!!」

「峰田の奴、全身拘束されてんのに全然ブレねえなあ」

「あの失血量だと動いたら貧血で倒れかねないからって、興奮しないようにあんな感じで拘束されてるんだよな」

「峰田ちゃん、今回は頭から血が出るまで頑張ってくれたけどやっぱり最低ね」

「色欲の化身故に」

『コイツ本当ニ大丈夫ナノカ?』

火埜と峰田。

片や上半身を丁寧に捕縛され、逃げ出せないようにと有志による肉体接触で良い思いしながらユルユルと拘束されている。

オーラを放出して逃げ出そうと思えば逃げられるはずなのだが、火埜性格上、仲間に害を与えることは無いだろうと判断したイレイザー・ヘッドによる処置であった。

片や敵が来ないことを確認したと同時に女子の膝枕（当初は胸枕）を希望し、全身ガツチガチに捕縛された上で地面に転がされてその上で更に瀬呂のテープ（クラス内通称「瀬呂テープ」）で地面に完全拘束されている峰田。

ダークシャドーにすら心配されているという意味を深く考えて欲しいところだ。

流星にそろそろいい加減にしとけ、という意味も多分に籠められているそちらの方向で普段から頭を悩まされている担任相澤消太の判断だった。

後日、ヒーローとしてイレイザー・ヘッドとして判断するなら拘束後に去勢だなど真顔で言われた峰田は数時間ではあったが態度を改め、非常に紳士的に振る舞うのだった。

そうとは知らず現在の拘束された2人の状態は、誰が見ても日頃の行いが反映され、還ってきている光景だった。

そんな、いつもの日常の光景に全員の気が緩んでいた。

「それにしても、トリーくんいつもよりなんだか温いね」

「…おい、全員離れる」

葉隠の言葉に何か気が付いた爆豪が声を上げた。

そして、反射的に火埜の傍にいた全員が離れる。

次の瞬間、火埜を中心に人体発火のように膨大な熱量を持ってオーラが燃え盛った。

まるで死に瀕した不死鳥が転生するかのように燃え盛る光景に生徒だけでなく教員ですら動けずにいる中、ミッドナイトだけが悠然とオーラの前に歩み寄っていく。

ミッドナイトがオーラに手を伸ばすと同時にオーラが霧散し火埜の姿が消えていた。

「え、火埜は？」

「おい、まさか」

「安心なさい、あの子ならここにいるから」

パニツクになりそうな状況で燃えなかつたコスチュームを漁るミッドナイト。

「全く、オーラの燃焼限界越えなんて久しぶりじゃない。頑張ったのね翔織」

その言葉と共にコスチュームの中から真つ白なバスケットボール大の毛玉を取り出す。

「「「「え、ナニコレ？」」」」」

「この真つ白でフワモコなおっきなヒヨコちゃんが翔織よ」

「「「「はあ!？」」」」

「(キヨロキヨロ) ピイ?」

ズキューーーーーーン。

突如そんな音が聞こえたかのように胸を抑える女性陣。

「おうおうおう、久しぶりじゃねえか。この姿」

「ピッピイ、ピッピ」

爆豪は慣れた手つきでミッドナイトに抱かれるフワモコなヒヨコを撫でる。

「うわあ、ヒヨコモードのとーくんだあ。かあいいいよ」

「ピイ」

緑谷も頬を染めて愛くるしいその珍妙な生物を撫でまわしている。

「ミッドナイト先生、説明プリーズ」

飯田によって呼ばれた来た戦闘の出来る教員の中で校長が代表して声を掛けてきた。

声をかけられたミッドナイトは別の意味でみてはいけない顔をしていた。

「んん、失礼。火埜君の個性にはオーラの燃焼限界というものが存在するみたいで、オーラを限界まで消費すると個性因子が勝手に最もオーラを使用しない姿に体を変えてしまっんです」

「それが、あの姿、かい」

校長が目線を動かすと。

「おおおお、これが火埜か？」

「ピイ？」

上鳴に持ち上げられ目線をがつつり合わせた状態で上鳴の真似をして頭を傾けるヒヨコトリー。

「コラ上鳴、乱暴に扱うな」

そう言われ耳郎に強奪されるヒヨコトリー。

「ピイピッ、ピイピイ」

何やら嬉しそうに鳴き声を上げる姿に抱っこしている耳郎も含め全員骨抜きになっていた。

「耳郎さん、次は私に」

「いやいや、この透ちやんに」

「またまた、三奈ちゃんが代わるよ」

「みんな邪念が凄いから私が代わるよ」

「ケロケロ、響香ちゃん私に代わって」

そんな最中、リレーの如く代わる代わる生徒達に抱き締められ撫でられている上機嫌なヒヨコトリー。

「いつ戻るのコレ」

「最短は2日でしたね、今日はイワさんに連絡とって迎えに来てもらいましょう。あの状態のあの子頭がとてもゆるいので」

「すでに 来て てる わ よう、 ヒーヒーヒーヒー
ハーーーーー」

「ピイ!!」

イワさんの声に反応して良く飛べるなそれでというサイズの翼をパタパタさせて飛んでいくヒヨコトリー。

「んもう、心配したつちやぶる。大丈夫キャンデイズ」

ヒヨコトリーを髪の毛の中に収納すると生徒のケアに回るあたり流石プロヒーローである。

「にしても、大胆なキャンデイズ」

「どうゆうことですか？」

全員の状態を確認して自身の個性は必要ないと判断したイワさん

に言われたなぞの言葉。

「だつとうえ、ヒヨコトリー状態だった頃にされたことはトリーボーイに戻ってもちゃんと記憶として残っちゃぶる」

「「えっ?」」

「だから、さつきキャンデイガール達が胸元で抱き締めてたその感触も、口田ボーイがプロの手並みで撫で回してた感触も全部ぜんぶゼーゼーゼーゼーんぶ覚えちゃぶるよ」

数秒後、施設内に木霊する絶叫。

事情を理解していた幼馴染み2人は遠巻きに笑っているだけだった。

こうして、雄英襲撃事件は一旦幕引きとなるのだった。

「いや、事情聴取するからね。まだ帰らないでね」

塚内警部のそんな声が何故かしつかりと聞こえたのだった。

「ただいま」

とあるバーに少女の声が木霊する。

「姉ちゃんお帰り。黒霧、姉ちゃんに傷一つもついてないよな」

「ええ、身体的には問題ないはずです」

「ああん、どういうことだオイ」

葬は戻ってきたからと体中に着けていた手を外しては投げ捨て、服の中でサラシを外し一息つく。

黒霧に出された紅茶を飲みながら物思いに耽っている葬。

そんな彼女の思考、その大半を占めているのは最後に見た真っ白で綺麗な翼とその持ち主のほんの一瞬だけ見ることが出来た黒く淀んだ瞳だった。

「あ、ねえ先生」

すると突如、電源の落ちたブラウン管テレビに話をふる葬。

ブラウン管テレビにノイズがはしり、数秒後。

そこには、顔は確認できないが男性と解る体つきをした存在が映し出されていた。

『お帰り、葬。何だかとっても機嫌がいいじゃないか?』

「ふふふ、ねえ先生」

『なんだい』

「わたしね、欲しいモノが出来たの」

『へえ、弟以外に興味を示さない君が欲しいモノだなんて珍しいね』

2人はまるで家族のように、なんの含みもなく会話を楽しんでいた。

「ちよつと待って、姉ちゃん好きな奴なんかできたの!!」

その話に手を付け終えた弔が割り込んできた。

「そうだよ、あの子なら弔とも仲良くなれそうだし」

「いったいどんな奴なんだよ」

「あんなに歪で心の奥底を凍らせえた存在なんて初めてだったの」

『いいね、とんでもなく歪んでいて僕の好みそうじゃないか。それは一体誰なんだい』

「火埜翔織君だよ先生」

『へえ、〃ヒノトオリ〃か』

「な、なな、なんなんじゃこりゃー！？」
キヤマバツカ事務所訓練所に響く少女の悲鳴。

話は襲撃事件の3日後、火埜が顔を真っ赤に染めて通学した日まで遡る。

「お、火埜おはよう。もうヒヨコじゃないんだな」

「中々に可愛かったなトリーちゃんよ」

「なあっはははははは」

「(上鳴に峰田め調子にのりやがって)」

休み時間の度にヒヨコトリーの画像を見せにくる上鳴と峰田。

悪意増々なのは誰しもが感じ取っているのだが、実際にA組では皆が待受にするなどプチブームになっていた。

「いや、オレらも久々だったから思わず撮っちまったぜ」

爆豪も止めるわけでなく面白そうに加わるため、上鳴と峰田を調子にのせる原因になっていた。

なお、ヒヨコトリーの存在を知っていた両親にも写真をシェアした爆豪のお財布事情はとて余裕が出来たことを明記しておく。

「お前ら、いい加減に席に着け。それから火埜教員内でも情報共有が必要だから写真は削除しないぞ」

授業のため現れた相澤からも裏か透けて見える言い訳を聞かされた火埜。

机に頭を強く打ち付けて絶望を味わっていた。

「トリー君、ごめんね。でも本当に可愛いよ?」

「あたしも。ごめんとしか言えないけど、朝“コレ”見ないと起きられなくなってきたよ」

「誠に申し訳ありません。しかし、許していただけなのであればせめて2カ月この待受にさせてくださいまし」

「トリーには世話になってるけどさ、あたしもお願いしたいな」

「火埜君、引子さんからも毎日のお弁当と交換で1カ月許して欲しいって言われてるの」

「ケロケロ、うちの家族もヒヨコちゃんのファンなの。だから、せめて削除だけは許してちょうだい」

「ほら、皆こう言ってるんだから。男の子なら覚悟しなよトーくん」
女子からの上目懇願という兵器まで持ち出された火埜。

仕方なく本当に仕方なく嫌々ながら条件付きで保存を許したのだった。

でも、それで腹の虫が治まるような良い子ではない火埜翔織。

「(報復じゃ、復讐じゃあ、目に物見せちやるけえなあ)」

死柄木葬が好みと言った濁った目をしながら、クケケケケケケケとそれはそれは不気味に笑いながらに帰宅する火埜が目撃されたのはそんな日の放課後だった。

その日以降、普段通りに過ごしながら峰田と上鳴からの冷やかしも右から左に受け流しつつ、いつもの笑顔で過ごしていた火埜。

そんな火埜に少しだけ違和感を覚える担任の相澤だったが、後にはこの時に行動を起こさなかったことを文字通り死ぬ気で後悔することになるのであったが、この時の彼が知るはずもなかった。

そして週末、キャマバツカ事務所訓練所には1A生徒フルメンバーに加え監視役として相澤とプレゼント・マイクがいた。

「今回は戦闘に長けたプロというのがどれだけ凄いのか皆に体験してもらおうと思ってね。イワさんと1A全員それに相澤先生とマイク先生にも参加してもらおう運びになりました」

まだ戦闘許可が出されていない火埜と轟以外の面子が動きやすい服装に着替え、訓練所に集合していた。

「Hey!!それじゃまず男共から逝ってこい」
何故か準備されていた解説ブースにマイクが座り解説を始めていた。

「それじゃキャンディボーズ、ヴァターシもちよつと本気出しちやぶるから、遠慮無く掛かってらっしゃい」

そう言うといワさんは独特の構えを取り出した。

「あ、あれは!?!」

「知ってるのか翔織」

「あれは、イワさんが自身のスタイルに合わせて作り上げたニュー
キヤマー拳法44のエステ奥義の1つ『無駄毛処理拳』の構え」

「なに!? 全身の無駄毛を綺麗に処理するかの如く滑らかな腕の動きで
相手に突きを食らわすあの『無駄毛処理拳』だと」

「²マイクも^人火^と埜も楽しそうだな」

「いじけるなよお、轟君」

フィールド場外で行われている茶番劇に全員が気を取られた瞬間
だった。

「すうきい、ありやああああああ。エンポリオーーーーーー」『女』
ホルモン流星群」

その声が訓練所にひびくのと同時にイワさんの両手の指が尖り、
フィールドにいた男全員に尖った指を打ち込んでいく。

「え、特に何もおきなあああああああ」

指された尻尾を撫でながら尾白が自分の身体に異変を探す。

数秒立たずに、その声が悲鳴に変わった。

指された全員の身体から「メキヤ、ベキョ、ブアキヤバキ」という
骨格を無理矢理変える音が響き渡る。

「普段なら痛み無く終わらせるっちゃぶるけど、今回はオイタが過ぎ
たわね! 連帯責任よ」

「あが、ほ、骨が軋む」

「痛い痛いイタイ」

「あれ、声が高くなってて」

「「「「いってえーーーーー!!」」」」

数十秒後。

「な、なな、なんなんじゃこりゃーーーーー!?」

上鳴によく似た少女の叫びが訓練所に響いた。

「あ、あんた上鳴か?」

耳郎が指さす少女。

元から愛らしい顔つきをしていたためか顔自体には変化はないが、
髪が伸び、バストとヒップも大きく膨らみ、男の劣情を滾らせるボー
イッシュな美少女がそこにいた。

「ああ、やつぱりこうなったか」

ボサボサの髪が潤いをもち腰まで伸びた黒髪、黄金律を思わせる崇めるレベルの美ボディ。

野暮ったかった服装でも隠せない色気を放つ相澤（女）。

「へいへいへい、やつぱりおばさん似なんだね勝己は」

子供がイタズラに成功した時のような笑顔を張り付けた火埜が女座りしている爆豪の肩を叩く。

「トリーてめえ」

「ぶは、また一段と女の子らしい体つきになったね。そうなるも本当におばさんのクローンみたい」

「ぐあ、乳が重い。ば、母さんにそっくりとか言うな!!」

「あつははは、皆ザマアみるケケケケケケケケケ」

実は火埜、ヒヨコ写真が消えないのであれば男全員捲き込んだれと今回の特訓を利用して全員の女子化企画をマイクとイワさん更にはクラスの女子に相談。

最初こそ難色を示すものもいたが、色欲魔神の鎮魂も兼ねていることが知れ渡るととたんに協力的になった。

「何自分は関係ナツシブルなポジションだと思ってるのかしら」

「え?」

「轟ボーイにひざしボーイもいくわよエンポリオー女ホルモン」

「巻添え反たあああああああああ!?!」

そんなことがあってから数分後。

「おお、火埜はカツコイイ系になるんだ」

「くつ、ヒヨコに次ぐ醜態を晒すことになるなんて」

女子による着せかえ人形劇が続く中、馴れている面子から着替え始めており、かつて男だった面影は見えなくなっていた。

当然、下着も変えられている。

「.....、姉さんそっくりだオレ」

鏡の前で実姉と瓜二つの姿となった轟。

葉隠コーデにより白いワイシャツの上からサマーセーターを羽織り、梅雨の時期にも寒くないロングスカートという姿は轟の記憶の中

にいる姉とそっくりだった。

「マイク先生とつても美人さんねケロケロ」

「かぁー、油断してたあ」

その場にいた生物学上「男」に分類される存在が全員女になった訓練所。

そんな中、1人隅っこにていじけている少女がいた。

「なんでだよお」

少女はその大粒の瞳に涙を溜め、世の理不尽を呪うかのように怨念が籠った声を静かに吐き出していた。

「なんでオイラだけ変わらねえんだよおおおおおお!!」

少女もとい峰田（女）は見える範囲で外見に変化がなかった。

母親にそっくりに成った口田と爆豪、もともとから中性よりの顔付きだった上鳴という例外もいたが、その3人ですら誰が見ても女の子な体型になっていた。

しかし、峰田のみパツと見変化が無かった。

「峰田ガール、ちゃんと〃無くなってる〃ちゃぶるから変化がなかった訳ではナツシングよ?」

「確かにオイラのLittle峰田が居なくなってるけど、周りが変わりすぎだろ!!てかお前ら誰だよ!!」

峰田が勢いに任せて指差した方には嘗ての面影を無くし、美少女にしか見えないクラスメートたちがいた。

「しかし、女性陣は普段峰田君の視線をこう感じていたのか」

それ程育っていない胸部装甲、しかし見事な美脚を黒のハイソックスで被い、黒いシックなワンピースを着た眼鏡をかけたザ・委員長な少女（飯田）が落ち着かない感じで休憩ように用意された椅子に座っていた。

「しかし、飯田が女子になるとこうなるのか。あんなにムキムキだったのに全体的に細身なんだな」

ぷっくり膨らんだ唇、世の女性も羨みそうな破壊力のバデェ。

大人になりかけの時期特有の色気を放つブカブカのTシャツにホットパンツという出で立ちの少女（砂藤）が持参したクツキーやら

フィナンシエやらを机に並べながら感想をのべていた。

「さつきイワさんに聞いたんだけど、個性因子の影響で姿が激変しちゃうことの方が普通なんだって」

深窓の令嬢を思わせる儂さを携えつつ、自分の個性で持ち上がってしまったロングスカートを必死になつて押さえる少女（尾白）。

「しかし、皆化けたなあ。正体知らなかったら尚良かったのに」

女性にしては長身、しかも出るところは確り出ている健康的な美少女（瀬呂）の言葉に何人かの少女（元男）が首を縦にふっていた。

「ひぎつさん、やっぱ女化すると若干静かになるんすね」

「イワさんの教育の賜物よ、自分が女であることに違和感がなくなつていく恐怖とその恐怖すらなくなる瞬間。あんな経験させられたら必然こうなるわ」

全体的に細身、どちらかと言うとカツコイイと評価されそうな美少女（火埜）が休憩用の飲み物（緑茶、ほうじ茶）の準備をする傍ら。

普段着として着てきたジャケットの前を全て開け、中のワイシャツも第3ボタンまで外した八百万を越える胸部装甲を窮屈そうにしながら完全に女性と化した元男プレゼント・マイク）が火埜の手伝いをしていた。

「山田、ボタン外すなら着替えてこい」

その後ろから黒のパーティードレス（スリットが太股まである）を着て白いカーデイガンを肩に羽織った色気が凄い女性（相澤）がやって来た。

「何よイレイザー、別に女子だけなんだから良いでしょ?」

「いや、あそこの阿保がな」

そう言つて相澤が指差した先には床でビクンビクンと痙攣している峰田がいた。

「ああ、なんだこれ?新しい快感?なんだかアタシ開けてはダメな扉を全力で開けてしまいそう!!」

傍目に見ても気持ち悪い状態に陥っていた。

「オツケー、着替えてくるわ」

なお、帰宅時には全員男に戻れたが、数人は感性が引つ張られてい

た。

そして、以降峰田のエロスが幾分か緩和され似非紳士のようなキララとして1週間が過ぎたのだった。

「そんじやま、今年も予定どおり開催するのさ」

物語は新たな幕を上げる。

全員女の子事件後日、教室では何やら百合の香が漂っていた。

「トリーお姉さま、今日のヒーロー美術学でお創りになる物は決められましたか?」

「まあ、大まかにならね。モモは何を創るのかしら?」

何故か登校してきたら女性化したままだったトリーが色々と腹を括った結果、教室の一部で百合の花が咲き乱れていた。

そんな最中、今日の授業のことで質問した八百万の質問に返しつつ火埜は考える素振りの後、八百万の顔を中指で持ち上げあと少しで唇が触れ合う距離で笑顔を向けた。

「あう（パタ）」

「も、百!!」

その光景を近くで見っていた耳郎はぱたりと倒れた八百万を抱き起すと揺さぶり意識の有無を確認していた。

「もお、火埜君。女の子で遊んじゃあかんよ」

ぶんぶんという擬音が聞こえてきそうな表情の麗日が何時もの調子で注意をする。

指を立てて私怒ってるんだぞという様子を現している麗日だったが、火埜はその腕を掴むと器用に麗日をゆるりと抱きしめた。

「あら、お茶子ったら嫉妬かしら?可愛いわね」

至近距離で向けられるカツコイイ系美少女の獰猛且つ美しい微笑み。

「もう、お姉さまったら」

「麗日陥落速すぎ!!」

その掌のあまりの返しの速さに流石の芦戸も驚きを露わにしていた。

「で、何だこの状況」

前日の悪夢を引きずっているのか周囲に諸悪の根源がないことを確認し精神を落ち着かせた爆豪が火埜に話しかける。

「実はね、早朝訓練でイワさんが流星群使ってきてそれを避け切れな

くてね。で、当人は火急の出動であたしは今日一日この有様よ」

その見事なお姉さまぶりに幼馴染とはいえ引き気味の爆豪。

もう一人の幼馴染と言えば。

「トリーお姉ちゃん、この間の宿題ちゃんと一人で解けたよ」

「あら、偉いじゃないシズ。流石やればできる子」

宿題をできたと報告して抱きしめられてイイコイイコされていた。

既に姉扱いして甘えることを選択したのだった。

「ケロ、トリーちゃんこの間のお豆腐料理、お父さんに好評だったの。

お母さんもまた教えてほしいって言ってたわ」

「うふふ、私も梅雨ちゃんに教えてもらった水餃子とっても美味し

かったわ。梅雨ちゃんはいいお嫁さんになりそうね」

丁度蛙吹の頭が届く位置だったからだろうか、ゆっくりと撫でられ

る蛙吹。

「ケロオ」

顔を真っ赤にして照れるその姿は大好きなお姉ちゃんに褒められ

てご機嫌な妹のようであった。

「おい、いつまで遊んでるつもりだ」

「あら、相澤先生おはようございます」

火埜の年不相応の色気を放つ笑顔。

「おう、いいから席付け」

流石は大人というべきか相澤は挨拶を返すと教壇へと足を進める。

「さて、弛んでいるところ悪いんだがまだ戦いは終わっていいねえぞ」

「まさか、また敵の襲来が予想されたのですか!？」

「自然災害予測で甚大な被害が出る予想が出たのでは」

「トリーちゃんにストーカーでもできたのかしら?」

「「「ビクッ!!」」」

何人かの目に殺気がこもる中、呆れたようにかつめんどくさそうに相澤が答える。

「今年も体育祭やるぞ」

「「G 学校 ぼいの キター P K!!」」

「ウツセエ」

「敵の襲撃後なのにやるんですね」

「まあ、示威行為の一種だ。お前たちのお陰で被害が少なかったのもあるな」

「いつ開催何ですか」

「来週だな、公平性を保つために1週間、放課後の校内施設使用は出来なくなる。以上連絡を終える、お前たちの名前を知らしめる絶好の機会だ。お前達の活躍を期待している」

普段の相澤が絶対言わなそうな一言を残して教室から出ていく。

「みんなー、私ガンバル」

休み時間、教室の後ろで目にやる気を漲らせ全身にやる気を循環させている麗日がいた。

「どしたのお茶子？」

「全然「麗」じゃないよお茶子」

「私頑張る!!」

「解ったから少し落ち着きなさい」

そろそろ空回りしそうと判断された麗日は火柱に正面から抱き締められ、頭を撫でられ、香りを楽しんだ後に落ち着きを取り戻した。

「取り敢えず、全員食堂いくわよ。お弁当組がカフェテラスを確保してくれたいだし」

火柱に抱き締められたまま、両手両足個性をフル活用してコアラの子供よろしく抱きついたままの麗日を引き連れて教室に残っていた全員は食堂へと歩いていった。

「麗日君を応援するぞ!!」

「「おーーーーー!!」」

「いやはや、俗っぽくて申し訳ない」

食堂についた後、やる気MAXHEARTな麗日に事情を聴く。

麗日家は関西ではそこそこの名知れた土木の下請け会社なのだが、一時経営が苦しくなった時期があった。

麗日の個性なら金の掛る重機を使用せずとも高所への運搬が可能であることから、そちらの方面で両親を助けたいと願い出たところ両親から自分の本当にやりたいことをやれといわれ、ヒーローの道を諦

めずにすんだのだと。

だから、自分が有名になってお金稼いで会社の宣伝すれば少しでも親孝行になるのではと考えたらしい。

そこで、人一倍感動しいの飯田とその侠気に感銘を受けた切島により現在「麗日お茶子決起集会」状態にあった。

「まあ、実際問題お茶子の志望動機を表面上聞けば俗っぽいかもしれないけど、その根底にある優しさまで否定するならお姉さん怒っちゃうぞ」

「あう」

お姉さまモードの火埵におでこを軽くつかれ少しよろけた麗日だったが、その慈愛の籠った眼差しを真正面から受け止めてしまい、別の意味で赤くなっていた。

「麗日の志望動機がOKならば、オイラの志望動機も」

「モテたいってのが動機なら応援するけど、本の僅かでも邪な思いが含まれるなら燃やすわよあんた」

「さあ皆さん次の授業に余裕をもつためにそろそろ片付けましょう」

カツコイ系美少女の殺意の籠った瞳に射抜かれた峰田は精神を紳士モードにすることで現実から逃げることに成功するのだった。

後日、これをやり過ぎた結果、別の扉を拓いてしまった峰田が居たとか居ないとか。

放課後

何故か職員室に呼ばれた火埵は1人歩いていた。

「ねえねえ、お姉さんうちの生徒？」

「誰よ、この子？」

そんな火埵に対して階段から身を降り出してきたほんわか不思議系美少女が話しかけてきた。

「取り敢えず降りてきなさい、淑女は階段から身を降り出すもんじやないわよ」

「はーい」

少女はふわっと手すりを乗り越える。

なお、この時スカートの中の雰囲気こそぐわな以外と大人パンツ

を確りと見た火埜は自分は悪くないと結論付けて忘れないと心に誓った。

「ねえねえ、お姉さんだあれ？うちの生徒じゃないよね、私見たこと無いもん」

「いいえ、ここの生徒よ。初めましてお嬢さん、1年生の火埜翔織よ訳あつてこんな格好だけど歴とした男の子よ」

「ええウソ!?私よりも大人っぽいのに、しかも男の子?」

「と言うことは、貴女は3年生ね。2年生は去年消太さんが退学通告したからヒーロー課の上級生で今居るのは3年生だけだもの」

「スゴイ!正解!3年生の『波動^{はとう}ねじれ』だよ」

「ねじれちゃんね、可愛い名前ね」

「やったあ褒められた」

コロコロと表情の変わる様は葉隠を思い起こさせるが、彼女以上に天真爛漫な印象を与える先輩を火埜は嫌いではなかった。

「波動さんこんなところに居た」

波動が飛び下りてきた階段に顔の半分だけ除かせた男子生徒がいた。

「あ、天喰。見て見て御姉様」

それはそれはご満悦な波動に抱きつかれている火埜。

「あれえ、火埜君じゃないか」

天喰と呼ばれた生徒の上から現れた男子生徒は火埜にとっても知らない仲ではなかった。

「あら、通形先輩。てことはお二方がビッグ3の残りというわけですか?」

「イグザクトリー、正解だよ」

「ふむ、大方敵の襲撃前に見知らぬ存在が校内を歩いていたことから、私を不審者として3人で見張つてたつてところかしら」

「イグザクトリー、これまた正解だよ。あ写真撮つて良い?」

「サーもセンチピーダーも見たことあると思いますが、ああバブルガール」

「そう、彼女だけ仲間外れみたいだからって」

話が進むなか、火埜の傍を離れようとしないう波動と通形の後ろから顔を覗かせている天喰。

「それじゃ、折角だからねじれちゃんもハギュー」
「ギュー」

其処には互いに満面の笑みを浮かべ会いながら、頬を合わせて笑う二人の美少女がいた。

「ベストショットいただき」

「通形、後で私にも送ってね」

写真の写りを確認し雑談を続けようとした時だった。

「あ、私ったら相澤先生に呼ばれてたんだわ」

「私も着いてく」

「オレはかえ・・・」

「環も一緒に後輩を送り届けに行こうぜ」

4人は並んで職員室へと歩いていった。

「出会い頭によく、エンポリオ濃縮『男』ホルモン!!」

「痛だだだだだだだだだだだだだだだだだだ」

「御姉様!!」

「人体がたてちやいけない音になってる!!」

「ひう（気絶）」

あまりの痛みでオーラが漏れだしてしまった火埜。

凄惨な光景に思わず大声が出た波動。

顔を青くし次のお仕置きこれかと思いに耽る通形。

あまりの凄惨さと人体の限界を超えた形容しがたい音により思考キヤパを越えてしまい気絶した天喰。

「ヒーハー!!」

「ああ、やっべえ。久し振りに死ぬかと思った」

「それじゃ、ヴァターシは仕事に戻るちゃぶる」

「え、此だけのために来てくれたのイワさん」

「元々、ヴァターシも雄英に用事があったちゃぶる、そのついでよついで。あ、後ヴァターシ当分事務所泊まり込むからお夕飯は3人で楽しんでね」

「あいよ。あ、まだ身体痛い」

「それじゃあねいネズつち、ヒーハー!!」

「バイバイなのさあ」

嵐のように消え去る保護者を平然とお見送りする火埜。

男に戻った火埜を間近で凝視する波動。

「御姉様、本当に男の子だったんだ。あ、この前通形が見せてくれた写真の子だ」

「いや、今さらかーい。にしても面影無いね」

「あの、波動先輩近いです」

「(気絶中)」

「むう、〃ねじれちゃん〃って呼んで」

「いや、流石に「ねーじーれーちゃーんー」

「ねじれちゃん近い」

「おお、火埜がペースを握られてる」

「男モードだとあいつ本当に純情だよな」

「火埜もう教室に戻って良いぞ、3年生もさっさと捌ける。通形、天喰を忘れるなよ」

相澤のドライな対応で職員室から追い出される4人。

「それじゃ、通形先輩。また週末に」

「サーも楽しみにしてたから週末まで怪我しないようにね」

「御姉様、トーリくん、1年生、職場体験!!リユークュウに相談しなくちゃ!!」

「キャラが濃い子だファットの好きそうな子だ」

そうして、4人は別れていったのだった。

1人廊下を歩く火埜は左手を開いては握り、開いては握りと繰り返していた。

火埜が考え事に没頭している時の癖である。

火埜は自身がこの世界に転生してきたという事実を本を読む読者の様な他人事に近い感覚で認識している。

それは、前世の記憶が曖昧だからか、現世で生を実感できているからか定かではない。

しかし、「火埜翔織」という存在は価値観とその在り方がかけ離れていると多分に考えていた。

かつての世界ではありえない「異能力」を「個性」と呼び、価値と危険性を軽く見ているこの世界を「火埜翔織」という存在の内側にある何かが生々しく嫌悪している。

かといって、自身が「無個性」ではなく、世間一般で言う「強個性」に分類される存在であることに少なくない優越感を持っている。

「個性」を十全に使いこなそうとしながらも、「異能」に嫌悪感を抱く。

そんな矛盾を抱える自身という存在を掴み切れていなかった。

階段を上がり切り、廊下へと曲がろうとした時、人にぶつかったことで初めて目を閉じていたことに気が付いた火埜。

「おや？大丈夫ですか？」

ヒーロー科の棟では見たことない見事な桃色の髪の少女が自分にぶつかってきた火埜に手を差し伸べてきた。

「あ、ありがとう。ところでこの人達は一体？」

「おや、ご存じないのですか？皆さんは1年生ながら会敵し、尚且つ生き残って今話題の1-Aの生徒を見に来てるんですよ」

少女の背中に背負われた奇妙な鞆から伸びてきたロボットアームに起こされながら起きた火埜に対して言葉を返す少女。

「ん、にしてもこれでは私の目的の人物に遭えそうにありませんね」

「？あなたは明確な目的があってココに来てるんですか」

「はい!!私は今回「テメエ、もっぺん言ってみろや!!」

少女の言葉を遮り、火埜からしてみればあり得ないだろうという存在の怒声が廊下に木霊した。

「うお、なんじゃこりや!?!」

帰りが遅い火埜を心配して、切島が職員室に迎えに行こうと教室のドアを開けた。

本来であれば生徒が疎らにしか居ない筈の廊下は1年生の生徒で溢れていた。

「ねえ、敵と戦ったんでしょ?どうだった」

「生徒だけで対処できたってことはそんなに怖くなかったの?」

「〃個性〃見せてよ」

「顔見せて」

敵の襲撃に関して箝口令が敷かれており、当事者たる1―A生徒への接触禁止令も出されていた。

しかし、本日接触禁止令の方が解かれたことで今まで抑えていた興味が爆発してしまい、結果多数の生徒が教室に押し掛けて来る結果になってしまった。

「.....、(チツ)ウゼエ」

「かつちゃん!?!とーくん戻ってこなくてイライラしてるのは解るから少し落ち着いて!!」

「.....、(ハア)邪魔だなあ」

「轟君!?!個性の制御で質問があるからって火埜君を待ちくたびれている気持ちも解るけど少し冷静になりたまえ」

久し振りに火埜家で遊ぼうと言うことになり、クラス全員で突撃と洒落込もうと計画を建てた中、主催者が中々戻ってこず外が五月蠅いせいで原作ばりに悪人面したお怒りの爆豪。

ここ最近火埜に懐いたのか雛鳥のように後についてまわることが多くなった機嫌急降下の轟。

態度にこそ出していないが、他のクラスメートも久しぶりの放課後勉強会にワクワクしている最中で水を差されような状況に多少機嫌を悪くしていた。

「幻滅しちゃうなあ」

そんな態度を敏感に感じ取ったのか1人の生徒が出てきた。覇氣の感じられない顔に紫色のボサボサの髪をした男子生徒だった。

「あゝあゝ!?!」

「かつちゃん、かつちゃん。も、本当に抑えて」

後ろから緑谷に羽交締めにされているにも関わらず狂犬モードの爆豪はズンズンと前に出ていってしまふ。

「んだとコラ!!もっぺん言ってみろや」

「どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだなあ。ヒーロー科に在籍する奴は皆こんなのかい?」

「普通科にはヒーロー科落ちたから入ったって奴が結構多いんだ。そんな俺らでも学校側がチャンスを残してくれていて、体育祭のリザルトによっちゃ、俺達のヒーロー科への移籍、あんたらにはその逆があり得る。いくらヒーロー科とは言え調子に乗ってる足元ごっそり掬っちゃうぞって宣戦布告に来ただけぞ」

敵情視察と宣戦布告。

この二つをやり遂げた普通科の生徒に冷静だった蛙吹、耳郎、障子、瀬呂は豪胆だなと思うほどに気持ちを落ち着かせれていた。

「ずいぶんと暇なんだな普通科って言うのは」

一方で普段は冷静な（というか周りにあまり興味がない）轟はその生徒の物言いに少しばかり苛立っているようだった。

そして、さらに。

「オウオウオウオウ、隣のB組のモンだけどう!!敵と戦ったつうから話聞こうと思っていたんだがよ!!エラく調子づいちゃってんなオイ!!!本番で恥ずかしい事なっぞ!!」

大きい声で勢いよく主張するB組の男子生徒。

その横にいる少し斜に構えた男子生徒も続くように喋りだした。

「聞くところによると敵を前にして気分を悪くした奴もいたそうじゃないか?そんな心持ちでヒーローを目指そうなんてお笑い草だね」

その生徒が誰の事を言ってるのかA組で解らない生徒は誰1人い

なかった。

そして、それが態と間違つてそう解釈しているのもそのにやけきつた顔から容易に想像できた。

「ブチコロス」

爆豪のその言葉はその時のA組全員の気持ちに代弁しているようだった。

しかし、爆豪の手がその生徒に届くよりも速く、その生徒は壁際に叩きつけられたいた。

物凄い勢いで叩きつけた生徒は誰もが想像していない人物だった。

「デメエ、もういつペン言ってみろよ」

普段の色狂いと言われるスケベな雰囲気は消え去った小柄な少年。

峰田実が無表情でゴミを見るような目で叩きつけた生徒を見ていた。

そして、学校全体に響き渡るような怒声が木霊したのであった。

峰田実にとってヒーローになると言うことはモテれるということが大前提に存在していた。

けて2枚目というわけでないことは彼自身が一番自覚しており、モテるために勉強を頑張っても結局顔の良いお馬鹿系に全てを持ってかれた中学時代。

ならばいつそのことそのスケベ精神スピリットを全て解放してやると意気込んだ中3の春。

それから卒業まで女子に近づかれることはなかった。

そんな鬱屈したモテたい精神と女子とお近づきになりたい願望の暴走状態が今の峰田実であった。

そんなある日、キャマバツカ事務所を最初に訪れた日から数日。

放課後勉強会の集合場所のとあるフルーツパーラーには火埜と峰田の姿しかなかった。

運ばれてきた紅茶を飲みながら峰田は対面で幸せそうにピッチャーに盛り立てられたパフェを黙々と消費する火埜を眺めていた。

峰田自身が悪いことは自覚くしているようだが顔面を握られて以降、進んで話しかけようとはしてこなかった峰田。

実際のところ恐怖よりも何故か女子に囲まれる火埜に怨念を垂れ流しているため近付かないだけなのだったが、その日は沈黙に耐えかねて話しかけてしまった。

「なあ火埜、エロいことは悪いことか？」

峰田自身なぜその話題を選んだのか当時は解らなかつた。

また、顔面を握りつぶされると思い身体に力が入ってしまう。

「え？別に悪くないと思うけど？」

パフェを完食し、次に運ばれてきたウエディングケーキかよと突っ込みたくなるケーキタワーにフォークをいれる火埜の返答に目が点になる峰田。

「いやウソだあ、悪いのはオイラだけどもオイラをしばいてるくせに」

「あ、悪いなどは思ってたんだ」

タワーの3分の2を消費した火埜は紅茶に口をつけると真面目な顔をして峰田と視線を合わせる。

「峰田の場合はやり過ぎなの、金と名声が原動力のヒーローが大半の今で表向き耳障りの良いこと言ってる奴らより、は、好感がもてるっただけ」

「はあ、そんなもんか？」

「少しは抑えろ、紳士的に振る舞え。世の中TPOを考えて行動すればお前でも好いてくれる子はいらんじやない」

僅かに間が空き、店内に流れるクラシックの音楽だけが流れていた。

「因みに火埜はどのパーツが好きなんだ？」

「T・P・O!!さっき言ったばっかだろうに。まあ胸に関して言えばその人にあつた形をしているかどうかだからなあ」

「その辺詳しく!!」

数分後、個々の用事を済ませて来たクラスメートが見たのは何かを悟つたような穏やかな顔をして火埜を拝む峰田だった。

それ以降、馬鹿話をするようになり、放課後訓練でも個性が単純な峰田は爆豪監視のもと前回よりも1個以上をモギれるように訓練し、

火埜監修の勉強会で頭皮を強くするためにエステにも手を出した結果、キヤマバツカ事務所ニューキヤマー拳法44のエステ奥義の一つリンパマッサージ拳に手を出したりと目に見えて変わっていった。

一方で隙あらば女性陣への攻撃・庇いという名目のセクハラは止むことはなかったが。

まあ、その結果セクハラのお仕置きに関しては女子陣も手加減抜きで行っているし余りに調子乗ったら男子全員で戦闘訓練の名目でお仕置きが待っているのだが。

そんなこんなで距離が近くなった火埜と峰田は友人関係としては面白おかしく過ごしていく間柄になっていった。

だからこそ、理解を示してくれる友人をバカにされて黙っていられる程峰田は馬鹿でも人格破綻もしていなかった。

そして、冒頭の怒声が響いたのだった。

「オラ、もういっぺんオイラの目を見て言ってみやがれよ」

「峰田落ち着け、手が離れねえ」

「は、はは。言葉にならないなら暴力かい。本当にヒーロー目指してるのかな?」

「まだ軽口叩ける余裕があるようだな」

峰田の握り締められた手が後ろに引かれ相手を殴る体勢になってしまった。

その時、廊下に出ていた全生徒は自身が凶悪な怪物の目の前にいるかのような錯覚を引き起こされる殺意に覆われた。

大半の生徒が怯えて座り込んでしまう中、一部の生徒は顔を青くして震えていたがなんとか立っていた。

「ダッセエなあ、あんたら」

声の発信源には1人の女生徒の前に立つ人を小バカにしたような笑みを浮かべる火埜が立っていた。

「アアン、テメエ誰だ」

もっとも声の大きかった生徒が震える足を殴り付けて睨み返す。

しかし、そんな姿に興味もなさげに頭を掻く火埜。

「どうも始めまして。先ほど話題に出っていた敵相手に気分を悪くした

生徒ですう。しかし、ダサイよねあんたら」

「ど、どういうことだコラ」

声をあげる生徒。

気が付くとその目の前に薄気味悪い笑みを張り付けた火埜が立っていた。

「人を小バカにして、挑発したつもりになって、優位にたとうとして、そして小バカにした奴から向けられた殺意程度でそんなにブルツちやつて、ダサイとしか言い様ないよねえ」

貼り付けられた作り物と解る笑みを間近で向けられた男子生徒は思わず後ろに下がってしまっていた。

「それと君」

そう言つて火埜に間近で指を指される男子生徒。

「な、なんだよコラア！」

『敵と戦いましたあ。そのことを詳しく知りたいので話を聞きたいですう』だど？ふざけんじゃねえ!!」

けして声を荒げた訳ではない。

しかし、火埜の言葉には明確な怒りが混じっていた。

「そんなに命のやり取りをしたのが羨ましいなら今から治安の悪い地区にでも喧嘩を売りにいけ。自分の無力さを痛感した奴らも少なからず居るのに、そんな奴らの事を考えないでそれを言つてんならテメエにヒーローの資格は無いんだよ。

熱血ぶりたいだけなら町のチンピラと変わらねえなあおい!!

なんで箝口令を引かれたのとか考えれないんか!!

ズカズカと土足で人ん家に無断で入って来られたらお前は怒らないのか？怒るよな？それと同じなんだよ!!

人が心の傷を負っているなど思つたんならこんな事はしねえよな？

するつて事はそういう事と見ていいんだよな？

テメエは人の気持ちなんてさほど考えないクズ野郎つてことだよな？

だとしたら俺はヒーローとしてお前を見ない、それどころか人とし

ても見ない!! 解ったか? 解ったかって聞いているんだよ!!」

「お、おう」

静かに並べ立てられる言動にB組の声の大きな男子生徒が萎縮するなか、火埜のは次の標的に目を向ける。

「それと、お前」

「なんだい、僕は間違ったこと言ったつもりはないけど」

軽薄そうに笑うB組の生徒に近付くと峰田を剥がして上鳴に峰田を放り投げその生徒の胸ぐらを掴み持ち上げた。

「随分と口が回るようだが、だからなんだ?」

「え?」

「一歩間違えれば誰か死んでいたかもしれない状況に対して、それを馬鹿に出来る程お前は偉いのか?」

あの場になかった奴が何を言っても羨ましがっている餓鬼にか見えないんだよ。

そこのお友だちにも言ったけど、そんなに命のやり取りをしたのが羨ましいなら今から治安の悪い地区にでも喧嘩を売りにいけ。なんの保証もされない場所で自分の力とやらを試してこいよ。

今のテメエは、テレビの自称博識者と同じ口だけの愚か者にしか見えないんだよ!!

テメエら2人がそうならB組の奴らってこんな感じのクズばつかの集まりなのか?」

「ちよつとまってあたしたちは」

生徒の群の外にいた女子生徒が反論をしようとする。

「止めなかった時点で同じだろうが!!」

テメエらみたいなのと同じヒーロー科として扱われると思うとヘドが出る!!」

そう言つて胸ぐらを掴んでいた生徒を廊下に乱暴に落とす。

「そして普通科のお前」

「な、なんだよ」

普通科の宣戦布告に来た生徒は自身に明確に向けられた怒気に当てられ動けずいた。

「ヒーロー科全員が偉そうに見えるのなら今すぐその両目を交換しろ。

周りを見てみる、そんな奴らが集っているように見えるのか？

ヒーロー科おとされた腹いせしに來ただけなら意味がないからさっさと消えろ。

それと別に足元を掬うなら掬えばいい。

宣戦布告だあ？受けて立ってやるよ!!

テメエの妄想に付き合っつて貰えると思っっているなら目障りだし、垂れ流しの妄言を聞かされて不愉快なんだよ!!

テメエの想像で勝手にそう思われているんならイラつくんだよ!!」

「わ、悪かった」

「それと」

普通科の生徒から視線をはずし、全員に聞こえるように声を大きくする火埜。

「それと、自分の意見も言わないでただ見に來ただけの奴ら」

「二二は、はい!!」

「ただ見に來たのなら俺たちの外見以外分かることはねえんだよ。

そんな暇があるなら体育祭までに力をつけてこい。

こんな事したつて意味ねえんだよ!!」

「二二す、すいませんでした!!」

数秒と経たずに廊下から生徒の姿は消えていった。

「チツ」

「うつわあ、トリー君ご機嫌斜め？」

「ほらおいでトリー、三奈ちゃんが抱き締めたげるよ」

「全くもう。あんたつて子は、ほらウチのとこおいで」

「あ、あの宜しかったら私の「ココ」空いてますわよ」

「百ちゃん、それはアカンつて」

「火埜ちゃん少し落ち着きましょう」

「とーくんぶちギレたの久し振りに見た」

「ああ、お陰で頭冷えたな」

そんなこともあり、本日はお開きとなった。
今日という日があったことで少しずつ何かが変わっていく音が聞
こえた気がした。

雄英体育祭。

日本最難関のヒーロー科を抱える国立雄英高校にて行われる、個性ありの体育祭。

TVでも放送され、高視聴率をキープ中な日本のビッグイベント。スポーツの祭典と呼ばれた「旧時代のオリンピック」に代わり、全国を熱狂させており、近年では全世界でも中継されるようになった。

なお、今回はとある事情から各局の偉い方々が資金援助を申し込みに連日校長室に顔を見せに来るといふ珍事が起きたが、その事には触れないでおく。

主にヒーロー科の生徒が活躍する為、現役プロヒーローもスカウト目的で大勢観戦に来ており、活躍または注目を集めた生徒は今後の進路で有利となるため、業界への個性アピールには最適の行事となっている。また、雄英高校にはヒーロー科受験に落ちて普通科に入った生徒もおり、成績次第ではヒーロー科生徒の枠を取れる可能性もあり、やる気のある生徒は下克上を狙っている。

会場は雄英の敷地内にある専用の施設『体育祭会場』。

収容可能人数12万人。

通常雄英はセキュリティがあつて入れないが、開催中はゲートから会場までを一般にも開放される。

都合3日間行われる体育祭、初日は1年生が主役になる。

そして、現在クラス毎にあてがわれた控え室に1A生徒達は集合していた。

「さあ、いよいよだ。皆、落ち着いて冷静に落ち着いて行動しよう」

「飯田ちゃん。まずは深呼吸しましょう」

左右の手足が同時に動いてしまい、さらに動きがぎこちなさ過ぎて誰が見ても緊張しているのが丸解りな飯田を落ち着かせるのはクラス皆のお姉ちゃんと化してきた蛙吹であった。

「うあ、緊張するなあ。お父ちゃんもお母ちゃんも見とるし」

「てか、八百万家凄すぎだろ」

「いえ、両親も同じクラスの保護者の方とご一緒出来ると聞いて張り切っていましたし」

現在、1A生徒の保護者は八百万家の大広間にてこの体育祭を観戦している。

まあ、集めたのは伊ワさんとそのネームバリューなのだが。

「火埜」

「ん？なんだ」

上鳴と入念にストレッチをしていた火埜に話しかけた轟。

入学当初の棘が多少薄れてきたのも関係してか、クラス内評価は「ナチュラル末弟」となっていた。

「兄さんと姉さんを保護者として誘ってくれてありがとう」

そう言つて頭を下げる轟。

前日、実家にて自身の部屋に姉が突撃してきて凄い富豪に招待されたけど何着てけばいいか聞かれ、数分後兄から住んでるマンションの前で忘れることが出来なさそうなオカマにパーティに誘われたと連絡がきた時は驚いたそう。

もしかしたらまともに兄姉と会話したのは初めてだったかもしれない、そんなことで嬉しくなれる自分がいることに轟自身驚いていた。

「なははは、深く考えるなよ。今は目の前の事に集中しようぜ」

「そうだけ轟。悪いけど今日はオレも負ける気はないからな」

クラスのムードメーカーとしてかつこたる地位を築いた上鳴からは普段のおちやらけた雰囲気はなく、かといって今回の体育祭を楽しもうとする感じは伝わってきた。

「皆、聞いてくれ」

だからこそ、轟は友人達に伝える決心をつけた。

「オレは何があつても左の力は使いたくない。だけどそれは皆を嘗めてる訳じゃない。事情を話さないのにムシが良すぎるだろうけど今のオレの全力で皆に挑ませてもらう!!」

轟の宣言に静まり返る控え室。

「はん」

切島とアップしていた爆豪が不敵な笑みをうかべる。

「安心しろよ、そんなこと」考えてる余裕なんて無くしてやるから」
「おう、よく解んねえけどオレ達と当たった時はそんなこと考える余裕なんかやらねえからな」

切島もその宣言に対して両腕を硬化して打ち付け、特有の鈍い音をたてる。

「おいおい轟君よお、オイラ達のこと侮りすぎじゃねえ?」

「然り、ココにいる誰もが己こそ最強と信じているぞ」

「踏陰ノ言ウ通り、オレタチ最強」

峰田がいつもの通りに煽り、常闇とダークシャドウがそれすら肯定するように強く語りかける。

「うちらを嘗めんなよ轟」

「状況次第だなんて言ってられないように圧勝しちゃうんだから」

耳郎が不敵に胸元で腕を組みカツコ良く宣言し、その背中に飛び付いた葉隠がその人懐っこい笑顔で強気に宣言する。

「轟君」

轟の背後から緑谷が何かを決心したような眼差しで見つめてくる。

「君がどんな理由があるにせよ、僕らも全力で挑むんだ。」

その時、本当の君と僕は戦いたい」

その瞳に灯る焰を見て轟は思った。

「このクラスになれて良かったー
と。」

『マイクテストマイクテスト、うん繋がってるね。』

1年生の皆、オールマイトだ』

控え室にオールマイトのアナウンスが流れ始めた。

『この体育祭、ヒーロー科だけのお祭りだと思ってる子達もいるかもしれない。だけど、それは違う!』

スピーカー越しであるにも関わらず、その声の圧力に生徒達は思わず背が伸びた。

『この体育祭は、これからの時代を担う君たちのための舞台だ!!』

『普通科の諸君』

突如名指しされざわつく普通科控え室。

『君たちの原点を思い出せ!!』

その言葉に強く拳を握り締める生徒がいた。

『経営科の諸君』

参加そのものに消極的だった経営科の控え室に歓声の木霊した。

『君達がプロモーションするための素材を生かすために少しでも現場で動くことを知ってほしい』

その言葉に一段と歓声が大きくなっていく。

『サポート科の諸君』

其々が持ち込むアイテムの調整をしていたにも関わらず、全員の手が止まった。

『君達の生み出す作品達がヒーローを生かすことを見せてやれ』

工具を握る手に力が入り、気が付くと全員が自作のアイテムと更に向き合う形になっていた。

『ヒーロー科の諸君』

静まり返る控え室、自分達が目指す頂の声を聞き逃さんと誰しもが耳を傾けたいた。

『次世代のヒーロー達よ、観衆に魅せてやれ。そして、宣言してやれ。私が来た』と』

その声に触発されてか全員が不敵に笑みをうかべた。

『今日というこの場は、君が主役だ、さあ魅せてくれ次世代の雛鳥達』

『更にその向こうへ、Plus Ultra!!』

全ての控え室から漏れ出す歓声。

No.1^生ヒーロー^伝からの激励が全ての生徒に火をつけたのだった。

『今年もやってきたぜこの日が！お前ら準備は出来てるか？』

『進行は勿論このオ・レ、プレゼント・ムアーーーーーイク!!』

『さあ、初日はこいつらの登場だ。卵から孵りたての雛鳥と侮るんじゃねえぞ、今年は初っぱなからトツプギアだ!!』

『うるせえ、マイク少し静かにしてくれ』

『おうっと、忘れるとこだった。今年の解説もコイツ、オレのマブダチ

のイレイザーヘッド、アアー……ドゥ今年はもう1人、ヒーロー科B組担当ヴラッドキングだぜい!!』

『宜しく頼む』

『それじゃ、呼び込んでくぞ。まずはコイツら入試で落ちた負け組? そんな奴はココにはいねえぞ、ヒーロー科への編入を目指す野心溢れるリベンジャー、普通科1年生!!』

「「おお……!!」」

毎年、普通科の生徒の登場は静かなものだった。

編入を諦め、静かに静かに目立たないようにしている印象だった。

しかし、今年は入場からして違っていた。

普通科の全生徒に活気が満ちており、自分達こそが主役だと言わんばかりの大声と共に入場してきた。

『続くのはコイツら! 頭デツカッチとは呼ばせない。実技も出来るオールラウンダーに僕らはなる!! 経営科1年生!!』

先程の普通科の入場とはうって変わり、一糸乱れぬ動きを見せる経営科。旧時代にあった某大学の集団行動を思わせる見事なシンクロ率だった。

『コイツらを忘れちゃいけないなあ。コイツらがいなきゃヒーロー出れない奴は山程だ! 奇抜な発想、生かす構想、産み出し実装! サポーター科1年生!!』

入場ゲートから現れたのは多種多様なアイテムを身に付けた生徒達。

その姿に企業関係者は様々な考察をしながら活躍を楽しみに待つ。

『お次はコイツら。地道に努力、直向きに研鑽、日々それ精進。暴れ狂う若いリビドー! ヒーロー科にはオレ達もいるんだぜ! ヒーロー科1年B組!!』

オレンジの髪をサイドに垂らした女子生徒を先頭に続々と入場してくるB組生徒、その瞳には覚悟の焔が灯っていた。

『すうあぁ……、最後はコイツらだ! 喜べマスメディア共、ついに来るぜ! 1年生ながら敵と会敵し無事に全員生還してきたコイ

「ぶ、あの子ったらいつちよ前に緊張しちゃって」

八百万家大客間にはA組の保護者が我が子達の応援のために集まっていた。

無論その中には爆豪の両親もいた。

「ヒーハー！勝己ボーイも成長したわねい」

「きゃー、麗日さんお茶子ちゃんと静空が映っちゃったわ」

「ええ、緑谷さん。ウチの子達も全国デビューよ！」

「うおー、お茶子おおおお!!」

各生徒の保護者が一喜一憂する中。

「姉貴、スゲエ場違いなんだけど」

「あんた、一人で逃げるんじゃないわよ」

轟兄姉は、場の雰囲気飲み込まれてしまっていた。

『宣誓』

爆豪は面倒くさそうに壇上で宣誓を始めた。

現在彼は自分の闘志を無理矢理納めさせられたような状態だった。

「(無難に終わらせよ)」

そう考え、何気なくA組(もつと言うと緑谷)を見る。

そこには、自分を見つめる仲間達(爆豪には自分に対して目を輝かせている緑谷がズームアップされています)。

その憧れるような視線に爆豪の着いてはいけない何か火が着いた。

「別に見下してる訳でも、嘗めてる訳でもねえ」

渡してある台本と違う宣誓に少し驚く教師陣。

「ただ、オレ達は負ける気でココにいる訳じゃねえ。

自分が負けると思ってたココにいる奴はいねえ筈だ。

だから、全員全力で掛かってこいや！

それでも、オレがNo.1だ!!

せいぜい頑張れや”準”優勝争い」

そう言いきると頭を下げ静まり返る会場を気にすること無く、自分の位置に戻る爆豪。

徐々に爆豪が放った言葉の意味を理解した者から怒声が放たれ始

めた。

「何が『準』優勝争いだ」

「嘗めんなクソガキ」

「優勝はオレだ」

周囲から降り注ぐ怒号を意に介さず頭を掻く爆豪。

「ヘイト集めすぎ」

隣にいた火柱が笑いながら話しかける。

「これでやる気にならない奴は問題外だ」

不敵な笑みをうかべそう火柱に返す爆豪。

雄英教師陣も、どうなることかと頭を抱えていたが、会場も盛り上がり、生徒達にも激励にもなったようだ。と安堵の息を漏らしていた。

『さて盛り上がってるるところ悪いけど早速、第一種目の発表に移るわよ！毎年ここで多くの生徒が落選&涙を流すいわば、振るい掻け!!今年第一種目は』

イヤホンマイクを着けたミッドナイトが右手に握る鞭を上に掲げて、生徒たちの視線を彼女の背後にそびえる巨大スクリーンはと集める。

ミッドナイトが鞭を掲げるのを合図にスクリーンに巨大なルーレットが映り出され、第一種目がルーレット方式で目にも止まらない速度で瞬時に切り替わっていく。誰もが第一種目の内容を待ち望み固唾を飲んで見守る中、ルーレットが止まった。

「『』はあ!?!『』」

果たして、第一種目は何に決まったのだろうか。

少し狭い通路へと移動した1年生たち。

全員にやる気が漲っているのを感じつつ火埜は先ほどのミッドナイトの説明を反復していた。

「第1競技はこれよ!!」

スクリーンに映し出されていたスロットが止まり、スクリーンにはデカデカと『障害物競走+α』の文字が映し出されていた。

「内容は1年生全員での総当たりレースよ。コースはこのスタジアムの外周約4km、そしてスタジアムの1kmトラック1周分。因みに個性の発動は自由!コースさえ守れば何でもあり!!そしてスタート地点はあの門の先の通路!」

「失礼いたします、”+α”とは一体何なのでしょう?」

ミッドナイトの説明の後、A組では既にお馴染みの飯田節がさく裂していた。

「Good、説明してあげたいんだけどそれはラストのトラック1周分に誰かが入ってきたら解るわ」

ミッドナイトも説明せず、案内係の先生たちに誘導され通路へと押し込まれていく生徒たち。

その時、火埜はサディステイクに頬を染める姉貴分ミッドナイトを見て少し嫌な予感がした。

そして現在、火埜は最後尾に位置する場所に立ち柔軟をしていた。

よくよく周囲を見ると、A組メンバーが大半を占める中、見知った人間たちもいた。

「Hey、火埜君!今日は頑張りますネ」

「頑張りましたようねが正解よポニー」

「あれ?ポニーに鱗はコッチにいるんだ」

火埜に話しかけてきた2人の美少女。

愛嬌ある顔つきにハニーブロンドのクセ毛、頭から伸びる2本の角が特徴的なB組生徒「角取ポニー」。

A組にはあまり見られないアジアンクールビュティ、スラリとした

体軀は龍を彷彿とさせる「鱗飛龍」。

火埜傍に美少女の影が差すと最近ヌルリと現れる存在がいた。

「やあやあ火埜君。こちらのレディたちはどなたですか（オイオイ火埜さんよお、また美少女引っかけてんのか。オイラに紹介も無しか、ああん!!）」

朗らかな笑みを浮かべた峰田が紳士の様な雰囲気ですら近づいてきた。

「（表情とセリフが一致してないな）同じマンションに住んでる留学生の角取さんと鱗さん」

「ヨロシクねLittle Boy」

「よろしく頼もう」

女子からの好意的な態度、今までの人生でこのような扱いをあまりされてこなかった峰田の欲望ゲージがMAXになるのはそう難しくなかったが、彼の脳裏には昨晚の母との会話が思い起こされた。

「実、あまり調子に乗って“私”に恥ずかしい思いさせないでね」

女子高生に生で会えると暴走した父（峰田を縦に伸ばしたような男性）を慣れたように武力鎮圧し、座椅子を背中に乗せ勢いをつけて飛び乗ると誰もが見惚れるような笑顔を自分に向けてきた美少女にか見えない母。

「い、Yes. mom」

その光景を思い出した瞬間、フルになっていたゲージは紳士ラインまで下がったのだった。

「ええ、よろしくお願いいたします」

そう言うとき峰田は準備体操を始めた。

なお、その光景に色欲魔人としての側面を知るA組生徒は驚愕の表情を浮かべていた。

『Hey 雛鳥共、準備はいいか?』

『それじゃ、いくぜ第一種目障害物競技+α、ゲート解放まで』

『3』

各生徒が走り出す準備を始めた。

『2』

その中でもカメラに映りにくい後方の映像をみた時、相澤は思わず笑みをうかべてしまった。

『1』

それに気が付いたヴラッドキングが話しかけようとした時。

『GO!!』

マイクの掛け声と共に一斉に走り出した生徒達。

しかし、スタート直後に思わぬ罠が待っていた。

『やっぱ今年も“こう”なったか』

『出口が狭くなっている中で大挙すれば必然的に“こう”なる』

『不合理だが仕方ない、この鮪詰状態は』

一斉に走り出した生徒が出口に集合することで身動きが取れなくなっていたのであった。

『しかしレイザー、貴様先ほど笑っていたようだが何が可笑しいのだ?』

『ん、笑ってたか?』

『H A H A、レイザーお前意外と“親バカ”の素質あるぞ』

『ふん、そうかもしれないな』

『貴様、本当にレイザー・ヘッドか!?!』

『おいおいヴラドお前も担任ならわかるだろ』

出口へと殺到する生徒たち、そんな彼らの後方から物凄い勢いで複数の何かが迫ってきていた。

『自分の教え子が“活躍する”。そう確信した時はうれしいモノだろうが』

それは。

両手の爆破の勢いを利用して空を飛ぶ爆豪。

その爆豪にモギモギで作ったであろう即席ロープでぶら下がる峰田とその峰田に捕まる上鳴。

両腕を翼に両足を鳥の脚に変え、空中を飛翔する火柱。

その背にいつも通りおぶさり満面の笑みを浮かべる葉隠とコアラの子供のように両手両足個性を駆使して引っ付く麗日。

ダークシャドー^{相棒}が天井を掴みサルが木から木へ飛び移る様に天井を

渡る常闇。

ダークシャドウに個性を効かせてブーストを掛けるため常闇に抱き着く口田。

個性を生かし、壁に張り付きながら器用に移動する蛙吹。壁走りの要領で天井を走る飯田。

その体に長く伸びた尾を絡めて運んでもらっている尾白。空気を足場に空中を駆け抜ける緑谷。

緑谷に比べると危なっかしいが、何とか空中を走っている砂藤。肘から発射するテープでスライダーのように飛び回る瀬呂。

○面ラ○ダーが乗ってそうなバイクで壁走りをする八百万。そのバイクに相乗りしている耳郎。

巨大な氷の橋を作り出しその上を走る轟。

轟の作り出した氷の橋を硬化して滑る切島と、酸で溶かすことで滑る芦戸。

轟の氷の橋を普通に走る実は素のフィジカルがクラストップの障子。

「「「「「お先に失礼」」」」」

後方にいたはずの1-A生徒たちの姿だった。

『うおうい、いいのか、あれ？』

『審判のミッドナイト先生、判定はいかがですか』

『勿論、OKよ!!個性有りでも有りなんだから妨害も助け合いも有りよ!!というよりもヒーロー目指してるなら助けそれくらい合い有りでしょうが』

『ぐむう、頑張れビ、他の生徒たちも頑張れ』

『おおっと、A組だけじゃねえぞ。あれはB組の角取と鱗じゃねえか』
『大方こうなることを予想していたんだろう、やるな推薦留学生』

マイクが目ざとく見つけたのはA組から僅かに遅れて空中を行く鱗とその鱗におぶさつてもらっている角取だった。

鱗の足下を見ると角取の個性である角砲に自身の鱗で危なげなく乗っているのが解る。

角取に角砲の操作に集中させるために背負っていることは誰がみ

ても解る。

『さて、トップがゲートを通過したぞ。そして、第一関門は』

爆豪がいち早くゲートを通過し、連続とトップグループがゲートを通過、少し遅れながら後続がゲートを通過。

そんな彼らの前に現れたのは。

『雄英が誇る巨大ロボの群を突破しろ!! ROBO INFERNO !!』

「で、でけえ」

「ヒーロー科の奴らはこんなの相手にしたのかよ」

経営科・サポート科の生徒から悲鳴か上がるなか、先頭を独走していたA組がバラけていく。

空を飛ぶ火埜に轟が捕まると急上昇していく。

その最中、爆豪が更に加速し先頭のロボの関節部分に到達し凶悪な笑みを浮かべる。

ハウザーインパクト
「榴弾砲着弾!!」

如何に強固に作られていようとも、稼働する関節部は全体に比べ脆い。

そこに豪烈な爆破を受けたことで先頭のロボは体勢を崩し他のロボを巻き込んでたたらを踏んでいた。

ロボと同じ高さに到達すると轟は火埜の背を足場にしてジャンプ、火埜もその勢いも利用して急降下していく。

ライブカメラが純白の翼で急降下する火埜を捉える。

更に加速し火埜自身に霜が着き始めた。

次の瞬間。

「オーバード・ゼロ」

地面に突き刺さるような両足蹴りを放つ火埜。

火埜を中心にロボ達が冰山に閉じ込められていく。

しかし、ロボの動きは止まること無く冰山の中で蹴いているのが見えるが、右手に可視化できるほどの冷気を纏った轟が冰山を滑空しながらその勢いそのままロボを殴り付ける。

ホワイトローゼン
「白氷薔薇」

火埜が作り出した氷山という拘束に更に冷気を叩き込み氷山内のロボに絡み付くように巨大な氷の薔薇が生まれ、その棘がロボを刺し貫いていく。

両手を降りながら走る爆豪と、人の姿に戻り走り出した火埜、その二人に追い付いた轟。

三人は其々が認識すると誰からでもなく、拳を打ち付けあい、鼓舞しあった。

『いやー、アオハルよ!!3人ともGJ!!』

『イレイザー、お前のとこの生徒はあれか、いちいち目立たないと死ぬのか?なんだあの芸術作品は!!』

ヴラッドキングが言うように、数台いた筈のロボは巨大な氷山に閉じ込められ、それらを氷の薔薇が絡めとっている。

その光景はまるで新進気鋭の芸術家が作り出したアートのようであった。

『知るか、あれ自体はマウントレディを仮想敵として想定した授業で捕縛目的なので3人が構想した連携技だが、まさか完成させていたとは』

『ぐぬう、だかここまで大技を連発して後半は大丈夫なのか』

爆破の衝撃で痺れたのか両腕を振りながら走る爆豪、飛ぶことを止め走りに切り替えた火埜、右側に霜が付着しており少し動きに違和感がある轟。

スクリーンに映し出される3人を見て会場の大半が思ったことを代弁するヴラッドキング。

『確かに爆豪はともかく、轟は今走ることで体温を上げて体に着いた霜を溶かしているし、火埜もスタミナの無さに関してはクラスでも下から数えた方が早い』

『Hey!!!ヴラド、世間もそうだがお前らはA組の生徒を過小評価してるよな』

マイクの横槍の発言に驚いたのは突如大声が聞こえたからか、それとも『過小評価』していると言われたからか。

『だがな、そんなこと本人達も百も承知だ。あいつらは休日集まれる

時は全員が集まって学校で不十分だと思ったところを重点的に訓練しているのを知っていたか?』

『!?な、ん、だどー!』

『ウチのクラスは素のフィジカルが優れている生徒が多くてな、火埜もスタミナを着けるよりも、上手い配分をそいつらから教わってる。轟も左側を使うことを拒否しているが、熱源としては利用している。スクリーン見てみる』

相澤に促され会場の視線がスクリーンへと注がれる。

そこには、スプリンターばりに加速し始めた爆豪、既に息を整え終え加速していく火埜と、霜が完全に溶け走ることに集中した轟が映っていた。

『あいつらの担任として宣言してやる。オレの生徒を嘗めるな、あいつらは気概も信念も何も持ってない二流以下のヒーローなんかよりもヒーローしてるぞ』

「ハッ!?!」

「どうした火埜?」

仲良く並走している（ように見えるが本気で加速中）爆豪と火埜と轟。

そんな最中、なにかを察知したかのようにハッとする火埜とそれに気づく轟。

「今、相澤先生がデレた気がした」

「でれ?」

「アホか」

以外に余裕がありそうなる3人であった。

『さてさて、障害物レース第二関門は落ちたらまっ逆さま、パワーローダーが徹夜して掘った結果、滅茶苦茶深くなっちゃった溪谷擬き。命綱のロープをどう使うかはたまたタイムロスと知って外周を橋って渡るか、The Fall!!』

『そして、なんと1位到着はB組の角取ポニーと鱗飛龍だ』

『A組がバラけてもたついたところをあの二人は組んだままて空中を滑っていたからな、当然だろう。しかし、ヴラドの教育の賜物か自分の個性制御という基礎の基礎である部分はウチの奴らと競っても負けなさそうだな』

『A組は実体験という経験値を1年生じゃあり得ない時期にあり得ない量獲得できたのに対してB組では基礎的なこと、つまり自身の個性に対する理解度を上げることに関心を置いてきたからな』

『ま、それが活かせてるのが推薦留学生だけというのはどうかと思うが』

『おっと、オレらが雑談してる間に後続が続々と追いついてきたぞ、てか爆豪の奴もう追い付いたのか!?あいつのタフネスどなってんのよ?』

火柱と轟を置き去りに「飛ぶ」のではなく「加速」に個性を利用して猛スピードで追い上げる爆豪。

その姿は飯田の兄であるインゲニウムを彷彿させる走りだった。

その後ろでは、中位グループに追い付かれかけながらも余裕を持って走っている火柱と轟の姿があった。

先頭集団はロープを頼り溪谷を進んでいく。

角取も集中力が切れたのか、鱗と共にロープを渡っており、次の障害物を警戒して全員がスタミナ温存を目的に切り替えた。

飯田のような加速系個性持ちもその出力を利用してロープを滑るように渡る生徒もいたが、途中で失速し落ちる生徒が続発。

さすがの飯田も途中の足場になる場所で休憩すると慎重にロープを渡っていた。

さて、突然だか世間一般では個性を伸ばすためには反復使用が一番の近道といわれている。

それに関係してか、日頃から個性を使用していると身体が自身の個性に対して感覚的に出力等を覚えていくと言われている。

第一関門で大技を使用した3人は他の生徒に比べて、スタミナこそ削られたが、その反面個性因子を活性化させることに成功した。

つまり。

途中にある足場も利用して爆発大ジャンプでリアルマリオしてる爆豪。

氷の橋を足場まで掛けて器用に滑りながら疲労を押さえて順位を上げていく轟。

両腕を青く輝く翼に変え、疲労を鎮静させながら悠々と翔ぶ火柱。

3人の姿が映し出された。

『もう、あれだA組の奴らチートだ』

『努力の結果だ、各自が得意分野を伸ばすことで全体的な能力向上を目指すらしい』

『まあ、B組の担任であるオレにも色々聴きに来たからな。そう言われると向上心の一言で片付けてた自分が恥ずかしい』

『おうつと、オヤジ達があーだこーだ言ってる間に第3関門にいち速く到着した奴らがいるぞ。てか何してんだあいつら?』

そこには踞る耳郎に群がるA組女子の姿があった。

イヤホンジャックを地面に刺しコースの概要を凶っている耳郎だったが、その個性が彼女に不運をもたらした。

切欠は追い付き、その光景を見ること無かった生徒が第3関門へ脚を踏み入れた時だった。

「へ?」

生徒が少し走った次の瞬間、とてつもない爆音と閃光が辺りを埋め尽くした。

『おうつと失礼!第3関門は一寸スゲエぞ。お前らの足元一面が地雷原、地雷の位置はよく見りゃ解るがだからといってスピード落とせば順位はガタ落ち。怒りのアフガンだ!!』

『そこだけ日本語なんだな』

『ん、おいなんか目を回している生徒がいるぞ』

ヴラドの指摘に空撮ドローンが近づくと耳を押さえ気絶した耳郎がいた。

『恐らく個性で仕掛けを看破しようとした時に被害にあっただろう。あいつは個性上聴力が良いからな』

A組女子があたふたしているところ、先程芸術を作り上げた3人が追い付いてきた。

事情を聴かされた爆豪は自身に何かを訴えかける耳郎の視線に気がついた。

「おい翔織。お前まだ余裕あるだろ、こいつ運んでやれ」

「別に良いけど」

爆豪は確りと見えたいた。

自分にしか見えない位置で耳郎が親指を上にしたてているところを。

「よいしょっと、響香は軽いなあ。もつと肉つけて」

そしてあるうことか、なんの迷いもなく耳郎をお姫様抱っこで抱き上げる火埜。

耳郎の耳には走ってきたからかいつも以上に早く大きな火埜の心音が個性を使わずとも聞こえていた。

「一応言つとくが、ここで怪我しても“あんな”感じにはならないからその顔止めろ」

爆豪の声にドキツとした複数の女子がいた。

「きよーかー!!まだお嫁に行かないでえー(悲)」

「透ちやーん、パパはパパはまだ許しませんよ(涙)」

「お茶子ー!!行け押し倒したれ(喜)」

「三奈、いつの間にか異性に興味を持つようになって(喜)」

「まあ、翔織君はあウチの百の婿なんでえ(煽)」

「「「ああん!!」」」

親バカ全開のオヤジ達に対して。

「あらあら、響香ったらいつの間にい」

「透も以外と押し強くなったわね」

「お茶子ったらちゃんど青春してるじゃない」

「三奈も遂に初恋かしら」

「百の武器を全部使えばイチコロなのに」

「二」ウフフフフフフ」

冷たい微笑みを交える母親達は静かに娘を応援していた。

「翔織君は相変わらずだね」

「無自覚に餌を巻いてるんだから」

「静空は大丈夫みたいね」

「まあ、あの子が火埜君ですか」

「良い面構えした子じゃないか」

「フフン、なんだってヴァターシの義息子だからねい」

「是非ともその教育方針を」

「オイコラ姉貴落ち着け」

場外でそんな茶番劇が起きていることなど気づくこと無く、第3関門を次々に突破していく生徒達。

なお、気絶しているはずの耳郎がガツチリと抱きついていたため、そのまま戻ってきた火埜が会場に戻ると冷やかしの声援が周囲から送られてきた。

『さて、規定人数が戻ってきたみたいだし今年が目玉“+α”の発表といこうか』

マイクの声に多少グズツた耳郎をおろし息を整える火埜。

『こいつが最後の締めだ』

マイクの声に反応するかのようにグラウンド中央部がせり上がり、モニターにはとある文言が表示された。

『対象は校内の全員、その名も“スーパー借り者競争”!!』

『ルールは簡単だ、グラウンドの中央の台の上に置かれた超強化用紙に書かれた特徴の人間を校内から探しだして連れてくること』

『校外の人を呼びつけたり、無理矢理連れてきても失格とする』

『さあ、枚数は限られてるぞ！最後の体力振り絞れ！』

その声が途切れるのと同時に走り出す面々、ヒーロー科ABCクラス
の面々だった。

『おいおい、今走ってない奴ら気抜きすぎだぜ』

『まだ誰もゴールしてないのだから今の説明中も当然競技中だ』

『スタートの合図など待っててもないぞ』

3人の教師の言葉にヒーロー科以外の生徒達は思い知った。

普通科の生徒達は僅か4カ月で開いた差を。

経営科の生徒達はヒーローを目指している者のあり方を。

サポート科の生徒達は彼等を見くびっていたことを。

次々に紙を手にしていく生徒達。

「さてさて、何て書かれてるのかな」

火埜も難なく紙を手にし、落ち着いて読める場所で紙を広げた。

数秒間紙に書かれている字を凝視していた火埜。

「えっと、居るんだよね？」

「よっしゃ、運が良いぜオレは」

「中々に有望そうだな君は」

爆豪は自身の背に乗るヒーローと共にゴールを目指していた。

爆豪のお題【昨年度ビルボードチャートトップ5以内のヒーロー】
に対して憤慨していたその時、彼の目の前をたこ焼き片手にスタイ
リッシュに通りすぎるヒーローを見つけた。

今日もきつちり決めた髪型にジーンズ生地ヒーロースーツ。

昨年度ビルボードチャートNo.4。

日本ヒーロー界のお洒落番長。

「ベストジーニスト」が数人のサイドキックと共に歩いていた。

「踏ん張れ静空、お前さんなら1位になれる」

「はい、先生」

その声に爆豪とベストジーニストが下を見ると物凄い速さで爆走
している女生徒がいた。

背中に小柄な老人を背負い、爆走する度に胸部装甲がバルンバルン
揺れている。

「あんのバカ、なんで今日も『サラシ』だったんだよ」

「ほう、凄い速いな彼女」

爆走女子と化した緑谷は数分前のことを思い出し出していた。

紙を開いてお題を確認した緑谷、そこには「オーバー60のヒーロー（リカバリーガールを除く）」と書かれていた。

そもそもそんな高齢になっても活動しているヒーローの方が珍しく、久々にネガティブモードになりかけていた時だった。

「餡子とカスタード、抹茶クリームそれとハバネロクリームのやつをくれ」

聞きなれた声に顔を上げる。

「ぐ、グラン・トリノ!？」

「おやあ、静空じゃないか。どうした?」

目の前には自身の師の1人であるグラン・トリノが弟子達の好物の中身が詰まったたい焼きを袋一杯に買っていた。

事情を聞いた最近孫のように可愛がる緑谷のために袋に詰め込まれたたい焼きと共に現れたのだった。

緑谷のダッシュのタイミングに合わせて自身の個性で勢いをつける爺馬鹿ぶりである。

「付き合っていただき申し訳ない」

「ふん、そのお題でオレが近くにいたのは偶然だ」

轟は出店通りの外れで1人黄昏ていた。

「こんなお題でOK出してくれるヒーローなんかいるかよ」

轟の右手に握られた紙、そこには「見た目が敵っぽいヒーロー」と書かれていた。

頭を抱え落ち込む轟に人影が被さった。

「おい、貴様何をしている。まだ競技中だろ」

轟が顔を上げると「ヴィランっぽい見た目ヒーローランキング」第3位にランクインする堅物な性格と顔の怖さから、子供によく泣かれているギャングオルカが社員を引き連れて歩いていった。

オルカは轟のお題を見ると。

「オレで良ければ連れていけ」

そして現在。

氷のスロープを二人で滑りながらゴールを目指す轟とギャングオ

ルカ。

「中々に涼しいなこれ」

「本当にありがとうございます」

『おうつと、いち速く戻ってきたのはやっぱりA組か』

『あいつら運も良いからな』

『しかし、顔ぶれが凄いな』

3組が同時にコールテープを切ろうとしたその時だった。

一筋の光が3組に追い付いた。

『Why!?なんだ今の光は?』

『なるほど、確かにそれなら最高速度で翔んでこれるわな』

『ほう、初めて見るが中々に美しい姿だな“火の鳥”というのは』

―遡ること数分前―

「えつと、居るんだよね?」

火埜が獲得したお題、それは「同科の上級生」だった。

人数の関係上、3日に別けて行われる体育祭。

今日出番の無い上級生は余程のことがない限り自宅にいるため探すのは困難だと予想された。自身のくじ運の無さに思わず天を仰ぐ火埜。

そんな火埜は後ろからの衝撃に思わず転びそうになった。

「あは、やっぱり御姉様だ」

「ああ、もうその呼び方で定着しちゃったんすね」

火埜の背中にはつい最近知り合った波動ねじれが私服姿で嬉しそうに抱きついていた。

「波動さん、そんなに急いでなにかあった?」

「もう、ねじれったらそんなに急ぐと危ないよ」

「あ、ミリオ先輩どもす。あとはじめまして1年の火埜翔織です」

背中に波動を引っ付けたまま(多少の役得を感じつつ)挨拶する火埜。

「なんだ、火埜君を見つけたのか」

「あら、後輩の子。はじめまして3年の甲矢有弓よ」

話を聞くと3年生の有志で私服警備をしていたところ、何かを発見

した波動が全力ダッシュしてしまっただけでファットガム御用達の焼き屋に捕まった天喰を見捨てて追い掛けたところだったらしい。「で、お題が『同科の上級生』と言うわけでここまで探しにきたと」

現在、火埜は出店通りを抜け校門前に来ていた。グラウンドから最も離れた場所でふてくされていたと言うわけだった。

「はは、今年は無理っすわ。裏技使えばともかくその裏技に耐えれそうなおーラ系の個性持ちの先輩なんて早々見つかりっこないっすわ」
遠い目をしながら喋る火埜は完全に諦めていた。

その後ろで物凄く良い笑顔をしている波動に気が付かない程に。

「御姉様、私の個性オーラ系」

「マジで!?!」

そこからの行動は速かった。

木陰に逃げ込み下半身の体操着を上半身の体操着の中にいれて袋状にして地面に置く。

そして、高校では誰にも見せたことのない完全変異し緑色の雷を纏った黄色の火の鳥となった。

「はど、んん。ねじれちゃんオレの体操着持ってくれた」

「大丈夫」

火埜の天候の焰には何個か裏技的な要素が存在している。

その一つが「オーラ系個性持ちへの効果の伝播」である。

何らかの形でオーラを操れる個性持ちの個性に自身の発現している天候の焰の効果を伝播させ天候の焰にその存在を火埜のと誤認させることができる。

これにより、火の鳥と化した火埜に触れることができるのである。

そして、今全長5mは有りそうな火の鳥に可憐な美少女が乗ったなんと絵になる光景が出来上がったのである。

「それじゃ、ねじれちゃんをお借りします」

「いってきま〜す」

「いってらっしやい」

甲矢の声を合図にオーラを活性化して後ろに放出し音速を超えて

上昇する火埜と火埜のオーラに守られぬくぬくとしている波動が出来る上がった。

グラウンドを目視する火埜。

「ねじれちゃん、辛かったら言っただけね」

「御姉様、私上級生だよ？後輩のために頑張れる先輩だよ？」

「上等!!」

落下とオーラによる加速の結果突き刺さるようにゴールにたどり着いたのだった。

その結果。

『4人同着、一位はA組の緑谷に爆豪、火埜と轟だ!!』

「御姉様、おめでどう」

「ねじれちゃんのお陰だよ」

ジャージを着た火埜と満面の笑みの波動。

そして、嬉しそうに「抱き合う」2人。

「」「ヒノクン、チャットオハナシシマシヨ」「」

その後ろには誰もが見惚れそうな笑顔をした極寒のブリザードを纏った5人の少女達がいた。

「(オレ死ぬの?)」

『さて2回戦、例年で言えば騎馬“戦”なのだが』

『A組の奴らが準備しまくり過ぎのせいで“こいつら組ませたらダメだな”と言う判断のもと騎馬“レース”を行うことになったぜ!!』

『ルールは1回戦で走ったルートを騎馬を組んで走ると言うものだ。無論、騎手が巻くハチマキをとられた騎馬はその場で失格となる。後は騎馬への“直接”的な攻撃はノットヒーローリアクションとして減点の対象とする』

『なお、組み合わせに関してはくじ引きとさせてもらうからな!2回戦出場の40名は電光掲示板を見てくれ』

MC席の3人の説明で2回戦に進出する生徒達は電光掲示板を見る。

そして、数分後。

「ども、ヒーロー科A組の火埜翔織です」

「B組、柳レイ子」

「普通科、心操人使」

「サポート科の発目明です」

選出されたメンバーで固まり作戦を練っていた。

「その前に火埜、柳」

そしていざ作戦を練ろうとした時、心操が手を上げて遮った。

「この前は、悪かった」

そして、深々と頭を下げたのだった。

「あの時のオレは、努力しなかった自分を正当化したくて食って掛かっただけだとあの後考え直した」

「で、なに?許せとでも?」

そんな心操に冷やかな視線を向ける火埜。

「いや、許してもらおうとは・・・正直考えている。でも、それも結局オレが楽になりたいからだと思ってる。許してもらえなくて構わない、だけどオレ、ヒーローになりたいんだ。そのチャンスをおレにくれ」

そう言つてまた深々と頭を下げる心操。

「あ、それならあたしも」

その姿を見てか柳が火埜に向き直る。

「あの時、ウチの^{B組}バカを^{物間}止めなくてごめんなさい。あなたに言われたこと、間違つてなかつた。許してもらえると有り難いけど、それはあたしらのワガママだから。けどせめて、この競技の間は力を貸して欲しい」

柳もまた頭を下げる。

放課後の一件以来、B組内でも冷静さを取り戻した面々が非常にやるせなさを覚えていた。

騒ぎの発端である物間ですら言われた内容を考え、反省しているようであつた。

B組のA組に対する態度は担任であるヴラッド・キングの反骨精神を鍛えようとする教えと、物間のような一部生徒のぶっ飛んでしまった思考の悪い方向への化学反応のようなものだった。

元々、そこまで深入りしていなかつた拳藤筆頭の穩健派だつた柳。

しかし、あの言われた言葉が彼女達に突き刺さつていた。

「『そんなこと』 どうでも良いです！ 一番の人、あなたに是非お話があります」

そんな二人の態度など自分には関係無いと、別の意味で目を輝かせた発目は火埜に顔を近づけた。

「おい、サポート科！ オレ等のことがどうでも良いってどう言うことだ」

発目の放つた言葉に対して、心操は掴みかかろうと腕を伸ばした。

「落ち着け、心操」

しかし、その腕は火埜に抑えられてしまった。

「発目、君のことはパワーローダー先生から聞いている。自分の言いたいことをちゃんと伝えられないと君のカワイイベイビーたちも真面に扱ってもらえないぞ」

火埜の言葉に少し考える素振りを見せる発目。

そして数秒後、彼女の口から改めて言葉が紡がれた。

「あなた方が許されたいとか、ヒーローになりたいとか、私にはどうでもいいことです。私は私のドっカワイイベイビー達を少しでも企業さんにアピール出来るならあなた方の状況状態、そんなことどうでもいいです！」

えっへんと胸を張る発目。

「(言いよつたなあ) まあ、発目の言うことも一理あります。所詮ライバル、一時の共闘、次の晴れ舞台に立つために嫌でも手を結ぶしかない」

そんな発目に多少引き気味になりながらも火埜は心操と柳に話しかける。

「お互いの利害のために手を結ぶのに、仲良しこよしである必要はないと思いますよ。まあ、あの時のことは許す気無だから結果で示してください」

火埜の言葉に俯く二人。

「あ、ミッドナイト先生に質問あったんだ。ちよつと行ってきますね」
そんな二人に興味ないと言わんばかりにミッドナイトへと歩いていく火埜、その後ろ姿を見ながら少女にしては珍しく思いが声に出ていた。

「彼は、優しいですね」

発目のその言葉に心操と柳、二人は同時に顔を上げて発目を驚いた顔で見っていた。

「彼を見ていて思ったのですが、そこまで他人・・・という表現は間違いですね。いうなれば心理的な線の外側にいる存在に興味は薄いのでしょうか。」

ですが、そんな彼があなた方が浸っている罪悪感に対して理解を示した上で、あなた方がこの競技で自分のパフォーマンスをベストに出せるように取り計らってくれたのですよ。そんな彼が優しくない筈ないじゃないですか」

発目明という少女は自分と自分の発明品ペイペイにしか興味を示さない自己中心的な人間である。

そんな彼女だからこそ、火埜翔織という歪な存在のあり方に気が付

いてしまったのかもしれない。

「おまたせ。ん？どうしたの？」

「何でもありません！それで一番の人、どうするつもりですか？」

「間違えても良いから名前と呼ぼうね。取り敢えず互いの個性の把握から始めましょう」

発目の言葉に言い返すことも出来ず、かといってその言葉が間違っていると言ったことが出来ない。

「心操、手から血が出てるけど怪我してたのなら言いなよ」

そんな中、火柱にかけられた言葉で心操は自分の手を見る。

強く握り混んだからか、爪により傷ついた手が発目の発言を肯定しているように見えてならなかった。

「いや、競技前に疲れさせるわけには」

「その怪我のせいで負けた、何て言われたくないんだよ。君“以外”の人のために治させてもらうよ」

綺麗に黄色く輝く炎に照らされ傷が治っていく光景に一番目を輝かせたのは発目だった。

「これが噂に聞く“天候の焰”ですか！実物は噂以上に綺麗なんですねー！」

「見世物じゃねえぞ」

「うらめしい」

なんやかんや和気藹々としてきたチームに意を決したかのように心操が話しかけた。

「俺の個性は……」

後日、この4人が仲良く歩く姿が目撃されるのだが、この時は誰もそうなるとは思っていなかった。

『さあ、EVERYBODY待たせたな！第2回戦騎馬レース各チーム騎馬が組上がったようだな』

『今回はあくまでレースだが、騎手のハチマキを狙うのか、走り抜いて順当に順位で本選出場を目指すのかそこも見所だな』

『騎馬各々の作戦がどう機能するかと言うことだな』

スタート地点には各々のスタイルで騎馬を形成するチームがス

スタート遅しと並んでいた。

スタンダードな形の騎馬もあれば、それアリ？と言われそうな形の騎馬もある。

『なお、スタートラインに立っている騎馬は審判のミッドナイト先生が許可したモノばかりだ』

『事前に聞きに行く奴らが多かったな』

『どんなことでも情報収集は大事ということだ』

『Hey!! Men, s!!準備は良いか？良くなくても開始の時間だ!!』

『会場のAUDIENCEも上げてきな!!そんなじゃ、いくぞ』

『3』

『2』

『1』

「ヨイ、ドン」

ミッドナイトの掛け声と振り下ろされた鞭の音に反応してブザーの音が鳴った。

そのブザーの音と同時に頭一個抜きでた騎馬があった。

『おっ、初っぱなから翔ばしているのは飯田たちか!!』

飯田天哉を先頭に両脇にB組の回原旋が脚を旋回させ、鎌切尖が足裏から生やした刃物でスケートのように地面を滑る。

その上には。

「いけえ葉隠号、1位でゴールじゃあ」

A組ではお馴染みになった見えるようになった美少女葉隠透が身体でリアクションをとっていた。

しかしその姿は顔以外の上半身が完全に透明化しており何かやらかすき満々であった。

「後続よ喰らえ、葉隠フラァーシュー!!」

上半身の透明化を利用してレンズのように集光させた光を後続に向けて放つ葉隠。

後続が光に目が眩んでいるようだが。

『おい、トラックの一部焼き切れてないか?』

『やり過ぎだあのバカが』

『個性の応用が上手いな』

飯田組改め葉隠組が一步先んじたレースで最後尾につく騎馬があった。

「おい、火埜本当に大丈夫なんだろうな」

心操が不安げに騎手として跨がる。

「大丈夫ダイジョーブ、オレの性格把握してる勝己とシズ以外はこれでいけるし、その二人も騎手やってるから直接対応できないし」

クケケケケケケケとあの日放課後に浮かべていた悪どい笑顔を浮かべる火埜。

「柳さんは大丈夫？」

火埜の右後方にいる柳に視線を向ける火埜。

「うん、心操思ったより軽いし私は発目さんのサポートアイテムの陰で問題ない」

「私のドツカワイイベイビーにお任せください。鳥くんこそ問題ないですか」

柳のとなりに位置する発目、彼女の持ち込んだアイテム郡は奇抜な物が多かったが、火埜・柳・心操の提案により上手く効果を発揮したことにより今回の作戦を執行することになったのだった。

「兎に角、半周ぐらいに仕掛けるからその時は全員よろしく。あと発目はゴメン」

「クツ、第48子の勇姿。私は忘れません」

「発目さんドンマイ」

「しかし、飯田とか言う奴速いな。インゲニウムみたいだ」
「実弟らしいよ」

後続にありながら余裕そうに走り続ける心操組。

その姿に火埜という存在を何となく把握しているA組メンバーは奇妙さを覚えていた。

そして、幼馴染みの爆豪と緑谷は。

「(絶対になんか仕掛けてくるな)」

その底意地の悪さを知っているからこそ、未だに静かに戦局を後ろ

から眺めているという事実には、不気味さを感じるようになった。

しかし、その不気味さを頭を振るい外に追い出し、自分達の状況を再確認することで忘れ去ることにした。

「さてと、一発目そろそろかな？」

火埜の視線の先には右腕の調子を確認する轟がいた。

「悪いな、オレ達は本選にいかせてもらうぜ」

轟はそう呟くと右腕を振るいトラックと騎馬を凍らせにきた。

「はいドンピシャ!!」

その予備動作で轟のアクションを察知した火埜も、最後尾からトラックを凍りつかせ始めた。

「チツ、火埜の野郎」

「予備動作が分かりやすいんだよ轟は」

互いにトラックを凍らせたことで騎馬が動けなくなった。

『おい、騎馬への直接攻撃はルール違反じゃないのか?』

『ヴラド、轟と心操の行動を見てみる』

『あ、アイツ等近くのハチマキを奪いやがった』

『ハチマキを取るための妨害行動だと言いたいんだろう。氷もさほど厚く作ってなさそうだしな』

ルールの過大解釈はA組では常套手段なところがあるしなとマイクに拾われることのない程に小さな相澤の呟きは何故だか誇らしげだった。

轟と火柱による凍結妨害が起きた一方で、スタート地点でも問題が起きていた。

スタート地点で一つのチームがスタートと同時に騎馬が崩壊し、早々と戦線離脱していたのだった。

そのチームはスタートの合図と同時に騎馬が離散し、騎手を落とすという行為に及んだ。

そして、そこから一切組み直そうとせず、レースの状況を見ているだけだった。

「おやおやおや、どういふことかな？説明してくれないかい」尾白君

トラックに落とされた騎手である物間を冷たい目で見るのは名指しされた尾白だった。

「別に、オレはお前が本選に行けなくなるなら、オレが本選に行けなくなっても構わないだけだ」

普段の朗らかでクラス内でも潤滑油のように人間関係を円滑に進めようとする、緑谷曰く『お日様の様な人』である尾白からは想像できないほどに冷酷で、容赦の欠片の無い言葉だった。

「物間、お前」あの日」以降今日までにオレ達のクラスに謝罪なりなんなりしに来なかったよな」

「それが何だい？僕は」あの日」のことを恥じてはいない！実際調子に乗っていたじゃないか」

物間と尾白の言い争いを眺めているのは尾白同様に物間に対して冷たい視線を向ける砂藤と、顔を青くし視線を下にし俯く泡瀬。

「USSJで火柱たちが居なかったらオレは死んだかもしれない。USSJ事件の後、何もできなかったオレは自分を責め続けた。そんなオレをクラスの皆は何も言わないでくれた、そして」あの日」オレはお前を言い負かしてくれた火柱に救われた。アイツにそんな気は無かったとしても救われたんだ。だから、」あの日」オレの恩人を馬鹿にしてくれたお前を許す気はない。火柱が言ってた通り、お前はただ

自分の我儘が通らないと喚いているだけの子供だ。そんな奴を本選に行かせるくらいなら、オレは喜んで巻き添えで失格になってやる」その瞳には確かな覚悟の焰が灯っていた。

尾白は入学当初から火焚や爆豪、八百万に蛙吹といったクラス内でも比較的に来た生徒に助けられてきた自覚がある。

放課後訓練も断らずに自分の時間を割いてくれる、そんな良い奴の足を引っ張ってしまったにも関わらず、その良い奴は笑顔で自分の成長を喜んでくれていた。

尾白は無意識のうちにクラスメートを守る、ヒーローを守れるヒーローを目指すようになっていった。

目をつぶれば思い出される。

クラスのムードメーカーであり、最近誰が見ても内面から変わった芦戸。

クラスでも裏方のようにクラスメートを見守る皆のお姉ちゃんとなってきた蛙吹。

実直に真つすぐに時々暴走するが誰よりも正しくあろうとする飯田。

名前に反して野心家で、それでいて誰かのために人一倍力を振るえる麗日。

恐らく入学から一番伸びた一番勤勉で仲間想いな上鳴。

漠漠煩いが自分の信念を一切曲げず只管目標へ向かう切島。

照れ屋だが、最近は頑張ってクラスメートと喋ろうと自分の殻を破ろうとしている口田。

自分のしようもないプライドに付き合っつて失格になる道を選んでくれた砂藤。

クラス内でも精神年齢が高く、成熟した思考を持った障子。

本人は自覚ないだろうが、一番女の子しているのに誰よりもヒーローであろうとしている耳郎。

歳相応にバカ騒ぎを共にしながら、多角的に物事を捕らえることのできる瀬呂。

ダークシャドウの影響か、言い方がいちいち仰々しいが、誰よりも誠

実な常闇。

最近クラス内で弟キャラが定着してきた努力を惜しまない天才の轟。

入学以降一番変わった見えるようになったことでさらに明るくなつたもう一人のムードメーカー葉隠。

嫌そうな顔をしながら事細かに体の使い方と認識のズレを教えてください爆豪。

?くさい笑顔が少なくなり、自分たちのために自分の財産を惜しげなく提供してくれる火埜。

一緒に走りながら最後まで完走したら自分のことのように喜んでくれる緑谷。

苦手な教科の宿題で何処が解らないか悩んでいるとそんな自分に30分も付き合ってくれた八百万。

エロいことに目が行きがちだが、意外と周りを見て行動している峰田。

尾白は自分が気が付かないうちに誰よりも今のクラスが好きになつていた。

そんな自分の好きなクラスメートを目の前の男は馬鹿にしてくれた。

恐らく人生で初めて他者に対してここまで怒りを覚えたことのない尾白は初めて制御しきれない怒りを身に滾らせていた。

そんな尾白に話しかけようとした物間の顔の真横をものすごいスピードで何かが通り過ぎ、トラックに突き刺さる。

それは放課後特訓とイワさんのエンポリオの影響で長く柔らかくより強くなった尾白の尻尾だった。

「これは純然たる八つ当たりだ。だけど、今回はオレの八つ当たりに付き合ってもらおう。一步でも動こうとすれば、一言でも喋ろうとすれば、容赦なく気絶させる」

尾白猿夫、蛙吹梅雨と対をなすA組の良心にしてストップパー。

そんな彼のマグマのような怒りに触れてしまった物間、彼はこの時初めて顔色を青く染めていた。

「お、尾白の奴怖!？」

「“あれ”は明らかにオレの伝え方に問題があった、教師として面目ない」

「それに関してウチの奴らは受け取って曲解した奴が悪い、ということとで落ち着いている。どんなヒーローにもアンチが出るのは仕方ないが、自分の発言に責任を持ってないなら喧嘩売ると言わせてもらおう」

『さて、あんだだけ派手に妨害した心操チームが未だに最下位を走つてるのが不気味だな』

『他のチームもそれに感じているからか、そこまでスピード出していないな』

『さて、そろそろ駆け引きが始まる頃合いだな』

「そこどけそこどけオイラが通る!!」

突如トラックに響く峰田の声。

しかし、どの騎馬にも彼の姿は確認できなかった。

ただ一点、一人トラックを走る障子の姿が異様に見えた。

『おうっと、1A障子の奴騎馬組んでねえけどあれいいのか?』

『マイクよく見ろ、アイツの複製腕で覆われた背中を』

『まさか、1人騎馬で3人も運んでいるのか!?!』

「ノコノコノコ、出来たよ大きな椎茸」

「そこにオイラのモギモギをトッピング」

「任されよ、ツインインパクト」

障子の複製腕による装甲から各騎馬に向けて放たれる妨害アイテムと化したモギモギ付き巨大椎茸。

B組の小森の個性“キノコ”により産み出された巨大椎茸(実食実験済)に拘束妨害という意味では最大の武器となる峰田のモギモギがトッピングされている。

しかも、投げる際に同じくB組の庄田の個性“ツインインパクト”を受けてることで思わぬところで加速する。

これにより何組かの騎馬は靴を脱ぎ素足で走っている。

「うっしや、思った通り峰田の妨害が始まった」

「なんか怖くなってきたんだけど、この予測的中率」

「火埜の思考速度がうらめしい」

「第14子の実装実験が出来るなんて夢のようです」

「と言うわけで、皆には霧幻むげんの世界で遊んでもらおうか」

心操チーム騎馬の火埜はそう呟くとおもいつきりトラックを踏みつけた。

その踏みつけた足から藍色の霧状の焰が放出され、トラックを覆い尽くす。

『おうつと、また最後尾の心操チームが何か仕掛けてきたぞ!』

『トラック全体を藍色の焰が覆っていくな』

『しかし、何やらすぐに晴れちまったぞ!』

『ん、おい小森たちのあのトラックあんなに撒かれてたか?』

藍色の焰が消えたトラックにはおびただしい量のモギモギ地雷が設置されていた。

「おかしいぞ!? オイラたちあんなに準備してないぞ!」

「のこ!? どういうこと?」

「まさに奇々怪々、霧に包まれたようだ」

「……! やられた、火埜か!」

放課後訓練において火埜の教導役になることの多い障子はクラスでは数少ない天候の焰の特性を全て知る存在であった。

『火埜曰く「霧は幻、その目に写る全てが真実とは限らない」つまり、突如増えたトラックは火埜の作り出した幻影ということだ』

『でもよイレイザー、あれじゃ心操チームの騎馬も巻き添え食うぞ』

『火埜は自身の焰をオーラとして感知できる。したがってどれが本物でどれが幻か判断がついている』

『なるほど、最後尾に位置すればこういった妨害に対しても手が打ちやすいということか』

『それに加え、ランダムになるようにばらまかれたトラックの位置を峰田チームが把握する前に決行したからな。誰も見分けがつかない上に騎馬の障子にはトラックはくっ付くからな。見分けがつかないならゆつくりと進む以外にアイツ等には方法がない』

『さらに付け加えるなら、小森のキノコは時間がたつと消滅する。つまり、峰田のモギモギが直接トラックと触れてしまうとトラックにくっついて動けなくなってしまう。他のチームも条件は似ているが、既に靴をさらにひどいと靴下まで脱いでいる騎馬が存在している。そのチームは次踏めば確実に動けなくなってしまうからより慎重に先に進まねばならない』

『かぁー、相変わらず頭の回転が早いな』

レース中盤、各チームが恐る恐る進む中、ジワジワと差を縮め始める心操チーム。

『まあ、手がないわけではないんだがな』

相澤の呟きを合図にしたかのようにトラックで爆発音が聞こえた。

「オレは鉄の漢。これしきの爆発じゃへこたれねえぞ、どんどんやれ爆豪!!」

「お前に言われなくてもガンガン逝くぜ」

騎手の爆豪の爆撃で進行ルートのもぎもぎトラップを全て吹き飛ばしていく爆豪チーム。

騎馬の先頭にはB組の鉄哲が個性を発動して金属化し、爆豪の爆破をもろともせず突き進んでいた。

「いぞ鉄哲、それでこそ漢だ!!」

個性により硬化した切島も騎馬の右後ろから声を挙げている。

「もうやだ、こいつら怖いよ」

「ビビってんじやねえぞバリア野郎。死にたくなかったら気張ってバリア張れや」

1人だけその爆破地域にて泣き言を呟く円場。

耳聴く爆豪がその弱音を叩き潰していた。

「ああ、クソ。走りながらだとやっぱ疲れるなッ!」

爆豪が爆破をの兆候を見せると瞬時に息を吐き、自分を守る壁を造る円場。

『まあ、あれだ。どれが本物でどれが偽物か解らないなら極論全部ぶっ壊して進めばいいだけだ。どうせ邪魔なトラップなんだからな』

『HEY! 相変わらずCrazyな漢だな爆豪』

騎馬レースは終盤に差し掛かり全ての騎馬から何かしらの妨害を受ける心操チーム。

「穴田君、もっと加速しても、いや寧ろ本気で加速して、お願い」

「委されましたぞ緑谷氏。穴田獣郎太本気で加速していきますぞ!! 麗日氏、まだ大丈夫ですか?」

「うん、静空ちゃんも鱗ちゃんも軽い方だからまだ大丈夫。鱗ちゃん後は?」

「妨害は止んだようだな。しかし、安心してしていると足元を掬われるぞ、気を引き締めねば」

B組の穴田が個性を発揮し巨体化し手足を用いた一人騎馬で疾走、3人騎手となった緑谷のデコピン空気砲と鱗の鱗マシンガンで狙い撃ち、そんな2人の重量を麗日の個性で浮かせているので実質一人分しかない重量も手伝って、穴田の速度は順調に上がっていった。

「八百万さん、大丈夫ですか?」

「ええ塩崎さん、このくらいで根をあげてたらコーチ2人に怒られてしまいますわ」

「やっぱりA組の放課後訓練混ぜてもらえるように交渉しよう。芦戸周りはどんな感じ?」

「ヤオモモのトリモチ弾のばら撒きは順調だけど、凍らせたり燃やしたり抉ったりで対応早いよ」

八百万がトリモチランチャーと弾倉を創造し、自身から切り離さず繋げたままであることではほぼ無限にトリモチ弾を撃てるようにし、芦戸が騎手としてそのトリモチランチャーをあえて狙いを定めず撃ちまくることで妨害に徹し、自分のへの攻撃はA組ではずば抜けている体幹で危なげなく避ける。

そんな芦戸でも避けられなさそうなモノに対してB組の塩崎が自身の個性であるツルを利用した縦横無尽な鞭で妨害、先頭騎馬である拳藤は自身の個性を生かし巨大化させた拳を安定した足場として芦戸のサポートに回っていた。

轟チームは、轟の右腕に霜が降り始めたことで轟の氷結妨害は一時中止となった。

しかし、騎馬である瀬呂のテープをトラックに張り付けることでスリップさたり、上鳴が所々で放電して他のチームの騎馬の失速を図り、取蔭が自切した左目と右耳で周囲の状況を確認することで広範囲の情報を収集しトップに迫る加速をしていた。

「すまん、もう少し大丈夫だと思っただが」

「やっぱり火埜の氷結の影響かよ。薄々解ってたけどアイツ意外と性格悪いな」

「ウエる前にケリつけないな。ウエツたらマジでオレ足手まといだし」

「いやあ、A組凄すぎでしょ!?!でも、噂の火埜君は思いの外イイ性格しているようだね」

無論、爆豪チームは爆豪の全方位爆破と心操チームへのピンポイント爆破で一位の座を死守していた。

「オラ、気合入れろ翔織のことだギリギリまで気を抜くんじゃねえぞ」「任せろ爆豪、どんな攻撃だろうと鋼鉄の漢であるオレに防げない物なんてねえんだよ」

「右側からの攻撃ならオレに任せろ、火埜からもお墨付きを頂いた最高硬度で耐えてやるぜ」

「馬鹿なお前ら、煽るな頼むから落ち着け。うわ後ろの連中と目が合ったマジで怖ええ」

全てのチームが全力を出し切るために最後の妨害行為を着実に進めていく。

示し合わせた訳ではないだろうが、それぞれのチームの心操チームへの妨害が重なることなく起きていることで息つく暇も与えない妨害が行われている状態に陥っていた。

そんな中、件の心操チームはと言うと。

「いやあ、解ってたけど容赦ないなみんな」

「二お前（火埜、とり君）が原因なんだけどね」

どのチームよりも妨害を受け、心操チームは未だ最下位を走ってい

た。

凍結による直接的な妨害に始まり、幻影による精神的に疲労させられる妨害。火埴による妨害を受け続けた各チームは足止めと言うよりは、スタミナの少ない火埴の疲労を誘発させるような妨害を行うようになっていった。

しかし、彼らからは最下位に位置することへの悲壮感は一切なかった。

「さてと、そろそろ最終コーナーなんだけども3人とも準備はいいかな」

「ええ、お任せくださいと君。そしてさようなら第14子、貴方の雄姿は忘れません」

「うらめしい、私もヒーロー科なんだから任せて」

「ココまでお膳立てされてダメでした、なんてカツコ悪いこと絶対しねえ」

4人は諦めた訳でも、ギリギリ入賞を狙っている訳でもなかった。

予選1位、自分たちが確実に取れると理解している顔だった。

『しかし、さすがの火埴も打つ手が無くなっているな。アイツの個性の場合、出力調整しても直接的に被害が出てしまうことを考えると最終直線での加速が勝負となるか』

ブラドの冷静な実況に多くの観客も納得している中、それはそれは嬉しそうな声が聞こえてきた。

『違うぞブラド』

最近、2年生からの信頼も得て生徒内でも人気が上がっている教師内認識『親馬鹿』となっていることに気が付いていない男、相澤の声がやけに静かに響き渡った。

『アイツは状況判断能力という意味でもウチのクラスでは上位に入る。そんな奴が黙っているだど？こういう時のアイツこそ本当に怖いんだ』

『オレらがまだまだイワさんここで世話になってた頃からだからな。あいつマジで良い子ちゃんぶってるけど、あの底意地の悪さはマジで恐怖だぜ』

『確かにそろそろ最終コーナーだというのに前半に比べてあまりに静かすぎる。同じチームの騎馬も何も焦っている様子はない。しかし、先ほどから周囲の妨害が勢いを増している上に他のチームの注意が彼らに向いてきているぞ』

実況室の男3人の言葉を聞きながら自称「翔織の偉大なる姉」であるミッドナイトは頬を染め上げ未成年にはけして見せられないドエロイ顔をしていた。

「ああ、もう、あの子ったら本当にイイ性格してるじゃない。その為の準備も済んでるようだし」頑張れがんばれ翔織」

言葉に出してしまった弟分への応援、その時の彼女の顔を偶然目にしたカメラマンはとてつもない後悔に襲われたことを後に同僚に話していた。

色っぽいことに定評のあるミッドナイトの聖母のような慈愛にあふれた笑顔をカメラにおさめることが出来なかったのだから。

「(おかしい、翔織ならそろそろ何か仕掛けてきても可笑しくないのに)」

「(静かすぎる、トー君の気配はするし意識を割かなきゃいけないからトー君のチームの動向を皆探っているのに)」

「(まるで何かを狙っているかのような、なんだこの寒気は。オレ達は何を見落としてる)」

トップ集団、というか心操チーム以外の騎馬がラストスパートで加速する。

意識を割いているが確かに存在している心操チームとの騎馬2つ以上の差が、彼らに無意識な油断と火柱が刷り込んできた何をしでかさかわからない警戒心をもたらした。

「おいおい、普通科いるチーム相手に大人げないな!!やっぱヒーロー科ってただの目立ちたがりの集まりじゃないか?」

僅かに警戒に割いていた意識に心操の言葉が突き刺さる。

その、自分たちを貶す物言い。

思い出される、あの日の放課後。

火柱によって鎮静化されたがあの場合にいたヒーロー科生徒全員に

打ち込まれた屈辱という楔に全員が「反応」したしまったのだった。全員が思わず心操チームへと向き直ってしまった。

そして、そこから全員が最後に記憶したのは悪戯が成功した子供の様な笑みを浮かべる心操に珍しくニンマリと笑う柳、その名と同じく華やかに明るい笑みを浮かべる発目、その3人を載せる台車を引つ張る緑色を纏い淡く黄色に発光する雷の鳥だった。

爆豪チームの騎馬である円場にとって幸運だったのが自分の個性が「自分と共に移動するバリアを張る」のではなく「息を吹き出した分に応じた大きさと硬度の、円形かつ透明の壁を作り出せる」というものだったことだろう。

突如意識が遠のいたと思った数秒後、円場は自分が作り出した壁に頭をぶつけた。

そして、意識が覚醒したのだった。

「え、皆止まって『おうっとマジか!!』」

そんな円場の耳に聞こえてきたのは実況のプレゼント・マイクの声だった。

『毎度毎度、ENTERTAINMENTしてるな翔おツ、火柱の奴』

『確か、彼は普通科の心操人使だったか』

『だから、毎年言っているだろう。あの試験方法〃じゃ有益な個性持ちを選別することは難しいと。戦闘よりも避難誘導や敵の無力化こそヒーローの本質だろうに。あの試験はやはり合理的じゃない』

円場は事態についていけずゴールを見た。

彼の目に飛び込んできたのは車輪が外れ所々ボロボロな台車。

そして騎馬を解き四者四様の状態の心操チームの面々だった。

「うげえく、しんどい。もむり」

息も絶え絶えにボロボロの台車にもたれ掛かり全身から疲れ切っている事が伺える火柱。

「お、おい大丈夫か？ た、タオルと飲み物取りに行っていないのか？ いや、それよりも本当に大丈夫か？」

そんな火柱を心配そうに見守りどうすればいいかオロオロしながらも取り敢えず背中を擦り労る心操。

「やりました!!第14子の折り畳み式アシスト付き台車がやりましたよ!!イコさん」

「レイ子」ね。でも、こんなに上手く嵌まるなんて最初聞いたときはどうなるかと思ったけどね」

そして、互いに手を取って嬉しそうに飛び跳ねている発目と柳がいた。

「おい、2人とも取り敢えずウチの騎馬を退かして労ってやろうぜ」

「そうでしたねヒト君!!とり君歩けますか」

「むり」

「お疲れ様火埜。あたしの肩に捕まって」

ゴールラインを越え和気藹々とした雰囲気の中、心操チーム。

『てな訳で見たかAUDIENCE!!第2回戦 激走!!騎馬レース 1位は心操チームだ』

「ほら火埜、スポドリ飲めそうか？」

「心操、流石に“この状態”の火埜に直飲みは無理だよ。はい、ストロー」

「柳、有り難い、有り難いんだけどまずは“この阿保”退かして」

「はいはいはいはい、細身ですけどかなり筋肉質ですね。じっくり後から見させていただきましたけど天候の焔で覆われた箇所は肉体系は天候の焔にコンバートされるようですねその為にオーラに触れるような方でなければトリ君は掴めないとなるほどなるほど」

「発目、抱きつくな。てかなんで限りなく弱めた雪の焔使ってるのに抱きついてくるのさ」

「良いじゃないですか減るもんじゃないですし。トリ君今冷たくて気持ちいいですよ？それに、私の身体は男子的には欲情する体つきをしていると自負しておりますのでトリ君にとつてもWinWinではないですか？」

「発目、女の子はそんなことしちゃいけない」

「イコさんも中々に素敵なたつきしてらっしゃるようですよしどうですか？トリ君今冷たくて気持ちいいですよ？」

「……、うらめしい」

「何がうらめしいの!?柳も抱きつくくな!!助けて、心操!!」

「オレ、フツウカ。ヒーローカ、ハタタナイ」

「見捨てられた!?!」

1位入賞をはたし、未だに全員の再起待ちの最中の光景。

それはもちろん、敗退した1年生も見てるわけで。

「「火埜!!てめえ、そこ変われや!!」」

思春期男子の魂の叫びが響くが、その魂の叫びを発した生徒は例外なく女子生徒からの冷たい視線がプレゼントされた。

『いやあ、しかし心操の奴スゲエな』

『トーナメントの都合で深くは言えないが、“洗脳”という悪く取られがちな個性なのに真っ直ぐに育ってくれたようだな』

『そんなことより、おい1位通過の阿保共。コントしてないでさっさとそこ退け』

「教師にも見捨てられた!!」

会場的にはそのやり取り全てがコントのようであったためか、爆笑の渦に飲まれていた。

「クソがーーーーー!!」

「うおーーーーー、オレが油断しなければ!!」

「クソーーーーー、オレは最硬のヒーローになるんじゃないのか?」

「いや、あんなん完全な初見殺しだろ」

円場が偶然とはいえ意識を取り戻し、残り全員を起こせたことで2位通過した爆豪チーム。

立役者の円場を置いてきぼりに、他3人が心情的なバーニングを引き起こしておりかなり五月蠅い。

「トー君の個性に目を向けさせ終始最下位にいつけることで自分に注目を集めることで3人が騎手であることを気づかせないようにしていたのか。それに僕らの中にあつた心操君への僅かな油断とあの時の苛立ちを利用して嵌めてくるあたり本当に性格悪いな。というかそもそも発目さんがサポート科であることを考ええなかったところにも問題があるわけだし柳さんの個性が誰に働いているかを考えれば良かったわけだ」

「おお、これが噂の高速ブツブツ」

「緑谷氏戻ってきてください、しかし運よく全員で転べたことで意識を取り戻せましたな」

「穴田君の加速のタイミングでかかったからゆっくりと前に転がっていったもんね。静空ちゃんそろそろ帰ってきて」

穴田が再加速をした瞬間に全員が洗脳にかかってしまった緑谷チーム。

加速した瞬間にかかったことで、前傾姿勢から緩やかに転んだので直に頭ぶつけた円場よりも覚醒が遅くなってしまう3位となった。

「……ああん」

「い、痛い。葉隠君、頭から手を放してくれたまえ」

「うお、葉隠の目から光が消えてる!」

「頭しか見えないからもう一種のホラーだよな」

うまい具合に洗脳が解けた葉隠チーム。

心操チームの未だ続く寸劇をゴール後に確認した葉隠はその瞳から光が消え去り、先頭の騎馬である飯田の頭に置いた手に力を込めていった。

予想外のパワーに飯田も自身の軋む頭部の音と確実に痛む頭に悲鳴を上げていた。

そんな美少女の頭部が宙に浮き、その美少女の瞳から光が消えている光景に回原と鎌切は何とも言えない恐怖を味わっていた。

「……チツ」

「おっと、轟が未っ子モードになってるぞ」

「ふてくされんなよ轟。オイ保護者ズ末っ子が拗ねてるぞ」
緑谷・爆豪・火柱

「これがA組の末っ子オーラ持ちかい、予想以上の破壊力じゃない」
洗脳の影響が解けず、出遅れた轟チーム。

騎馬リレーという形をとっていたことから鉢巻ポイントが加算され5位となった。

ただし、轟が最近会得した末っ子オーラ全開で拗ねてしまい、瀬呂と上鳴がそれを嗜めている。

その光景を取蔭が小型犬を見るかのような目で見ているが。

「……なんかねえ」

「……ですわねえ」

「ふ、2人とも目が、目が笑ってないよ!」

「おお神よ、罪深き鳥の化身をお許しください」

7位通過ながら鉢巻加点で6位に繰り上がった芦戸チーム。

4人で喜んでいたところ、心操チームの寸劇が目にとまり、笑顔のまま瞳から光が消えた芦戸と八百万。

そんな2人から発せられる只ならぬ気配に逃げ腰の拳藤。

そして、その原因をいち早く見つけていつも通り祈りを捧げる塩

崎。

「峰田、お前だけが悪いわけじゃないから気にすんな」

「ノコ、私たちもパニックになって役立たずになってたし」

「然り、これはチーム全体の結果なればこそ」

「うぐう、くそおおおお。優しくすんなよ、甘やかしてくれよ!!」

「二〃それ〃と〃これ〃は別!!」

心操チームの作戦にまんまと嵌りパニックになった峰田がモギモギを投げまくった結果、そこに障子が転んでしまい結果モギモギの餌食となってしまう、救出されるまで動けずリタイアとなった。

原因の大半ともいえる峰田だったが、慰められている最中に『あれ、小森って意外とすごい体つきじゃね』と要らんことに気が付いて色欲スイツチが入ってしまい小森の胸部に顔をうずめようとした。

しかし、庄田の個性で吹き飛ばされ障子により地面に頭部を押し付けられた結果逆さで動けなくなるという醜態をさらしていた。

「……ぐすん、あれだけカツコつけたのに」

「Oh、耳郎さん泣かないでください!!」

「まさか、轟の氷がここまでの硬度を持っているとは」

『皆ゴメン、オレガモットガンバレタラ』

「そう、オレ達の活躍はこれからだ。今回はそういった運命だったというところだ」

轟の氷結攻撃をモロに受け鉢巻も取られてしまい氷から抜け出せずリタイアとなった耳郎チーム。

競技前密かに特定の人物に啖呵を切っていた耳郎は散々な結果に涙をにじませていた。

そんな耳郎を抱きしめ頭を優しく撫でる角取。

常闇とダークシャドウは自身の成長に奢っていたことを真摯に受け止めていた。

黒色は活躍の場を得たと張り切っていたが自身の想像以上の実力者ぞろいだったA組に圧倒されてしまい個性を生かそうとすることも出来なかった事実には歯がゆんでいた。

「(むつつつつつつつつすうううううううううう)」

「けろおおおおおおおおおお」

「(オロオロオロオロオロオロオロオロオロオロオロオロ)」

「まあ、こんな時もあるって。取り合えず若の性格の悪さを知って読み切れなかったオレにも責任あるし」

全ての妨害に見事にはまった結果、完走こそしたが最下位だったうえに鉢巻を心操チームに取られてしまい敗退となった小大チーム。

普段の無表情からは想像できないほどに、頬を膨らませ拗ねていることをアピールしている小大。

周囲が氷漬けになった結果、冬眠しそうになりながらも走っていたが、それにより催眠の影響を最も受けたことで誰よりも復帰が遅れた蛙吹。

そんな女子二人をどう慰めていいか解らずオロオロするばかりの口田、よく見ると自分のふがいなさに目に涙を浮かべている。

そして両親の仕事の関係上、実はキャマバツカ事務所と幼いころから交友があり火埜とも顔見知りだった骨抜は火埜の腹黒さを見抜けなかったことの後悔を押し殺し、3人に奮起の言葉を掛けていた。

『さてと、勝ち残った奴らは午後の本選出場確定おめでとう。敗退した奴らも今回が終わりじゃねえぞ』

『この悔しさを糧にさらなる高みを目指すも、ココで折れてダメになるのもお前ら次第だ』

『本選トーナメントは午後から執り行う、まずは10分間の休憩とオリエンテーションを行い、12時からは昼休憩だ』

『それじゃ、まずは10分間の休憩だ。休める時に休むのもヒーローの大事な仕事だぞ』

『しかし、今年は色々と濃いな』

『その原因の大半はA組お前の生徒が原因なんだがな』

騎馬を組んだそれぞれが互いの健闘を称え、控室へと戻っていく。

そんな中。

「おい、峰田」

「任せろ、上鳴」

「泡瀬よ、本当に上手くいくと思うか？」

「円場も見てみたいだろう?」

A B組のお調子者が、何かを企んでいた。

「(あいつら、何かやらかす気だけどオレに被害がないならいいか)」
そして、その4人を眺める火埴はやつと解放された疲れから4人の不穏な動きを察知しながら休憩優先と控室に戻っていった。

『さて、会場のオーディエンス&生徒たち待たせたな。これからは楽しい楽しいオリエンテーションの時間だ』

『今回はオールマイイトの伝手で全学年に本場のチアリーディングが見られる手筈になってたんだが』

『はあ、何をしてるんだあいつらは』

会場では個性を利用した本場アメリカのチアチームによる応援パフォーマンスが行われていたが、それと同じだけ会場の視線を集めている場所が2ヶ所存在していた。

「「「「峰田(ちゃん・さん・君)、上鳴(ちゃん・さん・君)だましたな!!「「「「」

「「「「物間(さん)くたばれええええええ!!「「「「」

A B組女子全員がそこそこ際どいチアコスチュームで現れたのだった。

「おい爆豪の奴見たこともない健やかな笑み浮かべて気絶してるぞ!?!」

「ああ、気にしないで。流石にシズのチアコスあは脳がキャパオーバーしたか」

「A組もそうだけどB組ウチの女子も大概だな」

「おい、扇動した5人が吊るしあげられてるぞ」

A B組で何も知らされてなかった男子は固まってその姿を見ていた。

爆豪は今まで見せたことのないような爽やかな笑みを浮かべて、それは幸せそうに両手を組んで気絶していた。

「というより、何で誰も気が付かなかったんだ」

どこから持ってきたのかリング餡を美味しそうに齧りながら轟が誰しもが思ってたのに敢えて言わなかったことを言ってしまった。

遡る事数十分前。

「オイオイ八百万、お前まだ準備してなかったのか？」

休憩時間を利用して出店の食べ物を粗方食べ歩いた八百万が一人廊下を歩いていると峰田が声を掛けてきた。

「はい？準備とは？」

「あれ？お前相澤先生か火埜に会わなかったのか？」

「ええ、私今まで出店周りをしてまして皆さんより遅れて戻ってきたもので」

その言葉に峰田の目がキラリと光った。

「なんだあ、じゃああ入れ違いかあ。実はあ、プロチアのお返しにこつちもA B男女別れて応援合戦することになってなあ。男子は古き良き応援団をやるって張り切ってる」

「あら、でしたらなんで峰田さんはこちらにいらつしやるのですか」

「オイラちよつとトイレ行って今から合流するんだけどお、衣装が手違いで届いてないみたいで八百万に女子全員分の衣装を頼みたかって先生達が言ってるえ。火埜が伝言係になってるはずだけだなあ」

「もしかしたら行き違いになってしまったかもしれないわね」

「だったらあ、火埜にはあ、オイラからもう伝えたって言つとくから準備頼むぜ」

「ハイ、解りましたわ」

「あ、デザインこれね」

峰田はそう言うのとポケットから雑誌の切り抜きを八百万に渡した。

「こ、これは中々大胆ですわね」

「そおか？チアの衣装なんてこんなもんじゃね？」

峰田が暗躍しているころ上鳴は控室に集まっていた他の女子を見事にだまし、B組では泡瀬と円場に乗っかり物間が誘導した結果、A B組女子のそこそこ際どいチアが誕生したのだった。

「よく言えば純粹なんだけど、百はもう少し疑うことを覚えようね」

塩崎のツルにより緑の十字架に縛り付けられたアホ5人をバックにメンタルケアに励む火埜と轟と骨抜。

「うううう、だって確かに火埜さんと相澤先生がお話しされているところ見た方がいらつしやいましたし」

「はいはい、良い子イイ子。でもブラキン先生も相澤先生が言い逃すなんてありえないでしょ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

恥ずかしさで座り込む女子陣。

轟が氷で作った壁の後ろにいたので全国に流れることはなく、骨抜の説得でメンタルを持ち直し始めていた。

「若、若の感想はどうよ」

何かを閃いた骨抜が火埜に話しかけた。

「若言うなや、恥ずかしがってるとこ悪いけど皆可愛いよ」

「だな、轟はどうだ？」

「ん？似合ってると思うぞ？」

外見偏差値のバカ高い2人に褒められ、女子陣が照れていると何かを思い出したかのように火埜が注射器を取り出した。

「ここで豆知識、イワさんのサポートアイテムには遠投向けのホルモン注射器があつてそれを使用してもイワさんの個性は効果を発揮します」

そう言うとは何処からか注射器を4本取り出す火埜。

「柔造、B組はよろしく」

「あいよ若、さすがに今回はやり過ぎだな」

「百、あと4着もう少し際どいチアコス創造しておいて」

その言葉と共に氷の壁の向こうに消えていく火埜と骨抜。
数秒後。

「「「「「「「「「「「「「「「「」

普通に生活していたら決して聞こえてこない様な生々しい変形音が4つ流れた。

そして、今回の犯人たちは。

「ぐああああああ、全国放送で女装姿晒すことになるなんて。てかヤオモモッコレ」は流石にどうなんだ」

あの日の美少女モードの上鳴がそれはそれは際どい、放送コードをギリギリ攻めたチアコスを着させられ衆人觀衆の前に立たされた。た。

「まだ、体が痛い」

「もう、二度といたしません」

「ハハハハハハハ、陰湿だねA組は」

「物間黙れ!!」

元々、中性的な顔立ちだった田場、物間は出るところ出て雰囲気がない子になっており、泡瀬はボーイッシュな美少女と化していた。

そして、主犯の峰田はというと

「たあすけてえ〜」

「あなたが若の学友の峰田ちゃんだな、あなたに会いに、脱獄成功♡」

「いゝやゝあゝゝ、たゝすゝけてゝえゝゝ」

筋骨隆々の肉体を持つ、一昔前の米国の刑務所で使われていたような白黒縞模様の囚人服を着て、右足首には鎖に繋がった鉄球を着けている。小ぶりの黒髪のアフロヘアで、青々とした髭剃りあとに立派なケツアゴと風貌はかなり厳つい大柄な男性に抱きしめられ頬ずりされていた。

『おい、なんであの人外がいるんだよ』

「聞こえているぞマイクちゃん、貴様にも突撃ラブラブしてやろうか」

『いやあー、来ないでくださいプリさん』

キャマバツカ事務所最終兵器と名高いヒーローに捕まり更生させられていた。

「若からディーブなチツスマまでは許されているからな、覚悟したまえ」

「たゝすゝけてゝえゝゝ」

「いや、誰もそこまで許してないけど」

組み合わせ抽選とレクリエーションを終え、お昼休憩を挟ん後控え室に近い観客席にクラス毎に集められた1年生たち。

最終種目の準備を固唾を飲んで見守っていた。

「ヨシっ！完成」

『Thank You！セメントス!!Hey MEN'S !!Are You Ready?』

マイクのレスポンスに多少の声が会場に木霊する。

『声が小せえぞ!!魂から声挙げてけ!!Are You Ready?』

「!!Yahaaa!!」

2回目のレスポンスに満足したのか、マイクは席へと着いた。

『OKOK、色々やってきたが！ 結局これだよな！最後はやっぱりガチンコタイマン勝負!!頼れるのは己だけ！ 心・技・体だけじゃ足りねえぞ！知恵・知識・時の運!! 出し惜しみなんかしてないでめえが出せるもの総動員していきやがれ!!』

セメントスの “個性” でフィールドが整備され、実況のプレゼント・マイクの実況が響き渡る事で、観客席のボルテージはどんどん高まっていく。

『極々一部で甚大な被害が出たようだが、自業自得で片付けるぜ!!待たせたな野郎共、雄英体育祭1年の部本選トーナメントの開始だぜえ!!』

マイクの声に反応するかのように会場が更なる歓声に包まれる。

見学者だけでなく、クラス毎にまとまった箇所には座らされている1年生達も、歓声を挙げていた。

『それじゃ、第一試合まずはこいつだ。一撃の破壊力なら1年随一!!別の意味でも破壊力抜群なDangerGiRL!!ヒーロー科“緑谷静空”!!』

呼び込みアナウンスと共に東ゲートから現れたのは、胸を張り堂々とした姿で入場してきた緑谷。

『VS、今回の台風の目!!虎視眈々と下克上を狙う普通科期待の星!!
頑張れよ普通科 “心操人使”!!』

西ゲートから姿を表した心操は緊張しているのか動きがガチガチ
だった。

『ルールはシンプル!!』

- ・ 相手を場外に落とす
- ・ 行動不能にする
- ・ 負けを宣言させる

基本的にはこの3つだ!!』

『怪我なんざ恐れるんじゃねえぞ!何かあろうと復活させる我らが
リカバリーガールが待機してっからな!!』

『しかあし、命に関わるような行為は禁止だ!!ヒーローは敵を殺すた
めに力を使うんじゃない!!敵を捕まえるために力を振るうのだ!』

フィールドに立つ二人は同時に深呼吸をして、互いに目を合わせ
た。

『それじゃ、いくぜカウント “3”』

『緑谷』

『何、心操くん』

突如、心操が緑谷に話し掛けた。

心操の個性に関しては火埜も教えてくれなかったため、警戒心を高
めて試合に臨もうとしていた緑谷。

『 “2”』

『試合前に言うもんじゃないけど』

『うん』

しかし、その時点で心操の計略に、緑谷は嵌まっていた。

『 “1”』

『だけど、あえて言わせてくれ』

『何を?』

警戒するあまり、その計略にまんまと嵌まってしまったのだった。

『START!!』

『お前、可愛いな』

「ふあ!？」

そのやり取りから緑谷は意識を失った。

『おおおおおう、実際に見るとすげえな心操の個性』

『個性“洗脳”、心操が洗脳する意志を持つてした問いかけに返事をした者に対して簡単な動作を命令することができる、というものが“生物”にしか効果がないことから機械を相手にする入試では効果を発揮することが出来ない。やはりあの入試は合理的でないな』
『おまけに解除は心操の意思かなんらかの刺激を受けることでしか解除されない、緑谷の奴はこれで敗退か』

解説席で教師3人の解説がなされる中、フィールドでは心操が緑谷に指示を出していた。

「緑谷、そのまま歩いて場外まで行け」

心操の言葉に従い後を振り向くとゆっくりと場外へと歩き始めた。

あと一歩で場外に踏み出そうとした次の瞬間、緑谷のすぐ側に雷が落ちたかのような音が鳴り響いた。

「あれ、ここはどこ？」

緑谷は周囲を漆黒に覆われた場所に立っていた。

「おや?なんで君がここに居るんだい？」

緑谷の目の前に一人の女性が立っていた。

「(この人!オールマイトのを見せてくれた写真の人!)」

「可笑しいな?確かに君の成長速度は異常だけど、まだ“ここ”に立ち入れられる程馴染んでいないはずなのに?」

困ったような顔をして緑谷に視線を会わせてくる女性。

「あれ、何かに縛れてるね?しようがないな、今回は特別だよ。ちよつと痛いだろうけど、ごめんね」

その会話を最後、右手の中指に物凄い痛みが走り、緑谷は意識を覚醒させた。

『おうつと、なんだ?何が起きた?』

『!!緑谷の中指が折れているぞ』

『個性を暴走させて洗脳状態から抜け出したのか?相変わらず無茶するな』

右手を庇うような体勢になりながら、心操を睨み付ける緑谷。

その目に、心操は火柱から言われた言葉を思い出していた。

「シズ、緑谷静空と対戦することになったら絶対に油断しないこと」

「はあ？どういうことだ」

遡ること抽選終了後、心操チームとして騎馬を組んだ縁でか火柱は心操に話し掛けていた。

「あの子の個性は15歳になって発現した遅効型個性だからか、まだ謎な部分が多くてね」

遠回しな言い方に多少イラつきを見せる心操。

そんな心操に笑顔で話し掛ける火柱。

「心操の個性がいくら一撃必殺であろうと油断しない方がいいよ、てだけ」

「そんだけか？いくらヒーロー科でも、オレの個性に掛ければ余程のことがない限り、1人で解除は出来ねえよ」

「くふふふ。まあ、あまりなめて掛からない方がいいぞ」

ほんの少し前、たまたま組んだだけの「仲間」の提言を受け止めていなかったこと、自分の個性に対する傲慢な自信が仇となって、心操の思考に空白が生まれた。

「(今だ!!)」

その隙を緑谷が逃すことなく、左肩からのタツクルで心操を押し出してきた。

「ぐ、おおおおお(なんつう突進力だ！しかもタツクルのせいで呼吸が出来ねえから喋れねえ)」

問いかけ、返答されることで発動する心操の個性に対抗するならば一番簡単な方法は喋らせないことである。

超パワーで加速した緑谷のタツクルがモロに決まり、呻き声を挙げることしか出来ない心操。

更に、緑谷は心操を逃がさないようにタツクルした際に、心操の体操着を掴んで逃がさないようにしていた。

その結果。

「心操君場外!!勝者緑谷さん!!」

ミッドナイトが勝敗のコールを上げる。

それに呼応するように歓声上がる場内。

「(ああ、負けたのかオレ)」

フィールドの外に座り込み、空を見上げる心操。

「大丈夫？心操君」

其処には先程までの対戦相手だった緑谷が心配そうに心操に手をさしのべていた。

その顔には相手を見下すような感情は一切なく、相手に対するリスパクトの感情しかなかった。

「あ、ああ大丈夫だ。それより、緑谷の方こそ指大丈夫か？」

「ああ、これは叱られるなあ。あ、それよりも心操君！」

突如真剣な顔をした緑谷は心操の顔に指を突き刺した。

「いくら個性に掛けるためだからって、女の子に『あんなウソ』ついちやダメだよ」

「『あんなウソ』とは？」

心底解らなそうな顔をしている心操に、顔を真っ赤にして緑谷は答えた。

「だ、だから、その、ボクみたいな子が、えっと、か、『可愛い』だなんてウソついちやダメだよ」

その答えに納得したような顔をする心操だったが。

「いや、本心だけど？」

「ふふえ!？」

なにも間違ったこと言ってます、というような顔で答えた心操の一言。

予想外の答えに緑谷の顔は更に真っ赤になっていった。

「いやー！ーん、ア・オ・ハ・ル。アオハルよ!!」

「ふふふふ、二人とも取り敢えず退場してください」

好物のアオハル現場に体をくねらせて喜びに悶えるミッドナイト、自分にもこんな時期があったなど回想し退場を促すセメントス。

『蓋を開ければ短期決戦、ヒーロー科緑谷静空の勝利!!てか最後のあれマジか?』

『幼馴染み “その②” 情報だと中学時代はアイツの番犬が爆発しすぎてそういつた対象がアイツに近づけなかったらしい。おかげで緑谷の奴自分は可愛くないと思ってるんだとか』

『いや、傍目から見ても十分に愛らしい部類になると思うんだが』

『だそうだ、やり過ぎ注意だったな “番犬”』

解説室の相澤が目線を送った先には自分の受け持つクラスの一団がいた。

「AJTG AJMEJ TJGAJ LDJ TNJ ALELOKGSVE
ANK!!」

「うわあ、人間の顔じゃねえぞ “爆豪”」

「まさに悪鬼」

今にもフィールドへと飛び出しそうになっている爆豪は、雄叫びを挙げた瞬間に霧の焰による高次元で構築された有幻覚の鎖により捕縛され、人語として聞き取れないレベルの雄叫びを上げながら鎖を引きちぎらんばかりの勢いで爆発し続けていた。

「いやあ、これでシズクちゃんの可愛らしさが全国に知れ渡つてもうたなあ。爆豪君も苦労するんとちゃうん？」

「何でそんなに嬉しそうなのお茶子ちゃん？」

謎のマウントをとる麗日に不思議がる蛙吹。

「ほら、勝己。オレの言った通りになったじゃん」

「嬉しそうにしてんじゃねえぞ翔織コラア!!」

爆豪にとっての諸悪の根元（完全な言い掛かり）である火埜は目の前で悠々と寛いでいた。

「だから言つたじゃん、シズはモテるって」

「ざけんなや、コラア!!オレの苦節10年重みが違うんだよ!!」

「ケロ、爆豪ちゃんそういうのはちゃんと言葉にしないとダメよ」

「解つてんだよ!!わかつてんだけど」

蛙吹の正論に鎮火させられる爆豪。

彼には珍しくモゴモゴと言ひ淀んでいる。

「は、はずいんです」

「純情かよ!?!」

「てか、爆豪が敬語だ?!」

1Aブースが狂乱に陥っている中。

「あうう、た、ただいまあ」

顔を真っ赤にしモジモジとしながら緑谷が戻ってきた。

「緑谷」

「あ、な、なに、轟君？」

そんな緑谷を出迎えるよう前に立ちはだかる轟。

「オレも、お前可愛いと思ってたぞ」

「ああわあふあ、わあーーーーー!!」

轟の一言が止めとなり気絶した緑谷。

「? オレなんか変なこと言ったか」

そして、変な方向に進化し始めた轟。

「あぐあが、クソがーーーーー!!」

過去最大に爆発している爆豪。

『お前ら煩いぞ、上鳴はさっさと控え室に行け』

なんともしまらない第一試合となった。

緑谷が脳の情報処理限界を迎え、爆豪が倒れる緑谷を颯爽とお姫様抱っこしてリカバリーガールのところへ行こうとして、何故か轟と飯田に止められて誰が行くか無言の鬨ぎ合いが起きたので、しようがなく麗日筆頭の女の子達が運んだのと同じ頃。

『HEY! AUDIENCE, Are you ready?』

『それ、毎回やるのか』

『山田、無駄だぞ』

『Shut up!!お決まりみたいいなもんでしょが!!それじゃ、いくぜ!!』

マイクが指を鳴らすと東側のゲートにライトが灯る。

『雷系の強個性、予選も地味に活躍していたこのお、お!?ぶひやあひやひやひやひやひや、まだ治ってなかったのか?今はCuteなGIRLだけど本当はいけるBOY!!1A上鳴電気!!』

少し過激なチア衣装、温情で許可が出たスパッツを履いているが恥ずかしそうにスカートを押さえながら入場してきたボーイツシユガール、上鳴は涙目で怨めしそうに相澤がいるであろう実況席を睨み付けていた。

『自分のヤラカシのせいで時間が押してんだ、自分の試合が終わるまでそのままでいろ、ど阿呆が』

『ヴァーサス、西ゲートから入場するのは献身・清純・清楚の言葉が似合うB組のお?What's!?!なんでお前までその格好なの?まあ、似合ってるぞ、1B塩崎茨』

西ゲートから現れたのは、上鳴に比べて幾分が大人しめのチア越すに身を包み、祈るような仕草のままフィールドへと赴く塩崎だった。『塩崎!!なんだその格好は!!』

担任のヴラド・キングから体操着に着替えるように通達があつたにも関わらず、何故か着替えていない塩崎。

「そう、これは罰。他者を軽んじた己への罰なのです」

と本人が断固着替えを拒否したのでチア衣装のまま入場となった。

試合開始を控え、上鳴電気は羞恥に染まりそうな頭を必死になつて冷やしていた。

自身が招いたこととはいえ流石にあんまりだと思ふ所業だった。それが観客席から、「美少女対決だ!!」とか「金髪の娘タイプだ」とか「うほ、いい生足なんだな」とか聞こえてきても極力無視する。「(これが終わったら、土下座してでも火鉢に男に戻してもらわないと色々不味いわ)」

周囲からの視線に不快感を感じることもそうだが、思考が徐々に女性的になつていること、それに対して違和感を感じなくなつてきていることに上鳴は恐怖を覚えていた。

『それじゃ、カウントいくぜ』』

「塩崎、悪いが私の精神衛生のために瞬殺させてもらうわ」

『2』』

「なんと傲慢な。いくら女性とはいえ見過ごせません」

『1』』

「私、男だから、I am Man」

『Ready go』』

マイクの開始の合図と共に上鳴は放電を開始した。

まるで落雷が落ちたような閃光で誰しもが目を覆ってしまった。

「誠に遺憾です。その程度で私に勝とうなどと」

しかし、塩崎は冷静であった。

自身の個性の象徴である茨のツルを高速で伸ばすし、瞬時に放電する上鳴ごとツルで包み、無害化。

自身の前にもツルによるバリケードを作り、アースとしても機能する防壁としていた。

「あれあれ、あゝれれ？瞬殺なんじゃなかったの？あれれ？おかしいぞお？」

A組全員が声のする方を見ると通路にてツルの十字架に拘束され、「反省中、慈悲を与えないください」という看板を首から下げさせられた物間（女ver.）が「素晴らしい」笑顔で煽っていた。

「ふん!!」

「グヴヨ!？」

そんな物間に対して、ツカツカと歩み寄ってきた拳藤はお手本のよ
うな見事な正拳突きを見舞うことにより、物間を物理的に黙らせた。
美少女が拘束され、気絶している状況、はつきり言っ事案だが対
象が対象で、事情が事情だったのも関係して、皆に華麗にスルーされ
ていた。

「本当にごめんなA組。こいつ、メンタルが『アレ』なもんで」

一連の行動で物間の立ち位置を察したA組だった。

「別に気にしてないよ、電気の凄さを知らない奴に何言われたって」

拳藤の正拳を受けて沈んだ物間を興味無く視線から外した火埜の
言葉に全員が頷いていた。

「でも、あそこまでツルに覆われたら飯田君でも抜け出せないんじゃないの？」

区切られていたパーティーションの一部を動かし、顔をのぞかせた取
陰の言葉に不敵な笑みを浮かべる同じチームを組んでいた瀬呂だっ
た。

「取陰も勘違いしてるけど、あいつの個性は『放電』じゃなくて『帯
電』なんだぜ」

「それは電気を操るプロセスの違いなんじゃないの？」

「おい、推薦組」

瀬呂の勿体ぶった言い方に、冷静に返す取陰。

そんな、取陰を呼んだのはやはりA組の戦略部門担当火埜であっ
た。

「うちの電気なめんな、入学から比べて一番個性伸ばしてるのは他で
もないあいつなんだから」

そう言っ火埜は戦闘が行われているフィールドへと指をさした。

「塩崎の敗因は自分の視界を防いでしまう物量戦で挑んだことだ」

フィールド上の塩崎は自身の勝利を確信していた。

フィールドに突き刺したツルによるアースも兼ねた盾。

その後ろから数多のツルを操作して上鳴をツルの檻に閉じ込めた。
後は、ツルの檻を場外に置く。

それだけだった。

そして、ツルの檻は確かに場外へと置かれた。

自身も場外判定されないように空中でツルを自切する念も入れた。

「あの、ミッドナイト先生。コールはまだでしようか？」

だというのに、審判であるミッドナイトは一向に判定を告げる様子はなかった。

むしろ、塩崎を僅かに残念そうな顔をして見ていた。

「ごめんね、塩崎さん。だって」

ミッドナイトが話し終わる前、フィールドを青白い光が駆け巡った。

「まだ、上鳴ちゃんはフィールドにいるんだもの」

ミッドナイトの視線の先をたどるように視線を向ける塩崎。

そこには、自分が捕まえ閉じ込め、今しがた場外に追いやったはずの上鳴が雷を纏った姿で油断なくこちらを見ていた。

同性が見惚れてしまうような可憐な笑顔とともに。

『おいおいおいおいおい、どういうことだ？』

『簡単なことだヴラド、あいつの上鳴電気の個性を思い出してみろ』

実況席では自身の予想から外れ、まったく別の展開を見せる試合に混乱するヴラド・キング。

そんなヴラド・キングを余裕満々の笑みで見ている相澤がいた。

『たしか、上鳴電気の個性は“帯電”、自身の体に電気を帯びそれを放電するというものだったはず』

『そう、あくまで“帯電”が個性であって“放電”はおまけのようなものだ。個性把握テストを行った次の日、上鳴は火埵・爆豪・緑谷に個人的に個性の使い方のアドバイスを貰えるように頼み込んでたんだよ』

相澤の発言に火埵へと視線を向ける1年AB組。

その大半は驚愕という感情が見えていた。

「本当だよ、少しの時間でいいから見てほしいって声かけてきたんだよ」

肯定される発言に全員が意外そうな顔をしていた。

『その結果があれだ。塩崎のツルを全て避け切れたのは帯電した電気を各運動神経及び脳に放電し負荷を与えることでスピード系個性持ちと同等の反射速度を会得するブースト技だ。昨日、やっと出来るようになったらしくて嬉しそうにクラスのラインに流してきたからな』

『え、消太お前ラインなんかやるの!!オレが誘っても無視したくせに!!』

相澤の以外ない一面がサラッと流れて、少し寂しそうに反応するマイク。

無論、相澤のことを知る面々も驚きの表情を浮かべている。

『そんなこと、今はどうでもいい。兎に角、普段はお茶らけているし、馬鹿な行動をする筆頭のような男だが今のあいつは全力放電しか攻撃手段を持ち合わせていなかった入学当時とは比べることも烏澁がましいレベルに達しているといっても過言ではない』

相澤をよく知る面々はこの時同じことを思っていた。

「(この親馬鹿があ!!)」

そんなこととは関係なく、フィールドでは動きがあった。

塩崎がツルの量を増やし場外へ押し切る作戦に変更したのだ。

塩崎には現状これ以外の作戦をとることは難しかった。

だからこそ、上鳴が見せた不敵な笑顔を見れてしまった。

「(な、何なんです。この胸の高鳴りは)」

そんな塩崎の思考など知るわけもなく、上鳴は最高速度で塩崎のツルの操作領域の内側へと辿り着いていた。

「ごめんね、ちよつと痺れるわよ」

右手の人差し指と中指を塩崎の首筋に当てると、親指から電気を発生させた上鳴。

今までは全身しか放電手段がなかった上鳴だったが、これは放電する際に指向性を操作することが出来ないからであった。

そこで鬼教官爆豪と鬼畜軍師火埜、ただ一人の癒し要因緑谷が考えたのは、放電個所を限定して超近接格闘に順応させることで両手をス Tangan のように扱うことだった。

結果、利き手である右手であればある程度の放電数を操作することが出来るようになった。

そして、首に手を当てられていた塩崎は無抵抗のまま数ボルトの電気を浴びてしまうのだった。

「塩崎さん、気絶により試合続行は不可能と判断！この勝負、上鳴Sんん。失礼、上鳴君の勝ち!!」

勝負が決するのと同時に周囲に巻き起こる歓声。

かつての上鳴であれば調子に乗った行動をしたのだろうが、何を思ったか。気絶した塩崎を抱きかかえるとそのまま自身の出てきた東ゲートへと戻っていった。

そして、ゲートをくぐる前に一度だけ観客の方へ向き直りお辞儀をして退場していった。

塩崎はうつすらとだが意識を取り戻していた。

誰かに優しく抱きかかえられていることは解るがなんとも言えない安心感に包まれていた。

「それじゃ、気が付いたらちゃんど保健室に連れて行ってあげてね」

「ありがとな、上鳴」

級友の拳藤と誰かの声が聞こえた。

「にしても、戻っても顔はあまり変化ないんだな」

「まあ、いいじゃん。それじゃ」

男性の声が聞こえ、それと同時に額に感じる温かい手。

塩崎は無意識にその手を掴み取ると本人の口から思いもよらない言葉が零れ落ちた。

「お慕いしております、お姉さま!!」

その瞬間、周囲の空気が死んだかのように静かになった。

そして、手を握られた男、上鳴電気は魂の底から叫ぶのだった。

「だ・か・ら、オレ男！ I am Man!!」

『それじゃ、3回戦いくぞ』

『マイクの奴、どうした?』

『校長にガチ説教受けたらしい、あと2日喉は大丈夫かと』

『うっせえ!今年1年生がエンタメしてんのが悪い!!』

大人3人のコントが終わると同時に東ゲートにライトが灯る。

『地味個性と誰が言った?固めるだけの個性じゃねえ!最硬の盾にオレはなる!1A切島鋭児郎』

「うおoooooooooooooooo!!」

東ゲートから現れた切島は自身を鼓舞する意味も込めて叫ぶ。

そして、いつもの如く硬化した両腕を打ち付け、金属のような独特の音を会場に響かせる。

それに感化されたように、観客席でも声援が飛んでくる。

そんな歓声の切れ目を合図に西ゲートにもライトが灯った。

『敵向き個性?笑わせるな!万物切り裂く刃を持った最強の剣にオレはなる!1B鎌切尖』

「シャoooooooooooooooo!!」

西ゲートからゆっくりと現れた鎌切はライトに照らされるのと同じ時に、両手の指の間から爪のように刃を作り出すと切島に負けない勢いで叫ぶ。

その際、作り出した刃同士を打ち合わせて火花を発していた。

『盾〃対〃矛〃 どちらに軍配が上がるのか、カウント〃3〃』

選手両名がフィールド中央で向かい合うのを確認してカウントが始まる。

『〃2〃』

互いに視線を逸らさず、寧ろ互いにメンチ切りあう近さまで近づいていく。

先ほどまで個性を発現させていた互いの両腕は個性の影響を感じさせない状態に戻っていた。

『〃1〃』

カウントが終わるその瞬間、互いに不敵な笑みを浮かべる。

早く戦いたくてウズウズしているように見えるその様は、先に行われた2戦とは違う雰囲気醸し出していた。

『Ready, Go!!』

「シヤア!!」

マイクの開始の声とともに、鎌切の腕から高速で刃が伸びる。

瞬間、両腕を硬化させて鎌切の刃自体を防ぐことに成功した切島だったが、彼にとって一つ誤算があった。

『切島の奴、鎌切の“刃鋭”の勢いを殺しきれずに徐々に押し込まれているぞ』

『その場で留まる“硬化”と、刃を出す“刃鋭”じゃ発射される“刃鋭”のほうが勢いがつく。その分、切島は押されるからな』

『真正面からいくあいつの姿勢は評価するが、これでは場外に押し出されて負けるな(ま、ウチの頭脳労働組が何も考えずに送り出すことは考えづらいがな)』

鎌切は予選を利用してA組の個性を把握しようという物間の考えに賛同した一人である。

しかし、それは純粹に自分“達”がA組に比べて劣るところが多いと思っていたからであった。

その中で、クラスメートの鉄哲と似た個性の切島がなぜか印象深く残っていた。

「シヤシヤシヤ、吹き飛べ切島!!」

鎌切も考えなしに刃の発射を続けているわけでない。

片腕から交互に発射させることで断続的に勢いを殺さずに、切島にぶつけていたのであった。

そうすることで、威力こそ劣るが発射の勢いを衰えさせることなく場外を狙うことができると考えたからである。

その勢いにより切島は砂煙を上げながら後退させられていた。立ち上がる砂煙によって切島の姿が見え難くなっていく。

あと数回、勢いを維持したまま発射すればフィールドの端へと追いやり、最後に両腕から発射させればその勢いで切島を場外に落とせる

位置まで進んだ時だった。

ガキンと今までにない金属音が響いたの同時に、鎌切が発射した刃が戻せなくなってしまった。

「な、なんだその姿は？」

砂煙が晴れ、姿を現した切島の上半身は、まるでワニの鱗に覆われたかのような姿になっていた。

「斧留亜武怒（フルアームド）」

放課後訓練にて、最高硬度の維持する実験で両手を硬化した際、指先が爪と一体化して鍵爪のような形状で硬化したことがあった。

その時の光景を目撃され、悪どい笑顔を浮かべ目を付けた鬼畜軍師火埜により始まったのがイメージ訓練であった。

肉体を変化させるタイプの個性において「イメージ」とは重要なものであった。

実際、火の鳥に変化できる鬼畜軍師本人がそうであったため拒否する隙も与えられず切島は知識の蓄積量により選ばれた八百万と、個性の関係上動物の生息に詳しい口田により徹底して鱗や甲羅を持つ生物の知識を叩き込まれていった。

夜は夜で口田が貸してくれた動物の百科事典を読んでから就寝が義務付けられた。

その結果、巨大で嫌にリアルな鱗に追いかけられる夢を見るまでになり、その結果5分間であれば上半身を、10分間であれば両腕を鱗状に硬化させられるようになったのであった。

「相手が鎌切！お前で良かったよ！」

「んだと、どういうことだ」

「この姿」は相手の攻撃が鋭ければ鋭いほどに、オレに有利になるかな!!」

鎌切が発射する刃、先ほどまでであれば受け止めることで防御してきた切島であったが、刃に対して腕を伸ばした。

するとどうだろう、切島の腕に当たった刃は鱗を滑る様に発射の威力を受け流されてしまった。

「どっちが先にぶつ倒れるか、我慢比べといこうぜ！鎌切尖!!」

「面白いじゃないか、漢してんなオイ！切島鋭児郎!!」

どちらからともなく走り出した二人は、互いに殴り合いができる距離まで詰めるとノーガードの殴り合いになった。

最速発射で今まで以上に切島を削りにきている鎌切。

鱗状に硬化したことで刃を流すように耐える切島。

フィールドの中央で巻き起こる矛と盾の攻防。

次第に切島と鎌切は個性を使うのを辞めてしまった。

とある肉体強化型の個性持ちの男性がこんなことを言っていた。

『男という生き物は個性という異能が発現される前、有志以前から不治の病に冒されている』

『武器がどんなに進化しても、ボタン一つで何万人も殺せる兵器が誕生しても馬鹿な男達は結局そこに行き着いてしまう』

そう呟くと男はタバコを吸うと煙を吐き出し、ニヤリと笑みを浮かべた。

『ステゴロ最強』という不合理極まりない馬鹿な病気にな』

その男性は数年後にヒーローとしての道を歩き始めた。

『若き日のステゴロ回顧録より』

『何言ってるの、トリー?』

ステゴロ勝負になってからは興味を失くしたように、意識を休息に割いていた火埜、気が付くと芦戸のしなやかであり確りと奥に筋肉を感じる太股を枕にしていた。

『あれ?いつのまに?』

『なんか、眠そうにフラフラしてたからアタシの膝枕に強制着地させたの』

『それはそれは、どうもご迷惑をと』

すくつと起き上がる火埜であったが、そんな彼の頭を名残惜しそうに手櫛で掬う芦戸。

その光景に複数の嫉妬の視線が突き刺さるのだが、そんなこと気にしてはいなかった。

『2人とも熱くなっちゃって』

フィールドでは今まさに男と男の維持の張り合いが起きていた。

そして、大方の予想通り鎌切が息切れを起こしていた。

「オラ、まだ行けんだろ!!」

「うるせえ、耐久力馬鹿!!」

鎌切とは正反対に生き生きとしている切島。

個性抜きでも素の耐久力が飛び抜けて高い彼は終わりを感じ始めたこの試合に寂しさを覚えていた。

だからといって、手を抜くようなことはせず、鎌切が倒れぬ限り全力で殴りあっていた。

「ああ、くっそお。マジで化け物だな お前^Aら^組は」

息も絶え絶え、腕を上げる力も尽きてなおその瞳は勝負を捨てることなくギラつかせる鎌切。

そんな鎌切からでた言葉に本日一番の笑顔を見せる切島。

「おう!!うちには3人の鬼教師がいるからな!!気抜いた瞬間に置いてかれちゃうんだわ」

「くそがあ、次は負けねえからな」

その言葉と共に前のめりで倒れていく鎌切。

そんな鎌切を確りと支えるように抱き止める切島。

「鎌切君、意識喪失を確認!!勝者切島君!!」

最後には意地の張り合いで幕を閉じた試合であったが、心にくる試合となった。

「誰が『鬼教師』だ切島!!」

『^{爆豪・火壁}あいつらきつちりカウントされてたな』

火埜が目を覚ますと、見慣れた美少女がこちらを見ていた。

「あれ？オレまた寝てた響香？」

「うん、なんだかんだ疲れてるんだね翔織も」

ここ最近、色々あつて最も肉体接触率の高い耳郎と笑顔を見て少し和んだ火埜。

しかし、彼は寝ていた訳ではないのであつた。

遡ること5分前。

「トリーくん、私に少し勇気をください!!」

じゃんけんに負けたことにより、クラスメート全員分の飲み物を買いに自動販売機の前にいた火埜に発目が話しかけていた。

「え、どういふこと？」

火埜の目の前にはつい先程までの印象とは異なる、少しだけ震えている少女がいた。

「正直に申し上げますと、私は今から私らしくないことをしに行きます。それが物凄く怖いのです。私のせいで私のドツカワイイベイビー達の評価が正当にされないのではないか、そう考えると震えてきてしまうんです」

自分の体を抱き締める発目、その姿からは先程までの自信に満ちた雰囲気は無くなっており、年相応に大舞台に緊張する一人の少女がそこにはいた。

「……で、どうしてほしいの？オレ両手塞がつてるんだけど？」

八百万により創造された袋を両手に、発目と向き合う火埜。

「あ、トリーくんはそのままで大丈夫です！」

そう言うと言目は火埜に抱き付き、その体に顔を埋める。

「トリーくん、私頑張ってきます」

「飯田は強いよ。あいつは、あいつには明確なぶれない目標があるから」

火埜の言葉に抱き付く力を強める発目。

装備の関係上、より強調されるように見える胸部装甲が形を変える

程に強く火柱に抱き付く。

「だから、勇気を下さい」

その言葉と共に、顔を上げる発目。

身長の関係上、顔の距離が近い二人は発目がつま先立ちをした瞬間、その距離はゼロとなり唇が僅に触れるだけのキスをした。

「はっ」

「ふふふ、ベイビー以外で心がここまで動かされたのは初めてです。それじゃ、いつてきます翔織」

そこにはいつもの笑みではなく、異性を魅了するような笑顔を浮かべた少女がいた。

そして、その光景を偶然見ていた存在がいた。

A組ではペット感覚で皆からよくリンゴを貰っていたダークシヤドウである。

一人じゃ大変だろうと、常闇と共に手伝いに来たのだが一足先に近くまで来ていた。

そして、声を掛けにくい現場で “家政婦は見た” よろしく壁からひよっこり覗いた少し大人な現場に興奮して、本体の常闇を引き摺りながらクラスメードがいる観覧席に戻ると自分の見た光景を包み隠さず暴露したのだった。

「ゴメン、遅くなった。はい飲み物」

「……この浮気者!!」

いや、誰とも付き合っていないんだけどという一瞬の思考と襲撃の記憶は火柱の頭からきれいさっぱりと消えたのだった。

火柱が目を覚ましたのと同じ頃、フィールドでは飯田と発目の “試合” が行われていた。

「く、サポートアイテムの扱い方が上手いな」

「当たり前です、サポート科を営めないでいただきたい！そして、 “今の私は過去最高に絶好調です!!”

『サポート科発目テンション爆上がりだなあ、特別解説員 “パワーローダー”』

『ゲシシシシ、さっきの休み時間に何を思ったか整備室で色々やって

たからな』

『サポート科は自身で作ったアイテムなら何でも使用可能だからと毎年ゴチャつくのが通例だが、発目は必要最低限のアイテムで飯田を翻弄しているな』

『飯田の奴、持ち味の加速力を完全に殺されてるな。そしてそれをなしているのは発目が背負うサポートアイテムか』

『ゲシシシシ、アイツが自分の作品にちゃんと名前つけてるところ初めて見たぜ』

発目が背負っている8本のアームが付いたサポートアイテム。

軟体動物のようにならぬ滑らかに動くその姿。

いつもは『第○子』としか呼ばない発目が初めて名前をつけたアイテム。

「うふふふふふ、どうですか『オクタコス』の動きは!!これはヒーローにというより警察・自衛隊・レスキュー隊の皆様に使っていただきたいアイテムです!!総重量20kgと重いですが、アシストスーツとしての機能も備えており、単純なパワー系個性持ちと対等に渡り合える装備にもなります!!また、8本のアーム先端に取り付けられたカメラアイがターゲットを自動捕捉することで思考を別のことに割くことが出来る優れたものです!!そして、事前にシステムを設定すれば災害救助などでも活躍間違いなしです!!」

「やけに機嫌が良さそうだが、ぼつオレも負けてられない!!」

発目の勢いに押され勝ちだが、徐々にギアを上げていた飯田の動きに徐々にアームがついていけなくなっていた。

「速度重視の貴方ならアームがついていけなくなることは事前に解っていました!!なので、私『達』のドツカワイイオクタコスの奥の手を1つ切らせていただきます」

発目の言葉が合図となったのか、カメラアイの下に銃口のようなものがせり出すと青い焰を放出した。

そして、その焰に当たった飯田の左足のエンジンのギアが僅に落ちたのだった。

「!?まさか『これ』は」

「そうです、パワーローダー先生の研究室に保管されていた翔織の
雨の焰”です!!」

『発目!!この野郎、許可無く持ち出しやがったな!!』

『コスに付属のサポートアイテムの修繕ように焰を提供したと本人か
ら聞いてはいたが』

『サポート匣のエネルギーにも使用している焰を他人が攻撃に転換し
た最初の例だな』

『いいねいいね!!こういう展開を待ってたぜ!!』

発目の予想外の攻撃を受けて左右のバランスが崩れてしまい、結果
右足のエンジンのギアも落とさざるをえなくなった飯田。

しかし、彼の瞳に諦めの色は存在していなかった。

「まさか、初戦で使うことになるとは。火埜くん君が関わると予想の
斜め上にいくな)」

愚直ともとれるまっすぐな気質の飯田天哉。

放課後訓練が始まってもそれは変わらず、自分の有方を曲げること
無くヒーローとして邁進していきたいと常々言っていた。

「だったら、飯田君は観察力を磨かないと」

お昼休み、クラス全員で昼食を摂るのが常態化してきたそんな時に
緑谷に言われた言葉が鮮明に思い出された。

「確かに、足りないところを補うためのチームアップだったりするが、
結局のところ自分が出ることをやってかないと、仲間にも迷惑だし
な」

真つ赤に熱せられた土鍋から溢れる辛さとは何かと問い掛けられ
るような麻婆豆腐のような何かにより1つの机に隔離された爆豪の
言葉、けして自身を辱しめるために言ってるわけではないと解る。

「身近に良い手本がわんさか居るんだし、そう言ったところを伸ばし
ていくのも良いかもね」

緑谷の助言を聞き入れた飯田の観察眼を鍛える暴走は後にブチキ
レた火埜のライダーキックを受けるまで続いた。

その結果、飯田は走りながらも対象を観察し、考察できるように
なっていた。

だからこそ、オクタコスのアームの僅なタイムラグと死角に気が付けた。

ゆえに、心に刻まれた言葉が自然とあふれ出した。

―迷うことなかれ―

誰よりも速く動ける自分の迷いは必然的に対応の遅れにつながる。

―止まることなかれ―

脚に異常をきたしても頭は常にトップギアでいさせろ。

―熱くなることなかれ―

しかし、冷静さを失うことは何よりも行動を遅くする要因になる。

だから、見つけたその「隙」に迷うことなく全速全力で飯田は駆け抜けたのだった。

「零速 ヴレシプロバースト」!!」

予備動作もなく、徐々にギアを上げることもなく、飯田天哉は瞬時に自身の最高速へとエンジン出力を上げ、発目の背負うバックパツクのバッテリーを上空に蹴りぬいた。

バッテリーだけでなく、背面がごっそりと削られたオクタコスは緩やかに動きを止める。

「ミッドナイト先生、動けません。ギブです」

「発目さんのギブアップ宣言により、この勝負飯田君の勝ち!!」

レシプロの影響で上手く動けない飯田は苦々しい笑みを浮かべると発目に手を差し出した。

「君と戦えたことをオレは誇りに思うよ」

セメントスとミッドナイトに助けられながらオクタコスを脱ぐ発目。

そして、発目も差し出された手を握り返す。

「ふふふ、サポートアイテムの恐ろしきを見せられたことだけでも今回は良しとしましょう。それに、私自身大発見がありましたから」

後日、オクタコスの使用に関して各方面から雄英高校へ問い合わせがひつ迫し、夏休みが始まるまでに発目の銀行口座に見たこともない金額が振り込まれることになるのだが、それは未来のお話。

激闘の3連戦で観客のテンションのボルテージも上がりきった中始まった4回戦。

しかし、会場には先程までの選手への応援も歓声も響いてなかった。

3回の戦闘を終え次も熱い戦闘が繰り広げられる、そんな期待の熱量が会場を覆っていた。

「火埜、お前とはサシでやりあいたかったんだ!!」

「あ、そう」

「テンション上げてけや!!」

「……、うるさい」

片や熱気とヤル気十分、誰が見ても熱血モードの鉄哲徹鐵。

片や怠気を垂れ流し、ヤル気が欠片も見あたらない火埜翔織。

そんな対照的な二人の戦いは、開始とともに火埜の強烈な脚撃が鉄哲を捕らえ、フィールドの端まで吹き飛ばしたことから始まった。

個性で全身を鉄に変化させた鉄哲は、火埜の演武にも見える蹴りの猛襲を全て受け止める形で凌いでいた。

しかし数秒後、鉄哲の鳩尾へと向けられた蹴りを最後に火埜は空高く翔ぶと鉄哲の様子を観察し、強力な一撃を撃ち込むと空に逃げるを繰り返すようになった。

「火埜コラア!! 漢らしくステゴロで勝負しろや!!」

「てめえそれでもヒーロー志望か!!」

「相手見習って正々堂々闘え!!」

会場中に響く火埜への罵声。

そんな声に見向きもせず、淡々と一撃を入れては空に逃げるを繰り返す火埜へ遂にはブーイングが起こっていた。

「かっちゃん、ダメだよ」

「は、シズクこそ落ち着けや」

A組の生徒が集まった観客席では両手で断続的に爆発を起こしている爆豪と全身に傷のようなパワーラインが駆け巡っている緑谷が

今にも対面の観客席に乗り込もうとする互いを牽制しあっていた。

「にしても、ヒーローにも色々いるんだな」

「確かに、場の空気に酔いこの場がどういった場所なのか忘れている奴らが多いな」

瀬呂と常闇が冷めた目で反対側のヒーロー達をみていた時だった。

罵声を浴びせられようと平然としていた火埜の顔に誰かが投げたであろう缶がぶつけられた、そしてその映像がスクリーンに映し出されてしまった。

数秒の無音が訪れたと同時に、2箇所から何かを破壊する音が会場に響いた。

『さっきまで、オレ』の生徒に罵声浴びせてた屑ども。てめえ等動くな!!今からクビリに行つてやる!!缶投げた奴名前は言わないでおいでやるが温情はソコまでだ五体満足で帰れると思うな!!』

『落ち着け、イレイザーヘッド。お前こんなパワータイプだったか?司会席の強化ガラスに罅いれるパンチャーではなかっただろう』

『あああ、オレ知らねえ』

激怒し司会席に設置された強化ガラス全面に罅が入るパンチを放った相澤を本気で押さえ付けるヴラド。

そんな姿すら興味なさげに血走った眼で『屑』を見下すマイク。

そして、もう一つの音源はフィールドに鉄化した自身の拳を打ち付けた鉄哲だった。

「……が」

打ち付けた状態のまま何かを呟いた鉄哲。

次の瞬間、物凄い勢いで顔を上げた彼の顔は憤怒の色に染まっていた。

「外野がギャーギャー騒ぐなやクソがー!!!」

マイクを通さない肉声のはずなのに、その怒声は会場の外まで響いた。

「……、火埜」

いつのまにやら着地し顔の傷も治していた火埜に対して鉄哲は静かに語り掛けてきた。

「オレは『弱い』か？」

「え？普通に『強い』と思うけど？だから、対処に困ってるんだし」

鉄哲の質問に何を言ってるんだこいつは、と言いたそうな顔をして首を傾げる仕草をとる火埜。

「鉄哲は自分の個性の強みを理解している、それは『鉄』の硬度を持ちながらに柔軟に動けることじゃないの？」

「ああ、オレもそう思ってる」

「切島レベルで固められるんだったら、焰の最大炎圧照射で場外吹っ飛ばそうと思っただけど、最初の蹴りで膝付きかけたところを見ると、ソコまでの硬度ではないと思いついた次第で」

「だから、最高速度で蹴りつけることでスタミナ切れか場外狙いに切り替えたってことか」

鉄哲は再び下に顔を下げ、ブツブツと聞こえない程度に何かを呟き始めた。

火埜にしても根性論者の精神的タフネスは、切島とのスタミナ強化特訓でいやと言うほど味わってきたのでどうしようかと迷っているところだった。

「かぁー、クソが！火埜、オレが中途半端に『弱い』ばかりにお前を受ける必要ない罵倒に晒して悪かった」

「いや、だから十分に強いよ鉄哲は」

「しかーし、オレにも意地がある！！負けると解ったこの戦いでオレが成長するために頼みがある！！」

「聴いてねえーし」

鉄哲と火埜の視線が互いに交差する。

やる気の無いと思われた火埜の雰囲気は、今察すれば身体に余分な力の無い、気負っていない脱力状態を保とうとしていた。鉄哲はその雰囲気を感じたことで、自分がどれだけ余裕の無い状態でこの場に立っていたのか気がついた。

また、そんな自分に対して油断無く構え、冷静さを欠くことの無かった火埜翔織という存在の異常さに頼もしさを感じていた。

「火埜！次のA組の合同訓練にはオレも、いや『やる気のある奴ら』」

も混ぜてくれ!!」

「そこはクラス長同士で折り合いつけてくれ、責任者オレじゃ無いんで」

「そうだな!!拳藤に任せりゃいいな!!」

「まあ、B組の面々は基礎固めからはいつてるから切欠さえ掴んだら化けると思うなあ」

「と、なれば!!」

その言葉と共に、鉄哲は全身を銀色に染め今まで以上に好戦的な笑顔を浮かべた。

「これが今のオレの全力全開、折れない鉄の盾だ!!」

「その気概に答えないのは『漢』じゃないか」

好戦的な笑みを浮かべた鉄哲に対して、涼しい笑顔を浮かべ眼を閉じた火埜。

両腕を鳥の翼に変化させ、露出していた脚の部分も猛禽類を彷彿とさせる脚部に姿が変わった。

翼をふるい、その姿が目視できるギリギリの上空へと舞い上がった火埜の顔には好戦的な獰猛な笑みが浮かんでいた。

「いくよ鉄哲、最硬の盾の硬度を見せてもらおうよ」

「いつちよこいやコリア!!」

両翼、両脚のオレンジ色のオーラが徐々に色が変わっていく。

「鳳」

その眩きと共に焰は緑色の雷のような焰に姿を変えていた。

「凰」

その声が響くのと同時に、火埜の姿は消え去った。

「印」

その言葉と共に、鉄哲の胸部に脚撃が叩き込まれ。

「烙雷緑」

場外の壁まで吹き飛ばされた鉄哲を背にフィールドに着地する火

埜の言葉で終わりを迎えたことに周囲は気づいた。

「流石だよ、鉄哲徹鐵」

ミッドナイトの勝者宣言が響く中、火柱は壁にめり込んだ鉄哲を尊敬の眼差しで見る。

「意識を失つても個性を解かない、その気高さはこの会場のどんなヒーローにも劣らないよ」

セメントスの個性で壁から救出され運ばれていく鉄哲を見ながら、その姿に素直に賛辞をのべる火柱。

そんな尊い光景、その後ろでは。

「てめえ等、ヒーロー辞めて再就職先でも探しやがれ!!」

「グルガ、ガウガウ!グルルルガウガア!!」

「ヒーローなのにこの場にいるという意味を履き違えてるド3流どもが!!随分となめくさった口きいてくれたなあ!!」

「HHHHHHH!取り敢えず、君達は再試験なのさ!!ボクの可愛い生徒をバカに出来るくらいの実力があるかどうかみて上げるのさ」
「やり過ぎるんじゃないよ、あたしやだって流石に怒ってるんだからね」

「誰か止めるよ、ヒーロー以前に教師として放送コードギリギリの顔と発言だぞ」

「マア、仕方無いダロウ。流石ニ看過出来ル範囲ヲ大キク逸脱シタ行イダツタカラナ」

大会実行の為に集まっていた教員によるお仕置きという名目の別の何かが行われかけていたのだが、比較的に穏健的な思考をしやすい教員たちにより何とか留められていた。

「見て見て、カッコいいでしょ？一方的でしょ？最高でしょ？」
とあるバーの一室。

綺麗に手入れされた白髪のロングヘア、簡素だけど見る人が見れば解るハイブランドの衣服、
“あの日”とは全く違う姿をした“死柄木葬”が隣に座る女子と先ほどの雄英体育祭で行われてた試合の感想を求めていた。

「はい、なかなか素敵な方ですね。でも、私はもつと血だらけで傷だらけな姿が見てみたいです」
「んもう、“トガちゃん”たら。でも、ヒノ君の個性だとその姿はあまり見れないかな」

「そうですか、残念です」

葬のとなりに座り、ジューズ(ブラッドオレンジ100%絞りたて)を飲みながらテレビに映し出されている少年を見た感想を述べるところにでもいそうな少女“トガヒミコ”。

“とある事件”の容疑者である彼女は、ある日町中でばったり出くわした葬と意気投合し、彼等の隠れ家に住み着いていた。

そして本日、雄英体育祭を大画面テレビでポテチとジューズ片手に観戦していたのだった。

「それよりも、私はヒノ君の周囲に向ける“目”が気に入りました」
「流石トガちゃん、解ってるう！そう周囲のあの“なんちゃってヒーロー”達をまるでゴミを見るかのように見下す、憎悪と殺意で満ちたあの泥のように濁った目こそヒノ君の一番カッコいいところなんだよ」

火埜本人が聞いたら名誉毀損で訴えかねない物言い。

しかし、女子2人は楽しそうに和気藹々と1人の少年について熱く語っていた。

テレビの中ではその後の試合も進んでいるが女子2人はそんなこととお構いなしに火埜のことを語り合っていた。

「はあ、ねえちゃん達うるせえなあ」

「死柄木弔、そう言うものではありませんよ」

『葬にとつては初めての同年齢で同姓の友達だからかな？しかし、ヒノ君も良い感じじゃないか』

女子2人のお喋りしている姿はとても和気藹々としており、2人の整った外見も合わさってとても可愛らしく見えた。

話している内容さえ気にしなれば。

『それにしても、今年の“卵”達は粒揃いだね。思わず僕も欲しくなるような個性の子が多いじゃないか』

「先生も節操無いな、だから負けたんじゃないか」

『はははははは、痛いところをつくようになったな弔は』

弔からの返答にAFOの愉快そうな笑い声が木霊する。

「しかし、かの少年は本当に興味深いですね。ヒーローとしての資質は無論高いと思われませんが、それを凌駕するやもしれない深く暗く黒く濁った心の闇。彼の本質はどちらなのでしょう？」

黒霧はダークウェブに出回っている僅か数秒を切り取った火埜の画像を眺めていた。

上空に舞い上がり下を向く刹那の一瞬、観客に向けられた黒く濁った瞳。既に狂気じみた信奉者まで現れている現状に珍しく溜め息を吐いていた。

『それは違うよ黒霧、どちらかではなくどちらも彼なのだよ。コインの表と裏、光と闇、交わることの無い平行線をたどる筈のそれらが交わる特異点、“混沌”それこそが彼の彼たる魅力なのだよ』

けして顔の写ることの無いモニター、しかし黒霧も死柄木弔も感じ取っていた。

AFO、闇の王が笑顔であることに。

「しかし、フタを開けてみたら1回戦突破は全員A組か」

解説室はパワーローダーによって改修された強化窓ガラスがはめられ、休憩に用意されたお茶を飲みながらブラドキングは1回戦の結果を噛み締めていた。

「だけども、B組の奴らもA組の奴らに引つ張られたかのように実力を発揮してたじゃねえか」

「ふっ、嬉しい誤算ではあったがな」

マイクとブラドキング、2人の会話に耳を傾けながら相澤は1人の生徒を注視していた。

クラスの間隙に囲まれ、特に女子に囲まれながら困ったような笑みをした火埜の姿を。

「(翔織、お前は未だ世間を憎んでいるのか?)」

相澤やマイク、ミッドナイトにとって火埜翔織は生まれ落ちた頃から知っている存在であった。

相澤が何でも1人でこなそうと無理をしていた時期に無意識に止めてくれたのは自我も定まらない火埜であった。

そんな火埜か事件に巻き込まれ、行方不明になったことがあった。

それは世間で「個性」が発現した子供が誘拐されるといふ事件であった。個性検査が行われ、「個性」の判断がされた火埜はそのカルテと共に姿を消したのであった。

警察だけでなく、相澤や火埜の両親と関係があったヒーローも捜索にあたっていたが一向に捜査が進まなかった。

そんなある日、とある場所にあった廃工場で巨大な爆発が起きた。

その廃工場に向かった相澤とマイクが見たのは溶液で満たされたカプセルに閉じ込められ眠らされていた火埜とそんな火埜を守るようにカプセルに抱きつき爆発から我が子を守る火埜獣造と彩命の遺体だった。

火埜の意識が戻るまで報道規制が張られたが、ゴシップ専門の雑誌が火埜夫妻の死を面白おかしく書き立てた事で、火埜にも世間の好奇心が向いてしまい、一時期発狂していた。

そんな爆弾のような火埜を引き取り、各媒体に注意喚起を促し、それでも辞めない者には裁判を起こした現義男母であるイワさんには本人は認めないが今でも感謝していた。

そんなこともあり、相澤のマスコミ嫌いは拍車がかかっていた。

そんな火埜も幼馴染みと再会してからは、精神の安定を取り戻し年相応の笑顔をするようになっていった。

「(いつまでも、大人が守れるわけじゃない。だからこそ、ふりきって

欲しいと思うのはオレの我が儘なのだろうか」

相澤は知っている。

火葬の両親が眠る墓には月命日には花が添えられていることを。

そして、墓前には誰かが涙を流したような跡が残っていることを。

翌日の火葬が誰かを殺しかねない濁った目をしていることを。

「オレ達じゃダメだな、あいつを対等に扱ってくれる奴に、あいつを任せたい」

そう、思いを馳せ目を閉じる相澤。

その横顔を事情を知るマイクが悲痛な面持ちで見ていることにすら気付けずに。

「素晴らしい、なんて素晴らしいんだ彼は」

どこかの一室。

高価な調度品と机に置かれた高級そうな料理の数々。

大画面のモニターに写し出されているのは火葬が上空に留まっている姿だった。

「『異能』をあそこまで自在に操り、未だ伸び代を感じさせるなんて、我々の同士の中にも彼のような同士は存在しない」

感極まり、1人立ち上がり画面へと拍手し続ける男性。

「そうですね、しかし何よりも私の目を引くのはあの演説力です」

集まった男女の中でも一際整った立ち居振舞いをする男性は、火葬の別側面を称える。

「雄英に潜む同士からの話を聞いたでしょう？彼の強大な異能は無論の事、他者を自分の思想に引きずり込む演説力は我々にとっても必要な力ですよ」

「それもそうだけど、私は彼の半生にもスポットを当てべきと考えます」

部屋の中の紅一点、女性が持参した資料を見ながら歪んだ笑みを浮かべる。

「マスメディアによって歪まされた人間性、それでいてヒーローを志す精神、センセーショナルな半生。自伝にしたらどれだけの人間の興味をひくのでしょうかね」

女性が恍惚とした笑みを浮かべるなか、1人パソコンで何かを探し続ける男性はイライラしたように爪を噛みながらパソコンを操作し続けている。

「だというのに、ダークウェブにすら彼の『最初の』個性診断書が見つかからない。あれだけの異能ならば必ず5才までに一回は作成されるであろう診断書が何処にもない、どこだどこだどこだどこだどこだどこだどこだどこだどこだ」

そんな3人を拍手をしていた男性は優しい笑みを浮かべ手を広げる動作をする。

「まあ、そんなに焦ることもない。我々にも、そして同士達にも未々『時間』が必要だ。彼には是非とも我々の同士となって欲しいが、時期を待つとしようじゃないか」

動きを止めていた複数の歯車。

それが緩やかにだが動き始める。

体育祭会場は先程までの盛り上がりから若干の静けさの中、戦いが始まろうとしていた。

けして、会場席に空白が出来たことが関係しているわけではない。そして、その原因が一部教師達が暴れまわったからとかけしていない。

そんな会場中央、一組の男女が相対していた。

『さあて、勝ち上がり最初の対決はこの二人だ』

『シヨートされても困るが俺もカワイイと思うぞ、剛力キュートガール 緑谷静空』

マイクの紹介を恥ずかしそうに頬を染めながら下を見る緑谷。

会場の男性(一部お姉さん方)からカワイイと歓声が上がっている。

「ステイ、勝ちまじでステイ」

“有幻覚の鎖+塩崎助力の茨+瀬呂のテープ”で縛られながらも盛大に爆発している爆豪。

「火埜くん!!報酬を!!」

「解ってます、はいどうぞ」

「あああ、お姉さま」

「上鳴の奴、不憫な」

塩崎のスマホに送られたのは、上鳴(女子)のチアコス写真だった。

『ヴァーリースァーリース、戻れてよかつなバチバチエレクトリックボーイ 上鳴電気』

その紹介であがる歓声。

尚一部から「上鳴ちゃん」と送られる声援にげんがりしている上鳴。

「きゃーーーー!!お姉さまー!!」

「のこ!?塩崎こんなキャラだったっけ?」

「女子からの声援で羨ましいけど、これは違うよね」

『クラスメート同士、お互いのことはある程度知っている2人の対決。担任としてどう見るよイレイザー?』

『1回戦の2人の試合だが、上鳴は現状の手札を切っているのに対して緑谷がまだ手札を温存しているように思える。上鳴がそこをどう攻略するかで試合の流れが変わってくるな』

『確かに、現場でも“個性”が知られていても対処できる力が求められるしな』

『互いに位置に着いたところで、カウントいくぜ“3”』

『“2”』

『“1”』

『Ready go』

マイクの開始の合図と共に上鳴は電気を纏い高速で緑谷へと突進していった。

『開始早々、上鳴の速攻が炸裂!!』

『ああ見えて純粹に力があるからな緑谷は。いくら男女で素の身体能力に差が出ているとしても、力比べでは上鳴に分が悪いからな』

『そこに個性でブーストされた力が上乘せされるのか、だとしたら上鳴の速攻は理にかなっているな』

開始速攻、これこそが上鳴の緑谷必勝法だった。

上鳴と緑谷が格闘戦のみに絞った場合、上鳴が勝てる分野の一つに“帯電状態での反射速度”があげられる。

相手からの攻撃を見てから反応できる上鳴はこの事を究極の後出しと言っていた。

事実、緑谷が攻撃準備に入った時には既に攻撃体勢を整えていた。

『緑谷、この勝負もらったあ!!』

ABヒーロー科の観戦席は仕切りが取り払われ、全員が思い思いの席で観戦していた。

『あちやあ、上鳴君の悪い癖が出てもうてる』

『?上鳴氏の悪い癖ですと?』

麗日の眩きに反応したのは宍田だった。

『まあ、塩崎さんとの戦いが思い通りにいったのがいけなかったのでしょうか?』

『ケロ、相澤先生が頭悩ませてる光景が目には浮かぶわね』

「あのだあぼがああ！翔織と静空が何度も言ってるのに何で忘れてんだ！」

八百万は気の毒そうに、蛙吹はこの後のお説教タイムに、爆豪はあまりのアホさに言葉が出ていた。

「ねえねえ火埜君」

火埜の後ろに座り肩を優しく揺さぶる柳。

「はいはい、上鳴は今日と言う日まで本当に努力してきたのはA組皆が認めてることなんだ」

火埜説明にA組全員が同じタイミングで頷く。

「個性も強いし、伸び代もヘタに有ったからか自分の思い通りに事が運んでいるとちよつと調子にのつて警戒が薄れるんだよ」

「今がその状態ってことなの？」

「そういうこと、まあそれを狙ってる相手が目の前にいることに気付いてももう遅いんだけど」

火埜の言葉と同時に、会場では物凄い音が木霊した。

そこには、ステージギリギリで何とか踏ん張る上鳴と脚を振り切つたであろう姿勢の緑谷が立っていた。

『What!?!なんじゃ今のは?』

『緑谷の奴、空気を蹴り抜いて空気圧で上鳴を吹き飛ばしやがったな。』

上鳴の奴も空中にいたにも関わらずよくギリギリで耐えた』

『空気砲みたいなものか。指向性がないから全面攻撃のようになってるが、今回はそれがマッチした形になったな』

『上鳴は気絶狙いだから接近しなければならぬ、緑谷は場外狙いで空気砲のための振りかぶる“溜”が必要、どちらに転んでも面白いことになりそうだな』

「み、緑谷!!殺す気か?今の訓練で丸太5本ぶつた斬つた蹴り技だろ!!」

「なっ!失礼な!!ちゃんと加減できたもん!!とーくんでちゃんと練習したもん!!」

「あいつの個性が“火の鳥”じゃなかったら確実に殺してただろうが!あいつ4日位マジでお前のごと怖がってたじゃん!!」

「上鳴君だって、とーくん練習台にして放電圧の調整練習してるじゃん!!上鳴君が近づいて静電気流れるだけでとーくんビクつかせてるくせに!!」

ガクブルガクブルガクブルガクブルガクブルガクブルガクブル

「ける、大丈夫よ火埵ちゃん。わたしが一緒にいてあげるわ」

「ダイジョウブ。ツユチャンソバニイル、ダイジョウブ。」

「ケロケロ♪」

緑谷のキックをみた瞬間に後ろに隠れてジャージを掴まんでビクつく火埵を横に座らせ頭を優しく撫でる蛙吹。

その光景を数人の女子が羨ましそうに見ていた。

『若干の被害が出ているようだが試合は一進一退!上鳴が高速で間合いを詰めようとして、緑谷が空気砲をぶっぱなす!!』

『しかしこれ決着つくのか?』

『ああ、もうすぐ着くだろうな』

『はあ?』

『まあ、見てれば解る』

相変わらず答えを濁した相澤の答え。

しかし、その瞬間は以外と直ぐに訪れた。

「あ」

蹴り抜いた緑谷が突如間の抜けた声を出した。

「っ!!」

それに反応した上鳴が“上空”に逃げた。

その時、緑谷はしてやったりとニンマリと笑みを浮かべた。

それに気が付いた上鳴は驚いた顔をしていた。

『あれ?なんか上鳴の奴「やっちゃまった」みたいな顔してるぞ』

『そうか! “思い込みの利用”か!!』

『ヴラドの言う通り、訓練で何回も火埵が両断される光景を見てきた上鳴は緑谷が漏らした言葉で力加減を間違ったと判断した』

『なるほど、それで思わず足場の無い上空に逃げた』

『アイツのスピードは神経に過剰に電気を流して反応させている。足場が有るならともかく、空中では踏ん張りが利かない。反対に緑谷は

空気を蹴る。ことで空中を移動することが出来る』

『Oh、つまり』

「ごめんね、上鳴くん」

「やられたー！ー！！」

空中で身動きが取れない上鳴に対して、空気を蹴ることで空を走る緑谷。

地上と対して変わらない勢いを着けた渾身の寸止め右ストレートが炸裂した。

その結果、上鳴は場外に打ち込まれ気絶した。

『上鳴君、場外及び気絶!!よって勝者緑谷さん!!』

ミッドナイトの勝利宣言。

それにウインクといたずらっ子のように舌をだし、ピースをする緑谷がスクリーンに映し出された。

『“そういうこと”無意識にするから可愛いと言われるんだよお前は(溜め息)』

『なあはははは、まじで可愛いよなああいうところ!!でもよお、計算づくで、ただあざといアホよりも1000倍は良いだろ』

『緑谷の奴は天然ジゴロと、あれはファンの獲得しやすいタイプになるだろうな』

「シズおま、おま、オレが、ああああああああああクソがあああああああああ!!」

「おおう、爆豪の奴が自制しただ!!」

「まあ、まだ“あっち”回復しきってないから仕方ないよね」

尾白が後ろを振り向く。

そこには。

「シズコワイシズコワイシズコワイシズコワイシズコワイ」

「アカン！両腕翼に変えて尾籠しとる」

「ほら、火柱出ておいで。皆で抱き締めたげるよ」

「!?真ん中はわたくしですわ」

また別の火種が起こっていた。

緑谷対上鳴の試合の熱が冷めることなく行われている2回戦第2試合。

先手を取ったのは意外な男だった。

ミッドナイトの試合開始の合図と共に両腕を撃ち合わせる。切島。

その姿に寒気を覚えた。火柱が瞬時に両腕を翼に変え、瞬時に加速すると切島に飛び蹴りを放った。

焰のような蹴りの衝撃が「フィールド」へと伝わりフィールドが裂け、砂煙が上がり切島の姿が見えなくなった。

会場では火柱の瞬殺劇に残念そうな声上がるが、誰一人気が付く者は居なかった。

「おいおい、なんだよその姿は」

煙の中から飛び出しフィールドの端へと「避難」した火柱。

その脚は何か「固い物」を蹴り着けたかのように痺れているように見えた。

「お前らも知ってる通り、オレの個性は身体が固くなるっていうシンブルなもんだ」

煙の中から切島の声が静まり返った会場に響き渡る。

「だから、常に全身を硬化させることが当たり前だと思ってた。けどよお前を見ていて思ったんだよ」

煙が晴れていく。

そこには普段と変わらない顔をした切島が立っていた。

「オレも『部分的な硬化』が出きるんじゃないかって」

「それで試して、諦めないで試して、か。本当に切島は頑固だな」

火柱の言葉を合図にしてか、硬化した腕を振るい煙を飛ばす切島。

「その答えが『それ』?」

「安無嶺過武瑠・巖兜裂斗&黎我守!!最高硬化を実現したオレの新しいスタイルだ!!」

「参ったぜ。安無嶺過武瑠最大の弱点である『全身高密度硬化による

動けない」という弱点を克服するための現状の最適解と言うわけか」「おうよ、いずれ全身で安無嶺過武瑠長時間維持出きるようにするけど今はこれが限界なんだ」

「でも、オレの攻撃を耐えきる硬度、それに尾白に教わった武術の衝撃流しを地味に併用してるあたり流石だね」

「へっ、クラス内模擬戦上位のお前に勝ちたいんでね。オレも『漢』だから!!」

「熱っ苦しいね!!嫌いじゃないけど、さっ!!」

そこから始まったのは弓矢対剣盾の戦いだった。

常時維持するわけでなく、火埜が間合いから外れたら硬化を解き、以外と速い脚で接近し自身の間合いに詰めたら硬化して殴り付ける切島。

それを嫌がり上空に逃げるが鳳凰印を使用できるまでの炎圧上昇を切島に妨害されるので速さにもノを言わせた多角攻撃で切島のスタミナを削りにいつてる火埜。

『うおおおおおお、見てるかオーディエンス?これだろ!お前らが求めてたのはこういう熱いバトルだろ!』

『一撃の威力でいえば火埜は確かにクラス内でも上位だ。しかし、単純な防御力とそれを維持するスタミナに関していえば切島は雄英生徒という括りの中でも高い位置に存在できるだろう』

『火埜が勝つためにはその防御を突破するか自分以上のスタミナを使いきらせるかしか道はないな』

解説席で交わされる言葉は会場内に響くのと同時に歓声が爆発する。

火埜だけが攻撃をしているように見えるが所々で切島も殴る蹴るといった攻撃を繰り返していた。

火埜もクリーンヒットこそしていないが何発かヒヤリとする攻撃があつたようで、今は肩で息をしながらフィールドの端で休憩をしていた。

「うおおおお!!オレも、オレもあんなバトルがしたかつたぜ!!」

AB混同閲覧席では鉄哲が悔し涙を流しながら、それでも目の前の

バトルを糧にするためにしっかりと見続けていた。

「でも、相澤先生がいつか言っていたこと、切島が一番実践できてるかもね」

芦戸がフィールド上の戦いから目を剋らすことなく呟いた言葉。

放課後訓練において勉強時間が組み込まれることになった際、相澤から苦言があった。

「いいからお前ら。正直『馬鹿』でもヒーローにはなれる」

突然の発言にクラスメート全員がその意味を理解できていなかった。

「だがな、『馬鹿』じゃ誰も救えねえんだよ」

そう言い放った相澤の目には悲しみの感情が宿っていた。

いつもと違う雰囲気にはA組生徒は引きずり込まれていった。

「自分で考えて考えて考えて、練習して練習して練習して、その繰り返し現場で行動できるかどうかに関わってくる。常に考え続けろとは言わない。限られた時間の中で自分が何が『出来て』何が『出来ない』か、そしてその『出来ない』何かをどうするか考える。何かあった時、それで後悔するのは自分自身なんだ」

「その言葉はA組生徒に深く刺さったのだろう。」

放課後訓練も毎日ではなく休日も作り、身体だけでなく頭も鍛えるように全員で考えた。

その結果が今、現れていた。

「のこお、A組との差が如実に現れてしまっているノコ」

「勘違いしないで欲しいんだけど、うちら毎日居残ってる訳じゃないよ。メリハリつけてやってるだけ」

「ケロ、休む時は休むし遊ぶ時は遊ぶわ。だから、『その時』は皆で頑張るって決めたのよ」

その思考自体が既に現れてしまった差であることは明白であった。

その結果、トーナメント1回戦の勝者は全員A組であり、『今』自分が出きることを最大限のパフォーマンスを持って実行出来た、その結果であった。

「っだあああああああ、こんのスタミナ馬鹿!!自分が出きることを」

突き詰めていくのって、うちのクラスだと切島が一番だったか」

「がああああああああ、この鬼畜軍師が!!頭の回転が良すぎなんだよ!!もちつと付け入る隙残しておけよな」

フィールドに響く互いに互いの貶してるのか誉めてるのか解らない言葉の応酬。

互いに決定打に欠けているようで戦術プランの組み直しをしているようだった。

「いい加減に息切れぐらいしろや、こんの体力お化け!!」

「緩急つける余裕まだあんのかよ、この腹黒もやし!!」

スタミナの余裕のない火埜がカポエラのように流れるような蹴り技に切り替えた。

切島の安無嶺過武瑠スタイルは副次作用で硬化した先が鋭利な刃物のように尖る。

オーラ化している脚も蹴りが入る瞬間は実体のある脚に切り替えなければならぬので火埜の脚は所々傷だらけになっていた。

一方の切島もスタミナこそまだ余裕があるが決定打に欠けていた。元々、猪突猛進タイプなためか周囲への警戒を常にし続けていたからか、集中力が切れかかっていた。

「おい、切島」

相当きているのか既に猫を被ることを辞めた、好戦的な笑みを浮かべた火埜が切島に声をかける。

「チマチマやってても無駄に時間を使うだけだ、ここは一発本気でぶつかろうぜ」

そう言うのと火埜の両腕は緑色の雷と黄色の焰を帯びた翼に変化し、両足は藍色の霧状のオーラを発する鳥類の足へと変化していた。

「それが挑発だって解ってるんだけどな、猫が剥がれたお前からの挑戦状、答えてやらなきや「漢」じゃねえよな」

火埜のあからさまな挑発に対して、切島もまた挑発的な笑顔を浮かべる。

両手足の硬化が解けていき、身体の見える範囲は完全に硬化が解けた状態になっていた。

肩で息をしていた火柱の呼吸が徐々に落ち着いていき、静寂が辺りを覆っていった。

火柱と切島、互いの視線が交差したその時だった。

「鳳凰印・霧幻藍」
ほうおういん ザエノムシエル

「安無嶺過武瑠・完全武励?!!!」
あんぶれいかふる ふるぶれいく

瞬間的に真横に加速し切島に突き刺さるような蹴りを繰り出す火柱。

それにタイミングを合わせたように全身を最高硬度で硬化させた切島。

切島の最高硬度かつ全身硬化による完全防御により、試合は幕を閉じる。

そう誰もが予想しただろう光景は、裏切られる形となった。

「るああああああああ!!」

「うおおおおおおお!!」

オーラの推進力に身体の捻りによる回転が加わり、弾丸のように切島を押し出していく火柱。

切島も負けじと、足を掴もうとして違和感に気がついた。

『火柱の幻覚には“有幻覚”と言うものが存在する』

『突然どうしたイレイザー』

『この有幻覚の厄介なところは“幻”でありながら“実体”があると
言うところだ』

相澤の突然の呟きに会場がザワついていく。

『通常の“幻覚”が各個人の認識能力に働きかけてその個人を騙すの
に対して、“有幻覚”は複数の存在の認識能力に働きかけることで、
そこに存在していると言う認識を“世界”に一時的に上書きするこ
となんだと』

『つまり?』

『今、火柱はオーラに変異させた脚で物理的に攻撃が可能であり、さら
にあいつ自身へのダメージは無視した状態に有ると言うことだ』

フィールド中央で拮抗していた最速の槍と最硬の盾は加速し続け
ている火柱により切島が徐々に押され始めていた。

「踏ん張れ!!切島君」

「ここまでできたら、耐えきれ!!」

会場から響く切島への応援。

「いったれ、火埜君!!」

「後もう少しだよ!!」

そして、同じく火埜にも応援が送られていた。

「がああああああああ!!」

フィールドで2人の声が響くのと同時に、閃光が走った。

次の瞬間、2人を中心に爆発が起き砂煙が立ち上がりフィールドだけでなく、周囲も砂煙で包まれた。

『どうなった!?!』

『火埜が蹴り抜いたか、切島が防ぎきったか』

『砂煙が晴れてくぞ?!』

徐々に晴れていく砂煙。

フィールドが姿を表すと、フィールドの端ギリギリで耐える2人の姿があつた。

火埜は限界間近なのかフラフラといつ倒れたもおかしくなく、反対に切島は動くことなく視線を下に向けていた。

「.....、火埜」

切島から声が漏れる。

その声に反応して顔を上げるのが精一杯の火埜に周囲は切島の勝ちを確信した。

「次はオレが勝つ」

そう告げると、切島は後ろ向きに倒れ、フィールドの外へと落ちていった。

フラフラの火埜とミッドナイトが視線を合わせることで意識の有無を確認し、切島の状態を確認しに来たミッドナイトが見たのは、満面の笑顔で気絶した切島だった。

「切島君の気絶を確認、勝者火埜君!!」

ミッドナイト宣言に会場は万感の拍手と声援が包み込んだ。

「もう、二度とお前とはやりたくないな」

ギリギリで意識を保っていたであろう火埜もまたそう眩くと気絶し、フィールドへと倒れこんだ。

2人の健闘を讃えるように拍手は数分間なりやまなかつた。

『これ、両者KO?』

『次の試合開始までに火埜が目を覚ませば、問題ない』

2回戦第3試合。

そこには戦場が広がっていた。

「くたばれや、八百万!!」

両手から発せられる爆発を駆使して縦横無尽に飛び回り、格闘術と爆発により場を制圧しようとする爆豪。

「言葉が過ぎますわよ、爆豪さん!!」

両手持ちできそうな竹刀のような長めの警棒を創造し、爆豪との距離を制圧した八百万。

『爆豪の奴は解ってたけど、八百万は何だ?なんで爆破された警棒が“再生”してんだよ?』

マイクの疑問は最もであった。

八百万の警棒は創造してから幾度と無く爆破され破損してきた。

それにも関わらず、八百万が攻撃をすると破壊された部分が再生しているのである。

これにより、八百万は爆豪とのこの試合において相手との間合いを制しているのであった。

『ほう、考えたな八百万の奴』

『ん?そういうことか!しかし、よく“あんなこと”教えたなイレイザー』

『違う、八百万が勝手に考え付いたんだろう。まあ、いつも目で追ってる奴の個性が個性だからな。その思考に至ったのは必然だろう』

相澤のボヤキというか「“生徒”^{我子}“自慢”が炸裂した、それを合図にしてか注目度が増す八百万。

そんな八百万の“トリック”に気がついたのは同時だった。

「ちい、そういうことかよ」

「ああ、そういうことかな」

「うわ、そういう発想かあ」

フィールドでは爆豪が観客席では復活した火埜と緑谷がそう呟いたのは完全に偶然だろう。

天性の鋭さを持つ爆豪。

自由な発想と思考をする火埜。

無個性だったからこそ得た異常な観察力を持つ緑谷。

そんな3人だったからこそ八百万の行っていることに気がついたのであった。

「八百万、てめえの『それ』まだ『創造中』だな」

フィールドでニタリと好戦的な笑みを浮かべる爆豪。

それは、彼のギアがもう一段階上がる合図でもあった。

「はあ、やはり爆豪さんは気付かれてしまいましたか」

そう言いながらも笑みを深める八百万。

彼女の右手に握られた半ばから破壊された警棒の柄、八百万が握っている右手からは、彼女の個性である「創造」の過程で発せられる微量な光が出ていた。

「私と繋がっている『この状態』であれば、爆豪さんのおっしゃるとおり『創造中』となります。ですから、いくら壊されてもまた『創り直し』てしまえますのよ」

「かつ！面白えこと考えるじゃねえか」

「ええ、だって私はあなた『方』に負けっぱなしではいられませんもの」

「しつこい女は苦手だぞ、あいつ」

「まあ、失礼な！純愛ですわよ!!」

フンスフンスと聞こえてきそうな顔をする八百万。

その顔に既視感を覚える爆豪の頭には自身が恋する少女の顔が浮かんでいた。

「ですけど、こんな小細工で爆豪さんに勝てるとは私微塵も思っておりませんわ」

八百万の漏らした言葉に会場一同「え？」という顔になっていた。

「万全のあなたに勝って初めて、私は胸を張って翔織様の『初期』^{ファースト}幼馴染を名乗らせていただきますわ！」

フンスと息巻き、その高校級に実った西瓜をぶるんと震わせ胸を張る八百万。

「あ、あ、あ、？まだそんな寝ぼけたこと言ってるのか？あいつの
初期” 幼馴染はオレとシズだ!!」
フアースト

「で、どういうことかな翔織君？」

「わあー、可愛い笑顔（怯）。少し落ち着こうや静空さん」

至近距離で微笑む緑谷静空幼馴染のそれはそれは見惚れそうな笑みと押し倒されていると誤解しそうな顔の両脇に打ち付けられた拳に殺意を感じて怯える火埜。

「いや、あのね。2人と会えてなかった時期、イワさんが本格的に拠点を日本に写した時期に八百万家に預けられてね。そこで何故か気に入られて幼馴染を自称するようになったんだけど」

「つまり、押し切られたんだ。ボク達という幼馴染がいるのに」

笑顔とは本来威嚇するために生まれたのだと誰かが言っていた。

事実、緑谷の笑顔はとても愛らしく見えたが、正面から見ている火埜は怖くて震えそうになっていた。

「ケロケロ、静空ちゃん。私たちとの”約束”忘れちゃったのかしら？静空ちゃんの”それ”は好意でなくて依存よ？」

そんな火埜の隣に座り、緑谷に真正面から意見を言う蛙吹。

その顔はいつもの愛らしい笑みではなく、弟妹に言い聞かせる時のお姉さんの顔だった。

「誰かを大切に思うことはとても素敵なことよ。でもそれで相手を縛り付けるのなら、それはとてもダメなことよ静空ちゃん」

蛙吹の声に次第に落ち着きを取り戻していく緑谷。

その顔はただただふてくされた子供のようになっていた。

「解ってるもん、解ってるけど理解したくないもん」
無個性だった自分の初めての理解者。

同情や憐れみでは無く、ただ傍にいてくれた大切な幼馴染。

そこで止まることの出来た関係。

そんな居心地のよい関係が壊れるのが嫌だと緑谷は考えていた。

「ケロケロ、そんな静空ちゃんが私は大好きよ」

「ぶう、梅雨ちゃんには敵わないなあ」

”A組のお姉ちゃん” 蛙吹梅雨は今日も平和を愛している。

そんな平和空間が復活したアリーナとは違い、フィールド上では予想に反して爆豪が逃げ回っていた。

「おま、マジぶざけんな!!」「M134」なんて反則だろ!!」

言葉と所作で爆豪から見えないように右腕に創造した機関銃。

某国にて使用されているそれを小型化したようなその兵器からばら時かれる暴徒鎮圧用ゴム弾から逃げるように加速する爆豪。

「ご心配無く、これはM134を模倣して創られた電動ガンを小型化して創造したものですわ。うふふ、でもなんでしようこの感覚は」
引きつばなしのトリガーと次々に創造されるベルトリンク。

そして、恍惚とした表情で爆豪を撃ち続ける八百万。

状況が状況なだけになんとも言えないが、その表情は控えめに言っても、とてもエロかった。

『トリガーハッピーかよ!!』

『なんだあのミッドナイト先生レベルの顔は。放送禁止だろ!?!』

『まあ、普段大人しい奴ほどはつちやけたら危ないと言うことか』

『『お前の生徒だろうが!!』』

解説ブースで相も変わらず行われるコントであったが、相澤の目はどの試合よりも真剣だった。

『八百万の個性は出来るが多すぎるからな。その場その場の最適な判断と膨大な知識が求められる。さらに、普段のあいつはクラスでも大人しい分類だ』

『確かに「The・優等生」って感じたものな!!』

『育ちのせいかな所作も見事なものだしな』

『とれる手段が多いからか、判断が間に合わず、あいつは戦闘訓練での成績はかなり悪い。特に爆豪が相手になると今のところ全敗な訳だ。だが形に填まったからか、苦手な爆豪を圧倒しているからかいつになくテンションが高いが大丈夫だろうか?』

相澤の心配そうな呟きを合図にか、爆音とも言うべき銃撃音が止んだ。

音の発生源である八百万に視線を向けると。

「あううううううう」

頭を抱えるように悶絶した八百万がいた。

『What? 終始優位に立っていた八百万が目回してるぞ? どうした?』

『八百万の個性 “創造” は「自分の体内、正確には脂質からあらゆる無生物を創り出す」と言うものだが、その際に脂質と同時にとある物も大量に消費している』

「それは “糖分” だよ」

「「「「「糖分?」」」」」」

A・B合同席にて何故か説明役になっている火埜の言葉に全員が解らず首をかしげていた。

「はい! 火埜先生!」

「なんですか、上鳴?^{リア充}」

片腕を塩崎に抱き込まれた(色々諦めた) 上鳴が勢いよく挙手をする。

「脂質元々は本人から聞いてるけど、糖分の消費がいまいち意味解りません!」

そんな上鳴の言葉に全員が肯定を示すように頷く。

「何かを考える時、人は糖分を消費すると言われています」

ここまでは大丈夫ですか? と火埜が顔を向ける。

その雰囲気を観察したのか「はい」と元気よく返事する良い子達。

「それが細部、分子構造に至るまで必要な上に、常に創造するために八百万は体を動かしながら創造して頭の中でも出来上がり品を想像して、脂質だけじゃなくて糖分も消費し続けていたわけで」

火埜が視線をフィールドに移すと全員もつられてフィールドに視線を向ける。

そこには勝利宣言をされながらも、不完全燃焼でやり場の無い怒りをどこに発散して言いか解らない爆豪と、敗けを宣告され至急で点滴を射たれる八百万がいた。

「ははは、相変わらず真っ直ぐなんだから “モモちゃん” は」

世の中には“相性”というものが存在する。

それに対して文句を言うつもりは更々無いが、これはあまりにヒドイと飯田は言いたかった。

『触れたら勝ち確定とか麗日はルールとの相性がよかつたな』

『指先（の肉球）で触れた対象物を無重力状態にする『無重力』ゼログラビティ、飯田は麗日に触れられないようにして最速で場外に押し出すか気絶させるかどちらかの方法をとるにしても近づかなければならない。そのために、麗日に触れなければならずつまりその時は麗日にとってもチャンスになるわけだ』

次戦、飯田対麗日は開戦当初から状況が変わっていなかった。

あえてフィールド中央で飯田を待ち受ける麗日、フィールドの外周を走り続け加速し続ける飯田。

解説席のブラキンと相澤の言う通り、勝ち負けの条件がハッキリしているため、互いに攻めあぐねている状況にあった。

「モモちゃん、見えないんだけど？」

「私、今ものスツツツツツツツツツツゴク傷ついていますのよ、ヒーちゃん」。乙女を慰めるのは紳士の嗜みと教わったはずですわ」

AB合同観客席、そこはなぜか馴れた感じのカオス空間が展開していた。

座席に座り、困ったような笑顔をしながら試合が見えないことに文句を言う火埜。

そんな火埜を両腕両足でガツチリと捕まえ、2人の間に一切の隙間を作ろうとしないレベルで抱き付く八百万。

可愛く頬を膨らませ抱き付くその姿に周囲から殺意に似た何かを放たれていた。

「けっ！自業自得だろうが！それよりも、オレのこのやり場の無いモヤモヤをどうにかさせろやコラア!!」

爆豪と八百万が揃って観客席に戻ってきた、下を向いてあからさまに落ち込んでいた八百万だったが何となく火埜に視線を向けると、そ

ここには困ったような顔をしながらハグ待ち体勢の火埜がいた。

そして、八百万は周囲のことなど気にも止めず今のよう状態になっちゃったのだった。

余談だが、八百万百は運動時はブラを着けていない。

正確にはスポーツブラのようなものを着けているが、確りと受けとめ形を作るブラは運動に適さないと言う理由から着けていない。

つまり現在、火埜はその身に八百万の超高校級に育ち（今なお発育中）見事に実ったスイカを押し付けられ絶妙な軟らかさを体感しているのだが、まあ役得だろ。

「爆豪ちゃん、少し落ち着きましょう。それよりも久し振りに『放課後座学』何てどうかしら。お題は、『飯田ちゃん対お茶子ちゃん勝つのはどっちだ』でいこうかしら」

蛙吹の一言に早速反応した人物は

「普通に考えると飯田だろなあ。あの速さで押し出された一溜りもないし」

B組骨抜だった。

B組のブレーションとして信頼をおかれている彼は、試合開始からずつと二人の様子を観察し自分ならどう攻めるか考えていたのだった。

「あたしは麗日かな、『触る＝勝ち確定』という覆し用の無いアドバンテージは無視できないね」

同じくB組の推薦入学者である取陰が麗日の勝ちを推した。

個性もさることながら、その思考速度の速さはA組にもひけをとらないと評される彼女はリアリストでありロマンチストであることからか同性の麗日に頑張ってほしいと言う思いもあることは秘密である。

「ケロケロ、2人ともありがとう。それじゃ、みんなで考察しながら試合を見ていきましょ」

飯田天哉という男は良くも悪くも真っ直ぐな男である。

それが原因でクラス内でも『浮く』ことはあるが、それが彼の面白いところであった。

そんな男は女子に対しても紳士的であろうとする。

「麗日くんの背中中に隙が出来た時、その時こそ勝機！」
フィールドの外周を走り続けたことで飯田の速度は現在の最高速度になっていた。

それを目で追いかけていた麗日は徐々にふらつき始めていた。
クラス内では周知の事実だが麗日お茶子は酔いやすい。

特に自分を浮かせた時などはその傾向が顕著で放課後訓練でも幾度となく醜態を晒してきた。

そんな、麗日の状態に気が付いた飯田は速度を落とすことなく麗日の背中目掛けて手を伸ばした。

背中に触れるその瞬間、飯田は異様な寒気に襲われた。

「あのクソ眼鏡!!紳士ぶるのも大概にしろやボケが!!」

怒りを消化しきれしていない爆豪が試合を見ていて口汚く飯田に怒りを露にしていた。

「まあ、あれ」に関してはしようがないだろ」

「黙ってる半分子！オレとバディ組んだことある奴があんな体たらくなのはイライラするんだよ!!」

「まあ、オイラなら迷わず行くけどな」

「峰田、死にたいの?」

爆豪に珍しくツツコミをいれる轟だったが、怒り心頭な爆豪には逆効果であった。

そして、欲望の釜の蓋がガツツリ開いた峰田の本音に対して目にドツクンで黙らせる耳郎。

「あなた様、どういうことですか？A組の皆様は飯田さんよりも麗日さんの勝利を疑っておりませんか?」

上鳴の腕に絡み付き、意外とある胸に抱き込み、絶妙な距離で上目遣いをしてくる塩崎。

呼ばれ方にも馴れたもので、若干その感触を楽しむ余裕が出来てきた(本当に色々諦めて受け入れた)上鳴は少し考えた上で喋りだした。
「ウチの委員長は兎に角融通が利かないんよ。それは、こういうった状況であろうとも変わらなくてなあ」

「それが何か関係が?」

「あの速度で、正面から押し出すとなると触れられる箇所はまあ限定される訳で」

流石の上鳴も「その訳」に言い淀む。

「まあ、本当にヴィランとやりあうならその思考は一時的に放棄させるけど、流石にこの場では無理だったねえ」

「でも飯田の奴さあ、ある意味麗日嘗めすぎだよな」

「そうそう、放課後訓練で何度も誰かさんが「ラッキースケベ」ってたからねえ」

葉隠、耳郎、芦戸の補足されていたが、芦戸の補足と共に「ラッキースケベ」っていた講師役に鋭い視線が突き刺さる。

「……、僕悪くない」

犯人の弁明は、抱き付いたままの八百万の締め付け力強化により封殺された。

「(この勝負、僕の勝ちだ!!)」

飯田が腕を目一杯伸ばし、麗日の背中を押そうとしたその時だった。

「信じとったよ、飯田くん」

不意に麗日がその身を翻し、半身分の空間が出来た。

その空間に勢いを殺すことなく、最高速度で突っ込んでいく飯田。

そして、麗日の両手が飯田に触れる。

止めきれない加速＋突如としてなくなる重量

その結果は。

「飯田君「場外」よってこの勝負麗日さんの勝ち!!」

審判であるミッドナイトの宣言により麗日には会場から惜しみ無い称賛の雨が降り注いでいた。

「麗日、本当に当たっても文句はないんだな」

放課後訓練が始まった当初、対人格闘のスキルが必要だと考えた麗日は火柱に師事を頼んだ。

「うん、私の個性だと相手に触れることが前提条件みたいなどこあるし、それに戦闘訓練で私が飯田君に触れてたら絶対に結果は違ってた」

麗日の真剣な眼差し、個性を抜きにした対人格闘スキルで言えば爆豪の方が火埜を遙かに上回っているのだが、麗日の根底にある「何か嫌だ」という気持ちから火埜を選択させたのだった。

「本当に、不慮の事故とはいえ当たったり触ったりするかもだよ？その度に騒がれてたら意味ないんだからね」

「勿論!!あ、でも最初だけはゆるしてくれんかな?」

「既に弱気!?!」

その後、不慮の事故で触られたり、当たったり、(ナニを)蹴り翔ばしたり等があったが麗日がいやがらない限り火埜も師事し続けてくれていた。

「なあ、火埜君は何で私に付き合ってくれるん?」

放課後訓練の限られた時間でも休憩をとるようにしていた。

その時は偶々2人だけになったのでそんな質問が麗日の口から出てしまった。

「ん?ああー、多分オレ「頑張ってる女の子」が好きなのかもしれない」

猫を被らなくなり、口調が悪くなってきた火埜の口から出た言葉はよく解らない物だった。

「誤解を与えたかもしれないけど、A組の子が誰も頑張ってる訳じゃない、て訳じゃなくてね」

そう言いきると飲んでいたスポーツ飲料を見ながら、麗日を見る。

「年頃の女の子が無様さらして嫌なはずなのに、それでも麗日はオレと対人訓練続けてるよね?」

「うん、まあ自分の言い出したことだし」

「それでも、投げ出さない。それに」

少し言い淀むと、何かを決心したように麗日と向き合う火埜。

「それにオレ、麗日の笑ってる顔が好きだからから頑張ってる麗日のこと応援したいのかも」

比較的に容姿には恵まれていると認識させられていた麗日だったが、邪心なく褒められることに驚いていた。

ただ、その日から火埜を見る目に変化があったことは事実である。

勝利宣言を受けて火^{師匠}埜のいる席へと振り向く麗日。
そこには八百万に抱き締められ確りと自分を見ていない火^{師匠}埜の姿
があった。

“モヤ”

麗日の心から何かよく解らないものが溢れた。

取り敢えず自^{弟子}分の成長を真面に見ていない師匠にはお小言が必要
だ。

そう意気込むとフンスフンスと会場を後にする麗日。

彼女はその感情の名前をまだ知らない。

プニプニ

それは柔らかいものをつつく時の擬音語である。

プニプニプニプニ

少女は不機嫌そうにしながら、少年の意外と柔らかい頬をつつき続けた。

プニプニプニプニプニプニプニプニプニプニプニ

八百万ホールドから解放され、一息つこうとしたら戻ってきた麗日のプニプニ連打が幕を開けた火埜。

プニプニしていた間、一言も喋らずかといって不機嫌であることを隠そうともしない麗日は私怒ってますと言いたげな表情で火埜の隣で頬をつついていた。

「火埜君、私の師匠なのに試合見てくれてなかった」

プニプニ

「文句はモモに言ってください」

プニプニ

「私、すっごく頑張ったのに」

プニプニ

「読みやすい性格の飯田相手に計略負けするような教育してません」

プニプニ

「わたしががんばったのになあ」

プニプニプニプニプニプニプニプニプニプニプニプニプニ

ため息が漏れる音がした。

そして、麗日の頭部に手の感触が出現した。

「君が人一倍頑張ってることはクラス皆が知ってる」
麗日

麗日を労るように優しく、髪を滑るように撫でる火埜の仕草には年期を感じられた。

「勝己と個性ありで訓練してる時、オレがどれだけヒヤヒヤしてるかわらないくせに、毎回毎回突貫しやがって」

「ぶふう、ゴメンなあ」

「次の試合はしっかりと見させていただきますから」
「ならヨシ!!」

火埜に撫でられ幸せそうに顔を歪める麗日、その姿は主人にナゲナゲを強要する小型犬のようであった。

そんな2人の姿を視界の端に捕らえ、ヤル気を漲らせる少女がフィールドに2人。

「お茶子ちゃんも落ちそうだね」

「まあ、翔織ならしかたないかな」

「そうだね」

「ところでえ、葉隠さあん?」

「なんだい、芦戸さんや?」

互いにファイトスタイルを保ちながら淑女のように微笑み、相手にしか聞こえない声量でボソツと呟いた。

「なに、『正妻面』してんのさ」

ボソツと呟かれた言葉は互いにしか聞こえなかった筈なのに、駄々漏れの殺気がフィールドを覆い尽くした。

互いに両手に個性を現しており、葉隠は両手を完全に透明化させ太陽光の屈折によるレーザーを照射準備が調っている。

よく見るとフィールドが一部焼き切れ始めている。

芦戸も粘度MAXの強酸を作り明けている。

酸が当たった体操着の袖が焼き切れている。

フィールド上でミッドナイトがあまりの緊張から唾を飲み込む。

ゴクリと海上に響いたように思えたその音と共に粘度MAXの酸弾と熱線がフィールドでぶつかり合う。

その様はまるで2人の重い想いに個性が呼応しているかのようにであった。

「火埜、ウチみたいなの嫌か?」

「ヒーちゃん、我が家は万全の準備でお待ちしておりますわ」

「むう、私の師匠とらんといて」

「ううらあめえしい〜」

「妬ましいい(怨)」

火埜周囲には“何か”を察した美少女が集まり、周囲から見たらハーレム形成しているように見えてしまう。

事実、嫉妬メーターが振りきれた峰田は血の涙を流しその光景のすぐ近くで妬んでいた。

また、その実情を知らない男子からも似たような目を向けられていた。

「馬鹿共が!! さっさと試合見やがれ!!」

意外にまともに試合を見ていた爆豪が爆発しながら注意をする。

クラス内でも（とある女子が絡まなければ）まともな爆豪。

彼の視線の先ではとんでもないことが起きていた。

葉隠ーザー（命名 葉隠透）によりフィールドを焼き切りながら移動可能箇所を縮めていく葉隠。

そんな葉隠に対して粘度MAXジャージは溶かすジェル酸を投げつ動きを制限する芦戸。

「火埜君は私を“こんな身体”にした責任があるんだから!!」

「はあ!? だったら私のせいで死にかけた責任を取るんだから!!」

「あたしが正妻だあ!!」

「なんか、よく聞こえないけど女の執念というか情念というかそういういったものを感じる試合だな」

「ち、色気付きやがって。後でアイツ等説教だな」

「え? 消太アイツ等が何言ってるのか解るのか?」

「解らんが、ありや絶対にくだらんこと言い争ってるな」

フィールドも削れるだけ削られ、個性よりも肉弾戦闘に適した距離分だけの広さしか残されていなかった。

そして再び、淑女のような笑みを互いに浮かべると。

ブオゴツ!!

そう聞こえそうなパンチが互いの頬に突き刺さった。

たたらを踏み、残されたフィールドの端まで後退りする2人。

そこからはまるで拳闘を見ているような超近距離格闘が始まった。

互いに相手のパンチはいなし、自分のをいなされ、別の意味で熱い試合が展開されていた。

そして、唐突に試合は動いた。
バキッ!!

と会場に木霊する音。

互いの顎を正確に居抜きあつた拳をそのままに二人揃ってK.O.となつたのだつた。

『え、これで終わり?』

『例年こんな感じだろうが、今年が異常なんだよ!!』

『なんかセメントスの奴泣いてないか?』

『こんなフィールド壊されることなんてなかつたからな』

『壊してんのお前の生徒だけだけどな』

そして、少しやつれたセメントスによりフィールドが整えられ2回戦最後の試合となつた。

後に激しく落ち込みまくり、焼き肉やけ食いに走つた瀬呂はこう語っている。

「あれは無理」
と。

試合開始と同時に瀬呂はテープの端を円錐形に丸めて発射し続けていた。

漠然とテープを打ち出すよりも遅くなるがフィールドに突き刺さり轟の視界を塞ぎ、尚且つ移動も阻害していた。

瀬呂はA組の頭脳班にカウントされる程に思考速度が速いが、何より重宝されるのは「俯瞰性」にあつた。

基本的に熱くなりやすい性分が多いA組の中で、広い視野で全体を把握し、最適解を導きだそうとする瀬呂は実は蛙吹に次いで大人びた思考をする存在であつた。

周りに感化され熱血コマンドが増えたとしても根底にある考え方は変わらなかつた。

だから自分の相手が轟となつた時、直ぐに勝ちを諦めていた。

口では負ける気はない等と言つてはいたが自分の思考の深い底では、既に勝つのを諦めていた。

しかし、いざ2回戦が始まると誰も彼もが足掻き勝つことだけを考

意外と負けず嫌いの彼の物語は未だ始まったばかりなのであった。

準決勝開始前、セメントスの儂さと選手達の疲労を考慮して30分間の休憩が取られた。

準決勝に進んだ4人は控室に籠り、各々が自身の試合に向けて準備を始めていた。

心操人は普通科生徒のために用意されたエリアに座りこれまでの試合を振り返っていた。

「(クソツ、実力が桁違いすぎる)」

これまで行われてきた自身の試合を除いた全ての試合、それらを思い返して理解した。

ヒーロー科は自身が考えているよりも温い場所ではないと。

一試合毎に死力を尽くして戦うその姿に自身を重ねることができなかった。

「君は諦めるのかい？」

心操に声をかけてきたのはいつの間にか隣に座っていた普通科の生徒だった。

「なんだよ『青山』、なに意味解んねえこと言ってるんだよ」

普通科において、心操と同じくヒーロー科への編入を希望していた『青山優雅』。

今回の体育祭ではあまり目立ってなかったが、日々編入に向けて校外にいる知り合いのもとで訓練をしているらしい。

「僕は未だ諦めないよ、1学期の期末で結果だして必ずヒーロー科に編入するんだ」

「そうか」

「良かったら君も一緒にどうだい？」

心操に伸ばされる青山の手。

周りの喧騒に後押しされるように心操は手を伸ばした。

「よう、心操。少し良いか」

自身にとつての初戦、無傷な上にスタミナすら使いきれしていない戦

いの後、廊下で踞っていた心操に言葉が投げ掛けられた。

「えっと、イレイザーヘッド先生ですよ」

そこには、相も変わらず不健康そうな男、僕らの相澤先生イレイザーヘッドが立っていた。

ポケットに突っ込んでいた右手を抜きその手を心操に突き出す。

そこには一枚の紙があった。

「えっと、これは」

「緑谷からお前をヒーロー科に編入させてやって欲しいと言われてな。お前はオレ好みのヒーローになってくれそうだから受けた。その気があるならその紙の場所に来い。オレ直々に鍛えてやる」

そう一方的に話すとスタスタと来た道に戻っていく相澤。

「あ、あの」

その後ろ姿に思わず声をかけてしまった心操。

「なんで、オレなんですか。他にもヒーロー向きの個性持ちは普通科にいますよね」

その言葉にとてつもなくて嫌そうな顔をした相澤は頭を掻きながら面倒くさそうに答えた。

「名前を出すなど言われてたが火埵と柳からも頼まれていてな。オレもアノ試験では資質を見分けるのに不十分だと思っていたし、ヒーロー科3名からの推薦を短時間で得られたということからオレが見込みありと思ったから声をかけたにすぎない」

そう言って再び歩き始めた相澤だったが何かを思い出したように心操に声をかけた。

「もし、編入試験前に諦める可能性があるなら最初から来るな。推薦してくれた3人の顔に泥を塗るような屑に時間を割くこと程無意味なことはない」

突如として思い出された相澤とのやり取り。

つかもうとして思っていた青山の手は気が付くとかかなりの勢いで弾かれていた。

「あ、悪い青山。悪いがオレはオレのやり方でヒーローになる。今、そう決めた」

「ふうーん、そう。ま、お互い頑張ろうね」

カチリ、と歯車が噛み合う音が世界に響いた。

それが何を意味するのか、それは未だ誰も知らない。

「ふんふんふんふんふんふん」

サポート科用に用意された観覧席では破壊された筈のサポートアイテム「オクタコス」を使い、全ての試合の詳細なデータを取得できた事の上機嫌な発目明が鼻唄を歌っていた。

休憩のために空いた時間を利用してデータ整理をしている彼女の手はいつも以上に高速かつ正確にキーボードをタップしていく。

そんな中、最後にまわっていた生徒のデータが画面に表示された。

「うふふふ、翔織くん」

画面に火埜の顔写真と共に各試合のデータが表示されていく。

発目明は子供の頃から変わった子であった。

熱しやすく冷めやすい、興味の対象が変わりやすい。

そんな彼女が唯一、興味を失うこと無く今も変わらぬ情熱を燃やしているのが機械弄り、その果てのサポートアイテム開発である。

入学後、幾度となくパワーローダーの作業場を破壊してきたがそんなことにめげることなく、放課後は毎日何かしらを作り続けた。

「ローダー先生、このホバーシューズ貰っていつでも良いですか？」

珍しく教室で新たなベイビーの開発案が纏まらず、作業場に遅れてきた発目の耳に知らない声が響いた。

「ああ、そいつは生徒の作品だが使い物になるかどうか解らんぞ」

背中しか見えない少年の手に握られていたのは発目の入学後に作成したベイビーの一つ「空翔ぶシューズ」だった。

靴底から風を放出することで誰でも自由に空を飛べる設計思想のもと製作されたが、風を送り出すために0.1tものバッテリーが必要な上に風も5秒しか放出できず、出力調整ができないというとても発明品だった。

「これ、博士が発案してくれた装備にちょうど良さそうなんです。いつもいつも鳥になって翔ぶよりも対応しやすくなりそうですし」

そして、少年がシューズに視線をおとした時、その顔を発目は見る
ことが出来た。

世間的に見ても十分に整っているその顔には自身のベイビーへの
暖かな称賛の感情があった。

「それに、この短期間でこれだけのアイテムを作れるなんて、その子は
余程機械弄りが好きなんですね」

現在に到るまで、発目明の奇行ともいえるアイテム製作に対して、
理解を示してくれた者は少ない。

まあ、入学試験時に自作のサポートアイテムを多数持参で来る奇妙
な生徒が今まで居なかったこともあるのだが。

初見で、尚且つヒーロー科に在籍する生徒で理解を示してくれた存
在に、発目は興味を持ってかれた。

そしてあの日、あの廊下で魅せた火埜翔織という一人の男のあり方
に心引かれた。

「えへへへ、愛してますよ火埜M y D a r r i n g翔織」

選手控え室A、火埜と轟はベンチに座っていた。

いつもなら何かしら喋るくらいには仲の良いクラスメイトなのだ
が、今は轟から発せられる黒い焰のような何かを感じた火埜が黙って
いる、そんなところだった。

「……、緑谷から聞いたのか」

意味を計りかねるその言葉に火埜はわざとらしく唸る。

そして、まあ良いかと言わんばかりに口を開く。

「聞いた、というか勝己と一緒に3人でその場にいたからなあ」

「クソオヤジが、余計なこと言いやがって」

轟の放つ黒い何かが増していく。

「右だけで優勝できれば、それはアイツを否定することになる。アイ
ツの力じゃなくて母さんの力でオレはN o . 1になる。そう思っ
たんだが」

「まあ、お前がなに考えてるかなんて判らんよ。ただ、『全力』でいか
なきや静空には勝てないよ」

「解ってたんだよ!!」

いつも静かで客観的な立場にいることの多い轟が叫ぶ姿。

そんな姿を見ても火埜はどこ吹く風と言わんばかりに眠そうに目を擦っていた。

「クソオヤジだけが原因じゃねえ、オレ達家族が歪に無理矢理見て見ぬふりして取り繕った結果が今の状態なんだって解ってたんだよ!!」

「・・・、でシユート君はどうして欲しいのかなあ？ナデナデして欲しいのかなあ？」

そんなおどけた火埜の胸ぐらをつかみ憎悪に染まった瞳で火埜を見る轟。

「轟、オレもシズも勝己もクラスの誰も、ましてや他の誰もお前になれる訳じゃないからさ、その答えは自分で出さなきゃダメだよ」

「火埜、お前」

「シズは強いよ、何よりもその心が強い。そんなこと言わなくても轟なら解ってる筈だろ？」

胸ぐらから手は離され、轟は何かを堪えるように必死に両手を握りしめていた。

そんな轟の肩に火埜の右手が添えられた。

「決勝で会おう、その時に答えを聞かせてくれ」

その言葉と共に扉の外に押し出される轟。

その足は自然とフィールドへと進んでいった。

『オウラア、会場のオーデイエンス！待たせたな、準決勝第一試合の開始だコラア!!』

『おい、イレイザー。お前の親友どうにかしろ』

『は？オレにこんな煩い友人はいない』

『なに言われても気にしない気にならない！冷めたふりしたアホなど知るか!!フィールドの選手2人はヤル気満々だぜえい!!』

マイクのおかしなテンションももろともせず、対戦用のフィールドには真剣な眼差しの2人。

緑谷静空は自然体を保ち、轟焦凍は凍てつきそうな殺気を放ち互いに合図を待っている状態だった。

『もう良いよな?!いくぞいくぞカウント開始だあコラア!!』

『3』

会場のボルテージが上がっていくのが解る。

『2』

相対する2人の集中力が高まっていく。

『1』

全員の視線が2人に注がれる。

『スタート!!』

マイクの開始の合図と共に轟の広範囲瞬間凍結が炸裂。

緑谷のいた側のフィールドが完全に氷で閉ざされた。

『開始初っ端から轟の広範囲凍結攻撃が炸裂!!いくら緑谷でもこれは決まったか!?!』

マイクの実況が響く中、轟は背後に途轍もない寒さを感じ取った。

本能的に、感覚的に避けた場所に緑谷の強烈な蹴りが炸裂した。

「緑谷、なんだ“それ”」

緑谷の全身に葉脈のように浮き出る“何か”。

その何かが全身を駆け巡るその姿を轟は今まで見たことがなかった。

“、ボクの今の全力にいつまでそうやってられるかな？”

今までの悪戯っ娘のような可愛らしい笑みとは違い、獰猛な肉食獣を思わせる好戦的な笑みを浮かべた緑谷がいた。

「現段階でタイムリミット付きでという縛りではあるが、君のONE FOR ALLによる全身強化出力は10%といったところだろう」

ONE FOR ALLを身体に馴染ませる訓練をオールマイトと行っている中言われた言葉。

全身の筋肉が痛みで悲鳴を上げており、満足に動くことも出来ず言葉を発する余力もない緑谷はその言葉を噛み砕き理解するのに時間を有した。

「静空、気にするんじゃないぞ。この馬鹿弟子が異常なだけでおまえの成長は十分に速いぞ」

「それに、これ以上の訓練は成長期の君の身体に悪影響だ。私との行動予測訓練もあるのだから十分に君は凄いと思うぞ」

グランドトリノとサー・ナイトアイ孫馬鹿仲間からの激励を聞きながらスポーツ飲料を流し込む緑谷。

「全身でなければ最大強化出力25%といったところか。緑谷少女の成長率は凄いな」

オールマイト憧れの存在からの讃頌を聞きながらふとその奥を見る。

「ミリオさんの行動予測的中率が化け物過ぎて辛い」

「確かに。先輩実は未来予知系の個性持つてるんじゃないっすか？」

「いやいや、オレの個性はあくまで一つだよ。サーの教えがいいんだよ」

「それでも、1発しか当てられなかった」

「いや、始めて2回目で1発貰ってることに驚愕なんだけど」

爆豪幼馴染と火柱兄弟子と通形兄弟子が地べたに座り込み反省会を行っていた。

ずっと一緒にいたはずなのに1人置いていかれてしまったような感覚に襲われてしまう緑谷。

しかし、ここで無理をするとまた心配をかけてしまうと理解していた。

何より、大切な幼馴染みが自分が原因で悲しそうに顔をゆがめるのを自分が良しとしなかった。

だから、地道にコツコツと成長していった。

だけど、目の前の少年は違う。

自分とは違う別の何かに捕らわれ、何かを見失い、迷子の子供のような目をしてしまっている存在。

そんな、彼を助けたいと思ってしまうたがために、決勝を前にして“本気”になった。

『緑谷の流れるようなコンボが轟を圧倒していくぞ』

『フィールドが氷で狭まったことで近接主体の緑谷の得意な状況が出来上がってしまったな』

『轟も対応しているが、明らかに押されているな。このままだと轟のやつ押し切られるぞ』

実況の3人が話すように開始早々に轟が行ったフィールド半分を凍結させる大技により本来のフィールドよりも半分ほどの広さになってしまったフィールド。

そこでは全身にエネルギーを纏い、目にも止まらぬ早さで轟を追い詰める緑谷と個性発動のための隙が出来ず体術でそれに対応するしかない轟がいた。

「(何をしている焦凍)」

そんな状況を観客席で見て落胆に近い感情と憤怒の感情を覚えている一人の男がいた。

「(そのつまらないプライドを捨て早く左の力を使い!!オレの上位互換であるお前がこんなところで負けることなど許されないのだぞ!!)」

現No. 1に繰り上がってしまった男エンデヴァーは息子のあまりの体たらくに目を覆いたくなっていた。

オールマイトの実質的な引退宣言により変更されたチャート。

生涯目標だった男に勝つことが出来ず、その背に追いつくことも出来なかったエンデヴァーはお情けで繰り上げられたと考えている現在の地位に苛立ちしか覚えていなかった。

ならば、男と似た個性の持ち主である対戦相手の少女に自分の息子が圧勝することで擬似的な勝利を得れると考えていた。

だからこそ、敢えて勝負の前に少女の目の前に姿を現し、その調子を確認しようとした。

だが、そこで自分に向けて放たれた言葉がなぜか未だに忘れられないでいる。

「轟君は轟君です。エンデヴアーの息子でも、あなたの上位互換でもありません。轟君は轟焦凍という一人の人間です!!」

何を当たり前のことを言うのだろうと思った。

しかし、時間がたつにつれてその言葉がなぜか自分の心に深く深く突き刺さっていくように感じた。

「ねえ、いつまでふざけてるつもり？本気で来なよ、そんなんじや私に勝てないよ」

全身からのエネルギーの放電が止み、冷たい視線を轟に向ける緑谷。

「黙れ!!オレは右の力だけで、母さんの力だけで優勝するんだ!!あいつを否定するんだ!!」

右半身に霜がつき真面に動くことすら困難になってきた轟。

緑谷の言葉にその瞳に憎悪の炎を滾らせ、緑谷へと氷を放つ。

「ヒーローはいつでも本気でなきやダメなんだ!!君が意地張ったせいで助けられない人がいるかもしれないのに、相澤先生の生徒なのにそんなこともわからないの!!」

「お前に何がわかる!!あいつのせいでオレたち家族がどれだけ辛い思いをしてきたか!!何も知らないやつが踏み込んでくるんじやねえ!!」
「恵まれた環境で、個性に恵まれて、何でも手に入った人が何言ってるの!!親に自分が原因で辛い思いをさせてゴメンって言わせて泣かせたこともない奴が何言っているの!!」

その言葉と共に蹴りを見舞う緑谷とかなりの勢いで飛ばされる轟。

「私は、去年まで『無個性』扱いだった!!私の知らないところでお母さんがどれだけ辛い思いをしてきたか、考えるだけで胸が痛い!!」

「だからなんだ、結局自慢じゃねえか!!」

「違う!!結局誰よりも『個性』に縛られてるのは当事者である私たちなのに周りに当たってかっこ悪いのは自分じゃないか!!」

「うるせえ!!だからオレは『君の『個性』』じゃないか!!」

緑谷の叫びが木霊する。

会場に静寂が訪れ、誰も物音すら立てずにいた。

「お父さんの『個性』だとかお母さんの『個性』だとか言ってるけど、それは君の『轟焦凍』の『個性』じゃないか!!結局は君がどうしたいかじゃやないか!!」

緑谷の顔を涙が濡らす。

同じ頃、両手で顔を覆い2人の女性が違う場所で泣いていた。

自分の娘がこんなにも大きく成長していたことに喜ぶ緑谷引子、自分の息子に知らない間に憎悪しか残せなかったと悲しみの涙を流す轟冷。

「逃げるな、『轟焦凍』!!君は何になりたいんだ!!」

緑谷の叫びに轟の心の奥底に眠っていた母との思い出が蘇っていき。

「もうイヤだよ、お母さん」

母に抱きしめられ泣く幼い自分。

「そうだね、焦凍。でもね、焦凍はお父さんになる必要はないんだよ」
優しく、暖かく、労るような母の声色。

テレビにはオールマイトの活躍を伝えるニュースが流れていた。

「焦凍は焦凍のなりたいモノになりなさい。お母さんとの約束だよ」

轟の瞳の奥に母の笑顔が映り込んだ。

今まで忘れていた母の笑顔。

高校生になり、クラスメートに恵まれ、久しぶりに姉兄と話をし、ここ数年で始めて心を父の影を感じなかった数ヶ月。

ふと誰かの声が轟の耳に届く。

そこにはここにいないはずの姉と兄の汗だくで大泣きした涙に濡れた顔があった。

「焦凍、焦凍ゴメンね。全部押しつけてゴメンね。頼りないお姉ちゃんでゴメンえ」

泣いているせいであまく言葉にならない姉の泣いているはずなのに笑顔に見えてしまう顔。

「末っ子のお前に押しつけておいて、逃げ出して、かつこ悪い兄貴でゴメンな!!にいちやんなのに助けようともしないで逃げてゴメンな!!」
久しぶりに見た兄の顔は記憶にあるよりずっと大人になっていた。それでも、そこには幼い頃にみた兄の面影があった。

「(あんだ、お前) はなりたいモノになりなさい!!」

姉兄の言葉に母の面影が重なる不思議と左目から涙が流れる。

心臓に熱を感じる、まだやれる、誰よりも逃げていた自分にはこんなにも暖かい家族がいてくれた。

心臓の鼓動が高鳴る、ふと自然に左腕を真横に振る。

すると、轟の左腕から紅く煌めく炎が迸る。

「緑谷、待たせたな」

入学以来、もしかしたら母がいなくなって以来かもしれない。

「オレはオレの目指すヒーローになる!!」

身体の霜が消えるのと同時に長年凍てつかせていた心の氷が溶ける感じが轟の中でした。

「フン、不甲斐ないな焦凍」

「ヴァナータがそれをお言いでないよ」

エンデヴァアの真横、そこにはキャマバツカが優美に座っていた。

「あの2人を連れてきたのは貴様か、余計なことを」

「あーら、〃あのこと〃を引きずって怖がって家族に当たるような男に言われたくないわね」

エンデヴァアの象徴である焔が消える。

「オレはまだ間に合うか?」

「はん! そんなこと私を知るわけないっちゃブル」

「そうだな」

エンデヴァアを演じるしかなかった男、轟炎司は久しぶりに軽くなった気がした。

フィールドは緑谷と轟の戦いが佳境を迎えていた。

左側の焰を使うようになり、氷と焰による複合攻撃で緑谷を追い詰める轟。

フルカウルの維持が難しくなり、息切れし始めた緑谷。

「悪いな、緑谷。次が控えてるんだ。終わらせて貰う」

凍らしては溶かし、凍らしては溶かしを繰り返した結果、フィールドには大量の水があった。

そして、意地の悪そうな轟の笑顔に緑谷が何かを察して最後のフルカウルで阻止しようと走り出した。

「氷結の庭園」
アイスガーデン

その瞬間フィールドに氷の庭園が現れ一際大きな花の中に緑谷が閉じ込められた。

「白華絢爛」

その花の中にいる緑谷が動けないことを確認するミッドナイト。

「緑谷さん戦闘続行不可能と判断、勝者轟君」

爆豪勝己対火埜翔織となった準決勝第2試合。

先に行われた緑谷静空対轟焦凍とは違い、その始まりは静かなモノだった。

ミッドナイトの開始の合図でフィールド中央へと静かに歩いていく選手の2人。

そこから徐々に加速していき中央で互いの拳が交差する、俗にいうクロスカウンターとなるが互いに読んでいたのか首を傾げ綺麗に避けていた。

そこからはまるでお手本のような格闘戦が行われていった。

爆豪は個性を生かすためにか蹴り技を主体にしたまるでムエタイのような一撃一撃が必殺と言っても過言でない攻撃を流れるように、火埜へと襲い掛かる。

そんな火埜は時には両手で蹴りの力の方向を流し、時には爆豪の攻撃の勢いを利用しその勢いを乗せて肘鉄を見舞っていた。

「まるで舞踏のようだ」

観客席の誰かがつぶやいた、それはもしかしたら自分の口から洩れた言葉だったかもしれない。

フィールドの2人が行っているのは紛れもない格闘戦である。

それほどまでに爆豪と火埜の攻防は人を魅了していった。

誰もが席を立つことなく数分の時間が流れていった。

「……、待たせたな」

気が付くと体中から汗を流す爆豪がそれはそれは子供がみたら泣きだしそうな笑顔で対面にて同じく息も荒く、疲労を隠そうともしない火埜が呆れたような顔をしていた。

「別に、元々オレが提案したことだし」

火埜の両手に黄色い焰が灯る。

その焰は徐々に小さくなっていく。しかし、その輝きは増していき遂には晴れの日に見る太陽光のような眩しい黄色となっていった。

火埜は、両手に灯った焰を自身の体に押し付け何かを耐えるように

深く息を吐く。

「面白れえじゃねえか、楽しませてくれよ翔織!!」

今日一番の爆発を利用して高速で突っ込んでいく爆豪。

そのスピードは速さに定評のある飯田ですら目を見開き驚いていた。

『爆豪の奴、速つや?!』

『あいつのは“爆破”。掌の汗腺からニトロのような物質を出す事ができ、それを爆発させる。爆発力は汗の量に比例するため、動くほどに強力になる。何より推進力としても利用でき、それで空飛んだりもしてるがそれで地面を滑るように移動してるんだろ（もつとも、爆発の威力には限界もあるし、最大火力の爆破は自身もダメージを受けるけどな）』

『なるほど、つまり体が温まった今、あいつは最高のパフォーマンスを発揮できるということか』

『まあ、それを見越して火埜の奴も何かしたみたいだがな』

「くたばれや翔織!!」

驚異の速さで間を詰める爆豪。

その勢いのまま火埜に対して蹴りを放つ。

会場全員がその蹴りにより吹き飛ばされる光景を想像した。

「勝己には悪いけど、1RでK.O.してやるよ」

しかし、彼らが見たのは全く別の光景だった。

黄色く輝く肉体を持ち、フィールドに焦げ跡すら残さず爆豪の後ろに移動し、逆に爆豪を蹴りつける火埜の姿がそこにあつた。

『What!?!何が起きた!?!火埜の奴が黄色く発光したと思ったらスゲー速さで爆豪を蹴りやがったぞ!!』

『あれは“活性”の力を持った“晴れの焰”、しかもそれを高純度で燃やして自身に打ち込んだんだろう。それにより肉体の強制活性を引き起こさせ目にもとまらぬ速さで行動できるようになったんだろう』

『しかし、普段冷静な火埜らしくない勝負を急ぐ戦法だな』

解説席でのやり取りが流れる中、試合の流れは2人のギアが上がっ

ていくごとに熾烈になっていった。

両手の爆破を絶妙にコントロールし、爆破による攻防をもって火壁を制圧しようとしている爆豪。

それに対して、肉体を超活性させて普段以上の反射速度と攻撃の接続回数で爆豪を圧倒しようとしている火壁。

互いに決め手に欠けながらも手を緩めることなく、一進一退の攻防が続いていた。

そんな中、2人の異変にいち早く気が付いたのはフィールド外で見ていた蛙吹梅雨（1A皆のお姉ちゃん）だった。

「何かしら、この感じ？まるで何かを見落としているかのような言い知れないこの違和感」

「しっかし、普段クールぶってても火壁も男の子だよな ヽステゴロ〃で決着つけようなんてよ」

「!?切島ちゃん、今なんて言ったの」

いつもは静かに穏やかにクラスを見てくれている蛙吹、そんな彼女が突如声を荒げて切島に問いかける。

「うお、えっと確か「ステゴロ」で決着つけようなんて」とか言ったような」

「それよ!!なんで火壁ちゃんは「鳥」にならないの?」

その言葉に顔を強張らせる1Aクラスメート。

普段の戦闘訓練において攻撃を先読みし、身体を焰の鳥の性質に変化させオーラ化することで攻撃をいなして肉体的ダメージを負うことが皆無な火壁。

そんな火壁が肉体を使用する格闘戦を自ら仕掛けている、この異常事態ともとれる状況にクラス内でも困惑の色が見えていた。

「トリーボーイも流石に騙し切れない状態になっちゃぶるね」

「えっと、どういうことですかイワさん?」

観客席にて一定の空席地帯を作り上げたイワさんの横（姉弟揃って父親の隣を拒否した）に座り、その眩きに反応したのは教員でもある冬美だった。

「トリーボーイの個性は焰の鳥に転化する際に膨大なエネルギーを必

要とするちやぶる。無論、人間の姿に戻る際も同じ量のエネルギーが必要になるつちやぶるけど、普段は補給を欠かさないからそんなこと起こるはずないつちやぶる。でも、今回はどの試合もその時出せる全力で挑んで、何回かあの子も動けなくなってたことを顧みて流石にエネルギー切れが近いんじゃないかしら」

「つまり、火柱くんはこの試合、開始当初から無理していたということですか」

フィールドの火柱に明らかな変化が現れたのは、発光してから2分経過したあたりからだった。発光は弱まり、爆豪からの攻撃を避けるのではなく防御するようになり、時間が経過するとともに動きに鈍さが出てきていた。

「かつ、翔織はやっぱスタミナ無いな」

それはそれは凶悪な笑みを浮かべ、テンション爆上げで攻撃を続ける爆豪。

「一応、今出せる。全力である事に違いはないんだけど、勝己は不完全燃焼かな」

発光が収まり、フィールドの端で膝をつき息も絶え絶えな火柱

そんな火柱に対して一切の油断も見せない中央にてたたずむ爆豪。

その顔にはあからさまな不満の色が浮かんでいる一方でどこか満足げな雰囲気を全身から漂わせている。

「はん、お前が俺に勝とうなんざ3年は早いんだよヴォーケ」

「それじゃ、本当に最後に、轟のために削れるだけ削らさせてもらおうよ」

そう呟くと両手にオレンジの焰を灯した火柱。

その鮮やかなオレンジ色を見た爆豪はより凶悪な笑みを浮かべる。

半身をずらし、焰を灯した左手を後ろに引くと右手に更に焰を集中させていった。

「セメントス先生には申し訳ないけど、勝己とは最後までやり合いたいから、今のオレの真正銘最高威力の技だ」

「はん、いいぜ。それ」に對抗するためにオレの個性も一段階進化してんだ」

互いに不敵に笑い、互いが気になることを言っているが今の2人には目の前の存在しか認識していなかった。

「くらえ」

火埜の右手から鮮やかなオレンジの焰が放射される。

よくよく見ると同出力だと思われる焰が左手からも放出され、それが支えとなり右手の焰がより出力を上げていく。

爆豪の両手に赤みがかったオレンジ色の球体の焰が灯された。

火埜の右手から放射された焰をその両手の焰で受け止めるように前に突き出す爆豪。

互いの焰が拮抗し、爆豪が徐々に押されていく。

そんな熱い勝負の中、不意に火埜の焰が途切れた。

それと同時に誰かが倒れる音がした。

音の発生源、火埜の状態を確かめるためにミッドナイトが近づいていく。

一方の爆豪も片膝をつき、彼には珍しく息も絶え絶えにしながらか、それでも火埜から視線を逸らすようなことはなかった。

確認を終えたミッドナイトが徐に立ち上がると両手を頭上で交差させ大きなバツ印を作る。

「火埜君、気絶を確認。戦闘続行不可能とみなし勝者爆豪君」

周囲からまばらに、そして徐々に大きくなっていく拍手の中、爆豪はやりきったという顔をし、火埜は笑顔で気絶していた。

『おいおいおいおいおいおい、爆豪の奴の“あれ”なんでゅあ!!』

『爆豪曰く敵に対する憤怒の象徴、奥の手中の奥の手“憤怒の焰”^{ヴォルカニカ}というらしい。火埜と訓練し続けたある日出来るようになったらしいが出来も安定しないし、集中しないと出来ないから普段はまだ練習中とのことだ』

『まるで、火埜の個性のようだな』

爆豪の隠し技にどよめく会場。

それを得意気に見ている存在がいた。

「おうおう、勝己の奴やつは使ったか」

「そうですね、火埜君のあの技に対抗できる唯一の力ですから」

そこには私服に着替えたグラントリノとサー・ナイトアイが立っていた。

「しかし、彼の個性はあくまで『爆破』のはず。あの力はその範疇から超えています」

「未だ誰も完全に解き明かせていない『個性(この力)』。もしかしたらあれも一つの可能性なのかもしれない」

雄英高校体育祭1年の部もとうとう決勝戦という時、救護室では爆睡しているアホが1人いた。

つい数分前まで戦いにその身を文字通り燃やしていた火埜であった。

リカ婆もといりカバリーガール曰く

「気力とか何から何まで振り絞った結果、完全なエネルギー切れだね。燃焼限界超えていないのが奇跡だよ」

とお言葉をいただいている程である。

そんな彼女の城である救護室に近づく複数の影があった。

「失礼します」

「おや？あんた達、明日日本番なのにこんなところ来ていいのかい？それに、プロヒーローが3人もこんなところに来ていてそれこそ大丈夫なのかい？」

「心配ないサー」

「サー」の掛け声と共に後ろを指差したのは通形ミリオ、そして指差された瞬間に偶然眼鏡に指が当たり不機嫌MAXになってしまったサーナイトアイ。

「ねえねえ、御姉様大丈夫？なんで起きないの？」

「御姉様」って「若」のことだったの！ちよつと本気で考えようかしら」

一目散に火埜へと駆け寄り頬をプニプニと突っついている波動ねじれ。

そして、新人時代に色々とお世話になってしまった事務所のこれまたお世話になってしまった少年を目の前に何やら画策し始めたリユーキユウ。

「まったく、無茶苦茶だな。この年の自分と比較すると本当に怖いな」精神的に落ち着いているからか火埜から僅かに離れた場所で、グース力眠る火埜を見て感想を漏らす天喰。

「なんや、イワさんとこの坊やないけ！こら、おもろいことになった

な」

片腕に50人前はありそうなたこ焼きの箱を抱え件の人物の正体に少し驚くファットガム。

「なんだいなんだい、見舞いなら後にしな！まったくこんなことならいつそ燃焼限界越えてくれた方が楽だったんだかねこのバカ孫は」

お花摘みが終わったリカバリーガールが救護室に戻ると静かな筈だった自分の領域に6人も客か来ていた。

孫（扱っている男の子）の頬をつつつく娘もいるが、いつこうに起きようとする孫（扱っている男の子）の状況を見て少し笑いそうになっっていた。

「おばあちゃん、御姉様起きないの？」

「せめて先生と言いな小娘。まったく、試合の途中から目的変えたからって、本当にありとあらゆるエネルギーをギリギリになるまで使うなんて、自分を使い潰すようなやり方したおかげで燃焼限界手前で気絶しちゃったじゃないか。今は起きるまで待つしかないね、表彰式には出れそうにないけど、今日中には起きるだろうさね」

まだなにか言いたそうな顔をしながら火柱を眺めるリカバリーガール。

「本当に心配ごとが多すぎて、困るねえ」

決勝戦の音が聴こえてきた救護室には先程のメンバーとはまた別の人間がいた。

「火柱少年らしからぬ戦いだと思ったが、まさか本当に意地の張り合いだっただとは」

「はん、俊典に似なくてもいいところが似ちゃったな」

一般成人男性よりは筋肉質な体に戻れたオールマイトと両手にカスタードと粒餡たっぷり焼きたたい焼きが詰まった紙袋を持ったグラントリノが愛弟子その2の顔を見に来ていた。

「本当にあんた達もバカだねえ。そんなところに立ってられてもこの子は起きないよ。今日はあたしやとイワに任せてとつとと帰りな」

部屋の主からのありがたご説法があつたにも関わらず、グラント

リノがベッドの脇に常設された机に紙袋を置くと2人揃って椅子に座り直した。

「まったく、寝てりゃ年相応のガキだな」

グラントリノがオールマイトと連絡も取らなくなって数ヶ月。

そんなある日、オールマイトの元相棒であるサー・ナイトアイ経由であったが連絡をもらった時は驚いたのを今でもグラントリノは覚えていた。

そして、元相棒との仲も修復の兆しが見えたある日、3人の子供を連れて少々痩せすぎのオールマイトが自身の事務所を訪れた時、言葉を忘れてしまうほどに驚いてしまった。

骨と皮だけの身体だったバカ弟子が、回復しているという事実と後継者とその協力者を鍛えて欲しいと連れてきたその日のことを。

そこからは、意外に面白く生活していた。

バカ弟子のリハビリと孫弟子3人の教育。

そして、孫弟子を本当に孫のように可愛がるような爺バカになるとは思わなかった当時の自分。

後継者ということもあつてか、長い時間を共にした緑谷は完全に可愛がってるし、火柱と爆豪も男だから話せる馬鹿話で盛り上がった。

ヒーローなんてやってきたから家族を持つことはなかったが、この歳になって孫弟子の家にお呼ばれされて家族扱いを受けるようになり、それを嬉しく感じるようになるとはグラントリノは思いもしなかった。

「お師匠、やはり火柱少年の個性はおかしいです」

「まあ、本来何らかの“一つ”の特異性を発現した結果が“個性”であるならば、轟のところの小僧を例外にしても確かにコイツの“個性”はおかしい。まるで“脳無”のようだと感じたのはワシだけではないだろう」

グラントリノの漏らした単語に反応して、拳に力が入るオールマイト。

「じゃが、こ奴がAFOと接触した痕跡がない以上あれこれ言っても

しようがないじやろ。今日は幸せそうな寝顔を見ただけ良ししよう」

「そろそろ、決勝戦も終わりそうですね。それじゃ、私はメダルの授与がありますので」

「あたしやも少し席をはずすかな。まあ、決勝組もそこまで派手な怪我は出来ないだろうしね」

火埜が眠るベッドの脇に黒い靄が現れる。

その靄から2人の人間が姿を現す。

「ありがとう、黒霧」

「ふうわあ、寝顔がとてもキュートですう」

ストレートに治した白髪に真つ黒な改造白衣を着たを着た葬。

真つ黒なゴスロリ改造された看護服を着たトガヒミコ。

「残念だな、火埜君のあの濁った目が見れないや」

「でもでも、寝顔がとってもとってもキュートですう。これで血だらけならもつともつとキュートな筈ですう」

トガは心底残念そうに顔を歪ませる。

救護室には治療のための刃物すら置いていない。

それは、この部屋自体がそういった凶器に反応するセンサーが仕込まれているからである。

人の悪意を電磁波としてとらえられる技術を応用して作られたこのセンサーがUSJ事件を機に導入されていると知り、2人は何も持ち込めずにいた。

「ああ、火埜君。君は何て素敵なんだい。自分の正義を謡ながら心の奥底に僕らに匹敵する黒い黒い感情を携えて」

「もつと早く、あなたに会いたかったです。そうしたら、トガは少しはまだこの世界が好きだったかもしれない」

寝顔を左右から眺める葬とトガ。

2人が行動を起こしたのは同時だった。

「また、いつの日か。愛しい君よ」

そう、眩くと火埜の「首筋」に噛みついた。

うつすらと血が出る首筋、その血をうっとりとした表情で舐めとる美少女。

「まったく2人揃って何やってんだい！セメントスが干からびちまつたじゃないか!!」

決勝戦が終わり、運び込まれたのは個性の酷使で疲れきったセメントスだった。

ついでに様子を見ようと閉じられたカーテンを開けるリカバリーガール。

「あれ、ばっちゃん？おはよう」

自分が部屋から出た時に比べて少し血の気が抜けた火埴が目覚めましたのはそれと同時にだった。

とある街。

西洋騎士を思わせるコスチュームのヒーローが自身の個性の象徴である両腕を切断され気を失っていた。

「紛い者の割に、その魂は英雄と呼ぶに相応しい物だった」

手に持つ刃溢れだらけの刀を眺めながら男は自分が終わらしたヒーローを眺めていた。

「だが、オレ程度に負けるようなら、所詮は紛い者だったということか」

パトカーのサイレンの音が近づくのを聴きとり、男はビルの上へと駆け上がった。

「やはり、オレを殺せるのは本物だけ。お前だけだ。オールマイト!!」

男の声は獣の遠吠えのようだった。

何故かニコニコな麗日に車イスを押されながらA組控え室に戻った火埜の目の前では爆豪と轟によるよく解らない何かの押し付けあいが起きていた。

「あんなのオレの理想の『勝ち方』じゃねえ！つう訳でお前が優勝だ轟!!」

「ルール上でも場外に出たオレが『負けだろう』！いい加減に認めろ爆豪！」

「お前が優勝だろがあ!!」

控え室中央で金色に輝くメダルを片手に挟み込む形で組み合い、優勝した事実を押し付けあうその姿にクラスの誰もが呆れた顔をしていた。

「で、何であの二人は争ってんのさ」

「あははははは、実はなあ」

そこから、麗日による解説が始まった。

決勝戦は半ば燃え尽きた2人による消化試合状態で始まった。

準決勝でほぼほぼクライマックスになってしまった爆豪と轟は互いに様子を見ながら闘いを組み立てていた。

「憤怒の焰」を使ったがために掌に無視は出来ないレベルのダメージか残り満身に爆発できない爆豪。

緑谷との戦いで本来の自分に目覚めたが、その為にヤル気を根こそぎ燃やし尽くしてしまい精神と肉体のバランスが悪すぎる轟。

万全のコンディションでない上に、どちらも先の試合で半ば終わった感覚が残っているため精細に欠ける動きしか出来ずにいた。

そんな状態に精神も引っ張られ互いに注意が疎かになっていた時だった。

轟によって冷やされた空気が爆豪の渾身の爆発と轟の制御ガン無視の炎熱により尋常でない爆破が起きた。

咄嗟に爆発の逆噴射でフィールドに残った爆豪だったが、轟は氷を出すことも出来ず場外に落ちてしまった。

そして、ミッドナイトが勝利宣言をしていた最中だった。爆発によりフィールドに残っていた特大の氷が空に舞い上がっていた。

最高到達点に届いた氷は重力に引かれ下へと落ちていく。

その氷は加速していき、状況をのみ込めていない少年つまり爆豪へと引かれるように落ちていき。

「おう君のしょう「アガア!!」

勝利宣言の最中に爆豪の頭へと見事に落ちたのだった。

そして、体力も気力もギリギリだった爆豪は見事に気絶したのだった。

なお、爆豪がさんざんに駄々をこねたがルール上も誰がどう見ても不幸な事故ということでもなんとも締まらない優勝となったのだった。

「……、阿保か。勝己、どう考えても君が優勝だから諦めろ」

そう言うと車イスのタイヤを回そうとして腕に力が入らないことに気が付くと火柱は麗日を見上げる。

そんな麗日の精神は今、某柱の男のようにワッショイワッショイと祭り囃子が駆け巡っていた。

普段は自分が見上げる形になる師と慕う男の子が無警戒に自分を見上げてくる。

しかも、自分の中で起きた変化により美形フィルターがかかったのか、それとも見上げてくる角度の問題なのか、いつもより幼く見える火柱に少しムラツとしていた。

「あかん！あかん！えお茶子!!火柱君は今弱つとるから手出すならもう少し回復してから）て私は何を考えてんのよ!?!」

「ど、どうした麗日!?!」

突如、自分の頬を（結構強めに）叩いた麗日の奇行に驚く火柱。

そんな2人に視線が注がれていた。

「ああああああああ、麗日まで堕ちたか」

「いや、あれはまだ崖の上で足踏みしてるね」

「後ろから押し差し上げましょうか?」

「介錯的な?」

「あははは、とーくんモテモテだ」

「けろっ、火埵ちゃんは女難の相が出てるのね」

天井を仰ぎ「ガツテム!!」という雰囲気の芦戸。

やや冷静にそれでいてジトツと視線を送る耳郎。

笑顔なのに何故かその笑顔から恐ろしさを感じる八百万。

同じく笑顔なのに明らかに怖い葉隠。

3位のメダルを持ちながらポエポエ微笑む緑谷。

一人の少年の未来に待ち受ける女難にいち早く察した蛙吹。

そんな力オス溢れる空間に全速力で近寄ってくる影があった。

その影は、控室のドアの前を通り過ぎたことに気付かず走り抜け、会場整備で疲労困憊になりながらもエナジードリンクを飲むセメントスに衝突して周りが見えてなかったことに気が付き心からの謝罪をセメントスにし、再び走り出したのだった。

なお、セメントスに関しては衰弱が激しかったのもあり強制休眠させられることになった。

場面はまた爆走する影に戻る。

控室を見付けて勢い良くドアを開け放つ。

「な、何で此処にいったよーさっさと出てけ!!」

影は誤ってB組の控室に突撃してしまい、不運にもそこで着替えていた女子の着替えシーンを覗いてしまい、土下座のまま器用に謝りつつ走り出した。

影の聡明な脳にはB組女子の肌色率高めの光景が焼き付けられ1週間ほど煩惱に悩まされることになるのだが。

そして、遂に目的のA組控室に辿り着くと勢い良くドアを蹴り開けたのだった。

「すまないが火埵くんはいるか!!」

ドアを蹴り飛ばして登場したのは、決勝戦の間に教員に呼び出され今までの場にいなかったA組委員長飯田天哉だった。

飯田の声にその場にいた火埵以外の全員が飯田の反対側の壁を指さしたのだった。

「ん？なぜ火埵くんは壁に張り付いてるんだい？」

「お前が蹴飛ばしたからだよ（×18）」

本来、廊下側に開ける扉を勢い付けて蹴飛ばして無理矢理開けたこともあってダメーシはそれ程でもなさそうだが、確りと怨みの念が籠められた視線が火埜から飯田に突き刺さっていた。

「落ち着きなさいな飯田ボーイ」

「イワさんさん、しかし!!」

「お前、今自分でトドメさしかけた人間に頼みごとしようとしてんじゃないねえぞ。それに関しては大人が何とかするからお前は何もするなど言つた筈だぞ」

「相澤先生！ですがボクは、兄が！兄が!!」

「エンポリオオーリラックス&鎮静&睡眠ホルモン！インジエクトラアツツツツツシユ!!」

「んっはあああああああああああ！」

何やら怪しげな奇声を挙げて倒れる飯田。

「ほら、お前らしい加減に帰れ!!火埜は保護者と着いてこい」

「それじゃ、行くわよトリーボーイ。おマグ、飯田ボーイの回収お願いね」

「はあい、イワさん。ヨッコイシヨ、あらやだ結構好みの筋肉質」

何やらとんでもない自体になり爆豪と轟の優勝押し付けあいもナアナアで幕を閉じたのだった。

翌日

火埜は疲れが取りきれず、見る人が見たら敵認定されそうな顔をしながらキャマバッカ事務所所有の病院の前にオールマイトと保護者兼共同治療役のイワンクフと立っていた。

「はあ、インゲニウムが両脚腱断裂に両腕切断？その治療をオレが？」

前日、校長室に根津から聞かされた驚愕の話。

そして、インゲニウムこと飯田天晴が敵により両腕を切断され両足のアキレス腱も断裂してしまい、瀕死の重症であること。

本人の僅かな意識の中、ヒーローを続けたい意思を確認し、根津經由でイワさんに治療の依頼がきたのだった。

「ネツツチ、ヴァターシから言わせてもらおうっちゃぶるけどそれ本気なの？」

「ああ、飯田天晴本人からの依頼でもあるのさ」

「だとしたら、甘々スイーツな考えちゃぶるね」

「ボクもそう思うのさ」

オールマイトという成功例があるため受けると思われたが、オールマイトには治療当時ONE FOR ALLがあった。

ONE FOR ALLが彼のいきる意思に呼応したかのようにオールマイトの生命力を高め、本来では不可能だった再生治療が行えた。

麻酔薬による影響がどこまで出るか解らなかつたのでニューキャマー事務所所属医とリカバリーガールが医療コンサルタントを行い、術中もオールマイトのバイタルチェックなど万全の体制で実行したのだ。

それでも、約2カ月当人が地獄を見続けた事実があるのだが。

「今回はまず、ダメになった細胞を“分解”するところから始めるんすよね。しかも、飯田がああ調子なら呻き声聞こえたら術室に駆け込んできますよ。秘密になんて出来る訳ないっすよね」

最大のネックは火埜の個性に依存しきつたこの治療を外部に漏らされる危険性である。

大雑把に言えば「脳と心臓が無事なら五体満足に再生可能」な訳で、世間に知られた場合のことを考えるとその場にいる全員が断る判断をするべきだと考えていた。

「なんで、なんでそこで絆されるかなあ？え、ひつじさん？」

「私はヤギだよ火埜少年？」

「嫌みに決まってるんだろ」

「トツシー、解ってるでしょうね」

「はい！手術室のドアは必ず死守します!!」

なんと、オールマイトが仲立ちを勝手にしてしまい、飯田一族に条件を飲ませてきてしまったのだ。

その為、引くに引けなくなった状況が出来てしまったのだった。

「んじゃ、地獄の時間の始まりですよ」

生気もなにも感じられない目をした火埜が手術室へと入っていた。

「納得いきません!!」

「ああん、飯田お前なめてるのか」

家族待機室では飯田両親が落ち着き無さそうに椅子に座り、相澤の捕縛布で雁字搦めにされた飯田が床に転がされていた。

「オールナイトが先方に確認を取らなかったとは言え、あちらの出す条件は全て飲むと誓約書にサインしたのはお前のご両親だ。未成年のお前が、しかも当事者でもないお前がどうこう言うんじゃない」

「天哉、落ち着きなさい」

「父さん、しかしこれでは兄さんがどのような扱いを受けてるか、我々家族には知る権利があるはず」

「手術を担当される方が自分の個性を知られることを嫌がっている上に体調も万全でないにも関わらず、無理を言って引き受けてくださったんだ。我儘を言うんじゃない」

「そうですね天哉、母さんも心配ですがこちらの我儘で治療していただけのですから私達は信じて待っているべきです」

「母さんまで」

両親から説得され多少落ち着きを取り戻した飯田。

その頃、室内では。

「……………!!」

「はいはい、麻酔無し鎮痛無しで焼き切ってるんですからしょうがないでしょ」

「治療ホルモン追加よ!!」

「……………」

「セレ姉が非番で良かったなつと、はい両足の治療終了」

「バイタル乱れまくりだけど許容範囲だね」

「そろそろテンションホルモンいつとく?」

「いや、一旦休憩しよ。セレ姉の喉が心配だし、これから3時間は走り抜けなきゃ出し、患者が痛みで気絶してる間に準備とかあるし」

「ー、ゲホッ。(本当に勘弁してちょうだい：手話)」

音階ヒーロー セイレーン

キヤマバツカ事務所にて事務員として働く妙齡の女性。

個性は歌うことで様々な効果を声に乗せられること。

今回は2時間ぶつ続けでオペラを歌ったことで部屋内部の音、しかも特定の人間の声のみを消していた。

「それじゃ、オレご飯行ってくる」

ふらふらと術室を出て行く火埜。

地獄は始まったばかりであった。

月曜日。

兄の手術が無事に終わり、両手足も完全にくっ付いたこともあり落ち着きを取り戻した飯田は無理を言おうとして怪我をさせてしまった火埜に謝るために朝一番に教室に来てから現在、火埜が現れるのを今か今かとまっていた。

しかし、朝礼を知らせるチャイムが鳴ったが火埜が姿を見せることはなかった。

「お前ら席に着け」

そうこうしているうちに相澤が気怠そうに現れた。

「先生！火埜くんが来てませんが」

「あいつは休み中にプロがらみの厄介ごとに巻き込まれて今入院中だ」

その言葉に騒然となる教室。

「だが、疲労が抜け切れていないだけだ。明後日には登校できるだろうから心配するな」

相澤の発した言葉にそれでも心配そうにするクラスメート。

「あいつの心配よりも、まずは自分たちの心配をしろ」

そう言つて相澤が電子黒板を叩くと左側にA組生徒の名前が、右側に棒グラフが現れた。

「お前達にのんきにしている時間はないぞ」

そう言つとそれはそれはサデイスティックに相澤は笑つたのだつた。

「ご心配お掛けしました、飯田はタンスの角に小指強連打しろ」

水曜日、顔色は多少悪いが火埜が登校してきた。

「まあ！ヒーちゃん、御体もう大丈夫ですか？」

「お！翔織復活か！それじゃ、ウチは今週いつもの頼もうかな」

「トリー君大丈夫？んぎゅっして良い」

「葉隠に続き、三奈ちゃんもんぎゅっしてしたげるね」

「おうふ、うちの師匠取らんといてえ」

扉開けて早々に女の子達に捕まり中に入れないがどことなく役得的な顔をして満更でもない火埜。

「ひ、火埜君!? 僕が悪かったからそんなこと言わないでくれ！」

「口惜しい、怨めしい、妬ましい!! オイラだって今回頑張ったのになんだよこの差は!!」

「普段の行いじゃね? それよか火埜、退院早々ちよつと助けてくれ女性関連で」

「上鳴がまさか女子のことで誰かに相談する日が来るなんてな」

騒がしいいつもの日常、そこに帰ってきたことに少しだけ精神が回復した火埜。

なお、教室の奥で緑谷の後で威嚇しあう爆豪と轟を見たのだが、疲れるからスルーした。

ついでにニマニマしながらスマホ眺めてる緑谷が見ているのが心操からの互いに頑張ろうというエールのラインだと知っているが、それを指摘した瞬間に面倒事に発展する未来が見えていたので黙ることにした。

「お前ら、さっさと席に着け」

いつもの調子で天井にくつついた寝袋から顔を出し寝袋ごと教卓に移動する相澤。

「先生、発目の作品勝手に使って良いんですか？」

そう、相澤は体育祭で脚光を浴びた多機能多腕自動制御型サポートアイテム『オクタコス』を装備していたのであった。

麗日	:	9	9	(3, 254)
八百万	:	9	8	(3, 000)
切島	:	8	5	(560)
飯田	:	7	4	(460)
上鳴	:	6	2	(男:500 女:1, 500)
瀬呂	:	6	1	(428)
蛙吹	:	5	4	(329)
葉隠	:	4	0	(217)
芦戸	:	4	0	(216)
障子	:	3	9	(345)
耳郎	:	3	6	(215)
常闇	:	3	4	(154)
尾白	:	3	2	(130)
口田	:	2	1	(129)
砂藤	:	2	1	(119)
峰田	:	1	1	(86)

「あれ？なんか今年指名少ないっすね、てか後ろの数字なんなんすか？」

「お前達が不作というわけではないぞ。あまりに指名が来てしまったものでな」

「先方には悪いが勝手に篩いかけさせて貰った。後ろの数字は本来お前達に来ていた指名数だ」

「上鳴、お前」

「知りたくない、見たくない、知りたくない、見たくない、知りたくない、見たくない」

「そして、職場体験に行く前にお前らにはやるべきことがある」

相澤が全員に睨みを利かせるとクラス全員の背筋が伸びる。

「ヒーロー名をつける、本日のヒーロー情報学は『コードネーム』の考案だー」

「「「胸膨らむやつキターーーーーー!!」「」」」

「うるや」

「バカばかりだな」

クラスでテンションが上がっているのに対して、本日不機嫌に精神メーターが傾いている火埜と爆豪は不機嫌そうにしていた。

「プロの活動を実際に経験して、より実りのある訓練をしようということだ」

「なるほど、そのためのヒーロー名っすか！」

「ヤバい、ウチちよつとワクワクしてきた」

浮き足立つ生徒達、そんな彼らに相澤はため息を吐くと。

「ただし！ 適当なもの付けたら地獄を見ちやうよ!!!」

カツカツとヒールの音が教室に響く。

「ミッドナイト先生!!!」

「この時につけたヒーロー名が、そのまま世に認知され、プロ名になっている人多いからね!!」

「そんなわけで、そういったセンスがオレにはないから手伝ってもらうことになった」

「アンタのヒーロー名考えたの山田だもんね」

その頃、職員室

「Off Course!!メチャCOOLだろ!!」

「マイク先輩、奇行は程ほどにしてください」

「13号シビラー!!」

と言う訳(どう言う訳?)でAクラスは現在5分間のシンキングタイムとなった。

「こういうのはヒラメキも重要よ」

というミッドナイトの有り難いお言葉で書いては消して書いては消してを繰り返していた。

「それじゃ、5分たったから発表していきましよう。それじゃ、最初は出席番号順で芦戸さんから」

「はいー」

指名された芦戸はムフフと笑いながら元気よく教卓へと歩いて行く。

その顔は自信と悪戯心が垣間見えるようであった。

「いくよ、私のコードネームは……」

勢いよくフリップを前に出す芦戸、そこには。

「エイリアヒーロー・グリリアン・クイーン!!」

フリップの余白には無駄に上手い元ネタがシャギャーと吠える絵が描かれていた。

「(そつちできたかー……!)」

「2!? 血が強酸性の彼女を指してるの!? いろんな意味で危険だから却下、作り直し!」

「ちえー」

なんともいえない空気を作り出して残念そうに帰って行く芦戸。

「オイラ、次はオイラがちゃんとしたの出す」

はいはいと空気を読まずに手を上げる峰田、ミッドナイトに指名される目散に教卓へと走って行った。

「芦戸もちゃんとしたの考えろよ、やっぱ名前見てすぐこのヒーローだと解るのにしないよ」

自信満々にフリップを見せた峰田、峰田のフリップに書かれたヒーロー名は。

「グレイプヒーロー・『竜弦』!!」

「アウト、全然君っぽくないし、まったく違うヒーロー思い浮かべるから却下!!」

爆豪が視線を後ろの席に向ける。

そこには頭を抱えた火埜がいた。

「あれ、やっぱお前のせいかな」

「旧時代の特撮ヒーローって今でも需要があるんだよ。良いじゃん好きなんだから」

「おもくそ引つ張られてるじゃねえか、どうにかしろこの大喜利雰囲気」

撃沈した峰田が寂しそうに席に着くと今度はクラスのお姉ちゃんが手を上げていた。

「子供の頃からずっと考えてたのよ」

うれしそうにフリップを裏返しその名前を見せる。

「梅雨入りヒーロー・FッRロツOPビーPY」

「カワイイわ！それに、親しみやすくて実に良いわ!!皆から愛されるお手本のようなネーミングね!!」

余白にケロッと鳴く可愛いカエルのイラスト付きで展開されたフリップ。

そのヒーロー名を見たクラスの反応は。

「フロツピー、良いじゃん梅雨ちゃんぽい！」

「どんなヒーローかすぐに連想出来るところも良いですわね」

「なにより大喜利じゃねえ」

そこからクラスあげてのフロツピーコールが起こる。

普段あまり感情が表に出ない蛙吹だが大勢に褒められて少し照れていた。

「よっしゃ!!梅雨ちゃんに続くぜ!!」

やまないフロツピーコール中、次に立ち上がった切島は胸を張ってフリップを出した。

「最硬ヒーロー・レド烈怒頼雄斗ライオット!!」

「赤き狂騒!?!これは『クリム漢気ヒーロー・クリム紅頼雄斗ライオット』のリスパクトね

!」

「ウツス！俺の目指すヒーロー像どんなことがあっても砕けねえクリム紅”そのものつス!!」

「いいわよ、いいわよ!!でも、憧れの名を背負うからには、それ相應の重圧がついてまわるわよ?」

「覚悟の上ツス!!」

切島の熱い一言に影響されたのか、次々とヒーローネームを発表していく。

「ピアヒーロー・”イヤホン”ジャック”」

「個性を前面に出した良い名前ね」

「触腕ヒーロー・”テンタコル”」

「タコって海外だと毛嫌いされる傾向にあるけど上手く避けて自分を表してるわね!!」

「テーパーンヒーロー・”セロファン”」

「言いやすいし解りやすい、子供に人気でそんな名前ね」

「猿武^{えんぶ}ヒーロー・『テイルマン』」

「地味に聞こえそうだけど大人に人気浸透しそうな名前でGOOD
!!」

「甘味ヒーロー・『シュガーマン』」

「ヒーローらしく○○マンで締めたところに旧時代の浪漫を感じる
わ」

「リドリヒーロー・『Pinky』」

「梅雨ちゃんをお手本にしたのかしら？さつきよりも断然に可愛い
わ」

「ステルスヒーロー・『レディ・インビジブル』」

「あえてレディにしたところセンスを感じるわ」

次々と披露される力作にミッドナイトも興奮が抑えられない様子
で身体をクネクネさせて悶えている。

「良い、良いわよ、最高よ！さあ、どんどん行きましょ!!」

「先輩テンションタ高」

すつと立ち上がり教卓に出てきたのは。

「万物ヒーロー・『グリエティ』」

「解りやすさとヒロイツクさがベストマッチしてるわ」

「漆黒ヒーロー・『ツクヨミ』」

「刺さる層にはたまらないヒーロー名、嫌いじゃないわ!!」

「雷光ヒーロー・『サンダチャジャー』」

「此れでもかと推す『カミナリ』がいいわ!!」

「もぎたてヒーロー・『GRAPEJUICE』」

「そう、こういうので良いのよ。自分らしき全開で良いわよ」

「ふれあいヒーロー『アニメ』」

「心に寄り添ってくれそうな名前で良!!」

アオハルと言う謎の栄養素を摂取してビクビクと痙攣していてヤ
バそうなミッドナイトを尻目に発表は続いていく。

「無重力^{ゼログラ}ヒーロー・『ウラビティ』」

「自分の名前と重力を意味するグラビティの掛け合わせね。良いわよ

大好き」

「凍焰とうえんヒーロー・「ひょうか氷火」」

「敢えて漢字なところが良いわね!!」

「快速ヒーロー・スピーディア」

「誰にでも解りやすいし覚えやすい!!」

クラス内のテンションは（一部を除き）最高潮、するつと教卓に着くのは不機嫌そうな顔をしていた。

「火乃鳥ヒーロー・「セブンス」」

「自分の特徴を落とし込んでいて良いわね!!でも、お姉ちゃん相談ほしかったな」

「漏れてる、本音漏れてるからネムねえ!!」

そして、緊張して笑顔が引きつっているし手足もギクシャクしながら壇上に登るのは。

「パワーヒーロー・「ラビィアピース」」

「Love&Peaceを自分なりに略したのね!!語音がとっても可愛い!!」

そして大トリとして本当にイヤイヤなことが態度から現れている男が登場。

「爆心ヒーロー・「エクスプロウEX|FLOW」」

「「EXCEED」範囲などを超える」と「FLOW」絶え間なく流れる」を合わせた造語ね!!一番のヒーローになるって言う気構えを感じるわ」

こうして、「ヒーロー情報学」の授業は終わりを迎えるのだった。

不機嫌そうだった者も本日は誰が見てもウキウキしていたのは秘密だ。

ヒーローネームが決まったその日の放課後。

「ウツス!!火埜いるか?」

切島レベルの熱苦しさを全身から放つ男がA組に来襲した。

「鉄哲じゃん、何々どした?」

そこには、体育祭で火埜とぶつかった鉄哲徹鐵が切島級の俠気オーラを放ちながら立っていた。

「鉄哲邪魔!!倒れたって聞いたけど元気そうで安心した」

「柳さんも、いやはやご心配お掛けしました」

そんな鉄哲を個性で退かした柳レイ子が火埜の身体をペチペチ触りながら体調を確認してきた。

「お、復活してるな。火埜に、というかA組と合同でちよつと調べたいことがあつてさ」

火埜から離れる気配の無い柳を押し退けて現れたのはB組委員長拳藤一佳だった。

「ん?そういうのは担任通してじゃないとダメじゃない?」

「あれ?うちの担任は話し通しておくて言つてたけど?」

「けるつ、今日の今日なら相澤先生だったら断るんじゃないかしら?」

「確かに(Aクラス一同)」

「ええ!?せつかくだから皆で職場体験先のヒーロー見ようと思ったのにい」

B組から来た全員で残念合唱が始まりかけたその時だった。

「.....、それ別に来たい奴だけで集まれば良くない?」

ちよつと浮いた柳に後ろから抱きつかれ、それに対抗するように正面から葉隠のコアラ抱きをあやししながら火埜が呟いた。

「今日は“あの日”だし、これからA組皆で行くところで見せあえば良いでしょ?結構人数はいるし、行くなら早く行かないとまずいし」

「あかん!!今日は待ちに待った“あの日”なんや!!拳藤さん早くついてくる人に声かけて、そろそろ行かん!!」

“あの日”というワードに過敏に反応したのはヤル気を漲らせた

麗日だった。

なお、彼女以外のA組メンバーは全員が今か今かと走り出す準備をしていた。

「えっと、じゃあ声かけてくるから」

「5分後に校門集合!!遅れたら置いてくからね!!」

何時もよりも何故かテンション高い麗日を筆頭にA組メンバーは校門へと走り出した。

「そいじゃ、校門で待ってるね」

器用に柳を下ろして頭を撫でた後、正面から抱きついていている葉隠に気にかけることなく歩き始めた火埜。

拳藤たちは、結局興味が勝りほぼ全員が時間通りに校門へと来た。た。

そして、B組メンバーは本日「未知」との遭遇をはたすのであった。

「ウエルカマー……!!キャンディー……!!」

「来たよ、イワさん。店長は?」

つい最近B組のヒーロー学で特別講師として招かれたクイーンキャマバッカに対して多少の免疫があったB組メンバー。

A組も慣れたモノで良い子に挨拶をしていた。

そんな保護者と被保護者の呑気な会話が聴こえたのか、扉を勢い良く開けて一人の人物が歩み寄ってきた。

「Accuillir、未来のヒーロー達」

「お邪魔します、おうれん 凰蓮さん」

「二「お邪魔します」」

鍛えられた体格とスキンヘッドという出で立ちながらもバサバサのつけまつ毛を付け、やや上品なオネエ口調で喋る男となんの違和感もなく挨拶する火埜とそれに続く慣れた様子のA組メンバー。

しかし、B組メンバーは鱗と角取以外のメンバーは開いた口が塞がらないでいた。

「凰蓮・ピエール・ブ・ラボー!!」

「て、普通について来ちゃったけど、此処ってニューキャマー事務所総

本山じゃない！てかなんで高級菓子店の「シャルモン」のオーナーがいるんだよ!!」

「お菓子食べながらって話だったけどダメだろ!! 今月始まったばかりなのに(泣)」

「ノコお、お皿洗いで許してくれないかな?」

「くっ、おオレの思考が黒く濁っていく」

「は、ははは。死んだ死んだよ。財布が死んじまったよお」

阿鼻叫喚という地獄の様相を見せるB組メンバー。

「ちよつとトリーちゃん。もしかしてあの子達何も知らずに着いてきたの?」

「ええつと、恐らく。でも、オレ道すがら説明してたよね鱗」

「しつかりとしていたぞ。浮き足立っていて聞き流していたやもしれんがな。お久しぶりです師父、出来れば近日中に手合わせを願いたい」

「当分はダメよ。それよりも、トリーちゃんお願いね」

「はいよ、今日は昇級試験か」

「トリーちゃんの舌とお腹なら大丈夫よん。ざつと50人だから」

「いつもながら、燃費が悪くて良かったと思うことがこんなにあるなんて。皆はいつも通り大会議室行って資料を纏めておくように、それと塩崎はいい加減自重しろ」

馴れたA組以外に名指しされキョトンとした顔をする塩崎。

「私、何かいたしましたか?」

「お前なあ、物理的に縛り上げてたら「旦那」が可哀想だろ」

「旦那」と呼ばれ指さされた上鳴、恒例なのか塩崎の罵によって縛り上げられていた。

「あら? またやってしまいましたわ」

「いつかマジで逃げ出すぞ上鳴。そこら辺ウチの姉さん兄さん方に聞くなら体験学習はニューキヤマー事務所一択だな」

「トリーくん、ケーキ!!」

塩崎の遣らかしを横目に飢えた野獣のオーラを放つヨダレが口から垂れそうな麗日。

行をオレが^火行わせていただきます。まず最初に」

「ハイハイハイハイハイハイハイハイハイハイ!!」

完全に同じタイミングで手を上げたのは個性の性質も人間としての気質も完全被った2人だった。

「じゃあ、その心意気を汲んで切島から。鉄哲はプレゼンの仕方を見て学ぶという意味でその後ね」

「げっ!! やっぱそんな感じかよ」

「ぶれぜん?」

「切島もいい加減慣れようね。うちで纏まって何か発表する時は相手に明確に伝えることを考えてプレゼンテーション方式を取ってるんだ。プレゼンテーションが解らない子は解る子に聴く」

そこから始まる個々のプレゼンテーション。

将来を見据えた者、周囲の意見を求める者、己の欲望に正直な者。

そして、時間は有限であった。

「キャンディーーズ!! そろそろ帰る時間よ!! ヒーーーーーハ!!」

イワさんが勢いよく開けた会議室の扉、その向こうには死屍累々といった状態の学生達しか居なかった。

「あー、もうそんな時間かあ。ほら、全員撤収撤収」

義親の声に無理矢理身体を起こした火埜のかけ声が会議室に響き渡る。

かなり白熱したのか、こういう時にも率先して動く飯田ですら鈍重に動いていた。

「ホラホラホラホラ、明日も学校なんだから帰宅帰宅! 調子を整えておくのもヒーローの務めよ」

「そ、そうですね。ほら皆、しっかり動くよ」

「一佳、そう言うあんたも動けてないよ」

取蔭の容赦ないツツコミが炸裂するが当の本人も明らかに無理して動いている。

「仕方がないっちゃぶるね。ヴァナアータ達、今日は帰ったらさっさと寝るのよ」

イワさんの苦言に何かを感じ取ったのか義子の火埜が火の鳥化し

ようとしたまさにそのの時だった。

「エンポリオー……」
「デンション」
「ホルモン!!スターバースト閃光流星群!!」

指の先に棘のような物体が出来上がるとそのかけ声と共に死屍累々といった状態の学生達にイワさんの手刀が突き刺さっていく。

「うお、身体が急に軽くなった」

「アドレナリンって奴よ!!ただし、帰宅後はゆっくりとお風呂につかってしっかりと寝ないと明日地獄を見るわよ」

そんな彼女の予言は、翌日8割以上の生徒が疲労困憊で集中力に欠けた状態で授業を受けていたことにより放課後、教師2人からのお説教という形で現実になるのだった。

雄英高校最寄り駅。

そこでは毎年の風物詩の如く1年生の生徒で溢れかえっていた。彼等彼女等は、これから現役且最前線で働く「プロ」ヒーローのもとに数日間の職場体験に出掛けるのである。

様々な表情をする生徒達を、長年改札の良く見える場所に店を構える団子屋の老夫婦は朗らかに眺めていた。

「ええっ、今日から1週間の職場体験が始まるわけだが、お前ら先方には絶対に迷惑かけるなよ」

「ハイッ!!」

いつものやぼったい不審者スタイルではなく、髪を結いスーツに袖を通しシャキツとした立ち姿の相澤が受け持ち^{可愛い教え子達}クラスを見ながら声をかける。

そんな彼の激励に答えるように元気良く返事をする1ーA生徒達。

「まあ、お前達ならそこまで大事になるような迷惑を掛けないと思うが、先方も忙しい中対応してくれていらっしやることを忘れるなよ」

「ハイッ!!」

「それじゃ、各員コスも持ったな?それを着ると言うことは、世間からすればお前らもヒーローだ。半端なこととしてくるんじゃないぞ。時間も時間だそれじゃ行つてこい」

その言葉を合図に散っていく生徒達。

そんな中、身動き一つせずその場に留まる生徒が2人いた。

「ん、どうしたんだ緑谷と火埜の奴動こうとしねえぞ」

「なんでも、インターンに行ってる先輩がいるらしくて一緒に行くことになっているらしい」

そんな2人をめざとく見つけた峰田に事前に話を聞いていた尾白が答える。

そんな最中、峰田の耳がどこからともなく聞こえる美少女の声を捉えた。

「よろしくお願いします、ミリオ先輩」

「うん、いつも通り笑顔で行こうか緑谷ちゃん」

金髪に薄めの顔をした大男が緑谷の荷物を持ち、一緒に行こうとしている姿。

そこに注視しがちだったが、ミネタアイはまったく別の光景を捉えていた。

「お〜ね〜え〜さ〜ま!!スリスリ」

「うん、皆見てるからね。落ち着こうね。ねじれちゃん」

火埜とほぼ同じ身長と思われる美少女が嬉しそうに火埜に抱きつき、公衆の面前にもかかわらず互いの頬を摺り合せている姿であった。

「うぐう、ひ、火埜の裏切り者!!」

この言葉を最後に峰田は職場体験先に至るまでの記憶を消失することになるのだが、些細なことである。

「いらっしやい。若、ようこそリユークュウ事務所へ」

負ぶさったねじれをそのままに、ねじれナビで目的地へとやってきた火埜。

出迎えたのは数ヶ月前、キヤマバツカ事務所を退職し新事務所に移った嘗ての顔見知りであった。

「お久しぶりですニャーゴさん。これ皆さんで食べてください」

「あら、シャルモンのフルーツタルトじゃない」

「開業祝いも兼ねてますから。で、〃所長〃は」

ニャンコロヒーロー・ニャーゴは嬉しそうにタルトを受け取るとマスクを外した素顔を隠そうとせず、明らかに血色の悪い顔を崩して火埜に泣きついた。

「若の推察通りよ、お願い助けて」

「だから、せめて事務員は貸し出して貰いなっただのに。はあ、助っ人に来たよ竜ねえ」

腰に猫耳美人、背中に天然系美少女を貼り付けたまま勝手知ったるなんとやらで所長室を強めに開け放つ火埜。

そこには。

「え?!うそなんでもういるの?」

「若が来てくれた！これで今日は定時で帰れる」

「わかだあ。ひさしぶりにべつどでねれる」

目の下に隈を作り、ヨレヨレのジャージ姿の女性3人が高く積み重ねた書類と格闘していた。

「イワさんから、立ち上げて3年目ならそろそろ事務所関連の必要書類が一気に押し寄せてくるだろうから手伝いに行つてあげてだつて。てか竜ねえも音胡ねこさんも踏恵ふみえさんも一回シャワー浴びてきて!!ほら、摸もさん起きて」

「わあー、地獄絵図」

流星の波動も引くほどの地獄絵図、それにあきれたような顔をしている火埜はさらに問いただす。

「で、この現状を作り出した張本人は今ど」たっだいまあー!!やつぱ敵を蹴つ飛ばすのは気持ちいいなあ!!」

火埜の言葉に被せるように所長室の窓を勢いよく開け放ち女性が1人飛び込んできた。

「でさりユーキュウ、若はまだ来てないよな?この現状バレたらお説教じゃすまないよ」

「もう来てるわよ」

そう言つてリユーキュウが指さした方に女性は固まった顔を油の切れたロボットののようにぎこちなく向ける。

「はあい、ミル姉。それじゃ、お説教の時間だよこの大馬鹿鬼」

「うぎゃー、説教はいやー!!と言うわけでパトロールに「行かせるか!!」

青筋を浮かべた凶悪な笑顔の火埜を視認した女性、ラビットヒーロー・ミルコは全速力で逃げだそうとするが先読みになっていた火埜の有幻覚の鎖が部屋中から伸びてきて空中で拘束されてしまった。

「それじゃ、イワさんのお説教準備出来てるから頑張つてねミル姉」

「いやー、イワママ許してえ」

『許せるわけないっちゃぶるよ、こんのオバカちゃん!!』

そこから2時間、所長室ではランカーヒーローがテレビ電話でお説教されるといふ珍しい光景があった。

「職場体験、ウチを選んでくれてありがとう」

応接室にてヒロコスに着替えたリユークユウと3人のサイドキック、そしてねじれはお土産にと持ってこられた洋梨のフルーツタルトとメロンのフルーツタルトに舌鼓をうちながら火埴と職場体験の段取りを話していた。

「いえいえ、まあ1週間毎日毎日、先輩が声掛けに来てくださってるのに無碍には出来ないでしょ?」

「……!?!?ね〜じ〜れ〜?」

リユークユウが顔を向けた方では、美味しそうに火埴が淹れた紅茶を飲みながら満面の笑みでのご満悦な波動の姿があった。

「だってえ、おねえさまと一緒に職場体験したかったんだもの」

顔を赤く染め、照れたように身体をくねらせる波動の反応を見て驚愕の色を表すリユークユウ事務所のメンツ。

「え、この子誰?」

「ね、ねじれちゃん大丈夫?風邪?調子悪いの?」

「ああ、とうとう疲れが頭にも……」

そんな異常事態とも取れる状況にサイドキック3人が慌てふためいている中。

「おつしやああああああ、あたしのキャロットケーキドコ!!」

会議室代わりに使用されていた一室からミルコが姿を現した。

「まあ、99%終わった書類に目を通してサインするだけだからね。それでも2時間、ミル姉にしたら頑張った方か」

そう言いながら、朱色のケーキキーホールとアイステイをミルコの前に出す火埴。

「ああ、うんめえ!!てか若が来たなら早速蹴り合おうぜ」

「あのね、あなた当然のようにいるけどチームアップはウチが主体で学校側もウチだから許可でたのよ。ミルコは事務所無いんだから基本的なヒーロー活動がどういった物なのか体験して貰うのが先決でしょ」

そんなプロヒーロー2人の言い合いをバックに火埴は慣れた手つきで休憩室の掃除をしていた。

「まあ、見慣れているからかもしれないけど。せめて下着は片付けとこうよ、一応オレ男だよ」

「いや、若はアタシらの死屍累々な姿なんて見慣れてるでしょ？なんせ日本で一番厳しい修業先で有名なキヤマバツカ事務所に出入りしてたんだから」

「それより、久しぶりに若の手料理食べたい」

「いや、摸~~ら~~あんた何言ってるの!？」

「あたしもおねえさまのご飯食べたい」

多種多様な美人からの懇願、少し困惑したような笑顔を浮かべた火埜の答えは。

「大人5人胃に優しい物が良いと思ってお鍋にしました。まあ、現職ヒーローの仕事ぶりに関しては明日以降と言うことで」

「ああ、この感じイワさんのところにお世話になってた頃の感じね」

「デスマーチ後は必ず若の胃に優しいお鍋だったものね」

「おねえさま、メはやっぱり」

「うどんだね」

こうして、火埜の職場体験1日目は過ぎ去ったのだった。

職場体験も順調に進み、残すところ2日となった。

「朝御飯ですよ」

「あら、今日は中華粥なのね」

「トーリ、キャロットジュースくれ」

「おねえしやま、おはよごじやましゅ」

「あ、お茶も中国緑茶と烏龍茶だ。しかも温い」

「ああもう聞いてよ、旦那ったら若に会いたいからって今日もリハビリさぼろうとしたのよ。治ればいつでも会えるのに」

「会社着て朝食のある風景、尊い」

リユーキユウ事務所では恒例となりつつある朝のミーティングごみのトーリ朝食会が開かれていた。

「前から言ってるけど、今日は隣町で合同パトロールよ。てミルク私の中の揚げパン残しておいてよ」

「ちっ、別に良いじゃねえか。あたしは協会の呼び出し行ってくる」

「おねえ様のご飯美味しい。ねえねえ、隣町だと保須市に近いね」

「まあ、その流れで馬鹿やりそうな連中への牽制ね。若、この間のレシビありがとう」

「若もサンドイッチありがとう。旦那拜んでから食べてたわよ」

「うちも、奥さんも含めて6人分のおにぎりなんて大変だったでしょ」
和気藹々と進むミーティング。

この中で、気になる単語が火埜にはあった。

「(“保須”かあ)」

保須市を拠点として活動する“ノーマルヒーロー・マニュアル”へ職場体験に出ている飯田。

兄であるインゲニウムの件で一時期ヒーローの卵らしからぬ雰囲気纏っていた。

職場体験前にその実兄から何かを言われたのか怒りを心の奥底に沈ませ、家族からの進めもあり本人の希望通りマニュアルのもとへと赴いたのだった。

そんなマニユアルの活動地域に関して飯田の考えを察した緑谷から伝播し、クラス全員から暴走禁止と言い渡されていた飯田。

猪突猛進気味で理性よりも感情で行動する所がある、そのあり方が悪い方向に行かないことを願いながら火埜は自分用の巨大な土鍋に作った中華粥を完食していた。

「おう、セブンス。美味しい林檎入ってるぜ!!」

「ありがとうおっちゃん。後で見に來せてもらおうわ」

「二「ひのにいちゃんこんにちわあ!!」二」

「こんにちわチビツ子ヒーロー達。今日も元気だな」

「あらあら火埜君。この間はありがとね」

「どおも奥^{オネエサン}さん、おばあちゃん腰大丈夫だった?」

「おう色男!ピチスーハーレムかあ?」

「お巡りさんあの人で」「ゴメンゴメンゴメンゴメン辞めてえ!!」

体育祭の影響も有るだろうが職場体験から数日、火埜はリユーキウのパトロールエリアでの認知度はスゴかった。

未だに学生だから弄られる様なこともあるが、それも愛嬌と対応するので人気も鰻上りであった。

「もう本当にガチで卒業後はウチに來てくれないかしら」

「むふう!!おねえさま人気者で私も嬉しい!!」

「しかし、セブンスは良く人見てますね」

「固いわけどもないし、かといって不真面目であるわけでもないし、口は回るし、人気も出るわな」

「若の外面サイコー」

ヒロコスがどう見ても「インテリ系のヤのつく自由業」や「海外系のマのつく自由業」を彷彿とさせる黒スーツに赤シャツ、所々から見えるアクセサリーに知的さをプラスするメガネ型サポートアイテム。

なにも知らないファッション系の雑誌取材に幾度となく捕まるが、それすらも口で上手く躲している光景を何度も見てきたリユウキユ―事務所組は未だに馴れないその光景に思わず話し込んでいた。

「んむう?」

そんな渦中の火埜はパトロール初日で助けた移動販売のクレープ屋から貰った5人前クレープを幸せそうに食べていた。

その実年齢よりも幼く見える雰囲気周囲が色々やられていることに気が付かずに。

「久しぶりだな、火埜」

「ああ、元気そうだな轟」

ガシツと握手を躲すA組男子顔面偏差値^{グッドルッキングガイ}の2人。

その姿に周囲がスマホでの写真やムービー撮影をしているのが何とも言えないが。

「何か嫌なことあったか？」

「……オヤジが急に近い」

「……まあ、がんばれ」

「なんか爆豪の方が父親^{オヤジ}って感じがした」

「それ勝己とオヤジ^{エンデヴァー}さんに言うなよ絶対」

「なんでだ？」

「何をやってるんだ氷火!! さっさと来い!!」

リュウキューと話をしていたエンデヴァーの怒声に呼び戻される轟。

その時、火埜は見た。

エンデヴァーの瞳に輝く物があつたことを。

「(流石に、同級生から父親認定されるのは勝己的にきついだろうし黙っところ)」

「セブンス、私たちも今日は保須に行くことになったわ」

言ったら爆発するだろう幼馴染みの幻影に敬礼していた火埜にリュウキューから声が掛けられた。

「了解ッス 姐さん」

「それ、本当に止めて。お姉さん泣くよ」

パトロール自体は何事もなく進んでいた。

轟と火埜という有名人がいるからか、何時もよりも人が集まってきてしまいそれらの対応に戸惑う轟を上手く火埜がカバーした結果、下手なアイドルよりもファンサしていた。

「(やはり、オレもッああいっただことッ) するべきなのか)」

「エンデヴァーはキャラじゃないんで止めといた方が良くすよ」

エンデヴァーは息子とその友達の振る舞いを見て自分の行いを省みるが心を読んだかのようにツツコミを入れてきた火埜に驚愕していた。

「しっかし、なんかなあ」

「なあ、火埜」

頭をかきながら、夜にさしかかった空を眺める火埜。

そんな火埜に真剣な顔つきで話しかけてくる轟。

「ん、どした？」

「嫌な空気だ。USJの時みたいになんか悪意が空気に混ざり込んで全身に纏わり付くような」

USJ事件の経験、それは確実に1A生徒にとんでもない経験値を与えていた。

轟と同様に、火埜も確かに感じていた。

梅雨特有の水気を含んだ空気に混じった悪意を。

「ウォーターホースご夫妻無事で良かったねおじいちゃん」

「まったくじゃ、まったくあのような手合いは闘争欲求のみで生きているようで骨が折れる」

本日、グラントリノのチームアップに同行しその先で事件を一つ片付けた緑谷は新幹線内で着慣れ始めた制服で座っていた。

その隣にはスーツを着こなす小柄な老人グラントリノが座っていた。

繊維圧縮技術が発展したおかげでヒーロースーツの着用時間が係らなくなった結果、私服で移動することが多くなったヒーロー業界。

2人もまた、移動中はヒーロースーツを脱ぎ一般客と共に席に着いていた。

素でおじいちゃんと呼ばれ喜んでいるグラントリノは最近益々緑谷家にお世話になっており、可愛い孫(女子)が2人に増えたことも手伝って嬉しさを隠そうとすらしなくなった。

そんな時だった。

「おい、なんか向こうで爆発したぞ」

2人の乗る車両の乗客、その誰かが爆発を目にし興奮したように声を上げた。

その時だった。

『お客様、何かに捕まり姿勢を低くしてください』

車両内に機械的なアナウンスが流れた。

どちらが声を掛けるまでもなく2人はコスチュームを解放し、ヒーローとしての姿になる。

そして、次の瞬間。

「つくしよう。なんなんだこいつは」

車両の天井を壊しながら1人のヒーローが通路に叩きつけられた。

ヒーローを叩きつけた細く毒々しい緑色をした腕は、再びヒーローを持ち上げると車両の壁へと叩きつけた。

いつのまにか止まっていた新幹線は壁を破壊され、ヒーローは線路脇の防音壁に叩きつけられる。

のっそりと車両に入ってきたヴィラン、その姿を見たグラントリノと緑谷はいち早くその正体に気が付いた。

「脳無!!」

その言葉と共に顎を高速で蹴り上げるグラントリノ。

「静空!!避難誘導せい!!」

その言葉と共に脳無を車両から蹴り飛ばし防音壁すらも蹴り抜き街へと落ちていくグラントリノ。

「っ、皆さん慌てずにその場から動かないで」

動き出そうとする身体を精神で押さえつけ、車掌が来るのを待つ緑谷。

敵の排除も重要だが、何よりも今ココに残っている人命を守ることこそ彼女が今一番やるべき事であると認識していたからであった。

そして、避難誘導を車掌と終えて外に出て彼女の見た光景。

「なんだ、これ」

そこは紅蓮の火の海が広がっていた。

死柄木姉弟は炎々と燃える街と暴れ回る暴力の象徴と化した脳無の姿を見ていた。

しかし、その顔に写る感情は違うようだった。

弔の顔、といっても”手”が張り付き表情は読み取れないが、その目は新しく玩具を貰った子供のように輝いていた。

「あつははははは、すげえな姉ちゃん。見てみなよあんなに簡単に”日常”が壊れて慌てふためいてるよ」

一方でそんな弔の後ろで手を組んでつまらなそうに、弟の起こした惨状とそんな弟を冷めた目で見つめる葬。

「そう、良かったわね」

「„ステイン”なんかもうどうでも良いや。オレが、オレ達が敵連合だ!!」

数時間前

敵連合がアジトとしているバーに男はいた。

「なるほど、貴様らが雄英襲撃犯か」

黒霧のゲートを通り抜け現れたステイン。

死柄木弔の話を聞き納得したように返答した。

「そして、このオレもお前達の一派に加われということか」

「ああ、頼むよ悪党の大先輩。あんたもオレ達と組んだ方が動きやすいだろ?」

終始笑顔のまま死柄木弔の話を聞くステイン。

死柄木弔もまた、その声色から友好的であろうとしていることがうかがえる。

「それで、お前達の目的は何だ」

「・・・そうだなあ」

思考にふける死柄木弔。

そんな彼の後ろにはサマーセーター1枚でジュースを飲むトガヒミコとその会話を鋭い視線で見つめる死柄木葬がいた。

「とりあえず、気に入らないモノは全てぶっ壊したい。ヒーロー、特に

オールマイトを」

その言葉に僅かに顔色を変えるステイン。

それに気が付かないのか死柄木弔は懐から数枚の写真を取り出す。

「それに、ここのクソガキなんかもな」

そういつて死柄木弔がステインに見せた写真。

そこには爆豪や火埜、轟といった体育祭でも華々しい活躍をした生徒の姿があった。

そして、両手で写真を掴みその写真を跡形もなく崩壊させた。

「どうやら、貴様とは組むことはあり得ないな」

「ああん？どういうことだ」

オールマイトの名前が出てからか、それとも学生の写真を崩してからかステインの浮かべる表情が明らかに敵意を宿す。

「貴様らに興味を持った、持ってしまったオレが浅はかだった。貴様はオレが最も嫌悪し忌避する人種だ」

そういうとステインは体の至る所に配置されたナイフを手取る。「子供の癩癩などにいちいち付き合つてられん、信念無き殺意などオレの流儀に反する」

その言葉と共に周囲の温度が数度下がったような感覚が死柄木弔達を襲う。

「（ッヒーロー殺し）、死柄木弔が次の段階に進むために、そのための成長を促すために招き入れようとした男。しかし」

黒霧はこの会合の前に行われた「先生」との会話を思い出していた。

『いいかい、黒霧。もし死柄木弔とステインが一触即発の状態になつても君は静観するんだ』

「どういうことでしょうか？それは私に死柄木弔を見捨てろとおっしゃっているのでしょうか」

『違うよ黒霧。正解を僕が教えるのは簡単だ、でも答えを教えるだけでは意味が無いんだよ』

『自分の足りないところを自分で考えさせる。それにより成長を促す』

そうやって「先生」は深く息を吐く。

『本来、教育とはそう言うモノだ』

その言葉に宿るどす黒い何かを感じさせながら。

「何かを成し遂げるためには信念が「強き思い」が必要だ」

淡々と話すステイン。

その眼前には斬り付けられ動くことが出来ない黒霧と両腕に深々とナイフが刺さった死柄木弔。

そんな2人を表情を変えずに冷めた視線を送る死柄木葬とその腕に絡みつくトガヒミコがいた。

「くっ（動けない、これがステインの個性）」

「弱者は淘汰される、それは当然のことだ。だから、貴様らは今オレに殺されかけている」

ステインのその瞳に濁った光が灯る。

「数多のヒーローがそのあり方を見失い、「ニセモノ」が蔓延る今の社会」

「我欲のためだけにその個性を扱う貴様ら犯罪者も」

体中に装備したナイフを抜き、死柄木弔へとその刃先を向けるステイン。

「……、おい「これ」に何向けてるんだよ」

顔に貼り付けた「手」にナイフを向けられ死柄木弔。

すると、彼の雰囲気が一変した。

「口数が多いなあセンパイ。信念？強き思い？なんだそれ、強いて言えば理由を挙げるなら「オールマイト」だな」

死柄木弔から発せられる雰囲気。

先程までの子供の我儘の延長のようなそれから、確実に黒く濁って激んで、コールタールのように周囲にへばり付くような悪意。

「あんな「ゴミ」が祭り上げられる世界、そんな世界をメチャクチャにぶっ壊してしまいたいとは思ってるよ」

そこにあったのは純粹なまでのオールマイトへの悪意であった。

それを感じ取ってしまったステイン、気が付くとバーただ一つ外に通じるドアへと背中を着けていた。

「ふつ、それが『お前』か」

「ああん？」

何かに納得したように手に持つナイフをしまおうステイン。

そんな彼から敵意が消えたことを不思議がりながらも自分が知らないところで自己完結されたことに不快感を露わにする死柄木弔。

「オレとお前の目的は対極にある」

そう言うステインは口角を上げ微笑む。

「しかし、『今を壊す』。この目標に置いてだけオレ達は共通している」

そう言う死柄木弔と目を合わせるようにステインは語りかける。

「真意を、試させて貰った。異質ではあるが強き思い、歪な信念の芽がお前の中にはある」

死柄木弔に何か感じる物があつたのか、ステインは真つ直ぐに死柄木弔を見つめる。

「貴様らを始末するのは、貴様がどんな風になるか見届けた後にするでしょう」

「はあ？知るか、何様のつもりだ。おい黒霧こいつがパーティメンバーなんてオレは嫌だね」

「いえ、死柄木弔。彼の加入は我々にとって大きな戦力強化に繋がります」

「そして、ステイン。その態度から我々の仲間になると考えてもよろしいですね」

「いいえ」

黒霧がそうステインに確認する。

その言葉を否定したのは後ろで傍観を決めていた死柄木葬だった。

「あくまで同盟よ。彼には彼の、私たちには私たちの目的がある。彼の言うとおりに対極に位置する目的がね」

「ああ、そうだな。話が纏まったならさっさとオレを保須へ戻せ」

ステインの目に再び黒く濺んだ光が灯る。

「あそこには、オレがまだなさねばならないことがある」

そして、保須市へとやってきた一同。

「思ったよりも栄えてますねオスシ」

「保須市です、トガヒミコ」

「それで、センパイがなさねばならないことってなにかしら？」

興味なさげに俯く死柄木弔以外の同伴してきたメンツの言葉に両手を広げ、世界に宣言するようにステインは語り始める。

「“ヒーロー”とは偉業を為し得た者にのみ与えられる名誉ある称号。だが」

そこからステインの憎悪が膨れるのを感じ取る4人。

「多すぎるんだよ、英雄気取りの拝金主義者が」

刀を手にし眼下を見つめるステイン。

彼の目に世界はどう写っているのだろうか。

「贖物が蔓延り続ける限り、オレという存在は現れ続ける」

そう言つてビルから飛び降りるステイン。

「たいそうなこと言っておいてやってることは草の根運動かよ。
泣けるねえ^{笑える}」

「そうとも限りません、彼の現れた街、そしてその周辺の街では軒並み犯罪発生率が急激に減少しています」

「そういうえば、どこかのお偉いさんがヒーローの意識改革に繋がったとか言つてばっしんぐされてたわね」

「ほえ、あのおじさん結構スゴイんですね」

ステインの消えていった方角を見ながら死柄木弔は不快そうに首を掻く。

「くだらねえ、やっぱアイツとは合わねえわ。黒霧脳無何体か出せ」

死柄木弔の命令に反応し黒霧は自身の個性を使い何体かの脳無を連れ出した。

「ようはぶっ壊したいだけだろう。なら早い者勝ち、ぶっ壊し“競争の始まりだ”」

死柄木弔のその言葉を合図にしたように呼び出された脳無たちは一斉に街へと襲いかかったのだった。

「あんたの面子？だとか信念？だとかそういうったもろもろを土足で踏みにじらせて貰うぜ、ダイセンハイ^{ヒーロー殺し}」

そして、冒頭の悲劇が幕を開けるのだった。

炎に包まれる保須の姿、そこを逃げ惑う市民。

そんな市民を襲おうとする怪人脳無。

しかし、脳無の行く手を遮るように分厚い氷の壁が立ち塞がる。

キヤッスルウォール
「氷 壁」

氷火による分厚い氷のトンネルにより市民の避難経路を確保し。

パイオレット・ツリ
「雲の倍数弾」

セブンスの無数に枝分かれしていく弾丸による威嚇攻撃により脳無は思うように動けずにいた。

「セブンス、こいつら」

「ああ、USJに出た奴の上位個体だろうな、リユーキュウ!!」

セブンスとしてリユーキュウの名を呼ぶ。

それが意味することを直ぐさまに感じ取ったりリユーキュウの行動は早かった。

「チームリユーキュウは住民の避難を優先!!セブンスは私とアレラの相手をするわよ」

「チームエンデヴァーもリユーキュウに続け!!オレと氷火が取りこぼした奴らも任せる!!」

そう指示を出した後で、2人は脳無へと駆け出した。

そして、セブンスと氷火のもまた2人に続く。

ニヤンフウ
「猫々功夫・猫脚撃」

6 本腕の脳無の軌道の読めない連続パンチを身軽に避け、更にお返しにと逆立ちをするかのように両脚で顎に蹴りを入れるニヤーゴ。

「影縛り・黒茨」

腹部にガトリング砲を生やした脳無が自身の影から生えてきた黒い茨に絡め取られ捕縛されていく。

その後にはナイフを投合したカゲオニが妖艶に微笑んでいた。

フワフワエルト
「柔軟羊綿・フワフワシールド」

上半身が異常発達したような脳無の超重量級パンチを両手から生み出したピンクの羊毛のような物で受け止め、そのまま脳無をその羊

毛のような何かに沈めていくフワフワシープ。

「すごいな、リユークユウ事務所のサイドキック」

「姐さんたちは可愛くて美人なだけじゃないよ。なんせ皆イワさんの教え子でもあるんだから」

「忘れがちだけどあの人もバトル特化のヒーローだったな」

避難誘導をしながらもプロヒーロー達の活躍に驚嘆してしまう氷火。

一方、こうなるまでの地獄を知っているセブンスからすれば当たり前の事であった。

「氷火・セブンス避難誘導は終わったか？」

「おねえさまにシユート君大丈夫？」

「はい、バーニン。あと焦凍です」

「うつつ、バニさん。ネジレチャン今はヒーローネームで呼んでね」

「なら、よっし!!」

「はい」

避難誘導を終え戻ってきた2人の肩を組むように声を掛けてきたのはエンデヴァー事務所若手筆頭のバーニン。

初めて会った瞬間から波長が合ったのかセブンスは「バニさん」呼びになっていた。

そして、ふんわりした雰囲気を発しながら自然体でセブンスに抱きつくネジレチャンは何故か氷火の本名を間違えて覚えてしまった。

「にしてもなんなんだこのキシヨい奴ら。報告書見た以上じゃないか」

「恐らく死体やらなんやらをベースに複数の“個性”を無理矢理入れているんでしようマジで気持ち悪い色だらけだ」

他者のオーラが見えるセブンスは脳無の発する混ざりきらない混沌としたオーラの色に当てられて顔色を悪くしていた。

「おねえさま大丈夫?ぎゅする?」

ネジレチャンがペアで行動しているのもオーラの色が綺麗で尚且つ、セブンスの“個性”に影響を受け始めていたからである。

顔色が悪く明らかに無理しているとわかるセブンス、そんなセブンスの顔を間近で見たネジレチャン。

「もう、おねえさま虐めちゃダメ!!」

そう言っただけで近くに来た脳無に対してオーラを飛ばすネジレチャン。普段であればねじれてしまいスピードがあまりないはずの彼女の個性「波動」はまるで鉄砲水のように勢いよく発射された。

職場体験中に一緒に行動し続けた結果、何故か「鎮静」の効果を持つ雨のオーラに目覚め、セブンスのオーラ測定器で測ったところセブンスの放つオーラの波動に似た波動へと変化していたのであった。

「……、波動先輩スゴいな」

「この前、オレの雨属性ボックス開けてたからアレ完全に目覚めてるんじゃないかな」

「ななななな、コレ終わったらアタシにも「天候の焰」教えてくれ」周囲の脳無を完全に無効化し終わった一同は集合地点としてしていたされた座標へと周囲の警戒をしながら歩いていた。

あらかたの脳無を倒し、実力はあっても学生であることを考慮された氷火とセブンスは逃げ遅れた人の有無の確認を行うため割り振られた担当区域を歩いていた。

そんな時だった。

2人のスマートホンに連絡が入る。

そこには緑谷からの地図と座標のみが記された画像が送られてきていた。

「飯田だな」

「まあ、仕方ないか。寧ろよく間に合ったなシズは」

2人はそれぞれ、リューキュウとエンデヴァーに連絡を取ろうとした時だった。

「ギューエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

上空から両腕がコウモリのような翼となった脳無が襲いかかってきた。

咄嗟に避ける氷火とセブンス。

明らかに狙ってこの場に現われた脳無。

「行け！轟！！」

セブンスがヒーローではなく友達として、仲間を助けるために取った選択。

それは自分1人が残り轟を先行させることだった。

「!?何を言ってるんだ火壁!!こいつを2人で倒して速攻で駆けつければ」

「シズが端的に送ってきたってことは相当追い込まれているって証拠だ！それにココがどこだか忘れたわけじゃねえだろ!!」

「あつ、クソ飯田の野郎暴走しやがったか」

「先に行け、必ず後を追うから」

そう言うのと腰に下げられたホルスターから拳銃型サポートアイテムを引き抜き2つの匣を開く火壁。

そこには赤い焰を灯した巨大なリング状のサポートアイテムが浮遊していた。

「クソ、負けんじゃねえぞ」

その姿を見て、轟は走り出した。

確かに脳無という強敵に対して2人で当たれば倒すことは可能かもしれない。

だが、それで助けるのが遅れてしまったら。

生粋の末っ子気質は自分を受け入れてくれた仲間達を見捨てるような選択を取ることが出来なかった。

一方で火壁が残った理由に轟のような友を思う気持ちの他にもう一つ別の思惑があった。

「その火傷痕。ああ、今日の『僕』は本当に運が良いな」

「ギューエエエエエエエエエエエエエエ!!」

火壁の脳裏には幼き日の記憶が蘇ってくる。

執拗に自分をつけ回し、取材と称して幾度となく両親を侮辱した記者がいた。

その男は火壁の個性暴走に巻き込まれ重度の火傷を負ってしまった。

脳無の起こした風によって俯いていたせいで垂れ下がった前髪が

巻き上がる。

「殺したかった奴が向こうから来てくれたんだから」

火埜の瞳は純粹な殺意が宿る黒く底が見えない程に黒い憎悪に染まっていた。

目の前の脳無の体にはその時火埜の個性暴走に巻き込まれた記者が負った凍傷のような火傷の痕がクツキリと残っていた。

????

一人の男の話をしよう。

男はどこにでも居る普通の存在だった。

子供の頃は友人を作り、どちらかというと遊んでばかりで勉強はからつきしだった。

そんな男も大人になり、社会に出て仕事をするようになった。

必死に働き、幼き日に描いた理想からかけ離れた人生を送ろうとも満足しながら生きていた。

理不尽にも思えることもあった。

そんな中でも必死に生きてきた。

そんなある日、唐突にその生涯を終えることになる。

切欠は誰にもわからなかった、目の前で鉄パイプのような者を振り回す存在。

男の目の前には恐怖で泣き出し立ちすくむ子供が居た。

丁度、男の2人目の子供と同じ年の頃だろう。

子供に振るわれる凶器を前に気が付いたら男は子供をかばうようにその凶器を受けてしまっていた。

混濁し消え行く意識の中、凶器を振るっていた男は周囲の人間に取り押さえられた。

男はそこで意識を失った。

一人の少年の話をしよう。

少年は両親にも恵まれ、幼馴染みとも呼べる友人と共に過ごしていた。

ある日、少年は誘拐された。

両親により捕縛された犯罪者が逃げ出し少年を捕まえ逃げていたのであった。

そんな中、少年は気が付くと液体の中にいた。

薄れている意識の中、両親が大男と対峙していた。

大男は笑みを浮かべると少年に向けて槍のように尖った指を撃ちだした。

少年を守るように両親は盾となった。

その時、少年は不思議な感覚に陥る、両親の心とそれ以外の複数の心が流れ込んでくる。

そんな感覚に陥っていた。

数秒ごとにその流れ込んできた何かは少年の中で混ざり合い、調和し少年の中で一つとなった。

そして、少年の心を守るように一際大きな何か布のように被さった。

その後、大男に対して別の大男が殴りかかかっていく姿を最後に、少年は再び意識を失ってしまう。

少年が意識を取り戻した後に待っていたのは大好きな両親では無く、世間の好奇の目であった。

連日、心ない言葉が少年を傷つけていく。

両親への謂れのない誹謗中傷、少年自身に対する悪意の塊のような何か。

そんな生活の中、一人の男性記者が少年の病室に乗り込んできた。病院関係者が居らず、たまたま少年の関係者も席を外していた時だった。

その男が興奮気味にまくし立てるような言葉は少年には理解できなかった。

ただただ、目の前の男に恐怖を抱いていた少年の疲弊しきった心は壊れたのだった。

「ああああああああああ!!」

少年の口から悲鳴に似た何かが発せられるのと同時に、少年から黒い焰があふれ出した。

そして、数秒と立たないうちに7色の焰が黒い焰を覆い尽くし、オレンジの焰と***の焰が全ての焰を少年に押し戻した。

侵入してきた記者は少年の暴発した力に巻き込まれ重傷を負ってしまい、以降自力での行動すら困難になってしまったが誰も少年をとがめることはなかった。

これは“火埜翔織”が心の奥底に押し込めた記憶であり、“日野透

吏らがその意識を呼び起こされた瞬間であった。

ビルとビルの隙間。

表ではヒーローと警官隊による脳無との戦闘音と一般市民の悲鳴が木霊している。

「GYAaaaaaa!!」

コウモリのような皮膜を利用して空を飛ぼうとした脳無。

その両腕の翼を不規則に加速する弾丸が貫いていく。

その脳無を見ると左脚は焼け炭化しており再生できておらず、身体にも少くない風穴が空いていた。

「ははは、五月蠅いなあ。まだまだ殺してやらないから逃げなよほらあ」

そんな脳無に対して狂ったように笑いながら、濁った瞳を向ける火埜。

脳無が口から棘を発射して攻撃してくれば盾で防ぎ、最も致命傷にならないマガジンを選択して攻撃を続けていた。

その結果、脳無は徐々に逃げることを諦めたかのように後ずさりをするようになっていた。

「ええ、もう終わり？早く攻撃してきなよお、ほらコレもホルスターに戻すからさあ」

そう言つてホルスターに銃を戻した火埜の両手には漆黒に燃える焰が浮かんでいた。

「ほら、お前らは死にくいんだろ？じゃ、大丈夫でしょ？ほら早く、ほらほらほらほらほらほら」

髪を掻き上げた火埜の顔、そこには無邪気に玩具で遊ぶ子供のような無垢な笑顔が貼付いていた。

しかし、その瞳には誰しもが寒さを覚えるような極寒の殺意が焰のように燃えていた。

「ああ、もうイヤ」

そう言うのと両腕の焰を握り消し再び銃を構える火埜。

明らかに戦闘行為が出来ない意思もない脳無に対して銃口を向け

た。

「それじゃ、し……」

トリガーに掛かった指に力を入れるのと同時に火柱は意識を失い倒れた。

「GYASSYA?」

脳無は指先で気絶した火柱をつつく。

反応がないことに醜い笑みを浮かべる脳無。

空へと飛び上がり、安全圏に着くと口から無数の棘を発射して火柱を殺そうとした。

火柱が倒れていた道路には無数の棘が突き刺さり、それによって生じた砂煙で火柱の姿は見えなくなっていた。

「GISSYAAAAA」

姿が見えない火柱に対して優位を確信しますます笑みを浮かべる脳無。

「あーら、本当に思考が短絡的なんだね」

すると、脳無の後から声が聞こえてきた。

急ぎ振り向く脳無の視線の先。

そこにいたのは。

「まったく、子供相手にここまでするかね」

月光を浴びて夜に染えるサラサラの銀髪。

背中から銀色に輝く焰の翼で空に浮くヒノの姿であった。

「やれやれ、〃オレ〃が出てくるって事は相当だったんだな」

ヒノはそう言うのと左手に焰で出来た弓を作り出した。

その刹那、脳無は〃逃げ出していた〃。

脳無自身、意識がないにもかかわらず奥底に沈められた生存本能が彼を逃走という行為に走らせたのであった。

「無駄だよ、〃オレ〃が表に出てきた段階で君に生存の可能性は無いんだから」

弓を引き絞り、遙か先を飛ぶ脳無へと狙いを定める火柱。

「銀焰の断罪」

それがトドメとなったのか火埜は再び意識を失った。

「んあ？」

気の抜けた言葉と共に意識を取り戻した火埜。

「いつ目を覚ますか解らなかつたし、綱手先生からも精神的な負荷が原因だつて言われてたから。でも気絶するほど抱きしめちゃダメよ」
「確かに、火埜の坊主は耐久性皆無のカミソウコウ？とか言う奴らしいからのお。静空も加減してやなきやだめじやろうて」

「ごめんなさい」

リユーキュウとグラントリノヒローから怒られ正座反省している緑谷と波動の姿があつた。

「……うん夢だ」

「夢な訳ないだろうがこの馬鹿者がああああああ!!」

「エンデヴァーさん病院では静かに!!」

—というわけで—

「で、本当に何も覚えてないのね若」

「うい、たつねえ。てか久しぶりにたつねえの私服見たけど相変わらずの美人さんだね」

「流れるように口説くな火埜の小僧」

現在、病院で大声を出し看護師長に説教されているエンデヴァーをよそに轟を送り出してからの事情聴取をされている火埜。

なお、その横では売店から買ってきたであろうお菓子やお弁当、おにぎりサンドイッチといった食事類のゴミを片づけるリユーキュウ事務所の間々とそれを嬉しそうに介護している波動の姿があつた。

「いや、轟を送り出してから『アレ』の素体になった奴の当たりつけだからちよつと墮落ちしたけどそこからの記憶が全くないんすよね」
「はい、おねえさま餡蜜」

「それじゃ、彼女たちが見た銀色の翼に付近で目撃された黒い焰について」

「まったく、見当つきません」

用意された個室にて保須警察署の署長であり火埜の幼少期から知っている面構直々に事情聴取を受けている火埜。

そして、彼の一言に波動以外の面子から盛大にため息が漏れる。

「まあ、覚えていないのなら仕方が無い。明日精密検査が終わるまで退院は出来ないが今回の件は恐らく君の『個性』に関わることだ」

「うい、ちゃんと検査受けます」

そう言つて波動に抱きつかれて火埜は出て行つた。

所変わりキヤマバツカ事務所に隣接する病院、「蛞蝓診療所」にて火埜の検査結果を見てため息をつくのは火埜がイワさんの義息子になる以前からの掛りつけ医である「千住綱手」。

「こんなことあり得ない筈なんだがな」

彼女の手に握られたとある検査結果。

そこにはとある因子に関わる数値が書かれていた。

「去年よりも焔の出力が上がっているのに、個性因子の総量が減っている」

その呟きは誰に聞かれることもなく消えていった。

「うっす、ご心配おかけしました？」

職場体験が終了して1週間、強制検査入院をさせられていた火埜の復帰一言目は無駄に軽かった。

「おう、おかえり。お前なにかイベントあるごことに入院してるけどさう言う星の下に生まれたの？」

「そんなこと無いと思いたいけど」

互いを牽制し合っている一部とは関係なくさりりと話しかけてくる瀬呂。

こういう普段と変わらないスタンスでいてくれる存在というのは有り難く、一足先に復帰した緑谷・轟・飯田もその恩恵を受けたようであった。

「けろけろ、はい火埜ちゃんコレ休んでいた間のノートのコピーよ」

「蛙吹さんは理数系を、オレは文系を纏めといたよ」

そして流れるようにクラス内人徳者ランキングの高そうな蛙吹と尾白が休んでいた間のノートのコピーを渡してきてくれた。

「ありがと2人とも。いやあのべ2週間も抜けてたらマジでヤバいからね」

「けろけろ、火埜ちゃんは頑張ってるけど中々結果に現れないものね」「いや、本当にあれだけやってクラスでも平均ちよつと上の点数って、火埜呪われてない」

そんな和気藹々と会話の弾む中、教室の大きな扉が開かれる。

「おう、おはブフォツ！」

そこに居た人物、爆豪を目視した瞬間、挨拶すらキャンセルさせられる笑撃を受けたのは上鳴だったが、クラス全員がその攻撃を受けてしまっていた。

「だあつ、ひゃひゃひゃひゃひゃ！爆豪まだ『その頭』なのか？」

峰田の馬鹿笑いの理由、それは。

「アツハハハハハハ！マジ最高だぜ爆豪！」

「・・・笑ってんじゃねえぞコラア!!」

クセついちまって洗つても直んねえんだ。

オイ笑うなブツ殺すぞ」

「ブハハハハハハハハハハ！ やってみろよ8：2坊や！」

それは芸術的なまで見事に極った美しい8対2に分けられたヘアスタイルの爆豪の髪型だった。

あまりにも不釣り合いなその姿に、瀬呂と切島は涙を浮かべるほどに笑い転げていた。

「だ、ダメだ全然馴れねえ。壊滅的に似合わねえ」

「うつせーぞ塩顔っ！」

「お、やっといつもの頭に戻った」

「どーいう仕組みだ！ アハハハハハハハハハ！」

「笑うなっつってんだろうがクソ髪コラアッ！」

笑いすぎてまともに動けない切島瀬呂の2人が捕らえられている間にも、続々と生徒は教室へとやって来る。

「あーお腹痛い。で、麗日は何があったの？」

涙目になりながらも火埜の言葉に、全員の視線がそちらへ向けられる。そこには、この1週間でお馴染みとなった何かの武道の型のようなか、といっても放たれる一撃一撃に凶悪な回転が加わった一撃を中空に放つ麗日の姿があった。

「充実した職場体験だったんよ」

コホーと息を吐くその姿に見慣れていない火埜を除く全員が、そつと視界からその姿を外す。

「確か、麗日はガンヘッドの所に行ってたんだよね？」

「まあ、そうなんだけど流石にあれば1週間で感化されすぎじゃないか？」

「せ、成長だよ・・・多分、きつと」

揃って詳しい言及を避けたのは、愛嬌だ。

「皆!!そろそろ相澤先生がお見えになるぞ!!席に着くんだ!!」

飯田のその声いつもの日常を感じる1A生徒達であった。

「ああ、そろそろ夏休みも近いが、もちろんお前らが1ヶ月も休める道理は無い」

教壇に立つ相澤の言葉に、どよめきが起きる。

「夏休み、林間合宿やるぞ」

休みがなくなる、などと言われれば普通の学生なら落胆するのかもしれないが、そこはヒーロー科に籍をおくヒーローの卵。

誰もが自身を高める機会を喜んでいた。

学校ほいことキターー
「G P K !!!」

「肝試そうよお！」

「風呂！」

「花火、打ち上げ花火もしようよ！」

「風呂おっ！」

「林間学校って言ったらカレーだろ」

「フロ！」

「枕投げとかしようよ!!」

「OHURO!!!」

「……………峰田黙れ」

「はい」

己の欲望を声高に叫ぶ峰田、相澤からストップがかけられた。

ついでに、他の生徒たちも相澤の眼光に圧されて口を塞ぐ。

「ただし、その前に行われる期末テストで赤点だった奴。」

そいつは、学校で補習だ」

相澤はそう言うのと、とてもサドサドしい笑顔で可愛い生徒達を見回したのであった。

そんな顛末が朝のホームルームで繰り広げられた教室では。

「まったく勉強してねえ!!!」

悲壮感漂う上鳴と、なぜか笑顔の芦戸が異口同音に叫んだ声が響きわたっていた。

中間テストクラス内成績は20人中、芦戸が19位、上鳴が20位であった。

2人の名譽のために補足しておく、あくまでA組の中での順位であり、学年共通科目での学年順位であれば2人とも上位に名前が挙がる程には学力は高い。

ただ、ヒーロー科の授業が途轍もなく速く、ヒーロー科専攻科目といういまままで経験してこなかった科目が追加された結果、試験範囲が異常に広くなってしまうのであった。

「体育祭やら職場体験やらでまったく勉強してねえよ!!」

「いやあ、まいったねえ、あつはつは!」

「ん? 芦戸、随分と笑顔だけど」

「なんかもおさあ、笑うしかないよね!! ふえーん、ひのお」

放課後、屋上にてランチラッシュが最近提供するようになったクッキー等のお菓子類を持ちよった1A生徒達。

そんな中、話は期末テストの話題になっていった。

笑顔から一転して悲しげな表情になった芦戸は、癒やしを求めて火埜に抱きつく。

峰田の顔が色々とマズい感じになるも、誰もが「いつものこと」とスルーしていた。

「皆さん、宜しければ週末は我が家でお勉強会をなさりませんか?」

「鬼畜軍師と鬼軍曹よりヤオモモがいい!」

「いい度胸だな上鳴!!」

「私もお願いしますヤオモモ!」

とても良い笑顔で下位ツートップに声をかけたのは、学年1位の八百万。

まさに救いの女神と、2人は飛びついた。

「ウチもいいかな? 二次関数、応用で躓いてて」

「わりい、俺も! 誰か、古文の “ ” わかる?」

「俺もいいかな」

そこに続くのは、耳郎、瀬呂、尾白の3人。

頼られたのが嬉しいのか、八百万の表情がパツと明るくなる。

そして、八百万の視線はズルリと湿度を持って火埜に向く。

中間テストの結果はAクラス内では7位であった火埜。

個性学やヒーロー情報学といった分野や文系教科で3位〜5位という位置についていたのだが理数系が伸び悩んだ結果である。

その結果を知るからこそ八百万は視線を向けた。

あわよくばお泊まり個人授業をなどと考えているのだが、普段の笑顔を張り付けた彼女からその思考を読み取ることはできなかつた。

翌日、午前中の授業カリキュラムを終えた1A全生徒は食堂へ向かっていた。

この2人を除いて。

「ちつ、陰湿教師が!!」

「いやまあ、職場体験のレポート5枚で済んで良かったじゃないか」

1週間の検査入院に対する罰則という名の心配かけ過ぎた事への八つ当たり罰則を相澤から受けた火埜が文句を口にする。

その横で付き添いで来てくれた障子は馴れ始めたこの駄々っ子のようなクラスメートに苦笑を漏らしながら頭をポンポンと軽く叩いていた。

「おーーーーーえーーーーーあーーーーー」

そんな2人の後ろから誰かの声が聞こえてきた。

しかし、聞こえる声は1人なのだが足音は複数人間聞こえてくる。

「おーーーーーねーーーーえーーーーさーーーーまーーーー!!」

声に振り向く火埜と障子。

そこにはこれまたお馴染みになってきた満面の笑みを浮かべた波動とそんな彼女を必死に追いかける通形と天喰、元気で可愛い波動に目をキラキラさせた甲矢がいた。

「はぎゆうー!」

「おうつぶ、お久しぶりです皆さん」

「うんうん、入院していたときいたけど元気そうで何よりだ!」

「ひ、火埜くん大丈夫かい?」

「はあく、最近火埜君とセットの時は絶妙に精神年齢が幼くなるねじれが可愛すぎて私どうにかなりそう」

「先輩方も変わらない御様子で」

一方、食堂では。

「はっはははは、みてなよA組!!本当に優秀なのは僕らB組なのだ!!」

「・・・、フンツ!!」

「オゲツ」

毎度のごとくA組に絡んだヤカラをイワさん直伝の意識を刈り取る手刀にて沈めた拳藤が少し怒り気味でいた。

「本当にごめんなA組、コイツがB組の総意と思わないでくれ。」

後、八百万は職場体験の時はありがとな」

「あら、ご心配されなくても放課後に切磋琢磨する仲の学友を疑うことなんてありませんわ

それと、職場体験の件はお互い様ですわ」

ウワバミに1週間職場体験に行った2人は当初、タレントのようなことしかさせられなかったが、それがいかにヒーローという存在が周囲から見られ続ける職業なのかということを教えられ、品行方正でいる大変さを学んだのだった。

「しかし、物間の言うとおきのおきの試験内容って一体何なんだ?」

「まあ、例年通りならロボとの戦闘試験が演習試験になるらしいな」

飯田の疑問に答えたのは遅れてきた火埜であった。

3年生達は途中で各々のインターン先からの連絡を受けて職員室に向かったのであった。

なお、障子の増やせるだけ増やした腕には自身の昼食であるお好み焼き(海鮮ミックス)と火埜の本日の昼食である食パン10斤使ったフレンチトーストがあった。

「火埜くん」

既に体に染み付いた習性からか、抱きついてきた葉隠をフワリと抱えると火埜は空いていた机1つを占領してフレンチトーストを攻略し始めた。

「ついさつき、3年生から聞いたんだが『例年』であれば入試試験の際のロボを倒すタイムアタックらしい」

「マジで!?!」

「イヤッホウ! ロボならブツパで楽勝、楽勝!」

学科に不安しかなかった上鳴と芦戸は両手でハイタッチしながら喜びを露にしていた。

「まあ、『例年』通りいけばだけどね」

葉隠を背中に抱きつかれた状態ながら既に10斤あったフレンチ

トーストを完食し八百万が特別許可とって淹れた紅茶を楽しみながらしんみりと漏れた火鉢の一言。

「翔織よお、いやに『例年』で強調するな」

「勝己さあ、USJの襲撃や職場体験で全員が何かしら敵と戦闘になる事態に巻き込まれたんでしょ。」

それこそ、例年ではあり得ないこの状況。あの陰湿教師がなにもしない訳ないだろう」

その言葉にピタと、上鳴と芦戸の動きが止まる。

両腕は喜びを表して高々とハイタッチしたまま上がっているのに、表情だけが絶望に染まっている。

その顔からは、「マジで?」「嘘だよね」と言っているのが丸分かりであった。

「けろ、そうなるとより実戦的な対敵を想定した内容ということになってくるんじゃないかしら。それも、相澤先生達が絡んでくるのなら私達の長所短所を把握して相性の悪い相手をぶつけてくる可能性があるがあると言うことね」

「確かに、正直考えすぎじゃねえかとは言えないよな。個性犯罪の増加に加えて、ステインの事件に感化された敵が出てくることも考えられるし、何よりここは雄英だしな」

「そこも含めてプルスウルトラしろ、ということか」

蛙吹、砂藤、常闇の考えを聞き顔色を青くする上鳴と芦戸。

「ちくしょう、やること多すぎじゃね!?」

「普通に授業受けていれば、赤点は出ねえだろ」

「とーどーろーきー、言葉には気をつけろよお!!」

「もうむりい、演習試験もヤバイよお!」

「お前らは個性の制御、大変そうだしな」

峰田の言葉通り、上鳴も芦戸も、いくら調整が出きるようになってきたと言っても出力に気を付けなければ相手に重症を負わせてしまいかねず、下手をすれば相手の命を奪ってしまう個性。

「ロボでも人でも、ブツ飛ばすのは同じだろ、アホか」

「アホとは何だあ!アホとは」

「うるせえ！ 調整なんざ勝手にできるもんだろ！」

鬼軍曹と言われたことを根に持っているのか、騒ぎをうつつおしそうにした爆豪の目は、やる気に満ちていた。

「その為の準備期間だろうが、学科も演習も出ることやるだけやってぶつかんぞ！ ぜ、全員で林間学校行くなら準備だつて全員でやるぞ！ 週末だけじゃ足んねえから、今日から放課後訓練は期末テスト対策にすんぞ!!」

デレ豪だ、あれがツンデレかと弄られる爆豪であったが、これよりやる気に火をつけたA組生徒達。

彼らは試験へと向けて準備を進めていくのであった。

1年AB組全員がヒーローコスチュームで体育館へと集められていた。

物間のお決まりの煽りが木霊する中、合同訓練を行っている組は嫌な予感に苛まれていたのであった。

「やーやーやー、皆お待たせしたのさ」

体育館の壇上、そこに突如として現れたのは校長の根津であった。後ろには担任の相澤とブラッドキングを控えさせ何かを発表しますよと言っているようなものであった。

「もう気がついていている子達もいるようだけど、例年であれば実技テストはこちらで用意したロボットを相手にした戦闘テストにしようと思っていたんだけど」

「ん？」

そんな根津の言葉に1人疑問符を浮かべる物間。

彼以外のB組メンバーは天を仰いでいる者こそ居れど大多数が目をぎらつかせやる気に満ちていた。

「今回は僕らVs君ら生徒で試験なのさ」

「そして、お前らが集められている理由だが、お前らの自己分析能力と情報収集能力、結束力を顧みて1年ヒーロー科+αでくじ引きをしてのコンビ試験となった」

相澤の言葉にA組メンバーだけは「でしょうね」みたいな顔をしている。

自分たちの思考を読み切った生徒たちに最近蓋と箍が外れて漏れ出している父性がひよっこ顔を出しそうになるが顔の筋肉を引き締めることで耐える相澤。

「質問です、その“+α”とは」

「ふむ、今回普通科でありながら自ら望んで総合個性学をヒーロー科の範囲で望んだ彼らだ」

スナイプの指さす方から歩いてくる人影。

「紹介するのさ、今回の編入試験資格所有者の“心操人使”君と“青山優雅”君さ」

全身を黒い軽装甲に覆われ、口元を金属のマスクで覆い漆黒の捕縛

布をマフラーのように纏う心操人使。

騎士の鎧のような出で立ちで各所にレンズのような物体を取り付けたコスチュームを着た青山優雅。

2人が堂々と歩いて来たのであった。

その後サクツと行われたくじ引き、くじで書かれた場所に向かう心操は雄英が所有する森林フィールドの中を歩いていた。

「…………縁があるね、ヒトっさん」

「オレとしては大助かりだ、お前がパートナーで嬉しいよ火埜」

目的地に着いた彼の目の前にはヘッドホンで音楽を聴きながら岩の上で目をつぶっていた火埜がいた。

「相手、誰だろう」

「1番の不安は根津校長が明言しなかったことなんだよな」

サンガラスの奥にある瞳に不安の色を濃くし嫌な予感に身体を硬くする火埜。

未だかつて見たこと無い限定相棒の姿に心操は驚きを隠せずにいた。

「何をだ？オレ達と教師陣が対決して相手を捕まえるか生徒のどちらかもしくは両方がゲートを通ればオレ達は合格だろ？」

「いや、根津校長は一言も『教師』とは明言していないんだよね」

そんな火埜の不安の発露に呼応するようにどこからともなく地響きを立てて誰かが走ってくる音が聞こえてきた。

「おいおいおいおいおい、この人”は狡くない”

「ん？　だ　れ　の　こ　と　と　w

「ヒ——————

ハ——————

!!

突如、森の奥から爆走してきた巨大な二頭身の影に火埜はゲンナリとし、心操は驚き目を丸くしていた。

「久しぶりね翔織ボーイアンデュー心操ボーイ!!」

突如、森の奥から爆走してきた巨大な二頭身の影に火埜はゲンナリとし、心操は驚き目を丸くしていた。

「や、イワさん今朝ぶり」

「相手プロヒーローかよ!!」

「さあ、翔織ボーイアンデュ心操ボーイ!!私を倒してご覧なさい!!」

その光景を別室で見ている者たちが存在していた。

「イヤイヤイヤイヤ、相手プロとかありかよ」

「そりや、確かに校長先生一言も相手が教師なんて言っていないけどさあ!!」

「まあ、今年はある生徒連
そりやこつちだつてそれ相応に対応するさ」
学校側

そこには実技試験を終えたA B組それも合格を言い渡されたペアが揃っていた。

「でも、両手両脚に“自分の体重の四分の一の錘”を付けていればプロヒーローと言っても」

『DEATH・WINK!!』

画面の中でイワンクフがまばたきをした。

そうそれはただのまばたきだった。

ただのまばたきで木々をへし折っていく爆風のような風圧を放つ。

繰り返すが、“個性”の類ですら無いただのまばたきである。

「でたあ!!イワさんの必殺技。ただのまばたき」DEATH WINK
K!!」

「あの人に四肢に錘とか言うハンデ意味ないよな」

「おい連射されてんぞ、火埜の奴イワさんが目開いた瞬間に両腕翼に転化して高速飛行で逃げてるし、脚に心操を抱きつかせて連れて行ってるようだけどマジで洒落になってないな」

教師でもない相手は対策のしようが無いと言いたいところだが火埜にとつて義母さんなイワンクフはデータが揃いに揃っているの
で対策を立てようと思えば立てれる存在と認識された。

しかし、実際は違っていた。

「ヒトっさん、試験落ちたわゴメン」

「おい、諦めんな!!いつもの不敵な笑顔はどうした!!マジで確りしろ!!」

「いや、むりだよ。見たでしょ、あれ」。こせいもさようしないだ
のまばたきであのいりよくだよ」

「くっそ、諦めの極致に達してやがる」

「あれでこせいつかわれた・・ら・・ん?」

突如何かを思いついたように言葉が詰まる火埜。

そして、そこに浮かんでいたのは悪戯を思いついた悪ガキの笑みで
あった。

「んふう、翔織ボーイの性格からしてそろそろ攻めに転じてくるで
しょうけどそうはいかなっしブル」

森林群を見渡せる丘の上、ゲートの前に立つイワンクフ。

徐に広げられた両手の指は注射器を思い起こす形に変化していた。

「エンポリオ・顔面成長ホルモン!!」

そのかけ声と共に自分の顔にホルモンを注射したイワンクフ。

数秒と経たずに、ただでさえデカイ頭部を更に巨大化させていく。

「HELL・WINK!!」

顔面成長ホルモンによって巨大化した顔面から放たれるDEATH

H WINK強化版。

威力・攻撃範囲が強化されたそれはさらに広範囲の木々を一掃す
る。

「おかしいわね、ここまでやって出てこないなんて。ならヴァターシ
も、もうちよっと本気でいくわよお」

すると突如飛び上がったイワンクフ、その身体が微振動を始めた。

「GANMEN・残像!!」

身体の微振動は止まるが顔面を高速で移動させ、残像を作り出す。

そこには20人を超えるイワンクフ（の濃い顔面）があった。

「ギョラクシー・ンヌウインク
銀河・WINK!!!」

GANMEN・残像からの一連の動きから放たれるDEATH W
INK。

攻撃範囲こそ「HELL・WINK」に劣っているがその連射性と
制圧能力により瞬く間に木々が吹き飛んでいく。

そして荒れ地と化した平野にあってイワンクフの目の前には。

「勝負だイワさん」

不敵な笑みを浮かべた舌を出した火埜であった。

「(意識、問題なし)」

ヒールに仕込んだ画鋲を踏み込むことで痛みによる洗脳解放を実行したイワンクフ。

自身の思考に一切のタイムラグが無いことから目の前の少年が義息子の火埜であると認識しようとした。

「(でも、それも早計よね)」

本人以外であれば誰よりも火埜翔織と言う存在の「個性」を熟知しているイワンクフは目の前の少年が霧の焰を纏った心操であると考えていた。

理由としては単純、火埜翔織と言う存在の思考パターンにある。

詰め将棋の如く相手の手を潰していき、自身の勝てる確率を上げられるだけ上げる、その上で負ける前提で作戦を練ろうとする。

臆病なまでの慎重さとそれを簡単に飛び越える思い切りの良さ。

相反する思考パターンを同時に行える義息子がいくら挑発のためとはいえある種のトラウマともいえる自身との戦闘に対してそこまで思いきりがよく割りきれぬだろうかと。

そして、戦闘に思考を切り替えた自分の目の前に現れることはまず難しいと判断した、すなわち。

「(目の前に立つちやぶルは心操ボーイで間違いナッシブル)」

と僅かに思考がズレた、その時だった。

「あゝっ、っ、っ、っ!!」

イワンクフの顔に炎がぶつかった。

「か、顔が!?ヴァターシの顔が!」

所変わり、リカバリーガールとグラントリノが茶をしばきながら大福と鯛焼き片手に1年生の実技を見守るモニタールーム。

「おいおい、火埜の奴やりすぎじゃないか?」

「容赦ない奴だけど確かにこれはやりすぎでしょ!」

そこで大画面に映し出される人の顔が焼きただれる映像に思わず声を荒げる泡瀬と回原。

「こげ、焦げて、焦げてええええ！」

その熱量に身体を震わせているのか未だにおぼつかない脚で崖をうろうろするイワンクフの姿が映し出されている。

「リカバリーガール、コレはどう見ても非常事態です!!試験の中止を!!」

「黙れ!!モブ共っ!!」

穴戸の言葉を制するように怒声がモニタールームに響く。

怒声の主、爆豪は誰が見ても苛立っていることが明白である態度で壁際に立っていた。

「お前らの未熟な判断で試験を止めようとしてんじゃねえ」

「しかし、爆豪氏。火埜氏の攻撃は明らかに過剰ですぞ」

「ああ?誰が翔織のことだと言った?」

その言葉に関わりの薄いB組メンバーは頭に疑問符を浮かべていた。

「あの人は、^{イワンクフ}プロ”なんだよ!あの程度のことでも狼狽えるような器の小さいヒトじゃねえんだよ」

爆豪がそう言っただけ画面を睨み付けた瞬間。

「焦げて、焦げて、焦げてなああああああ!!厚化粧だからあああああ!!」

ガッパっという効果音が付きそうな感じでイワンクフの顔面が外れてその下から無傷のイワンクフの顔が現れたのだった。

「無事なのかよっ、ヒーヒーヒーヒーヒーヒー!!」

「一本取られたよ、ヒーヒーヒーヒーヒーヒー!!」

1人崖の上で自分の渾身のギャグにツッコむイワンクフ。

「でーもーもー、心操ボーイには効果あったようちやぶる」

イワンクフが向ける視線の先には森から抜け出してしまった心操が写っていた。

「1人撃破、DEATH・WINK!!」

イワンクフが爆風のような風圧を放つ。

心操は避ける術もスキルも持ち合わせていない。

彼の脱落する姿が確定する。……筈だった。

スル

そんな音が聞こえてきそうになるくらいあっさり心操を通り過ぎる殺傷能力が馬鹿高いただのウインク。

その証拠に後の木々はへし折られていった。

「あら？（どういうこと？心操ボーイの性格ならあそこにいるのは絶対心操ボーイの筈？）」

「ほら、言ったとおりだろ」

「お前、思考がヴィランしててマジで怖いわ」

イワンクフの後、ゲート側から突如として聞こえてきた2人分の声。

混乱する思考の中、身体が反射的に動いてしまいそちらを向いてしまいうワンクフ。

そこには。

2つの焰の盾を前面に銃を構える火埜と。

その後に控える、両腕を翼に変えて上空にいる火埜がいた。

「オレ達の勝ちだね、イワさん」

「はあ？まだ試験はおわってn……」

火埜の言葉に思わず返答してしまったイワンクフの意識はそこで途切れたのだった。

「ああ、つつかれた」

前衛にいた火埜が全身の力が抜けたように地面に倒れ込む。

「お前のいう『試験だから勝てる』っていう意味が今解ったよ」

その後、霧が晴れるように火埜の姿が消えていき、所々傷だらけの心操がハンドカフスをイワンクフに付けると火埜の隣に座り込む。

「でも」

「まあな」

2人は空を見上げるとそれぞれが空に拳を突き上げる。

「オレたちの勝ちだ」

〈数分前〉

イワンクフの『銀河・WINK』による縦断爆撃の中。

「今回、コレが試験でなかつ1年生の試験であることでイワさんに勝てる可能性が出てきた」

森林エリア、自身の幻影が発射するのと重なるようにライフル型のサポートアイテムで炎を撃ち出す火埵。

その横では呼吸を整えながら、自身の出番を待ち続ける心操がいた。

逃げ回る中で何度かウインクで嘔き飛ばされた心操。

コレに近い威力の攻撃を受けたことのあるヒーロー科の面々に多少の尊敬を持ちつつも、自身の横で狙撃をし続ける火埵のム力つくほどに整った顔を見上げる。

思考を切り替えた火埵はそれまでがウソであるかのように冷静で勝ち筋を作るためだけに自分自身すら囿にして作戦を立てていた。

その為に、何回か心操はイワンクフのウインク爆撃の中に突撃させられたが。

そして、何回かウインクがカスってプロテクターが嘔き飛ばされたが戦場に落ちたそれらがよりイワンクフの思考を狭めていつていた。「ど、どういうことだよ」

「現状、間違いなくイワさんはコレが試験であることが頭にあることが解った」

「当たり前だろ、これは試験なんだから」

「そうじゃなくて、オレ達に知らされていない縛りがあるんじゃないかってことだ」

「？」

怪訝そうに火埵を見つめる心操。

「さっきから言ってるけどコレが試験であると言うことはオレ達であれば必ず合格できる道筋を残しておかなければならない」

「まあ、確かに。じゃないと試験の意味が無いからな」

「でも、事前に揭示されている試験のルールと合格のラインはなんだ」
火埵に言われて改めて考える心操。

彼らが事前に掲示されていたルールは以下の通りであった。

①試験の制限時間は30分

②生徒側の勝利条件はハンドカフスを教師にかける、もしくはどちらか1人がステージから脱出する

③担当する試験官は体重の約半分の重量を装着する
大まかに言うところの3つであった。

しかし、③に関して言えばあまり意味をなさない試験官がイワンクフ以外にも存在している。

例えばセメントス。

彼の「個性」である「セメント」は彼が触れたコンクリートを意のままに操るといふものである。

つまり、周囲に彼が操れるセメントが存在していればその場から動かずに相手を拘束し続けることが可能である。

また、セメントス同様にエクトプラズムも③のハンデが機能しない相手である。

彼の「個性」「分身」は口からエクトプラズムを飛ばし、任意の位置で本人に化けさせられるというものである。

飛ばした分身はハンデとなる錘を付けていないことから彼本来の身体スペックで生徒を追い立てることが出来るのであった。

代表的な2人だけでも③のハンデが機能しない相手がいるにも関わらず敢えて③のハンデを付け加えているのか。

「そうか、オレ達にハンデという部分に意識を向けて各試験官に割り振られている勝利への道を隠すためか」

「だと、オレは思っている」

そう言うで一息ついて木にもたれ掛かる火埜。

肉体よりも精神にかかる負担がデカいのか幻の数を維持するためには実は手抜きになり始めている幻がチラホラいたりする。

「そして、オレ達のハンデはおそらく」

「オレ、^{心操}だよな。どう考えても」

体育祭後、放課後に相澤主催のガチ訓練with AB組で基礎体力などが幾分か向上してきたとはいえ、まだまだヒーロー科には遠く及ばない心操。

それは体力だけで無く、思考や知識といった面でも後れを取ってい

る。

明らかなハンデとして設定されたと認識出来る状況。

体育祭前に同じ状況になったら恐らく無意味に悔しがって終わっていただろう。

だが、今の心操は違っていた。

「だとしたら、このまま作戦続行だな」

「んー、それも良いけど。イワさんがまだ遊んでいるうちに勝負にでたほうが良いなと思ってる」

「それはつまり」

「ヒトっさん、覚悟決めてね」

「幻に紛れてあの衝撃波の縦断爆撃の中を突き進むのか」

「それが1番の死角になるからね」

そして、2人は同時にため息をつく顔を見合わせた。

「よし、逝くか」

そして、彼らは見事に演習試験の合格規定を満たしたのであった。

「まあ、今回はイワさんというか教師陣がヒトっさんの個性を過小評価してくれたからなんとかあった感じだな」

「あと、発目のサポートアイテムペルソナコードが地味にスゴイ」

「明の奴張り切ってたもんな」

心操が口元からずらした金属製のマスク。

その名を「ペルソナコード」。

心操の名前をちゃんと覚えた発目が名前を付けたサポートアイテム第2子である。

正式名称は「金属製変声可変機構マスク “ペルソナコード”」。

機械を通してしまうと心操の個性である洗脳の効果が無くなる事に着目した発目が複数の様々な材質と厚さで構成された発せられた声を金属の反響で変声させる機構を考えつき、2日間の徹夜(その後、火焚の膝枕で就寝)で造り上げた心操専用サポートアイテムである。

なお、ペルソナコードの開発と同時に音階ヒーロー セイレーンによる地獄の声帯声域大改造を受けた心操は原作以上に老若男女の分け隔て無く声を出せるようになっていた。

「まあ、これで林間合宿にはこれるんじゃない？」

「ああ、お前となら楽しい合宿になりそうだ」

そう言っ互いに拳をぶつけ合う火柱と心操。

なお、後日この映像にアオハル臭を感じたミッドナイトは放送禁止な顔で昇天していた。

「ええ、お前ら意外とやるな」

本気で驚いた後なのだろうと考察できるレベルな相澤が発した一言はそれだった。

期末試験が終わり、全員が無事に実技試験を突破したA組では芦戸・上鳴両名以外の生徒は自己採点の結果なんとか落ち着いて今日という日を迎えていた。

そんな学科の結果発表当日、1Aクラスではとある異変が起きていた。

「とおりのん」

「はいはい、次はイチゴ味が良いかな？」

幼児退行に近い状態に陥っている芦戸が火埜の膝の上を独占して口を上に向けるひな鳥のような行動を取っていた。

その手に握られたマシユマロの袋（個包装）から火埜が適宜、違う味を探して与えるというルーティーンが生まれそうな光景だったがコレには訳があった。

「まさか、途中まで『記載欄を1個ずつずらして書いていた』なんて古典的なお約束をやらかすなんてなあ」

「みなちゃん、わるくないもん。がんばったもん」

「しかも、苦手なヒーロー情報学なのがまたなんとも言えないな」

「ぜんぶうめたもん、がんばったもん」

「はいはい、三奈は頑張ったな」

そう言っただけ自分の胸を枕にしている芦戸の頭、より正確にはふわふわの癖毛を優しく撫でる火埜。

今朝方、なぜか連絡先を知られていた芦戸母から連絡を受けてお家にGOした火埜と切島が見たのは確実に現実逃避に浸っている芦戸三奈がいた。

「あ、とおりのん」

「なにがあつたよお前!!」

その結果、芦戸母から説明を受けた切島であったが火埜は芦戸に抱

きつつかれ、それをあの手この手であやしていたので登校中に切島から説明を受けてクラス全員にメッセージを送り現在に至っている。

なお、上鳴に関しては普通に自己採点がギリギリ赤点がありブツブツと上の空で呟いている。

「先生が来られるぞ、芦戸君は……クツ、オレはなんて無力なんだ」「諦めるな委員長、ほれ三奈着席しな。また後で」

「うにゆ、はあい」

そして、冒頭に戻る。

「芦戸は親御さんから連絡来ているから知っていたが、上鳴は大丈夫か」

「いや、やばいかもしれません。さつき塩崎が朝のキス（まだ頬にしかできません）をしても無反応でしたから」

「……、まあいいか。兎に角実技は全員合格だったことは既に知っているだろうが学科の結果が出た」

その言葉に黙っていた芦戸と上鳴からクフクフと危ない笑いが木霊してきたが全員無視した。

相澤も流石に声を掛けようか迷ったようだが、結果発表をすることにした。

「全員、赤点無し。補修なしで林間学校に行くぞ」

「ふおー……」

相澤の言葉が特効薬になったのか奇声を上げて喜ぶ芦戸と上鳴。

「あ、戻ってきた」

「まあ、今回は頑張った方だもんな」

「オイラ、こればかりは茶化せねえぞ」

なお、今回クラス内順位で10位になった火埜は誰にも知られない様に机の下でガッツポーズしていた。

「と、いうわけで今週の日曜日みんなで林間学校の買い物行こうよ」「いつもの調子で喋ってるけど朝の件、忘れたわけじゃないからねあたしらは」

放課後になり教室で少しおしゃべりをしていたA組で芦戸が発案したのはクラス全員でいく林間学校の買い物だった。

「皆で買物、絶対楽しいよ」

「あ、三奈ちゃん勢いで朝の事無かったことにしようとしてる」

「まあ、流石にそれは許されませんわよ」

「皆で買物、絶対楽しいよ!!」

朝のやらかしに関して恥ずかしさが勝っている芦戸はある意味必死だった。

「それじゃ、ヒトっさんと発目も誘うか。2人とも林間学校同行するらしいし」

「お、心操も期末合格か」

「発目さんは何故に？」

「ヒーロー仮免許取得するんだって、後は色々な個性を観察してサポートアイテム作成のインスピレーションにするんだって」

という話があつてから数日後。

「やって来ましたショッピングモール!!」

「いやあ、こういうところ来るとなんかテンション上がるよな!!」

「あなた様、お洋服が素敵ですわ」

「おお、塩崎ちゃん今日もフルスロットルだねえ」

「ノコ、もうB組では日常茶飯事で馴れてきたよ」

「しかし、1人既に死にかけてる奴がいるんだけど、どうしたんだ火焚組？」

友達との買物というイベントでテンション上がりまくりなAB組。

しかし、ただ1人ベンチに座り込み青ざめた顔で天井を見上げる火焚がいた。

「ああ、マジか。悪いな、こいつ人酔いするんだわ」

「久しぶりだから私たちも忘れてたけど、とー君実は人の香りが苦手なんだよね」

「まあ、と言うわけで来て早々で悪いけど少し休む」

「かつちゃんと私が付き添うから皆は先に買物行ってきて」

相手に話かけるヒマさえ与えない幼馴染み2人の息の合った言葉のラッシュに押され3人を置いてそれぞれの買物に向かうAB組

生徒達。

「……、お前無理してこなくても良かったんだぞ」

「やだ、いく」

全員が遠く離れたのを見届けた爆豪があきれた顔をしながらも心配そうに買ってきたペットボトルを火埧に手渡す。

一口だけ口を付けると片言だが返事をする火埧。

「オバさん達の月命日だったんだもんね。あんまり無理しちやダメだよ」

「……おう」

「へえ、本当に弱ってるよ。ウケるわあ」

3人の会話に突如として男の声が割って入ってきた。

声が出た方向に顔を向ける爆豪と緑谷。

声のした緑谷の後に立っていたのは夏が間近だというのに真っ黒な厚手のパーカーを着た青年だった。

その時、今まで青ざめていた顔を無理矢理起こし身体を起き上げらせようとした火埧。

その火埧に反応したようにパーカーを着た青年は緑谷の首に小指一本残して片手を宛がう。

「やっぱり、気付くか。久しぶりヒノくん」

「おい、翔織。こいつ誰だ」

緑谷に知らない、しかも見るからに怪しい存在が近づく。

それだけに飽き足らず、その首を触る変態（と認識した）に対して抗戦モードに突入した爆豪。

そんな爆豪に意識を裂く余裕がないのか目の前の青年に意識を集中させる火埧。

「静空に完全に触れてみる、お前この場でマジで殺すよ、死柄木 弔
”

本来押さえ込んでいる殺意が気分の悪さで漏れ出している火埧。

瞬時に状況を判断した爆豪と緑谷が動こうとしたその時だった。

「あ、いたいた勝手にいなくならないでよ転弧」

「本当です、今日は私たちのお買い物に付き合ってくれる約束でした

よね」

そんな男性の後ろから女性2人分の声が聞こえてきた。

「あたし、たこ焼き」

「トガはアメリカンドックが良いです」

「・・・、ブートジョロキア饅」

「えっと、オールマイイトコラボ”ドーナツ全種」

「コーラ、ジョッキで」

「いや、お前らもうちよつと加減しろよ!!」

6人は何故かフードコートに移動していた。

「でも、じゃんけんで一人負けした転弧が悪いと思うなあ」

「転くん、転くんケチャップマシマシでお願いします」

「どうでも良いから、さっさと買い行ってこいよ負け犬」

「あ、コラボセットのアクリルスタンドも忘れないでくださいね」

「氷無しな」

「ちくしょーーー!!」

涙目ダツシユでパシられる転弧。

敵のなんともいえない姿にため息を一つつくど火埜は席を立つ。

「“あの個性”じゃお盆も持ちづらいでしょうに。オレも付き添ってくるよ」

「はいはい、うちの弟をよろしくね火埜くん」

スタスタと先程よりは軽くなった足取りで転弧を追いかける火埜が人混みに消えていく。

「ねえ、緑谷ちゃん爆豪くん。お願いがあるんだけど」

唐突に呟かれた葬の言葉、それは何を意味するのか。

「ちくしょお、姉ちゃん達もあんまりだよな!!火埜くんもそう思うよな!!」

「わかったから落ち着け、フード取れ掛かってるぞ」

「直してくれよ」

「子供か!!お前の方がデカいんだから手が届かないんだよ屈め!!」

転弧に追いつき一緒に並んだ火埜は、以外と社会ルールを守る転弧と呼ばれた“死柄木 弔”を見上げる。

「お前、どつちが本名なの？」

「はあ？今 “それ” 聞かあ」

その光景に違和感はなく誰もヒーローの卵と敵が仲良く行儀良く並んでいるとは思わないだろう。

そんな雰囲気だったからか漏れた何気ない言葉に反応した転弧。

そんな彼も雄英を襲撃した時や保須市で見せた凶気は一切感じられなかった。

「いや、会敵したオレだから思うんだけど学校であつた時より周り見て行動してるしあの時との違いってそれくらいじゃないかなって」

「ああ、 “あつち” もオレだけであつちは先生に合わせた演技だからなあ」

「はい？」

なにやら考え込むように指を噛みながらボソリと呟いた転弧の言葉、それに思わず素っ頓狂な声が漏れた火埜。

「今のオレと姉ちゃんがいるのは先生のおかげだし感謝してるけど、それ以上にオレと姉ちゃんを自分の駒としてみてる先生には正直ムカついてるんだよね」

「でも、お前オールマイト嫌いなんだろう」

「ああ、それな。オレも姉ちゃんもオールマイトが嫌いな訳じゃないんだよな」

「え、どういうこと」

2人は周囲に聞こえない程度の小声で列を乱さずに話しながら進み続けている。

だから、誰も気が付かないし気づけないでいた。

「OFA、というかこの個性ありきの社会が、個性が社会構成の根幹になったしまったこの世界が大嫌いなんだよ」

転弧から出た言葉、それは火埜の中にある今の社会構成を否定する気持ちと同じだった。

「ぶっちゃけよ、 “個性” ってオブラートに包んでるけど完全に “異能力” じゃん。無個性の奴にしてもドクターの話じゃ個性発現期以前の旧人類と違って個性が発現するレベルじゃないってだけで個性

因子はあるっぽいし」

「オールマイトをコロコロしたいのも、アイツが現代社会の象徴だったからで、先生みたいな私怨じゃないし」

「まあ、オレと姉ちゃんが狂ったのってOFAと先生が原因だし、そう考えるともう少しすれば無個性に戻るオールマイトってどうでも良くないか？」

緑谷の如くブツブツと呟く転弧。

自分の思考を整理するように呟くその内容に火埜は驚愕していた。

「転弧、お前やっぱ怖いよ」

その個性が、ではなく誰しもが一度は考えそして忘却の道を選ぶ社会の不条理と異質さを受け止めながら、世界を壊す事に躊躇がないこと。

“死柄木 弔”の原典でなく、“転弧”自身のどす黒い原典を垣間見えた瞬間に火埜は知らず知らず緊張の汗を流していた。

MY HERO

人工移動都市”I・アイランド”。

世界中のヒーロー関連企業が出資し、個性の研究やヒーローアイテムの発明などを行うために作られた学術研究都市。

研究成果や発明品を狙うヴィランから科学者とその家族たちを守るため、移動可能な人工島。

直径約14kmの大きな円形の内部に中央の六角形のブロックを取り囲むように3つのブロックが浮かんでおり、複数の橋で連結されている。

島への移動手段は飛行機のみで、島の警備システムはタルタロスに相当する能力を備えており、これまで一度もヴィランによる犯罪が発生したことがない。

そんなI・アイランドでは今、個性技術博覧会と銘打たれたイベント”I・エキスポ”の準備に島全体が追われていた。

個性の研究やヒーローアイテムの最先端が集まるI・アイランド。だからこそ、その規模は大きく、そして発表される内容も最先端の内容ばかり。

一般市民も楽しめるように、技術を応用して作られたアトラクションもあるが、やはりヒーローやその候補生、サポート企業などは、公開される情報や試作された実物に興味を持つ。

そんなI・アイランドに向けて1台のプライベートジェットが飛んでいた。

「HHHHHHHHHHHHHHHHHH、まさか私がこうして誰かとI・アイランドに行く日が来ようとなね」

日本人にしては筋骨隆々、兎のような特徴的な髪型をしたオールマイトがオーダーメイドのストライプのスーツを着ながら嬉しそうに自作のクラフトコーラを傾けながら笑っていた。

「しかし、良かったんですか？^{クラフトリノ} 大師匠や師^{サー・ナイトアイ} 範ではなく僕らが随伴者で」

オールマイトの向かいの席にて少し狭そうに真ん中に座らされ両

マイトという素材。

そんな状況だから人が集まる集まる。

そして、知らない人間の匂いが得意でない火埜の機嫌は急激に降下し底辺に墜ちていた。

「なんで態々一般ゲートなんか通るんだよ」

「イヤ、ゴメンね。通るゲート間違えちゃった」

「トー君大丈夫？お水飲む？」

ホテルの一室（スイートルーム、勿論オールマイトのおごり）にてヤの付く自由業も真つ青な怒り顔で外を眺める少年に対してガチ目の謝罪土下座をする大人。

4人にとってはおなじみのやらかしたオールマイトの土下座謝罪。

「ははは、待ち合わせの時間になっても来ないと思ったらそういうことか」

「もう、マイトおじさまったらトーリが可哀想でしょ」

そんな中、この部屋には2人の来客が会った。

「旦那からもこのダメヒーローに言ってくれよ。ヒーローとしては兎も角大人としてダメすぎだろ」

「メリッサさんもあまり甘やかさないでね。この間からここに來れるのが嬉しすぎてポカし過ぎておじいちゃんグランドトリノにも怒られたばっかんだから」

そこにはお腹を押さえながら過呼吸気味に笑いを堪えようもしないデヴィット・シールドとオールマイトと緑谷に甘いことで定評のあるメリッサ・シールドが私高級ですと言っているようなソファに腰を下ろしていた。

「はあ、もう良いつすよ。それよりも博士、ボクの『SYSTEMA

C. A. I.』調整お願いします」

「オレも『X-PROMINENCE（エクスプロミネンス）』の調整をお願いします」

「私も、『O. F. A（オペレーション・ファイティング・アークス）

』の調整を。それとこれ約束のオクタコスの詳細資料です」

火埜は腰にぶら下げていた複数の匣型サポートアイテムを、爆豪は

手榴弾を模した籠手を、緑谷は手袋と強化ブーツをコスチュームから取り外すとデヴィットの前に差し出す。

「うん、確かに預かったよ。調整は明日からになるから皆はエキスポに行つてきなよ。メリッサも久しぶりに会ったんだから行つてきな」
「それじゃわたしも」トシ、君の用事が最優先事項なんだからさつさと行くよ」

ズルズルと雑に引きずられていくオールマイト、数ヶ月前までこの友人関係が壊れかけていたと誰が想像できようか。

歳を重ねた大人2人が青年期の学生の頃のように連んでいる姿に娘であるメリッサは安堵していた。

「それじゃ、3人とも着替えたらエントランスに集合ね。エキスポを案内するわ」

「ういつす」

「静空のことよろしくお願いします」

「え、心配されるの私？」

私服に着替えた3人を伴つてエキスポを歩くメリッサ。

時に火埵のハムスター食いをお姉さんのような視線で愛で、爆豪が緑谷の私服を褒めようとどもっているのを横から搔つ攫つて褒めて勝ち誇つた視線を送つたり、緑谷を可愛い可愛いと頬ずりして互いの胸部装甲が大変なことになっていても無視して練り歩いていった。

「いやあ、明連れてきたら発狂してただろうな」

「発目の奴、最近完全に翔織の専属メカニック化してるだろ。この間なんかデヴィットの旦那と深夜にテレビ電話でやり合つて寝不足登校とかマジでヤベえだろ」

「メイちゃんつてオクタコスの開発者の子でしょ？。パパもテンション昂ぶつて何か似たようなコンセプトで凶面引いてたわね」

「あはははは、博士らしいですね」

4人が休憩がてらよつた喫茶店。

その前では何やらタイムアタックが行われていた。

「あら、ヴィランアタックじゃない」

「標的倒しのタイムトライアルみたいなものせすね」

「勝己、ヒロコスだったら参加してただろうな」

「あ、あ、なんだつたらこのまま参加し殺してやるわ。翔織いくぞ」
「え!?オレも?てか引つ張るな」

数分後

『それでは、次の挑戦者はコスチュームではないですが参加してください
たジャパニーズが登場だ』

「なんでオレから?」

そこには何か諦めたように空を眺める火埜がやる気なさそうに
立っていた。

「翔織!!やったれえ!!」

その後にはじやんけんで負けた爆豪が両手を爆発させながら火埜
の応援をしていた。

「はあ、まあ頑張りますか」

『それではヴィランアタック、レディ』

司会の声に即座に思考を切り替え両腕を翼に変える火埜。

『ゴーーーーー!』

開始の音が響いたその瞬間だった。

「鳳凰印」

翼で輪を作るとその中心に真紅の炎の玉が出現する。

「火銃華^{ひがんばな}」

炎の玉は火埜の声に呼応するように弾け飛び的を全て撃ち抜いた。

『な、なんとという広範囲攻撃だ、そしてタイムは!!』

司会がじらすようにタイムの表示計を見るそこに映し出されてい
た数字は。

『なんと驚愕の9秒、しかも一步も動かずに!!これは新しい世代の台
頭か』

「……終わったからもどるよ」

めんどくさそうにスタート位置から爆豪の傍に戻る火埜。

そんな彼の姿を見つめる存在に気が付かずに。

MY HERO―②

「死にさらせええええええええ!!」

「日本の恥だから掛け声もう少し考えようね勝己」

スタート地点のやや後、ピッチャーサイズのジンジャエールをゴキユゴキユと飲み干した火埜が物騒な掛け声を放つ幼馴染みに注意を促す。

火埜の嘗めプ上等な結果を受けて闘争心に火が着いたのか、はたまた夏らしい真っ白なワンピースの可愛いカワイイ緑谷の声援を受けてテンションが振り切れたのか、開始早々フィールドを盛大に巻き込んだ爆発で全ての標的を焼き付けした爆豪。

『ちよつと、この歳のジャパニーズボーイはみんなこうなの？さっきの火の鳥ボーイもスゴかったけどもつとスゴい記録が出たわよ!!今年最速記録8・9秒よお!!でも、フィールド大丈夫?』

「しゃあ!!どうだ翔織!!」

「うん、爆発の範囲を絞れるようになったのはスゴいけど」

「なんだあ、負け惜しみかおい」

呆れたような表情で爆豪を見上げる火埜に対して久し振りに上からな態度を取る爆豪であったが。

『ちよつとちよつと、今日は本当にどうなってるのよ!!またまた最速タイム更新、タイムは・・・8・2秒!?フィールド全面凍結とかそんなのあり??』

「あ、爆豪と火埜だ」

悠々と戻ってきたのは別のスタート地点から競技を開始し、開始早々に凍らせターゲットの動きを止めたことでアタック終了の判定を受けた轟だった。

夏休みに入ってから以来、会えてなかったクラスメートに会えて嬉しそうに微笑む轟。

「ういっす、おつかれ轟。凍結範囲ある程度絞れるようになったね」

「まだまだだけどな」

「お、ま、え、な、あ、へ?」

「ほら、足元搦われた」

「? (誉められると思つて頭をさしだしている轟)」

再稼働待ちの爆豪を引き摺りながら緑谷とメリツサのもとへと歩く火埜と轟。

発目が夏休み前に開発したヒーロースーツ圧縮及び瞬間装着機能付きバックにより私服になった轟はこの経緯を説明していた。

「確かに、お前のサポートアイテム、オリジナルはシールド博士の作品だし、それならシールド博士と知古のオールマイトが引率するのは納得だな」

「まあ、そこは両親様々つて感じかな。轟はお兄さんからだっけ?」

「ああ、アメリカ修行中の兄貴から変わりに行つてくれつてエアメー ルで届いて親父の分はクラスの奴らに渡した」

「ああ、あの日の決死のじゃんけん大会は轟が原因かあ」

「そうなんよ。でも結局、轟君の分のチケットはうちら勝ち取れん かつたけどな」

男二人の低い声以外に女子の高めの可愛らしい声が後から聴こえてきた。

後を振り返るとそこにいたのは。

「しかし、爆豪君もナイス伏線回収!!ねえ、今どんな気持ち?教えて教えて」

「麗曰てめえ〜」

布の上に座らされて無理矢理引き摺られていた爆豪を枝でツンツンつついて煽っている麗曰。

「火埜も残念だったね。でも格好良かったよ」

「耳郎、来てたんだ」

象徴となつているイヤホンジャックを弄びながら顔を真っ赤にして見ているほうが照れてきそような雰囲気耳郎。

「轟さんのチケットは私が勝ち取りました!!なんで呼んでくれなかつ たんですかダーリン!!」

「だーりん?」

「気にするな轟」

整備用のツナギをちゃんと着て小型化したオクタコスを背負い、火埜に突撃しようとしたところをオクタコスに付けられたリードで待て状態にされている発目。

「発目さん、もう少し落ち着いてくださいまし。麗日さんと耳郎さんは我が家の招待枠ですわひーちゃん」

「ああ、八百万家はアジア圏きつてのスポンサーだもんなあ」

発目に繋がったリードを持った少しプリプリと拗ねた雰囲気痴女に間違えられそうなヒロコスを惜しげもなく晒す八百万。

先程、火埜のヴィランアタックをありとあらゆる角度から激写していた4人だった。

「あ、みんな此方だよお」

クラスメートと久しぶりの再会に加え、大好きな幼馴染みの活躍を見て興奮MAXな緑谷。

子供のように飛び跳ねるものだからバルンバルン揺れる2つの果実に周囲の視線が集まるが。

「なに見てんだコラア!!」

「見物んじゃねえぞ、ウセロ!」

爆豪^豪番犬①と番犬^轟②が威嚇するもんだから周囲のそういった視線はすぐに消え去った。

「轟君、スゴかったね!!凍結速度がまた上がったんじやない」

興奮のあまり轟の目の前でぴよんぴよん跳ねて腕を振るモノだから轟の目の前でブルンブルン揺れる緑谷の果实。

一般的な男性ならその果实に目がいきそうモノなのに轟は緑谷のあふれんばかりの笑顔に釘付けになっっていた。

「ああ、癩だがオヤジの指導のおかげだろう」

「おい、轟コラア!!オレを見ながらオヤジとか言うんじやねえ!!」

「でも、爆豪の方がオヤジって感じがして落ち着く」

「こんなガキ丸出しの同い年の子供いるかあああああああああ!!」

夏休み前、うっかり爆豪をオヤジ呼びして以降、クラス内で定着しつつある爆豪オトーサン化。

実際、口は悪いが面倒見も良いし教える際は丁寧だしでクラス内でも違和感が薄れ始めていた。

「ダーリン!!ダーリン!!スゴいですスゴ過ぎです!!ベイビーのアイデアが湯水の如くあふれてきた早く開発したくてたまりません!!」

「うん、言ってることは開発者として正しいけど内股でもじもじしながらハアハア色っぽく息漏らして言うといけないから少し落ち着こうね明」

「火埜君、なんで私だけ誘ってくれへんかったの?あれ、もしかして私嫌われてる?」

「嫌ってないから涙目上目遣いは止めて。あと、腕を胸に抱き込まないで、オレも男の子なんだから」

「火埜の匂いがする、落ち着く」

「人の背中に顔押しつけて思い切り深呼吸しないでくれる。そんなキャラだったっけ響香」

「ひーちゃん、いちやいやしてわたしをおわすれですか?おわすれですわね?」

「ももちゃんももちゃん、俺の手を何処に導こうとしてるのかな?少し落ち着け、エキスポ終わったらちゃんと会いに行くから、おじさん達にもそう言ってるから!!」

「相変わらず面白いわね3人の近くって、すいません注文追加でお願いします」

「はい、ただいま!!」

「あれ、聞き覚えのある声だな」

女子率の高い机へと猛ダッシュで近づいてくるボーイ2人。

その姿を見た時、何故か猛烈な安心感に襲われた。

「お、峰田と上鳴じゃん。元気?」

「うるせえええええ、なんでお前はいつもハーレムってるんだよ火埜おとおおお!!」

「わかあああああ。良いアルバイト紹介していただきありがとうございます(スライディング土下座)」

そこには火埜の存在に気が付き血涙を流し悔しがる峰田と夏休み

人生初の彼女のために奮発しまくった結果、軍資金がマジで0になり火埜に泣きついた上鳴がいた。

「取り敢えず、皆の分はオレが奢るから注文しちやいな」

「蕎麦!!」

「飲み物だバカ。轟は冷茶ね」

「玉露、ホットでお願いします」

「わたし、ホットミルク」

「ウチ、ジンジャエール」

「茶葉のリストはありますか？あら、和紅茶なんて珍しい。私は『清廉』をお願いいたしますわ」

無駄話をしているボーイ峰田・上鳴の後からキビキビというオノマトペが聞こえてきそうな影が歩いてきた。

「何を油を売っているんだ峰田くん上鳴くん!!バイトを引き受けた以上労働に励みたまえ!!」

「うい、飯田も代理出席?」

「ん、おお緑谷くんに爆豪くん、それに火埜くんも。うむ、リハビリ中の兄に変わってチケットを使わせてもらった」

ナチュラルに緑谷に意識が先いくようになっていいる飯田。

社会経験と言うことでアルバイトをしているらしい。

「悪い、遅くなった」

「切島も来てたの!?!てか伝手ないのでよく来れたな」

「オレの優勝賞品のチケットやった」

「爆豪に感謝だぜ」

何故かA組の主力が集まっているI・アイランド。

ヒリつくような嫌な予感に襲われながら、時間は過ぎていった。

「はあ、疲れるぜ」

「まっていたよ、よろしく頼むよ」

「ああ、金さえもらえればなんだったってやってやるよ。それで『あれ』の準備は出来ているんだよな」

「うむ、あと少して充電も終わる。そうしたら使用できる」

「くくくくく、良い気分だぜ。今日という日、歴史が動くぜ」

まだ見ぬ悪意を潜ませつつ。

「あん？」

最初に違和感に気が付いたのは爆豪であった。

それはメリツサの好意でバイト組もゲストとしてパーティに参加出来ることになったその時まで遡る。

「ん？ん？。ん？ん？ん？ん？ん？。火埜」

「はいはい、轟はこっち向いて。ああ、この結び方だと野暮ったくなっちゃうからトリニティノットにしとこうか。飯田もそれじゃおじさん臭くなるからカフスポタンはこっちの少し派手目の遊んでる系の物に変えるように、でもメガネに合わせるならゴールドじゃなくてシルバー系にして」

男子全員は火埜と爆豪の部屋に集められ火埜によるドレスチェックを受けていた。

なお、クラスメートが集まったせいも轟の精神年齢が若干下がっているがA組としては馴れた物である。

「勝己は上着は着ない方が自然かな、それでベストはその無地のじゃなくて脇に柄の入った奴があったはずだけど。あ、この薔薇を遇ったの良いなコレにして」

男子全員が火埜のペースに巻き込まれ反論できない状態になっていた。

飯田が一度、何か言おうとしたところガチの殺意をぶつけられ大人しくなった。

「火埜の奴スゲえな」

「まあ、義親がイワさんという段階でな」

「元全米No.1ドラアグクイーンのお洒落道の弟子は伊達じゃないってことか」

テキパキと指示を出し、時には自分の持ち込んだ小物を付けさせてアレじゃないコレじゃないとスタイリスト顔負けの手際の良さで全員のドレスコードを整えていく。

「上鳴と峰田はエプロン外して、ベストはそのまま良いからネクタ

イをコレとコレにして。上鳴は色々付けすぎだし似合っていないから全部外して着けるならこっちの薔薇と茨を象ったブレスレットにして、峰田はいつそのことタイピンとカフスボタンを抑えめのこっちに
変えて」

しかも、他人のスタイリングをしながら自分も着替え続けており、いつもは垂らしている髪をオールバックにしてメガネも少し色が
入った物に変えている。

「ヒロコス自体がお洒落だもんな、てか火埜の奴もしかしてあれヒロ
コスか」

「ちげえな、アレは自前のスーツだな。まあ、あれをヒロコスのデザイ
ンに落とし込んでいるからアレがオリジナルになるんだが」

そして、男子全員のコーディネートを終えやりきった達成感が顔に
出まくった火埜を先頭に待ち合わせのラウンジへと出て行った。

イワさんの調教により、待ち合わせにの5分前には集合場所にいる
様になった火埜と爆豪により男子全員がラウンジのソファァーに思い
思い座りながら女子陣を待っていた。

「おまたせえ!!」

メリツサの声で全員がそちらに振り向くとそこには青いドレスを
見事に着こなすメリツサを先頭に女子陣がスタスタと向かってきて
いた。

「うん、時間ぴったり。メリツサさんに任せて正解だったな」

「モモちゃんも手伝ってくれたからよ。それにしても皆きまつてるわ
ね」

天然物のハニーブロンド美人に褒められ悪い気はしない男子ズ、峰
田にいたっては全ての神々に感謝を述べ始めている。

そして、ここでも事件は起きる。

「おい!!しつかりしろ爆豪!!ダメだ清らかな笑み浮かべて気絶してや
がる!!」

「轟もだ!!スマホのカメラで連写してるけど表情が1mmも動いてね
え!!」

「ん？おおおおい、飯田も目ガン開きで気絶してるぞ!!」

3人の視線の先には勿論緑谷がいた。

長くせ毛を綺麗に纏めて、胸元はラメ糸の総レースで透け感のあるレースによるデザインが上品さを演出。

履き慣れないヒールは低めにされていることで転倒を防止しながら緑谷の快活さが見て取れる。

全体的に可愛らしい仕上がりになっていた。

「(こりや3人には目の毒だったかな)これはシズが選んだの？可愛いじゃん」

「メリッサさんがコーディネートしてくれたの。トーくんも似合ってるね。パーティだからアクセサリーは少なめなのな」

「ありがとう。メリッサさんもシズのコーディネート有り難う」

「ヒノくんは相変わらずね、イワンクフの教育のタマノモって言うのかしら」

「？あ、賜物すね。皆も似合ってるね」

そう言いながらメリッサの後にいるメンバーに視線を移す。

「ふふふ、みんな綺麗だね」

素で相手を褒められるのは火埜のある種の技能ではないかと思うA組男子。

元々、心を許した相手には素直になる火埜だからこそ、その言葉に嘘偽りが無いことが感じ取られる。

「お茶子はピンクのドレスなんだ、肩だしが大人びてて全体的に可愛い印象を与えそうなのになとそれと同じくらい色気があるね」

「モモちゃんは元々大人びてるからかな、大人びて見えるね。でも背中では開けすぎかな？オレ以外の男共に見せるのは癪だな」

「響香も少しゴスペンみたいだけど、ヘアアクセサリーが全体の雰囲気を手く纏めてて、少しドキドキしちゃうな」

「明は黒のカクテルドレスか、いつものゴーグルが無くて髪も遊んでるからかな。女性特有の色香がするみたいでクラクラするよ」

すらすらと出てくる褒め言葉。

いつの間にか復活した3人も含めて全員が妙に感心している。

そして、褒められた女子ズは頬を赤らめ恥ずかしそうに、しかし嬉しそうにしていた。

「さて、皆揃った事だしパーティ会場に向かいましょ」

レベツカの先導で会場を目指す一行。

それは本当に偶然だった、爆豪はパーティ会場に向かう警備の集団を見かけた。

I・アイランドという場所の関係上、警備に使用される装備は殺傷能力がそこそこ高いモノが支給されている。

しかし、爆豪が見た彼らの装備はそのどれよりも凶悪だった。

「なあ、メリツサ」

「ん？どうしたのバクゴウくん」

「銃火器が配備されてることは知ってたけどよ」

先程まで恋した少女の尊さで死にかけていた少年は既にいなかった。

「サブマシンガンなんていつ配備されたんだ」

そこには、危機を感じとり戦闘に備えるヒーローがいた。

メリツサが何かを感じ取ったのと同様だった、周囲に警報が木霊したのは。

「携帯は・・・圏外だ。うわあ、USJを思い出すなあ」

「おい、疫病鶏!!お前何した!?!」

「エレベーターも反応無しか。峰田、ウチの旦那にケチつけるな!!」

「マジかよ！てかお前等いつの間そんな爛れた関係に!?!」

「あらあら、耳郎さんその件につきましては後程にしてくださいな。

それよりも、メリツサさん」

「ええ、いくら爆発物が主要各所に設置されただけで警備システムが限界になるなんて考えづらいわ」

緑谷たちは一度状況確認のためバラけ、再度ロビーの死角にて状況交換と把握を始めた。

携帯を試したが使えず、エレベーターも動かない。

メリツサ曰く、この程度で警備システムがエラーを起こすとは考えづらいとのことだった。

「つまりこれはエキスポに対してのテロ、それも相当大規模なものだと考えられる」

「やね。多分I・アイランド全体に混乱が広がっている、それか既に混乱が起きているって考えた方が良さそうだね」

サポートアイテムが無いため、思うように情報が集まらず知らず知らずのうちに彼らにも混乱が押し寄せ始めた時だった。

「確かパーティ会場にはオールマイトがいるはず」

「でも、何ら反応がないてことは」

「ウチの出番だな」

アジア圏No.1ヒーローであるオールマイトが反応しない、そんな異常事態の原因を調べるために、A組索敵探査班の耳郎が名乗りを上げる。

耳郎響香の個性は『イヤホンジャック』。

プラグになった耳たぶを挿すことで自身の心音を衝撃波として放つことができる。

また、壁などに挿す事で微細な音を探知することもできるため索敵などにも使え、分厚い壁があらうと彼女には筒抜けである。

実は夏休み前、彼女の個性は索敵探査方面で進化とも呼べる変化があった。

それは左右のプラグで衝撃波の放出と音の探知を別々に出来るようになったことである。

これにより、彼女の索敵探査能力はひとつ上の段階に駆け上がった。

エコーロケーションをご存じだろうか。

反響定位とも呼ばれ、動物が音や超音波を発し、その反響によって物体の距離・方向・大きさなどを知る方法である。

耳郎は自身にしか感知できないレベルまで弱めた衝撃波を放ち、それをもうひとつのイヤホンジャックで感知することでエコーロケーションを可能にしたのだ。

なお、特訓に付き合っていた火埜と嬉しさのあまり衆人A B 組有志観衆の中抱き合って喜び、おでこにチューされて頬にチューしかえしてそこで急

激に現状を思い出した耳郎による暴走特大ドツケン心音爆発音を火埜は受けることになるのだが。

「・・・金属パイプかなにかで拘束されてる。パーティ会場の客を人質に取られたっぽい。会場にも銃を構えたテロリストがかなりいる」
そして、彼らはオールマイトただひとつの希望すら身動き不能という現状を確認してしまった。

「ダーリンダーリン」

「明、もしかして」

「ぬふふふふ、この台詞を言える日がくるなんて。そう、こんなこともあろうかと!!」

「私と発目さんで小型の通信機の開発に成功しておりますわ。そして、すでにオールマイトのヒーローコスチュームに組み込んでありますわ」

「ナイス、モモちゃん!!」

「そしてこれが」

「その“通信機”です」

会場内で一人頭を垂れ拘束から抜け出せないでいるオールマイト。

「(Shit!!私としたことが!!)」

親友との再会で生まれたて僅かな心の緩み、I・アイランドという地理的要因と警備の嚴重さから生まれたて驕り、自分ならなんとかするという慢心。

それら全てがいま、オールマイトが身動きが取れない現状を作っていた、

「(どうにか、どうにかせねば!!)」

『俊典、聴こえてるか』

突如耳元で聴こえてくるお師匠特大のトラウマはの声。

「はいっ!!」

それに脊髄反射で大声で答えてしまい、場内のテロリスト達の注目を集めてしまうオールマイト。

「ソズのケチャップは最高だよねえ♪」

『・・・、あんたバカでしょ』

「ひ、火埜少年」

『咳で答える、YES1回NO2回』

「ゴホ」

『状況はヤバいですね』

「ゴホ」

『タワー占拠されてて人質多数、ヒーロー全員捕縛状態ですね』

「ゴホ」

『……博士は』

「……おい、君たちデイヴをどうしようと言うんだ」

すると突然意識を取り戻したような大根演技で敵に話しかけるオールマイト。

「ああん、オレらが知るかよ。タワーの天辺にある機械の発動に必要ならしいから連れてかれたけどその後のことなんか知るか」
「くっ」

『なるほど、理解しました。一端連絡を切ります』

ロビーの影にて全員でオールマイトと火埜の会話を聞いていたため、メリツサの顔色が悪くなっているのは解った。

「うそ、パパがなんでいまさら」

「タワーの頂上っていったら『アレ』か」

「ああ、『アレ』だよね」

「でも今更『アレ』稼働させる意味なんてあるの」

メリツサと幼馴染爆豪・緑谷・火埜ズは先程の会話でテロリストの狙いに見当が付いたようだが、それ以外の面子は解っていない。

「もしや、博士の未発表作品である『個性増強装置』がまだ残っていたのですか」

そのニュアンスから日頃からテレビ電話をしている発目は見当が付いたようだ。

「はい、解ってる組説明」

「あつと、オールマイトと博士が個人的な話題で距離を取っていた時期があったんだけど、博士は加齢によって個性因子が十全に働かなくなっているオールマイトのために個性因子を活性化させる装置を

作っていたんだよ」

「結局、旦那とオールマイトは元の状態に戻って装置は最終プログラムと一部装置の取り付けを前にして破棄されたって聞いたんだけどな」

そういつて火柱と爆豪はメリツサに視線を向ける。

「多分、サミュエルさんだと思う。パパの助手だった人なんだけどパパが装置の開発を止めて残りの人生をオールマイトのヒーロー活動に費やす話になってからずっと微妙な感じになってたから」

「憧れは理解から最も離れた感情である、誰かがいつてたけど博士の研究に携わる姿は研究者たちにとって理想だったんだろうな」

「なのに、その憧れの人が自分の研究を捨ててまでヒーローの裏方になろうとする姿に何か切れたんだろうね」

お通夜モードになる中、突如すくつと立ち上がると徐に自身のドレスを切り裂きスリットを入れる発目。

「なんなんですかその人、私一寸文句言ってきます」

「はい明、ステイステイ」

即断即行動の発目を後ろから抱きしめる形で押さえる火柱だったが、それでも発目は止まろうとしなかった。

「なんなんですかその人。自分たちは自分たちのベイビーたちがヒーローと共に活躍するのが喜びなんじゃないですか。そんなの自分の思想の押しつけです」

「はいステイステイ、ささてどうする?」

火柱が全員の顔を見渡す、それは全員の意思確認だった。

「正直、後数時間もすればスターアンドストライプが到着するだろうけどそれまでに何人か殺されるだろうね」

「お前、ささらつと怖いこと言うな」

「事実だし、今動けるのオレらだけだし、誰かが逃げ出してもタルタロス並みのセキュリティが作動しているなら再突入できない。もし、動くなら法律違反覚悟でやるしかない」

「翔織、オレはやるぜ」

「私も、やる」

火埜の行動指針に最初に動くとは反応したのは爆豪と緑谷だった。

「姐御まつてる時間〓人質の安全じゃないなら動けるオレらがやれることやった方がいいだろ」

「うん、それに動かないで後悔するなら、動いて後悔したい」

真っ直ぐな瞳で火埜を見つめてくる2人。

「いいな、熱いぜお前ら!!オレもいかせてもらおう!!」

「当然、私も着いていくわよ!!私ならシステムを元に戻すことも出来るわ!」

「はいはいはいはい、そういうことでしたら私も行かせていただきますよ」

「たく、脳筋ばかりが、索敵要因のウチを置いて行く気?」

「私も勿論着いていきますわ。道中のサポートはお任せください」

「たく、ここで1抜けたはだせえな。オレもいくぜ機械相手ならオレはクソ強い!!」

「オイラも行ってやるよ!!ここで目立てば世界中の美女がオイラのトリコに!!」

「級長として皆の勝手な行動を容認できない、オレも着いて行って皆を纏める!!」

『というわけで、オールマイトには後で個性使用許可を出した生け贄になつてもらいます』

「ゴホ（全く、相澤君の苦勞がしれるよ）」

「ただし、これだけは約束してくれ」

オールマイトは自分の出せて相手に聞こえないギリギリの声で子供たちに願う。

「誰も、欠けないで必ず帰ってきてくれ。明日はBBQなんだから」

MY HERO―④

エレベーターエントラスに陣取る二人の人影。

その周囲には暴走していた警護ロボがブスブスと落雷を受けたように感電していた。

「うおおおおお!!何も考えないでぶっ放すの楽しいいい!!」

「最近は出力調整ばっかだったからな、これならもう少し電圧上げても大丈夫かな」

「なにか不吉な発言聞こえたけど!?!」

そこには久方ぶりに200万V全方位放電してウエラなかった上鳴ともしもの保険として残っていた火埜と火埜におぶさった峰田がいた。

彼らの作戦は至ってシンプル。

1階の開けた場所に警護ロボを集めるためにまずは電気基盤を通して上鳴が放電して注目を集める。

その隙に残りのメンバーで最上階を目指すというものだった。

「さてと峰田」

「合点承知!!」

峰田のモギモギがロボにくつついたのを確認すると火埜の両腕が緑色に光る炎を纏い始めた。

そのまま帯電している1体のロボに向けて落雷のごとく両腕の緑色の、雷の炎を放出した。

するとロボは一塊にまとまってしまった。

「うっし上鳴、上行くぞ」

「電磁石だっけ。おまえすごいな」

「おいらのモギモギのおかげでもあるがな」

火埜たちが1階から順当にロボを行動不能にしていくなか、各階でも戦闘が行われていた。

しかし、各階に配備されていた敵側は気付かずにいた。

彼等が自分達に対しての囿であるということ。

数分前

「屋上組は基本的に非常階段で上に向かって貰う」

早速行動に移ろうとした矢先に爆豪から放たれた意外な言葉。

「でも、かつちゃん。中央突破の方が最短で良いんじゃないの?」

身長差の関係から必ず爆豪を見上げるかたちになってしまいう緑谷。

普段から「胸がキツイのは嫌だ」というなぞ理論を展開している彼女のドレスはそのせいか胸の部分が緩めに設計されているため、上から覗く形になるとかなり見えてしまう。

「(役得う!!)確かに最短での解決が望ましいがなにより、安全にことを進める方が重要だ」

「(あらら、にやけちゃって)シズの意見は最もだけど、サポートアイテムも無い現状なら屋上に向かってもらう組は安全第一で行かないと」

緑谷を言い聞かせるように頭をなでながら語りかける火埜、その光景を羨ましそうに見つめる複数の視線が刺さるが気にする様子を見せない3人。

そして作戦が練られ、1Fにはロボ対策に適した火埜・上鳴・峰田が残って陽動を始めたのだった。

ロボを片付け終わり3人が上を目指そうと歩み始めたときだった。

「クケケケケ、ガキ共がテメエら邪魔しやがって」

屋上に通じる階段から「僕悪者です」という雰囲気と見た目のした男が現れた。

「まあ、これだけ暴れて何も無いってことはねえか」

「へ、こ、このぐらい余裕だろう」

「な、なんだ、ビビってんのか上鳴」

好戦的な笑みを浮かべる火埜、久しぶりに雷撃ブツパして気持ちに余裕がある上鳴、明らかに敵が出てきて少しビビってる峰田。

「ケツ、しかしガキばつかったが上に登ってるメスはイイ身体した奴もいたな。さっさとお前らぶち殺して久しぶりに遊ぶとするか」

「ああ?」

「(あ、こいつ死んだ)」

あまりにゲスな反応をする敵に対して、明らかにキレている火埜。
そして、敵に対して黙禱を捧げる上鳴と峰田。

一触即発の雰囲気になってきた時、タワーが突如として揺れ始めた。
「な、なんだ!？」

「はっはあ、ボスが遂に手に入れやがった。デヴィット・シールド未発表にして最高傑作、「個性因子活性化装置」を手に入れやがった」

敵から漏れた言葉に3人は即座に理解する。
「火埜、行きやがれ!!」

「こんな雑魚、おいら達で十分だ!!」

「悪い!!」

そのまま、敵に背を向けて屋外に出ようとする火埜。

「おっと逃がすと思ってるのか? オレの個性「分身」はこう言う時こそ輝くんだぜ」

そう言うと敵は自身が手にしていた銃火器ごと20人近くに分身した。

しかし、火埜は振り返ることをしなかった。

「200万ボルト まといつな 纏飯綱」

「モギモギボール カンビオ・フォルマ 形態変化” グレイプソーン 捕縛蔓”」

21人の敵を前に上鳴と峰田に怯えという感情はなぜか消え去った。

「モテたい」

夏休みに入った初日、雄英名物U・S・JにてAB組で集まり「第24回・必殺技を編み出そうの会」が行われた日であった。

休憩中に火埜の背中を座椅子代わりに寄りかかろうとする柳と小大と葉隠と芦戸の牽制しあいを尻目に胡座の中に収まった小森とか更に漁夫の利を得て背中に寄りかかった緑谷。

その光景を嫉妬100%の視線を送る爆豪と轟と飯田と心操と峰田。

そんな光景の外で塩崎の茨に巻き付かれイイ具合にヤンデレた瞳

で見つめられ続ける上鳴を着に休憩する面々がいた。

そして、全員じゃんけんの敗者となった峰田（言い出しっぺ）による合計36人分の飲み物買いだしなどが起きたそんな日の終わりだった。

小回りを効かせるべくモギモギの特性を利用した高速移動の確立を目的にした峰田の特訓に付き合った上鳴と様子を見に来た火埜しかいない状態で呟かれたそんな一言は静かに響いた。

「は？お前最近手紙もらったりしてるじゃん？」

「そうそう、この間も沢山の女の子に囲まれてたじゃん」

それは学校帰りにA組みんなでクレープを食べた日のことだった。

黙っていればマスコット扱いされる峰田はその本性を見抜けない女性に人気だった。

「みんな幼稚園児だったじゃないか、オイラは高校生以上のお姉さんにモテたいんだよ!!」

峰田の魂の叫びに火埜はただただ笑っていた。

「なんだ、余裕か、このハーレムやろう!!」

「いやいや峰田さんや、現時点で明確に嫁いるの上鳴だけだし」

「うぐ、不名誉な飛び火」

「上鳴も嫌がってるフリしてんじゃねえよ!!」

「いやあ、茨のことはそこまで嫌いじゃないしなあ。ただ、愛が重いんだよ」

「名前呼びしてる時点でお前はオイラの敵だ!!」

コントの様な遣り取りをしながら3人は楽しそうに笑っていた。

「でも、オレは峰田のこと尊敬してるんだぜ」

ひとしきり笑い終えた火埜が唐突に語った衝撃の言葉。

エロの権化と呼ばれ始めた峰田のどこに尊敬に価する箇所があるのか。

「だってお前、差別しないじゃん」

人間は自分と異なる、たったそれだけで相手を異分子として排除する。

個性という異能が一般的になった現代においても異形型に分類さ

れてしまう外見だったり、個性がない無個性というだけで排他される。

そんな世の中で峰田は違った。

彼の価値観は「モテるかモテないか」そして「エロいかエロくないか」の二極で構成されていると言っても過言ではない。

だから、どんな外見であつても仲間なんだから壁を作らず話しかける。

女性だから、自分がモテるためにあわよくばエッチイことに発展してほしいがために紳士的であろうとする。

だから、峰田実は差別をしない。

「そんなお前だから、いつかきつと、お前を好きになってくれる人が現れると思うよ」

峰田にとつて火埜翔織は目標であり、悪友であり、代えがたき理解者であつた。

「はい、電気くんのちよつと良いところ見てみた〜い」

「しぬ、〃コレ〃流石に死んじゃうからあ!!」

放課後訓練にてグラウンドに連行された上鳴は両腕両足を発目が開発した拘束鎖で拘束されるとパワーローダーがストレス発散のために作り上げてしまった超電圧発電機から伸びた電線を両手に装着されていた。

そして、グラウンドに作られた安全地帯では両手に別々の属性の焰を灯らせる訓練をしながらタンクトップで明らかに下着を着けていないフニャフニャに蕩けきつた笑顔の発目に抱きつかれた火埜から電圧コイルを受けていた。

「泣き言なんか聞きたく有りません。〃帯電〃という個性の特性上、耐えられる電圧と電気容量を上げろといつてるのに放電ばつか訓練してる奴に慈悲はありません」

「んみゆ、だありんおひさまのにおいしますう」

「火埜!! テメエ、なにイチャついてんじや!!」

「……嫁ちゃん、呼ぶか?」

「すいません!!ちゃんど訓練します!!」

そして始まる耐久電圧訓練、その間も発目に焔の影響が出ないよう細かいコントロールを続けながら焔の属性を変化させていく火埜に仰天しかけながらウェイつては休憩して復活したら耐電訓練を繰り返した上鳴。

その結果。

「むふん、流石ダーリンと私の計画通り!!」

「うお、マジで避けた!!」

「オレが意味も無く美少女を侍らせながらお前の特訓に付き合つてると本気で思ってたのか?」

上鳴のゴーグル型サポートアイテムを介してではあるが、火埜の最速の蹴りが飛んでくる前にサポートアイテムが上鳴の間合いに来た攻撃を感知して電気信号として脳に直接避ける命令を出したことで、上鳴にとって本来ではあり得ない回避を行えた。

「帯電した電気量を上手く使えば動きを自動反応で繰り出すことも、自分の意志で肉体を操作することも出来るっていったじゃんか。だから耐電訓練しろっていったのにしないから強制でやるんだよ」

サポートアイテムを上鳴から奪うと持ってきた計器類に接続して何やらバーチャルキーボードを高速でタイプし始める発目。

「できあ、正直なところ塩崎とはどうなのよ?」

上鳴は飲んでいたスポーツドリンクを一気に吹き出して噎せていた。

「なんで、今聞くなあ」

「いや、暇だから」

火埜の指差す先では久方ぶりにマッドな笑い声をあげながら何やらシステムを構築している発目がいた。

「まあ、愛が重いつていったことあるよな」

「嫌なの」

「あそこまで一途に思ってくれるのは正直嬉しい!!」

「だろうね」

「だけど、あんなに可愛くて良い子が“オレ”なんかで良いのかなと

思うことが増えてきました」

「現実逃避で放電訓練ばかりしてた」と

「すいません」

ペシ、と軽く空のペットボトルで叩かれた上鳴は顔を上げる。

そこには困ったような顔をした火埜が何かを指さしていた。

上鳴は指の先に視線を追っていくとそこには自分を心配そうに見つめながら、でも訓練を邪魔したくないからと持ってきたタオルを握りしめて我慢している塩崎がいた。

「『護るもの』があれば人は強くなれる。もう、持つてるんだから頑張れ。怪我ばつかしてたら塩崎に毎回泣かれるぞ」

「うへえ、それはキツいな」

互いに顔を見合わせると火埜は発目の方へ向かって歩き始め、上鳴は塩崎に向けて手を振ってこちらに来るように催促する。

「まあ、嫌われないようにがんばるか」

うれしそうに走ってくる塩崎を見ながら、明日のオフはデートに誘おうと考える上鳴は無くしていた心の余裕を取り戻していた。

そして、現在。

「鬼さんこちら、電気のほうへ!!」

雷の速度で移動しながら四肢に帯電させた電気で相手を気絶させ続ける上鳴。

「オラオラオラオラ、オイラの糸に絡まれたら終わりだぞ!!」

糸状に伸ばしたモギモギであやとりをするように手を動かして大きめな網を作りあげると敵が集団で固まっている箇所投げ込み一網打尽にしている峰田。

「な、なんなんだこのガキ共は!!」

敵の個性を分析しながら戦うことの重要性は相澤からたたき込まれている二人は敵の個性が一気に20人の分身を作りあげることが出来るということ。

そして、時間が経過すれば分身が消えること、分身の耐久性は本体と変らないことを導き出していた。

「お前の敗因はな!!」

「オイラ達を嘗めきってたことだ!!」

敵が気がつくと自分の素肌^{すみ}に直で紫色の糸がくっ付いていることに気がついた。

その糸の先は手袋をいつの間にかした上鳴の右手に繋がっていた。

「行くぜ、全力放電」

「ま、まて!!」

敵の制止の声を完全に無視し上鳴は糸に向けてウェイらないギリギリまで放電圧を上げた。

「200万V!!紫糸落雷^{ししらくらい}」

「アギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ!!」

上鳴の放電を受けた本体は焦げながら気絶した。

「よっし!!」

「勝利!!にしても〴〵しらくらい〴〵って何だよ?」

「え?お前のモギモギ糸を伝って流すから紫の糸で〴〵しし〴〵だよ」

「ほおん、照れるぜ」

1F 戦闘 峰田・上鳴 勝利!!

あかでみいだ 茶番劇場
そのいち

梅雨の大雨そんな憂鬱な時期の放課後、ヒーロー科2年Aクラスには裁判所のようなセツトが組まれていた。

裁判官席には誰も居ないように見えたがどこからか現れた黒い頭巾をかぶった者たちが持ってきた追加の椅子に座り直した同じ頭巾をかぶった存在が怒りを静めながら言葉を発した。

「これより異端審問会を始める、罪人は前に」

そう言われ頭部を黒い袋で覆われた男子生徒が審問台の前に押し出される。

頭の袋を乱暴に取り払われる、そこから露わになったのは。

「くあ、あく熱かった」

去年よりも長くなった銀髪、梅雨の時期になったからか選択できるようなになった夏服の薄いワイシャツを着用しネクタイを僅かに緩めた火埜翔織だった。

「ご丁寧に両手両脚を手錠で拘束されている。

「てか、おい峰田 “コレ” なんだおい!!」

「黙れい!!この破廉恥の権化が!!!」

「お前に言われたくないわ!!」

ボイスチェンジャーを用いたのか、声が機械加工されているが極低身長とあまりに特徴的なシルエットで丸わかりな裁判長席に座る峰田^{議長}。

「火埜、この国が法治国家であったことにお前は感謝するべきだな」

「法治国家じゃなかったら何されたんですか、てか副議長は正体隠す気ないっすよね “相澤先生”」

火埜から見て議長の右隣、同じような黒い頭巾をかぶって居るであろう見慣れた寝袋姿の存在にツツコミを入れる火埜。

実は頭巾を取られてからアホらしさを感じ取って火の鳥に転化して逃げようとしているのに転化出来ないのですかおかしいと思っていた

のであった。

「つたく、本当にこの茶番はなんだよマジで意味わからん」

「ほう？火焚、貴様この異端審問会の意味がわからないとぬかすか」

いつにもない議長の気迫に少し後ずさりそうになる火焚。

「よかろう、貴様が思い出せないと言うのなら何故このようになったのか一つ一つ教えてやろう。証人をココに!!」

カンカンと木槌を打ち鳴らす議長。

すると複数の存在が証言台に現れた。

ケース①「とあるサポート科1年生の証言」

自分、2週間前工作室に向かってたつす。

その日実習で使ったアイデアノートを置き忘れてしまったので。

実習室に近づいて扉に手を掛けた時つす。

大爆発と共に自分は廊下の壁と吹っ飛んできた扉の間に挟まれてしまったつす。

しかし、それ以上の光景を目にできませんでした。

部屋の中にはユルツユルのタンクトップで今にもお、お、おP、ウオツパイが零れ落ちそうな発目先輩にのし掛かれて、しかも腰より下にのし掛かれて押し倒されている罪人がいたつす。

「^{ギルティ}有罪!!」

「ちよつとまで、それはそいつの主観であつて実際は違う」

ケース①「罪人反対答弁」

あの日は、パワーローダー先生に頼み事があつて放課後に会う約束をしてたんだ。

でも、先生は急に入った別件で遅れてくるからいつも通りに発明に勤しんでいた明と待っていたんだけどバチって音が聞こえて明の方に向き直ったらいつもの困った時に浮かべる笑顔浮かべてこつち見てる明と目が合ったんだ。

「ダーリンどうしましょう、久しぶりに爆発しそうです」

「暢気に言つとる前にそこから離れる明!!」

そう言つて手を引いた時に丁度、明の発明品が爆発して、爆発から明を守るために抱きしめたままでは良かったんだけど結構な威力だつ

行くのは早いぞおおおおお

「せ、先生いいいいいい!!!」

「いや、それも若干違うから」

ケース② 「罪人反对答弁」

あの日は、普段お世話になってるお義父相澤先生さんにお礼がしたいからつてお小遣い貯めた壊理ちゃんに頼まれて「父の日」の買い物に出かけたんすよ。

それで、一様父の日コーナーがあったテナントを全部見て回ったんすけど人酔いしちやった壊理ちゃんの休憩もかねてフードコートに寄ったんすよ。

でソフトクリーム食べてたら疲れちゃったの頭カクカクし始めて鼻がソフトクリームに当たっちゃって、放置するわけにもいかないから拭いてあげたんですよ。

で、最終的にお小遣いで買える猫柄の、今先生が使っているハンカチを買って帰ることにしたんですよ。

それにそう言う風にエスコートするようにたたき込まれてるんですから仕方がないでしょうが。

「ぶわ〃 ああああああえ〃り〃 いいいいいい」

「いや、親馬鹿の素質は肌で感じてたけど想像以上だったなおい担任」

「ふん、貴様の余裕いつまで持つか。取り敢えずセット濡らすとマジで怒られるから清掃時間に入る」

「え、この茶番まだ続くの!？」

それに

「ぐずつ、審議を中断して済まない」

「良いんすよ副議長、オイラが父親でもあいつみたいな性獣嫌つすもん」

「お前が言うな、違う意味でお前も要注意人物リストに入れてあるからな議長」

「(しようもなあ)」

副議長相澤の涙腺崩壊に伴い借りてきていたセットが汚れては拙いと判断され中止になった審議。

その際、罪人はパイプ椅子に座り結構良い所のお茶と和菓子が振る舞われていた。

「それでは審議を再開する」

ケース③「とあるヒーロー科2年生Mの証言」

この間、ウチのクラス委員長が上の空で外を歩いていたんだ。

彼女の進む先には階段があつてそれにすら気付かないで歩いていたから、当然転んだ訳なんだけど。

少し馬鹿にしてやろうと近づいたら、そこの、そこの罪人が抱きしめて、しかも右手は彼女の意外と豊満な胸を鷲掴みにして左手は格闘技経験の関係上育った尻を鷲掴み。

その上、唇まで奪って押し倒されてやがったんだ。

巫山戯んなよ、僕がまだ告白してないのを良いことに押し倒されやがって。

しかも、すぐに離れずに少しの間、固まったフリしやがって。

謝れ、全世界の僕に謝りやがれええええええええええええ。

拳藤おとおお、こんな男の何処が良いんだよおとおお。

「ヨシ、死刑」

「「異議無シ!!」」

「審議しろやボケ共がああああああ!!てか物間の『それ』は自業自得だろうが!!」

「黙れ、淫獣!!」

ケース③ 「罪人反対答弁」

落ちてきた一佳を抱き止めたまでは合ってますよ。

でもその時、あの石頭に頭突きされてこっちは気を失ってたんだよ。

起きたら、顔真っ赤にした一佳が目の前にいてドギマギしたけど自分が気を失っている間に何があったかなんか覚えてないわ。

てか、一佳だけじゃなくてレイ子に希乃子に唯まで同じ感じで転けてるし、B組最近厳しすぎるんじゃないの。

「「極ツツツツツツツツ刑!!」」

「なんでき!?!人助けてんのに?」

「お前よう、こんなに鈍感だったか?」

「あれ?シヨタにいゝあつちゝじゃなくて良いの?」

「なんのことだ?俺はお前の味方だろが」

「(この野郎、今日は壊理ちゃんが夕飯作りにチャレンジするから夕飯に間に合うように帰りたいだけだな)」

「で、お前こんなに鈍感だったつけ?」

「オレだってゝ告白してくれた子」とゝ告白されてない子ゝじゃ明確に区別しますよ。察しろって言われても無理だよ」

「お前、本当にそういう所だぞ」

「上鳴もこの茶番関係してるっぽいからなあ。よし、復讐したろう」

「ムキヤアアアアアアアア!!次ジャ次イイイイイイイイイイイイ!!」

ケース④ 「とあるヒーロー科2年生Aの証言」

去年の林間学校でそれとなく良い雰囲気になった女の子がいたんすよ。

それでまあ、気になってたんすけどオレの夢はもろくも崩れ去ったんすよ。

そうそれは2週間前の梅雨には珍しい快晴だったあの日。

中庭のベンチに座る彼女を見かけて声を掛けようと近づいた時だった。

茂みで見えなかった彼女の体が目視できた時、あろうことか罪人は

『取り敢えず全員 “オレ” には面が割れているんだからこのくだらない会に参加した全員反省文10枚明日までに提出な 相澤』

その日、正式にHHH団は結成された。

H（火埜の野郎） H（ハーレムなんぞ作りやがって） H（本当に爆発しやがれ） 団の戦いはこれからも続くのであった。

「え!?まだ続くのあの茶番?！」

「ふえ?！」

「トリーママどうしたの?！」

一生懸命豚汁を作る壊理ちゃんの尊さと、意識した薄着でエプロン姿の麗日に癒やされながら背筋を走る悪寒に身を震わせる火埜がいた。